発掘調査報告第6集

県営ほ場整備事業大田切（3）地区（昭和51年度分）
埋蔵文化財緊急発掘調査

丸山南遺跡

緊急発掘調査報告書

1977

南信土地改良事務所
駒ヶ根市教育委員会

序　　文

今回ここに刊行の運びとなった報告書は，県営ほ場整備事業に伴い，昭和51年に実施された発掘調査の報告書であります。

北は大田切川，南は中田切川を境界とする赤穂地区は，広い扇状台地状に展開し，その間には，古田切川・上穂沢川・辻沢川などの小河川が東流し，田切地形を形成しております。

遺跡は中央アルプス山麓や小河川の沿岸に沿って集中して見られ，その濃密な遺跡群は古くから学界の注目するところでした。

駒ケ根市赤穂地区では，昭和45年以来県営ほ場整備事業が行われてきており，駒ケ根市は事業に先行して発掘調査を実施してきております。

今回発掘調査を行った丸山南遺跡は古くから知られていた遺跡で，報告書の各項にみられるとおりの成果を挙げることができました。とりわけ縄文時代中期の集落址を完全に発掘調査できたことは非常に嬉しく，今後の研究上果たす役割は大きなものがあると確信いたします。

長期間にわたって発掘調査をご指導下さった友野良一団長を初め，快く発掘作業に参加していただいた地元の方々，事業に深いご理解をいただいた大田切土地改良区並びに南信土地改良事務所の方々，地主の方々など，多くの皆さまのご協力，ご厚志によって無事初期の目的を達成することができました。

ここに関係者の皆さま方に心から感謝申し上げますとともに，この報告書が学界のお役に立つことを念願する次第であります。

昭和52年3月1日

駒ケ根市教育長　宮　下　清　計

凡　　例

1. 今回の調査は県営ほ場整備事業に伴い，昭和51年度に実施したものである。

2. 事業は南信土地改良事務所の委託により，県営ほ場整備事業大田切(3)地区埋蔵文化財調査会が実施した。なお本報告中には文化庁補助事業として実施した分も同一遺跡のため含まれているので了承いただきたい。

3. 本報告書は契約期間内（昭和51年度）にまとめることが要求されているため，調査によって検出された遺構及び遺物のうち土器をより多く図示することに重点をおき，文章記述はでき得る限り簡略した。そのため，発見された遺構・遺物に関する考察は断念せざるを得なかった。後日所見を加えたいと念じている。

4. 遺構関係の図面は宮下喜代子が主に整（製）図し，一部気賀沢進があたった。炉内埋設土器は土器で表示し，埋甕はウメとし正位を表している。焼土はドットで表し，柱穴の深さは床面からの深さをcmで表している。縮尺は各図に示してある。

5. 土器の実測は小原晃一・気賀沢が，製図は新井美智子・気賀沢があたった。

6. 石器の実測は宮下・新井が製図は気賀沢があたった。

7. 土器の復元は和田武夫が担当した。

8. 本報告書は気賀沢が執筆した。

9. 本報告書の編集は気賀沢が担当した。

10. 遺物及び実測図類は市立駒ケ根博物館に保管してある。

目　　次

序　　文
凡　　例
目　　次
挿図目次
図表目次

第１章　発掘調査の経緯
　第１節　発掘調査に至るまでの経過 …… 1
　第２節　調査会の組織 …… 1
　第３節　発掘作業経過 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境
　第１節　地形及び地質 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3
第Ⅲ章　発掘調査
　第１節　調査概要 …… 7
　第２節　住居址と遺物 …… 11
　第３節　その他の遺構と遺物 …… 114
　第４節　石器 …… 125
第Ⅳ章　まとめ …… 145

図　版 …… 147

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図 …… 4
第２図　遺跡の地形図 …… 5
第３図　付近の遺跡分布図 …… 6
第４図　遺跡グリット図 …… 8
第５図　丸山南遺跡遺構全体図 …… 9
第６図　第１号住居址実測図 …… 11
第７図　第１号住居址覆土出土土器 …… 12
第８図　第１号住居址床面出土土器 …… 13
第９図　第２号住居址実測図 …… 15

第 10 図　第 2 号住居址出土土器 …… 16
第 11 図　第 3 号住居址実測図 …… 17
第 12 図　第 3 号住居址覆土出土土器 …… 18
第 13 図　第 3 号住居址床面出土土器 …… 19
第 14 図　第 4 号住居址実測図 …… 20
第 15 図　第 4 号住居址覆土出土土器 …… 21
第 16 図　第 4 号住居址床面出土器 …… 22
第 17 図　第 5 号住居址実測図 …… 23
第 18 図　第 5 号住居址床面出土土器 …… 23
第 19 図　第 6 号住居址実測図 …… 24
第 20 図　第 6 号住居址出土土器 …… 25
第 21 図　第 8 号住居址実測図 …… 26
第 22 図　第 8 号住居址床面出土土器 …… 27
第 23 図　第 9 号住居址実測図 …… 28
第 24 図　第10号住居址実測図 …… 29
第 25 図　第10号住居址床面出土器 …… 30
第 26 図　第11号住居址実測図 …… 31
第 27 図　第11号住居址覆土出土土器 …… 33
第 28 図　第11号住居址床面出土土器 …… 34
第 29 図　第12号住居址実測図 …… 35
第 30 図　第12号住居址床面出土土器 …… 35
第 31 図　第13号住居址実測図 …… 36
第 32 図　第13号住居址出土土器 …… 37
第 33 図　第14号住居址実測図 …… 38
第 34 図　第14号住居址覆土出土土器 …… 40
第 35 図　第14号住居址床面出土土器 …… 41
第 36 図　第15号住居址実測図 …… 42
第 37 図　第15号住居址出土土器 …… 43
第 38 図　第16号住居址実測図 …… 45
第 39 図　第16号住居址床面出土土器 …… 46
第 40 図　第17号住居址実測図 …… 47
第 41 図　第17号住居址床面出土土器 …… 48
第 42 図　第18号住居址実測図 …… 48
第 43 図　第18号住居址床面出土土器 …… 49
第 44 図　第19号住居址実測図 …… 50
第 45 図　第19号住居址覆土出土土器 …… 51

第46図　第19号住居址床面出土土器 …… 51
第47図　第20号住居址実測図 …… 52
第48図　第21号住居址実測図 …… 53
第49図　第21号住居址床面出土土器 …… 54
第50図　第22号住居址床面出土土器 …… 55
第51図　第23号住居址実測図 …… 56
第52図　第23号住居址出土土器 …… 57
第53図　第22・25・51号住居址実測図 …… 58
第54図　第25号住居址床面出土土器 …… 59
第55図　第25号住居址床面出土土器 …… 60
第56図　第25号住居址床面出土土器 …… 61
第57図　第26・52号住居址実測図 …… 62
第58図　第26号住居址出土土器 …… 63
第59図　第27・29号住居址実測図 …… 65
第60図　第27号住居址出土土器 …… 66
第61図　第28号住居址実測図 …… 67
第62図　第28号住居址床面出土土器 …… 67
第63図　第29号住居址床面出土土器 …… 68
第64図　第30号住居址実測図 …… 69
第65図　第30号住居址出土土器 …… 70
第66図　第31号住居址実測図 …… 71
第67図　第31号住居址覆土出土土器 …… 72
第68図　第31号住居址床面出土土器 …… 73
第69図　第32・33・34号住居址実測図 …… 75
第70図　第32号住居址出土土器 …… 76
第71図　第33号住居址床面出土土器 …… 78
第72図　第34号住居址床面出土土器 …… 79
第73図　第35号住居址炉内埋設土器 …… 79
第74図　第35号住居址実測図 …… 80
第75図　第36・38号住居址実測図 …… 81
第76図　第36号住居址床面出土土器 …… 82
第77図　第37号住居址実測図 …… 84
第78図　第37号住居址床面出土土器 …… 85
第79図　第38号住居址床面出土土器 …… 87
第80図　第39・41・42号住居址実測図 …… 88
第81図　第40・46・47号住居址実測図 …… 89

第82図　第40号住居址床面出土土器 …… 91
第83図　第41号住居址出土土器 …… 92
第84図　第43号住居址実測図 …… 94
第85図　第43号住居址出土土器 …… 95
第86図　第44号住居址実測図 …… 96
第87図　第44号住居址床面出土土器 …… 97
第88図　第45号住居址実測図 …… 98
第89図　第45号住居址出土土器 …… 99
第90図　第46号住居址床面出土土器 …… 100
第91図　第47号住居址床面出土土器 …… 101
第92図　第48号住居址実測図 …… 102
第93図　第48号住居址炉内埋設土器（折り込み） …… 103
第94図　第49・50号住居址実測図 …… 107
第95図　第49号住居址床面出土土器 …… 108
第96図　第50号住居址床面出土土器 …… 109
第97図　第51号住居址出土土器 …… 110
第98図　第52号住居址床面出土土器 …… 111
第99図　第53・54号住居址実測図 …… 112
第100図　第53号住居址出土土器 …… 113
第101図　単独埋甕址（1～11）位置図 …… 115
第102図　単独埋甕址（1～11）出土土器 …… 115
第103図　単独埋甕址（12・13）出土土器 …… 116
第104図　特殊小竪穴実測図 …… 117
第105図　土壙1・2・3実測図 …… 118
第106図　土壙4・5・6・10実測図 …… 118
第107図　土壙7・11・12・13・14実測図 …… 119
第108図　土壙7・13・14出土土器 …… 119
第109図　土壙15・16実測図 …… 120
第110図　土壙16出土土器 …… 120
第111図　土壙17・18・19実測図 …… 120
第112図　土壙20～63実測図 …… 121
第113図　土壙64・65・66実測図 …… 121
第114図　土壙67～79実測図 …… 122
第115図　土壙67・69・72出土土器 …… 123
第116図　土壙80・81・82・83・84・85・87実測図 …… 123
第117図　土壙80出土土器 …… 124

第118図　ローム マウンド1・2・4・5実測図 …… 125
第119図　打製石斧（a・b類）実測図 …… 132
第120図　打製石斧（c・a類）実測図 …… 133
第121図　磨製石斧実測図 …… 136
第122図　石匙実測図 …… 137
第123図　石錘実測図 …… 139
第124図　敲打器（a類）実測図 …… 139
第125図　敲打器（b類）実測図 …… 140
第126図　敲打器（c類）実測図 …… 141
第127図　特殊敲打器実測図 …… 142
第128図　砥石・ハンマー実測図 …… 144

図表目次

図表 1　住居址別石器出土表 …… 126
図表 2　打製石斧分類・石質別破損状態表 …… 131
図表 3　打製石斧分類・石質別比率表 …… 134
図表 4　分類別打製石斧の最長と最大幅最大厚相関表 …… 134
図表 5　分類別打製石斧の最長と刃部頭幅比率相関表 …… 135
図表 6　大形粗製石匙分類表 …… 138
図表 7　石錘元長と幅と厚さの相関図 …… 138
図表 8　石錘元長と重量相関図 …… 138
図表 9　特殊敲打器分類表 …… 141
図表 10　磨き石分類表 …… 143

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

第1節　発掘調査に至るまでの経過

昭和51年度より県営ほ場整備事業に伴う発掘調査の経費のうち，農家負担分については，文化財保護担当部局において負担するようにとの指示があったため，丸山南遺跡の一部を丸山Ｂ遺跡として文化庁補助事業として市教育委員会直営で実施することとし，昭和51年１月29日予算150万円の補助事業計画書を長野県教育委員会へ提出する。

５月１日，補助事業の内定があり，５月28日補助金交付申請を県教委へ提出するとともに，６月議会に丸山Ｂ遺跡発掘調査予算を計上することをきめ，６月22日決議された。

当該事業はほ場整備事業と関連するため，南信土地改良事務所・大田切土地改良区と連絡をとりながら10月６日から着工することとした。団長は友野良一氏をお願いし，調査団を編成し，県文化課へ発掘調査の指示を仰ぐ。

今回の発掘調査は文化庁補助事業と併行して南信土地改良事務所からの委託調査を進めて行くこととし，秋の穫り入れにあわせて発掘調査を行うこととした。

第2節　調査会の組織

◦丸山南遺跡発掘調査会

会長	宮下清計	（市教育長）
理事	有賀勤	（市教育次長）
	木下義男	・（市文化財調査委員会委員長）
	下村忠比古	（〃　〃　副委員長）
	伊藤和正	（市立博物館館長）
監事	小出幸一	（市文化財保存会会長）
〃	佐藤雪洞	（駒ケ根郷土研究会会長）
幹事	松崎勝治	（市教委社会教育係長）
	気賀沢進	（市立博物館）
	井上かほる	（〃）

◦調査団

団長	友野良一	（日本考古学協会会員）＜発掘担当者＞
主任	気賀沢進	（長野県考古学会会員・市立博物館）＜発掘担当者＞
調査員	和田武夫	（〃）
〃	北沢雄喜	（〃）

調査員　田中清文　（長野県考古学会会員）
〃　吉沢文夫　（　〃　）
〃　伊藤修　（　〃　）
〃　小原晃一　（立正大学学生）
指導　樋口昇一　（県指導主事）
〃　丸山敞一郎　（　〃　）
〃　今村善興　（　〃　）
〃　山田端穂　（　〃　）
〃　伴信夫　（　〃　）
〃　笹沢浩　（　〃　）
〃　林茂樹　（日本考古学協会会員）

第3節　発掘作業経過

10月4日，友野団長，和田調査員，気賀沢で遺跡の下見を行う。最初予定していた所より東に多く遺物が出たとのことで，調査区域の拡大を考える。10月5日，発掘器材の運搬及びグリット設定を行う。遺跡を2ブロックに分け西へあいう……，東へａｂｃ……，南北に１２３…とする。

6日，現地にて調査開始にあたって鍬入式を行い，市教育長（調査会会長）・友野団長のあいさつのあと，今後の調査日程と調査方法について説明を行ったあと，テント設営と杭打ちを行う。

発掘地域は稲はざがあちこちに残り，それをかいくぐっての発掘となり，補助事業と委託事業の作業をある時は同時に行うこともあった。6日から始まった調査は，11月1日に補助事業分を終了した。しかしながら，遺跡は予想外に東に伸びる可能性がでてきて南信土地改良事務所と協議をした結果，発掘期間を延期して調査を行うこととなり，すべての作業が終了したのは11月24日であった。

地元土地改良区関係者・南信土地改良事務所・地主の方々・長期間発掘に参加して下さった地元の協力者をはじめ，多くの方々のご協力とご配慮によって，ここに初期の目的を果し，調査を終了することができました。ここに心から感謝の意を申し上げる次第であります。

第Ⅱ章　遺跡の環境

第1節　地形及び地質

当遺跡は駒ケ根市赤穂上赤須丸山地籍に所在する。国鉄飯田線伊那福岡駅より東へ3 ｋｍ，天竜川の右岸第二段丘上に位置する。標高は610ｍ前後である。

伊那谷は長野県の南部にあたり，東に赤石山脈，中央構造線をはさんで戸倉山，高鳥谷山を初めとする前山の伊那山脈が並行して走る。西には木曽山脈があり，天竜川をはさんで南北に並行する。

伊那盆地は，沖積世以前にこの高峻な両側の山地からの過剰堆積により山麓に大小いくつかの扇状地を形成している。駒ケ根市赤穂地区は北の大田切川，南の中田切川によって形成された二つの大きな扇状地の複合した地域である。これらの両河川にはさまれた中を更にいくつかの小河川が東流して田切地形を造っている。当遺跡はその末端に位置し，北には上穂沢川，南には孫ツ沢・中田切川が深いＶ字谷を形成している。天竜川の第二段丘面上に位置する当遺跡は，天竜川との比高は約85ｍを測る。

北を流れる上穂沢川は赤穂地区を南北に分断する河川で，源は中央アルプスに発し，国道153号線付近より深い渓谷を形成し，当遺跡北で片川と合流して天竜川に注ぐ。南を流れる孫ツ沢は付近の雨水を集めた小河川で遺跡の西方200ｍよりＶ字谷を形成している。

第2節　歴史的環境

昭和28年に行った赤穂地区の遺跡の分布調査によると，遺跡数77か所，遺物出土地点230か所に及んでいる。近年分布調査が進むにつれて遺跡数も増加する傾向にある。

赤穂地区における遺跡の分布状態をみると，大部分が東流する小河川に沿ってある。

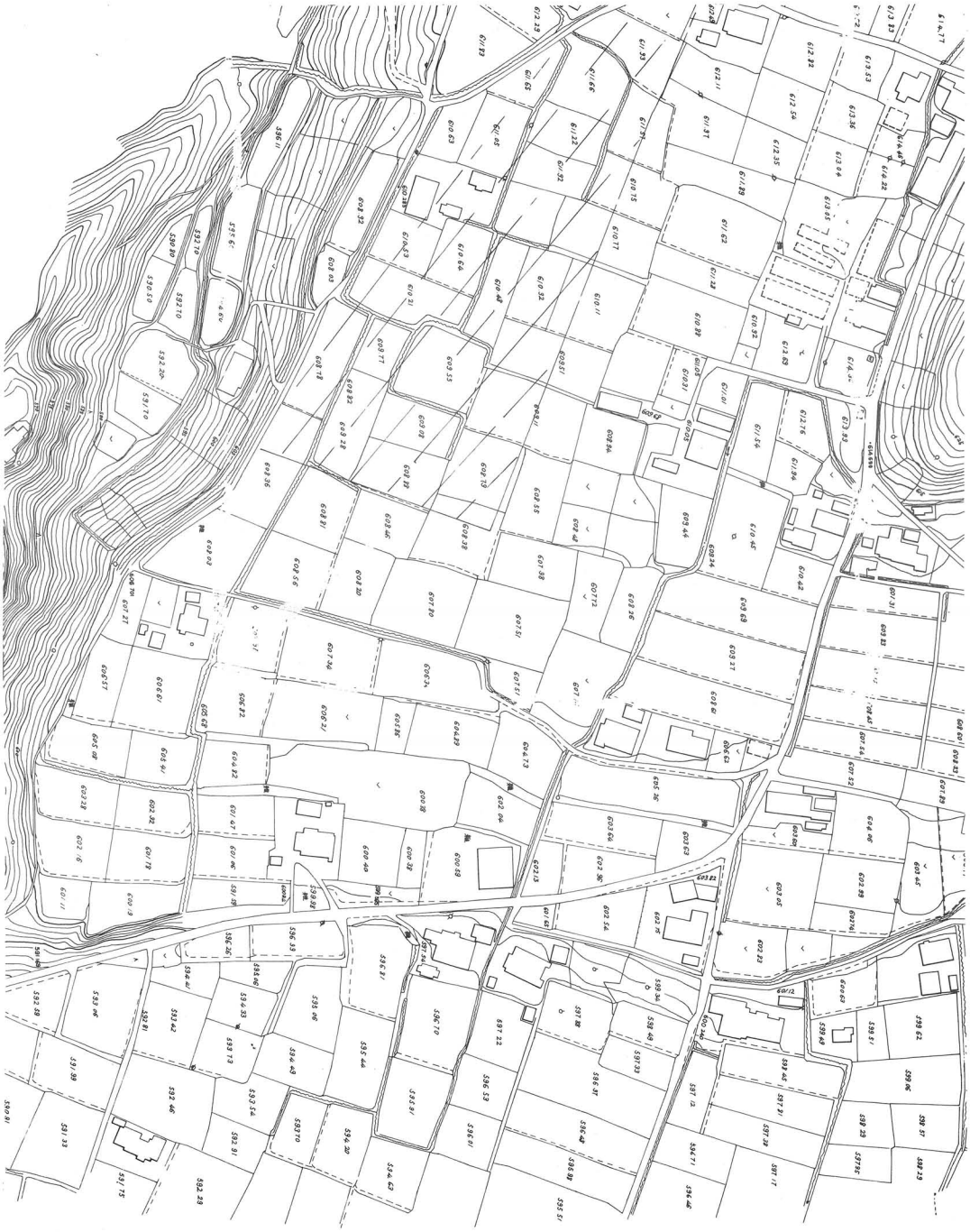
中でも先に述べた上穂沢川沿岸は大遺跡群を形成しており，山麓からみると中割原・春日・北方・四分一・八幡原・大城林・羽場下・舟山・如来寺・荒神沢・小平・中通り上・中通り下・丸山北・丸山南・南原などがある。また孫ツ沢さらに中田切川との間を流れる辻沢川沿岸も非常に濃密な遺跡分布を示しており，大徳原・辻沢・辻沢丸山・馬住の原・筒沢・蟹沢などがある。

以上本遺跡を取り巻く遺跡の分布状態をみてきたが，関係の深い遺跡について若干ふれてみたい。

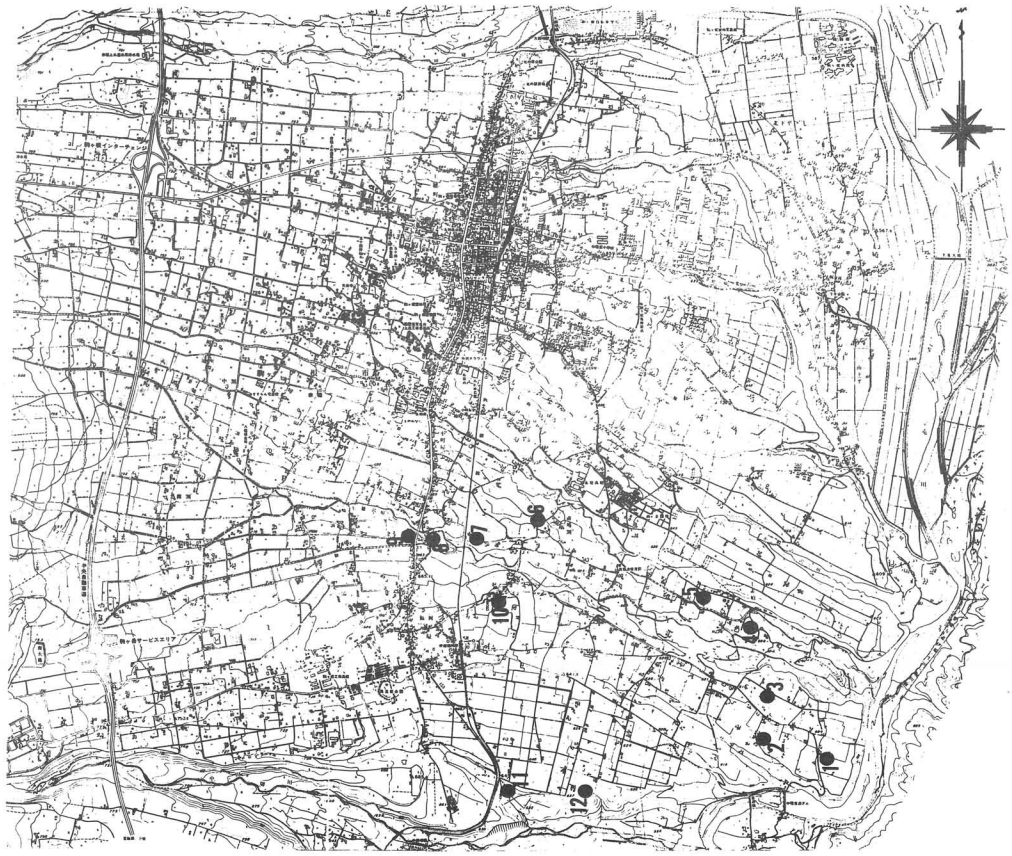
1　**南原遺跡**　本遺跡の東方天竜川第一段丘上突端に位置し，昭和50年に発掘調査を行った。縄文時代中期中葉の遺跡で9基の住居址を確認している。この遺跡は石器・原石・剥片を多く出土しており，石器製作址の性格を持つ集落として貴重な遺跡である。またこのような性格を持つ遺跡の在り方が非常に注目される。

1 ……南原遺跡　　2 ……丸山南遺跡　　3 ……丸山北遺跡

第1図　遺跡位置図　（S＝1／100,000）



第２図　遺跡の地形図　（Ｓ＝１／3,000）



1　南原遺跡　2　丸山南遺跡　3　丸山北遺跡　4　中通り下遺跡　5　中通り上遺跡　6　尾崎遺跡
7　荒神沢遺跡　8　如来寺遺跡　9　舟山遺跡　10　小平遺跡　11　筒沢遺跡　12　蟹沢遺跡

第3図　付近の遺跡分布図　（S＝1／60,000）

3　丸山北遺跡　昭和28年の分布調査において遺物の散布がみられ丸山南遺跡とあわせて発掘調査を行ったが，開田による破壊が進んでおり，若干の遺物をみたのみで遺構は検出できなかった。

4　中通下遺跡　上穂沢川の左岸，崖川にはさまれた所にあり，道路改修中に発見された遺跡である。詳しい出土状態はわからないが，平安時代後半の遺物を多く出土している。灰釉の双耳壷は優品で猿投産のものである。他に須恵器の瓶や土師器がある。付近一帯は広い範囲にわたって遺跡があると思われ赤穂地区の歴史解明には欠かせない遺跡である。

7　**荒神沢遺跡**　上穂沢川左岸段丘上から南側傾斜面にかけての大遺跡で，縄文時代中期の縄文時代晩期氷式の土器を出土する良好な遺跡である。また東側には破壊されたが丸塚古墳があった。

8　**如来寺遺跡**　荒神沢遺跡の対岸上穂沢川の低位段丘面上に所在する。縄文時代晩期の上伊那における標式遺跡として有名である。

9　**舟山遺跡**　如来寺遺跡の西丘陵上に位置する。各時代にまたがる複合遺跡であるが，とりわけ縄文時代早期末の条痕文系土器を出土したことで有名である。検出された小竪穴群の性格は今なおはっきりしていない。

11　**筒沢遺跡**　辻沢川の流末低位段丘上にある。縄文時代中期加曽利Ｅ式・晩期の土器庁が採集されている。

12　**蟹沢遺跡**　筒沢遺跡の東方500ｍの地点で中田切川の低位段丘面にあるが，遺跡はそう広くはない。縄文時代晩期から弥生時代初頭にかけての条痕文系土器が多く発見されている。

第Ⅲ章　発掘調査

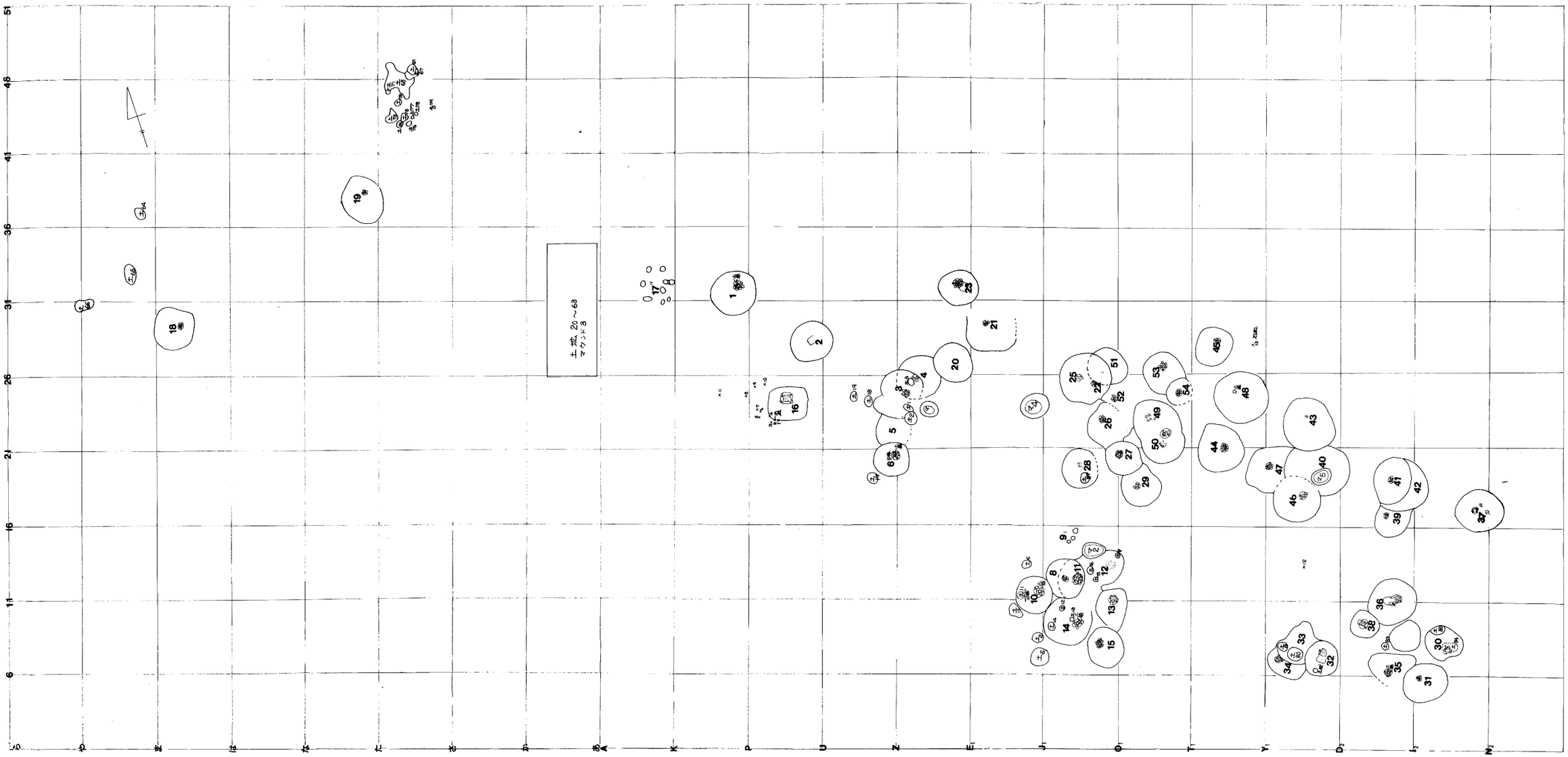
第1節　調査概要

当遺跡は昭和28年赤穂地区の分布調査のおり確認され丸山南遺跡とされたものである。分布調査当時は西に一部畑があったのみで，東の方はまったく調査することができず遺跡の正確な範囲をつかむことはできなかった。今回の調査を行うにあたって事前に農家の人々に聞いた所東によって大分遺物が出たとのことから計画を一部変更して東へ調査区域を拡大することとした。

南北に１２３４５……と基準を設け，西へあいうえお……，東へａｂｃｄｅ……と２ｍグリットを設定した。補助事業の区域はＵラインの西方とし，試掘を行って遺構確認によって，全面発掘に切り換える方法を採った。

確認された遺構は縄文時代中期の住居址52基，土拡群，単独埋甕，ロームマウンド５基である。番号は発見順につけたため連続していないが了承いただきたい。

第４図　遺跡グリット図（S＝1／2000）



第5図　丸山南遺跡遺構全体図

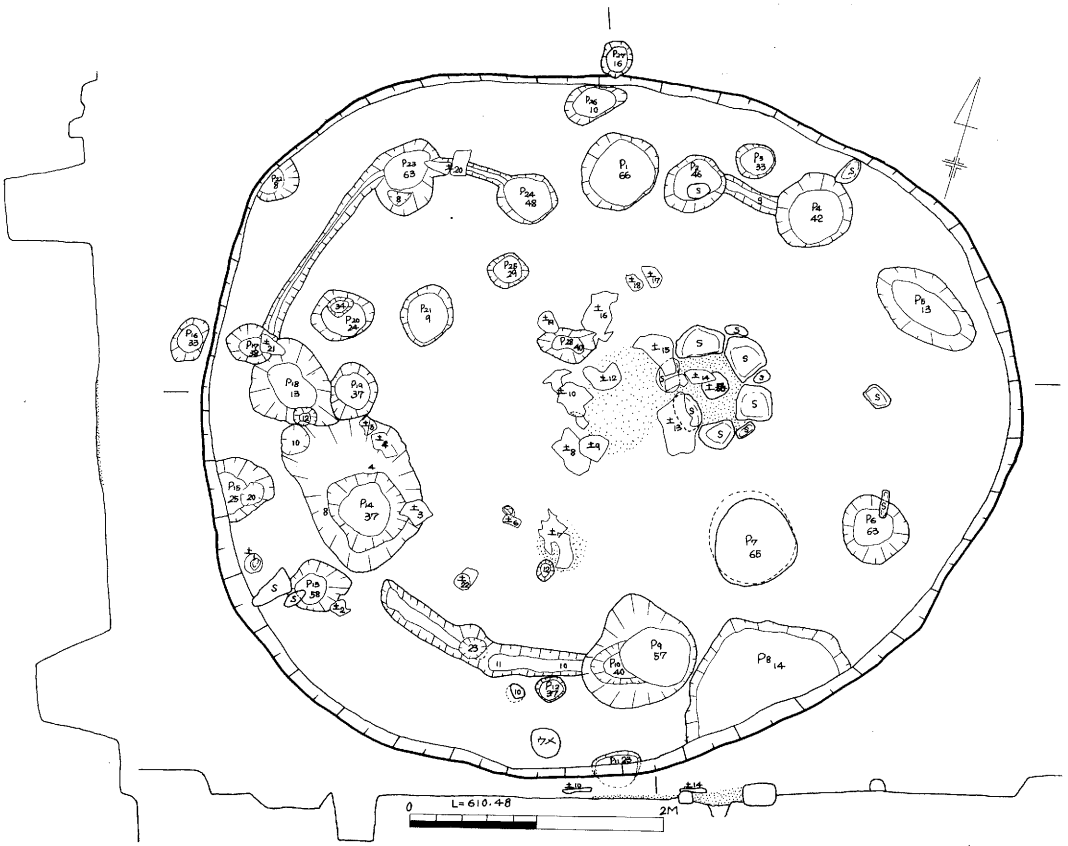
第2節　住居址と遺物

1　第1号住居址（第6～8図）

遺構（第5図）

本住居址は集落の西に位置し，プランは楕円形を呈す。大きさは南北5.5m，東西6.5mを測る。水田の地場のすぐ下にロームを切り込んで確認されたものである。壁は垂直に近く壁高は15cm前後である。床面はロームを固くつきかためてあり，平担で良好である。壁は開田のさいに削り取られた可能性が強い。

東を除いた内部には幅10～20mの周溝が部分的にみとめられ，住居址の拡張に伴う建て直しが考えられる。周溝で囲まれる範囲は南北4m，東西は不明だが4.6mほどと思われ同心状の拡張であろうか。しかし周溝がピットを結んでいることに若干疑問が残る。プランはやはり楕円形である。炉はほぼ中央にある焼土がそれであろう。主柱穴はP_7・P_{14}・P_{24}などが考えられる。他の住居址においては古い住居址の柱穴に貼り床が認められたが，当住居址においてはみられない。



第6図　第1号住居址実測図　（S＝1／60）

さて新住居址の主柱穴はP_1・P_4・P_6・P_9・P_{12}・P_{23}の６本と考えられる。P_3・P_{11}・P_{15} P_{16}・P_{22}などは支柱穴であろう。

炉は中央東寄りに位置し，内部は若干五角形ぎみの石組み炉である。大きさは外測は90×90㎝，内部は50×40㎝を測る。炉石は大きな自然石を用い横長にすえてその間に小さな礫をつめている。内部には胴下半部を欠く小形深鉢（第８図－17）が埋設されていた。焼土は10㎝ほど堆積している。炉の西にみられる焼土は旧住居址のものと考えられる。

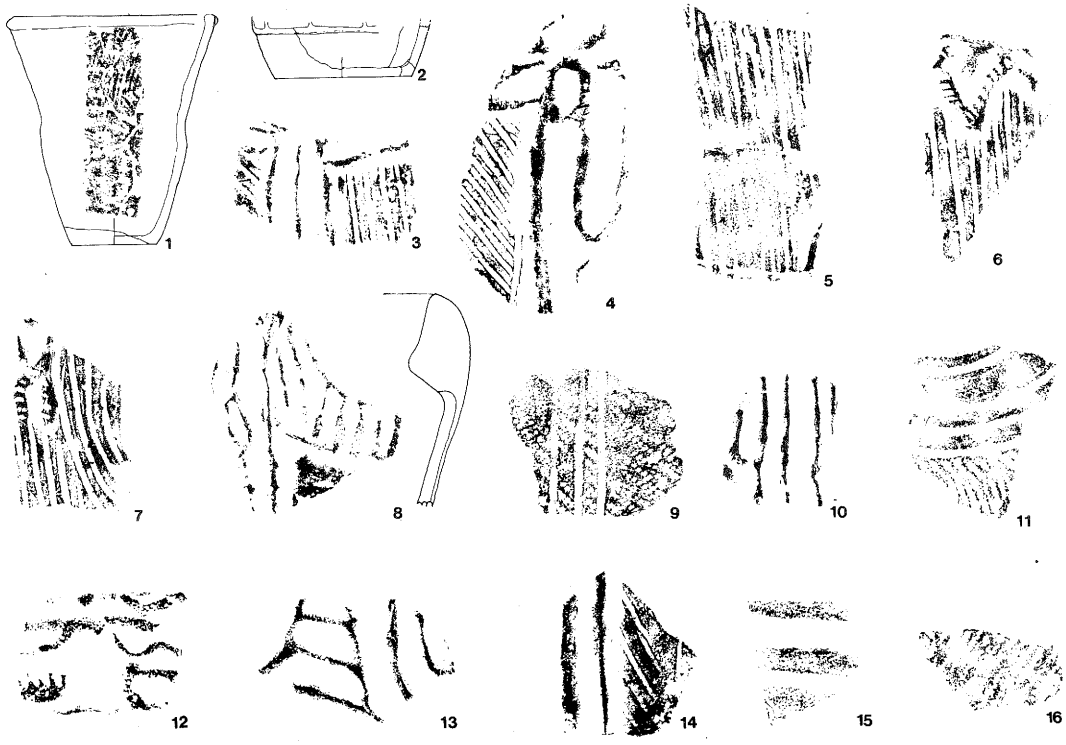
住居址中央南壁ぎわに胴上半部を欠く正位の埋甕（第８図－18）が発見された。

土器は非常に多く出土し，図示するように床面また床面より５～８㎝浮いた形で出土している。ある程度集中したものに番号をつけてみたが，すべて復元はできなかった。当住居址に伴出する一括土器である。

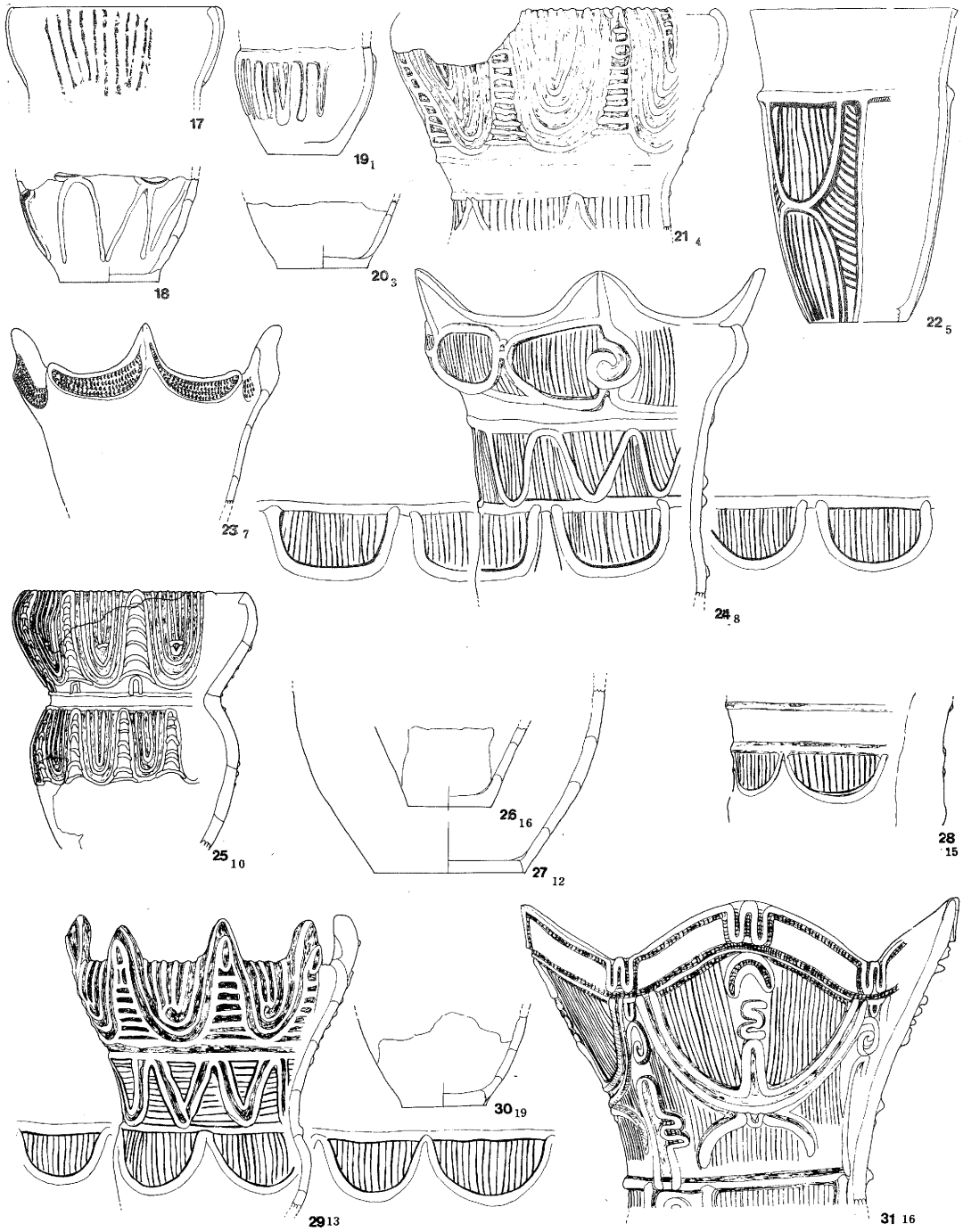
遺物（第７，８図）

土器は多く発見されている。床面出土のものは先に述べた通り，まとまった出土状態をしており，当住居址に伴う一括土器である。

第７図は覆土より出土したものである。１は小形の深鉢で底部を少し欠く。内面にわずか炭化物の付着がみられる。口唇部に隆帯をもたせ，胴部は縄文で埋められる。２は小形深鉢の底



第７図　第１号住居址覆土出土土器　（１・２は１/６，他は１/３）



第８図　第１号住居址床面出土土器　（１／６，17は炉内埋設土器18は埋甕）

部である。竹状工具による平行沈線文土器や粘土紐によって口縁部を飾るものが多い。

第8図は床面出土のものである。土器番号は21まであるが，図上復元を含め図示できたものは半分である。

17は炉に埋設されていたもので胴下半部を欠く。非常にもろく一部を接合できただけで図上復元である。内湾する口縁部には，細い粘土紐によって装飾される。18は正位の埋甕で胴上半部を欠く小形深鉢である。外面はヘラ削りがみられ，内面には指頭痕がみられる。19は小形の深鉢と思われるが口縁部を欠くため不明である。粘土紐を横走させその下は粘土紐による流水文がみられる。内面に若干炭化物が付着している。21は大形の深鉢で口縁を一部欠く。口縁部には細い粘土紐によるくま手状文とはしご文が交互に施される。胴部にはわずかに無文帯をおいて櫛形文がみられる。焼成は固く器面調整も良い。25・29など同様な口縁部文様を持つものである。22は底部を欠く小形深鉢で全体にスマートである。文様は口縁部はまったくの無文で頸部に隆帯を横走させそれに直交する懸垂文によって四分割し，その間に変形人体文を配して内部は非常に浅い沈線で埋める。焼きは非常に良く器面調整も十分である。23は大小の山形状突起を4個ずつ交互に配した深鉢で胴下半部を欠く。文様は口縁部のみで突起の間に4条の連続押し引き文を口唇に沿って施す。この種の土器は類例を知らない。赤褐色を呈し胎土には大粒な砂を含む。焼成は良く指頭がみられる。24は底部を欠く深鉢で口縁には山形状の突起を4つもつ。文様は口頸部と胴上・下半部の三つに区角される。口頸部は楕円文や渦巻文を配し胴上半部には三角文その下に櫛形文を配す。内部は浅い細線で埋める。25は底部を欠く深鉢で口縁部や胴下半部も一部欠損している。頸部にわずかの無文帯を残し口縁と胴部に同一文様を施すものである。26・27は深鉢の底部である。28は深鉢の胴部破片による図上復元である。連続櫛形文がみられる。29はやはり底部を欠く深鉢で8個の突起を持つ。口縁部は21・25同様，くまで状文とはしご文を交互に配し，胴部は24同様三角文と櫛形文である。24同様櫛形文は5個で口縁部文様構成と異なりをみせている。31は大形の深鉢である。口縁部のみであるが，非常にマジカルな土器である。大きくうねる口縁の下に変形人体文を配して内部を細線で埋めている。胎土に長石を多量に含んで暗褐色に焼かれている。焼成・器面調整ともに良い。

櫛形文の盛行からみて井戸尻Ⅲ式に比定される一群である。

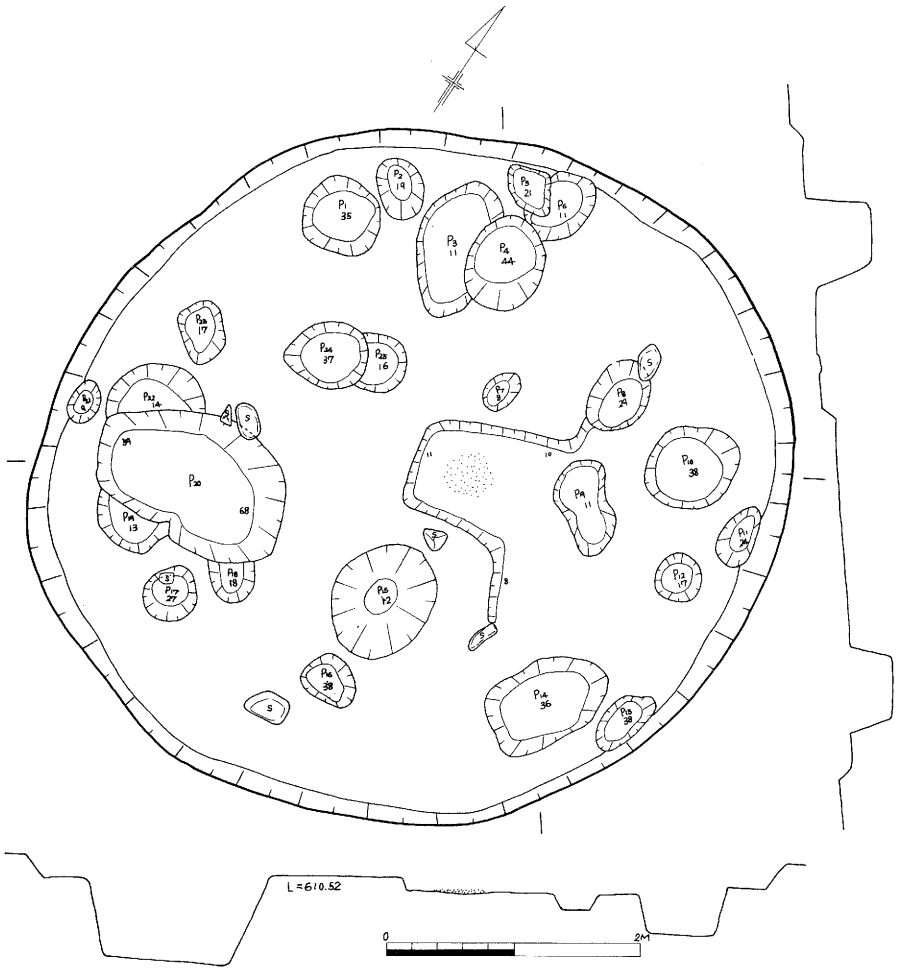
石器は全部で110点出土している。内訳は打製石斧15，大形粗製石匙6，石錘3，敲打器a類3・b類5，特殊敲打器41，磨き石20，横刃形石器17点である。他に剝片が54点出土している。

2　第2号住居址（第9・10図）

遺構（第9図）

本住居址は第1号住居址の南7mの所に発見されたものである。プランは楕円形で南北5.5m，東西6mを測る。壁はゆるやかで，壁高は20cmを測るが北と南で10cm前後である。ロームの床面は平坦で固い。

主柱穴は6本である。ピットが多くみられるがすべて支柱穴とは考えにくい。P_{20}は他のピッ



第9図　第2号住居址実測図　（S＝1／60）

トを切っているところから土壙とも考えられるが定かではない。

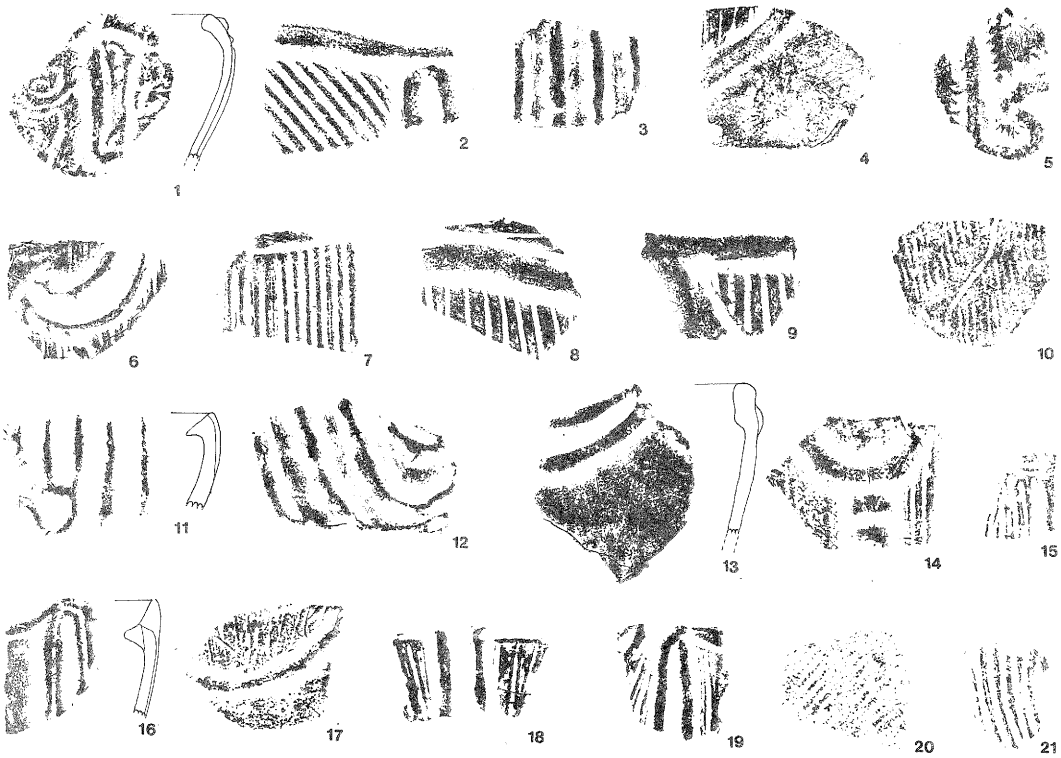
炉は方形の石組み炉で中央東寄りにある。炉石は抜き取られている。掘り方の規模は1.1m×0.8mである。焼土は中央部に薄くみられる。

遺物（第10図）

土器は非常に少ない。器形を知り得るものはまったくなくすべて破片である。1～10は覆土出土のもの，11～21は床面出土のものである。この両者には形式差はみとめられない。

3・11・12は細隆線で口縁部を飾るものである。平行沈線を施すものとしては2・6・7・14・18・19がある。

4・8・9・17は櫛形文を施すものである。1は内湾する口縁に浮隆文を配してその間を沈



第10図　第２号住居址出土土器　（１／３，１／10は覆土11～21は床面出土）

線で埋めている。縄文を持つものとしては10・20がある。10は新しい要素を持つ土器である。

器形を知り得るものがないため時期ははっきりしないが，井戸尻Ⅲ式に属すると思われる。

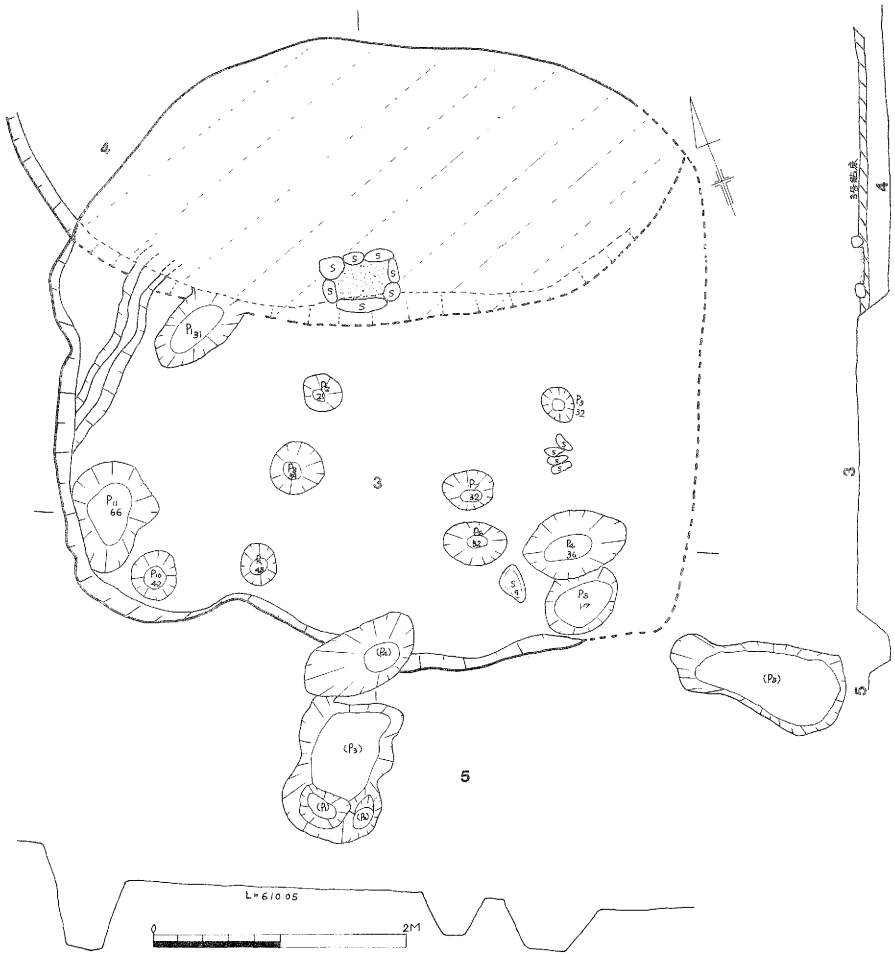
石器は全部で66点出土し剝片は36片である。内訳は打製石斧14，磨製定角石斧２，乳棒状石斧１，大形粗製石匙２，石錘５，敲打器ａ類２・ｂ類２，特殊敲打器12，磨石３，磨き石15，掻器１，横刃形石器７点である。

3　第３号住居址（第11・12・13図）

遺構（第11図）

本住居址は第２号住居址の南約８ｍの所に位置し，北側半分は第４号住居址に貼り床し，南側は第５号住居址と接する。貼り床部分は上を井が通り，非常に軟弱であったが，ロームを５～10cm貼りつけてあり明瞭であった。第４号住居址との床面差は30cm程である。貼り床部分における柱穴の確認は残念ながらでき得なかった。

プランは隅丸方形に近く大きさは南北4.9ｍ，東西5.1ｍである。床面は全体に平坦で固く良



第11図　第３号住居址実測図　（S＝1／60）

好である。壁高は西で30cm，南は第５号住居址を切った形で５～10cmである。

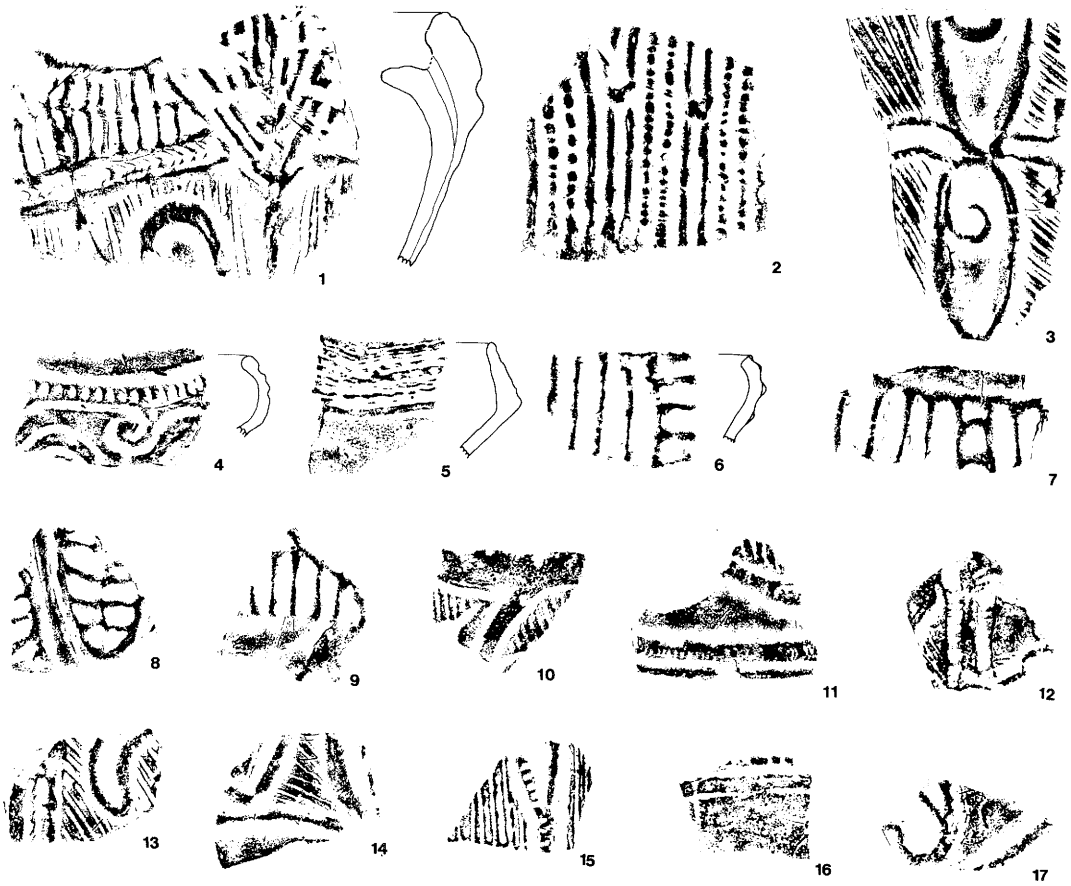
炉は住居址中央北寄りにあり，貼り床部に作られている。方形の石組み炉で大きさは60×50cm，内側は40×30cmで堀り込みは浅く，内部には焼土の堆積がみられる。

主柱穴はP_4・P_{11}・P_1がそれを考えられ不明の貼り床部分を併せ６本と考えられる。

図示してないがP_1とP_{11}の間床面上に深鉢形土器（第13図－18)が横倒しの状態で出土している。

遺物（第12・13図）

土器は第13図－18を除き散在した状態で出土している。第12図は覆土，第13図は床面出土のものであるが，時間差はないと思われる。



第12図　第３号住居址覆土出土土器（１/３）

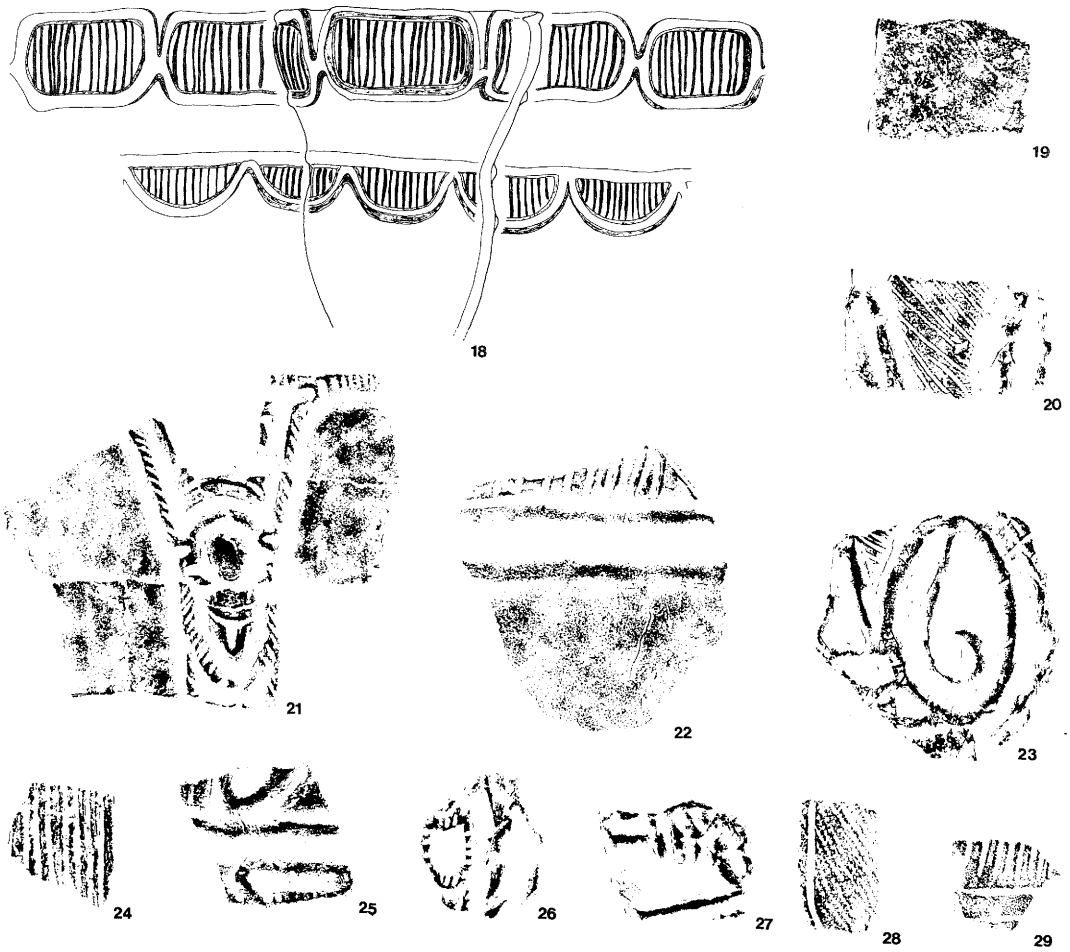
18は横倒しの状態で発見されたもので，底部を欠く深鉢形土器である。文様構成は五区角からなり，口縁部と胴央部に施文される。外面口縁部と胴部に一部炭化物の付着がみられる。井戸尻Ⅲ式に比定される。

浮線文で飾るもの（６・７・８・９・23・26）やその間に細線を施すもの（13～15，20）が多くみられる。

５は浅鉢形土器の口縁部で棒状工具による沈線がみられる。

曽利Ⅰ式的要素もみられるが総じて井戸尻Ⅲ式に比定される。

石器は全部で93点，剥片が32片出土している。石器の内訳は打製石斧26，磨製乳棒状石斧２，大形粗製石匙４，石錘８，敲打器ａ類３・ｂ類５・ｃ類２，特殊敲打器13，凹石１，磨き石８，砥石１，石核４，横刃形石器16点である。



第13図　第３号住居址床面出土土器（18は１／６，他は１／３）

4　第４号住居址（第14～16図）

遺構（第14図）

本住居址は第３号住居址の北にあり，南側は第３号住居址によって貼り床されていた。東は第20号住居址によって切られている。

プランははっきりしないが円形を呈すと思われ，規模は東西推定10ｍ，南北9.5ｍを測る大きな住居址である。

壁高は西で30㎝東へ行くに従い低くなる。壁はややゆるやかな立ち上がりをみせている。

床面は中央部に大きなくぼみがみられるが全体に平坦で固く良好である。

住居址西及び南に壁にそって一部周溝がみられる。P_1・P_2，P_4，P_7・P_8，P_{12}・P_{13}，P_{15}・

第14図　第４号住居址実測図　（S＝1／60）

P_{16}などから柱穴の移動がみられ，拡張された可能性が強い。炉の移動ははっきりしない。

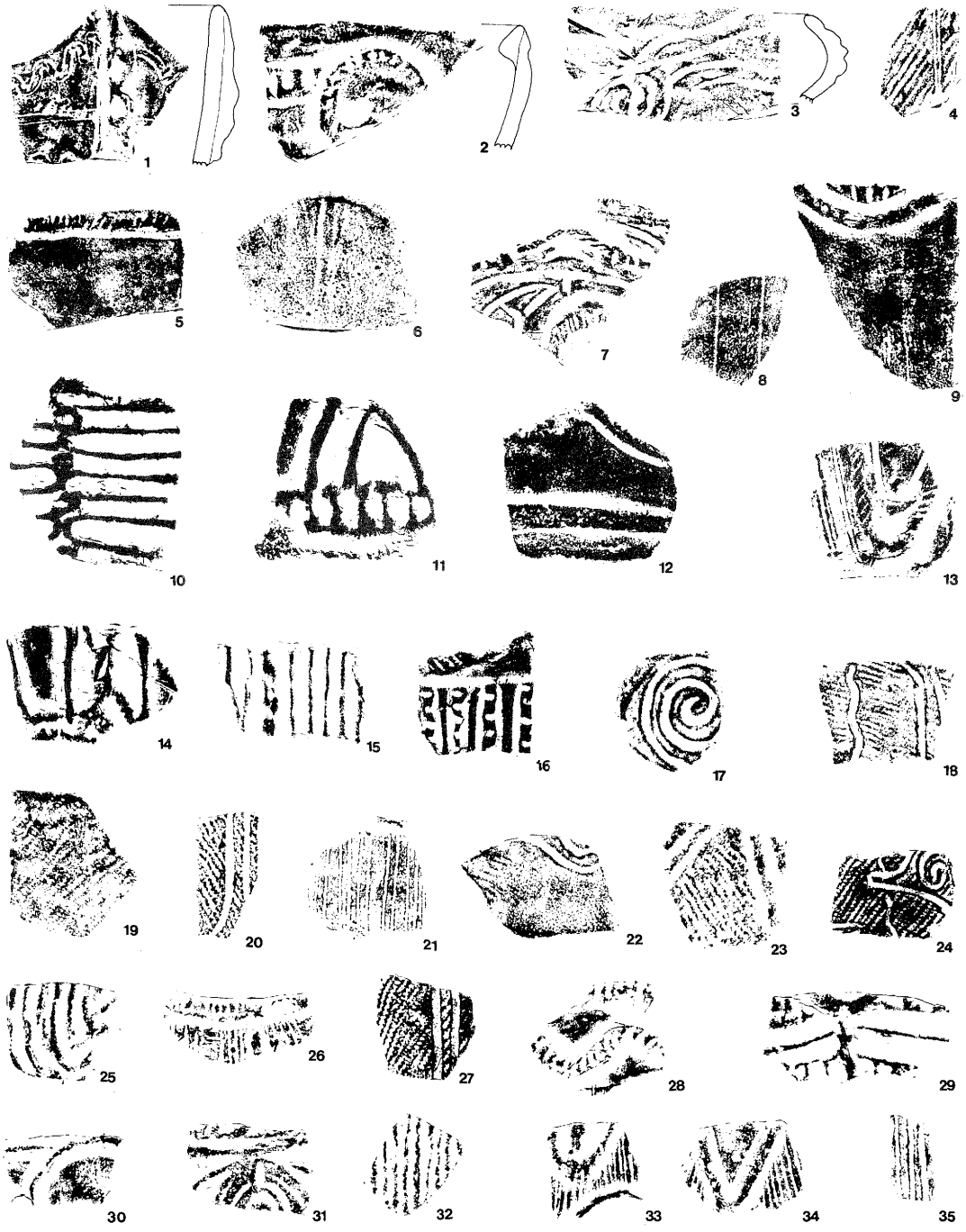
炉は南西部を土壙３によって壊されはっきりしないが，方形の石組み炉と思われる。推定規模は外側100×70cm，内側60×40cmである。炉石は横長に使っている。堀り込みは10cmほどで浅く，内部には焼土が充満している。

主柱穴は先ほどのピット群とP_{10}を入れて６本と考えられる。

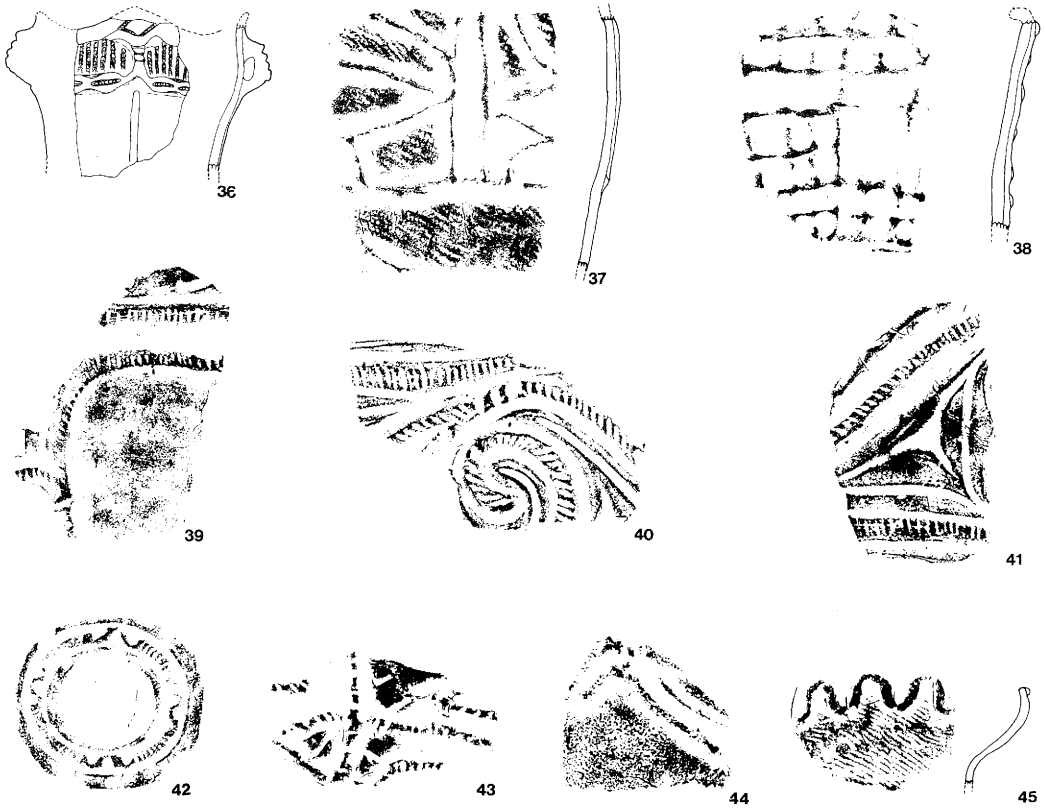
P_{13}とP_{14}の間に貼り床されたピットがみられ，内部より土器の底部が出土している。後に述べる第32号・33号・37号住居址においては古い柱穴に土器を埋め込んだことが知られるが，当例は，拡張される前の住居址と思われる周溝外にあるところから土壙とした。

遺物（第15・16図）

土器は覆土に多くみられ，床面近くは少ない傾向をみせている。器形を知り得るものは36だけである。



第15図　第４号住居址覆土出土土器　（１/３）



第16図　第４号住居址床面出土土器　（36は１／６，他は１／３）

先に述べたように器形を知り得るものは36だけであるが，ほとんどが深鉢形土器である。浮線文で飾るもの（10，11，14，15，25，29，37，38）が一般的である。覆土出土のものには曽利的要素を持つものがみられる。１は平出Ⅲ類Ａに属するもので先行するものである。

36は小形深鉢形土器で１/４ほどの破片による図上復元である。山形状の突起を持ち変形人体文が懸垂し，穴様は４区角からなる。時期は井戸尻期である。

石器は多く132点出土し，剝片は78片みられる。内訳は打製石斧23，磨製定角１・蛤刃２・乳棒状石斧２，大形粗製石匙13，石錘７，敲打器ａ類２・ｂ類７，特殊敲打器22，磨き34，礫核石器２，砥石１，石核８，横刃形石器８点である。

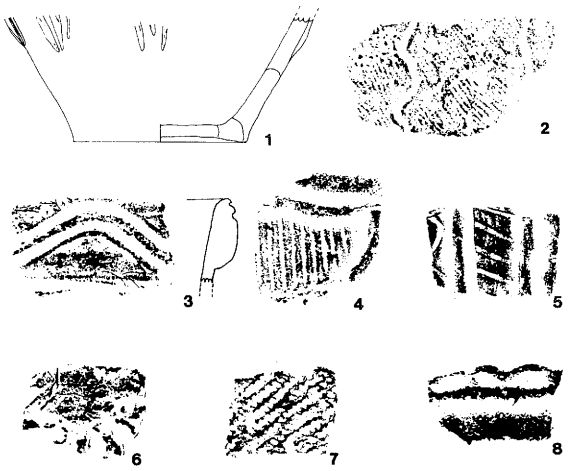
5　第５号住居址（第17・18図）

遺構（第17図）

本住居址は南側を第６号住居址によって切られ，北東部は第３号住居址に接する。

プランは定かでないが，不整円形を呈すと思われる。推定規模は，径４ｍほどと考えられる。

第17図　第5号住居址実測図　（S＝1／60）



第18図　第5号住居址床面出土土器　（1は1／6，他は1／3）

第6号住居址との床面差は西側で10cm東側では浅くなる。

壁はゆるやかで，西側で20cmの壁高である。東側は壁の確認ができなかった。

当住居址には炉がみられず，第6号住居址によって切られた部分にあったとはとうてい考えられないことからしてもともと炉がなかった考えるのが妥当で，これからすると住居址とは性格が異なるものであろうか。

ピットもあまり深いものもなく柱穴と考えられるものはない。

床面は平垣で固く良好である。

P_{15} の西わきから深鉢形の土器の底部が発見されている。

遺物（第18図）

土器・石器とも非常に少ない。

1は深鉢形土器の底部である。三条を一組みとする懸垂文がみられる。

時期は曽利Ⅱ式に比定されるであろう。

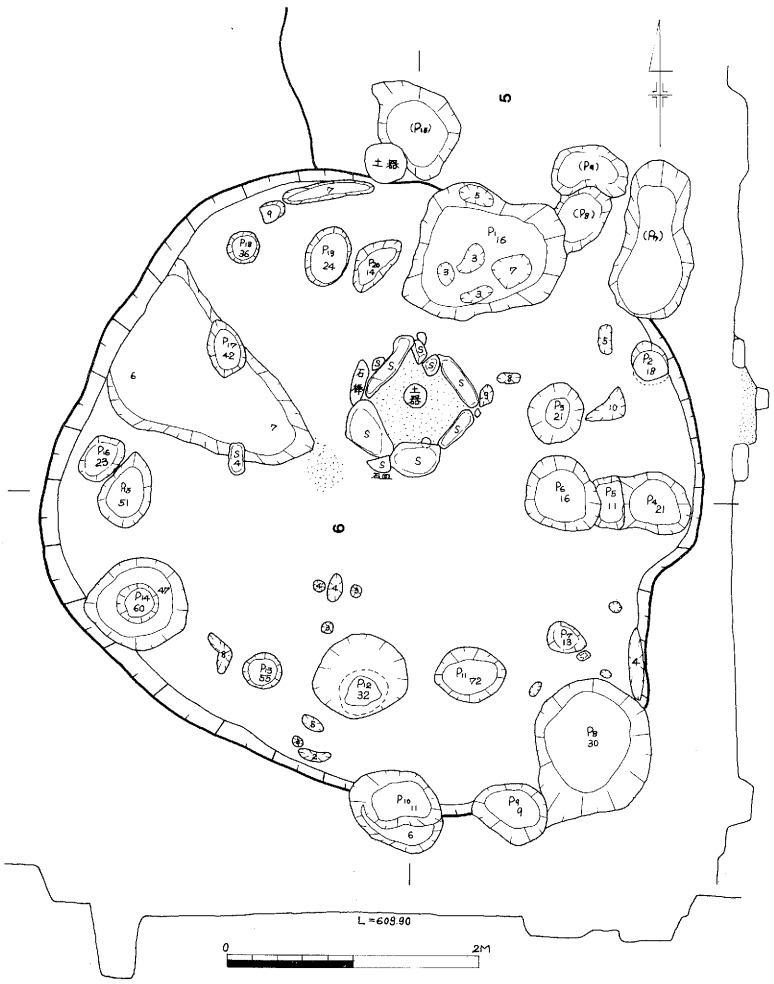
石器は全部で20点と少ない。出土した剝片は17片である。石器の内訳は打製石器８，大形粗製石匙１，敲打器ｂ類４，石皿１，磨石１，磨き石３，掻器１，横刃形石器１点である。

6　第６号住居址（第19・20図）

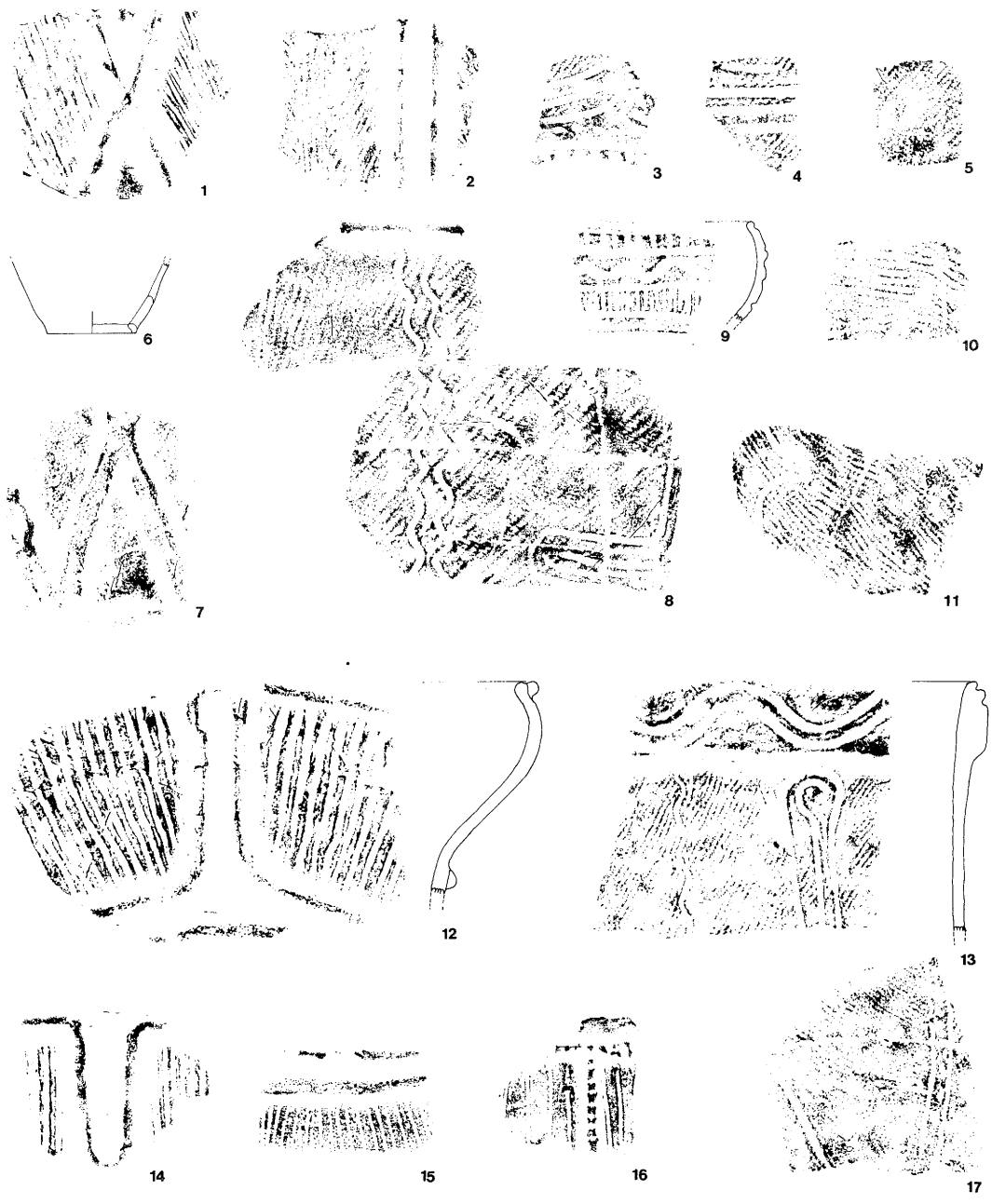
遺構（第19図）

当住居址は第５号住居址の南にあり，その南部分をわずか切っている。

プランは東南部にわずか張り出した不整円形でその大きさは径５ｍである。ロームを掘り込んだ床面は中央部が若干高くなり，固く良好である。壁高は西側で30㎝東へ行くほど低くなり20㎝を測る。炉は中央北寄りに位置し，石組み炉である。形は外形は方形，内形は五角形である。南西部を除く三方は細長い自然石を使い細かい石で裏詰めをしている。南西部は大きな平



第19図　第６号住居址実測図　（Ｓ＝１／60）



第20図　第６号住居址出土土器　（６は１／６，他は１／３。１～５は覆土，
６～17は床面出土。６は炉内埋設土器。）

担な石を利用し内部を逆八の字に組み，外側には石皿の破片で裏詰めを行っている。これは平盤石皿的意味を持つものと考えたい。炉の内部は20cmほど掘りくぼめ，中央部には深鉢形土器の内部が埋設されて内部は焼土が充満している。石は横長利用である。大きさは外形120×90cm，内形80×60cmである。

西側炉石に接して自然石利用の石棒が発見されている。

主柱穴は定かでないが6本と考えたい。

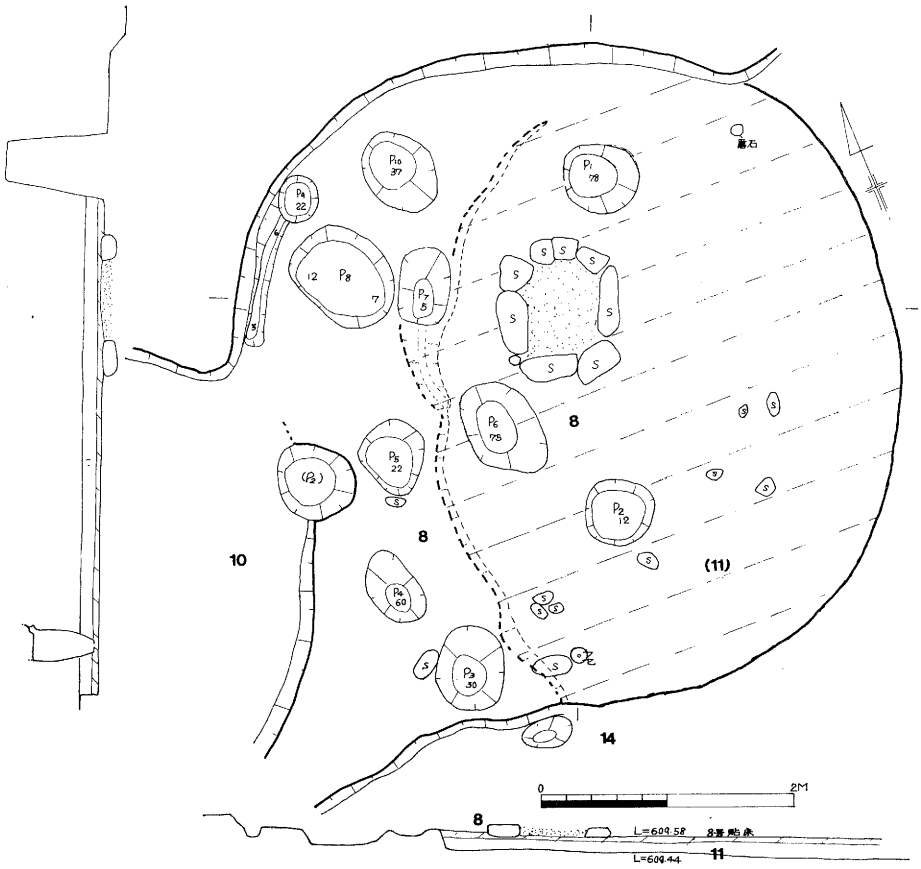
炉の南西に厚さ2～3cmの焼土がみられる。

遺物（第20図）

土器は炉内から出土した小形深鉢の底部(6)を除いてはすべて破片である。出土量も少ない。

1・2・12・14～16のような曽利的要素を持つものと3～5，8～11，13，7のように縄文を持つものとに大別できる。

時期は曽利Ⅱ式に比定される。



第21図　第8号住居址実測図　（S＝1／60）

石器は22点と少ない。剝片は17片とこれまたわずかである。石器の内訳は打製石斧４，石錘１，敲打器ａ類３・ｂ類１，特殊敲打器５，石皿１，磨石１，磨き石５，石棒１，横刃型石器２点である。

7　第８号住居址（第21・22図）

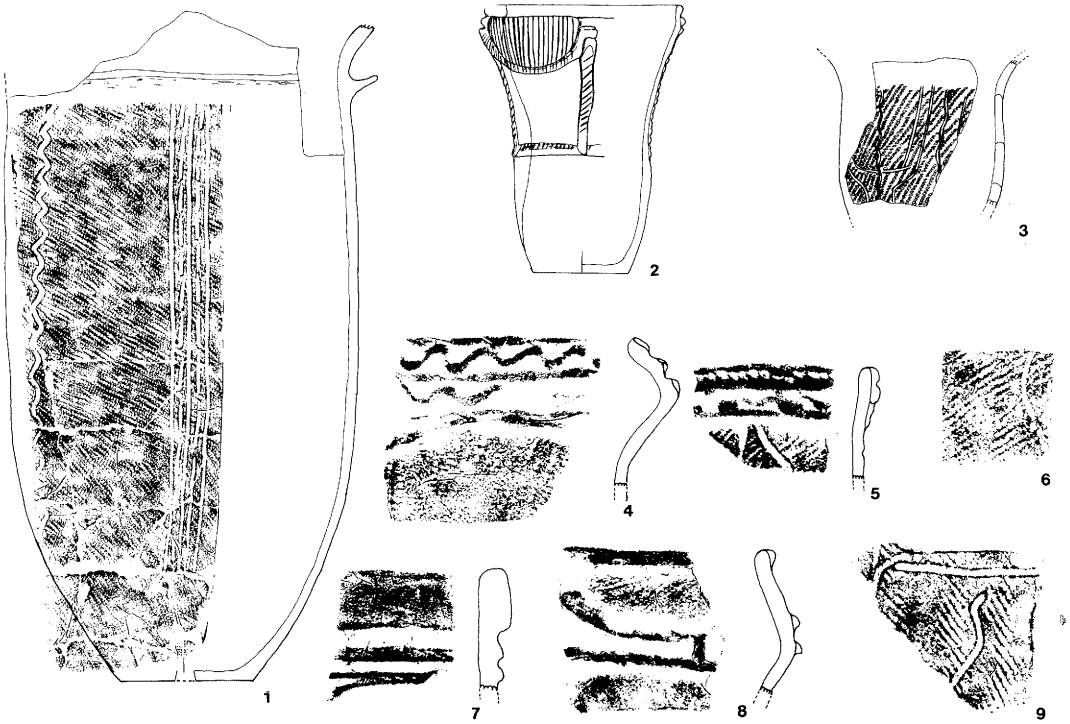
遺構（第21図）

当住居址は集落の南にあり10～15号住居址と一群をなすもので，西側を三分の一ほど残して第11号住居址に貼り床をしている。西側は第10号住居址と南側は第14号住居址と接し，共に当住居址より床面は低く本住居址を切った形であるが，はっきりとはしない。

貼り床部分は所によって10cmほど床を貼った所もあるが全体に軟弱で炉の発見によって貼り床とわかった状態で，プランもあまりはっきりしない。一応円形を呈すと思われ，南北5.2ｍ東西５ｍと思われる。

第11号住居址との床面差は15～20cmである。北側の壁はゆるやかな立ちあがりで，壁高は20cmを測る。

炉は住居址中央北寄り貼り床上にあり石組み炉である。形は方形に近いが北側に丸味を持ちいわゆる五角形である。大きさは外形120×100cm，内形75×65cmを測る。北側を除く三方は



第22図　第８号住居址床面出土土器　（１～３は１/６，他は１/３。１は伏甕）

細長い自然石を用い，北側は小さ目な円礫によって丸味を作っている。石は横長に使っている炉の内部はほとんど堀りくぼめられておらず炉石からの深さは10cmほどである。炉内には焼土が充満している。

貼り床部におけるピットの検出は十分でなく主柱穴は何本かは不明である。

住居址中央南側に貼り床より5cmさがって底部せん孔の伏甕（第22図－1）が発見されている。　甕の部分だけ堀り込み埋め込んだもので，内部は黒色土が充満しており，遺物は検出されなかった。

遺物（第22図）

土器は全体に少ない。すべて床面出土のものである。全体に縄文を持つ土器群からなり，曽利的要素を持つものは2のみである。

1は伏甕で底部せん孔の大きな深鉢形土器である。孔は内側で1.5cm,内側で1.2cmを測る。口縁部はほとんどなく文様は不明であるが，強く外反し，その下部には受け皿状のつばがめぐらされる。当遺跡の第36号住居址より出土した馬蹄形把手を持つ土器と相似する。同様な口縁部装飾があったと思われる。胴部は縄文を地文とし沈線による直線及び蛇行の懸垂文が4個ずつ交互に配される。加曽利ＥⅠ式に比定される。まだ磨消懸垂文の発達はみられない。

2は小形の深鉢形土器口縁から胴部にかけては半分ほどしかない。口縁部に櫛形文を配し，そこから隆帯を胴部まで懸垂させたものであまり類例をみないものである。井戸尻的色彩が強いが，口縁部の施文方法や胴部における櫛形文の消滅，懸垂文などからして曾利期の始めに位置づけられるであろう。

3は胴部破片からの図上復元である。器形はさだかでないが，小形の深鉢形土器で胴上半部から強く外反する。文様は縄文を地文とし，細い平行沈線が蛇行ないし斜走する。加曽ＥⅠ式に比定される。

8は加曾利ＥＬ式である。これらを曾利編年に対比させれば諏訪地方の共伴関係からして曾利Ⅱ期に比定でき得る。

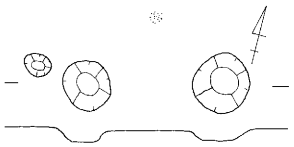
石器の出土は57点，剝片は34片である。その内訳は，打製石斧11，敲打器α類2，特殊敲打器14，磨石2，凹石1，磨き石17，礫核石器3，石核1，横刃形石器6点である。

8　第9号住居址（第23図）

遺構（第23図）

本住居址は第8号住居址の北東に発見されたもので，開田による破壊のため，わずかな焼土とピットが3個確認されただけのものである。焼土の存在がみられるところから住居址としたものである。

土器・石器ともまったく出土していない。



第23図　第9号住居址実測図　（S＝1／60）

9　第10号住居址（第24・25図）

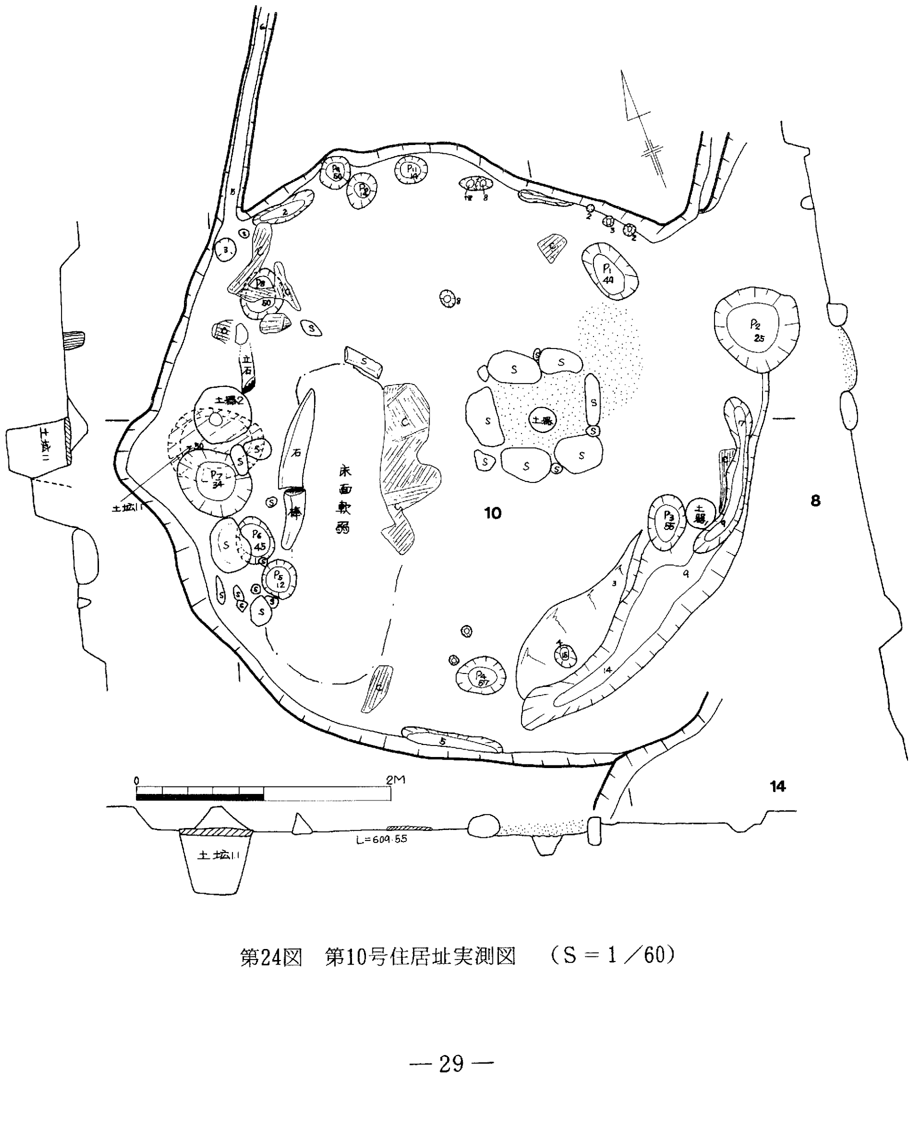
遺構（第24図）

本住居址は第８号住居址と東側で南東部は一部第14号住居址と接する。第８号住居址との重複関係ははっきりしない。　また第14号住居址との複合関係であるが住居址東から南にかけてみられる周溝からすると第14号住居址を切った感じをうけるが定かでない。

一応住居址の壁を周溝の線として考えると西側に張り出しを持つが，ほぼ円形である。大きさはほぼ５ｍである。

この住居址は火災にあったもので，焼土が厚く全体に堆積し，床面近くには炭が多量にみられた。柱材や上屋材と思われるものを除いては，20㎝ぐらいの層をなしており，「わら炭」のようにみられ，上屋のふき材と思われる。

床面は若干凹凸がみられるが一部を除いては常に固く火熱によって一部ぼろぼろしていると



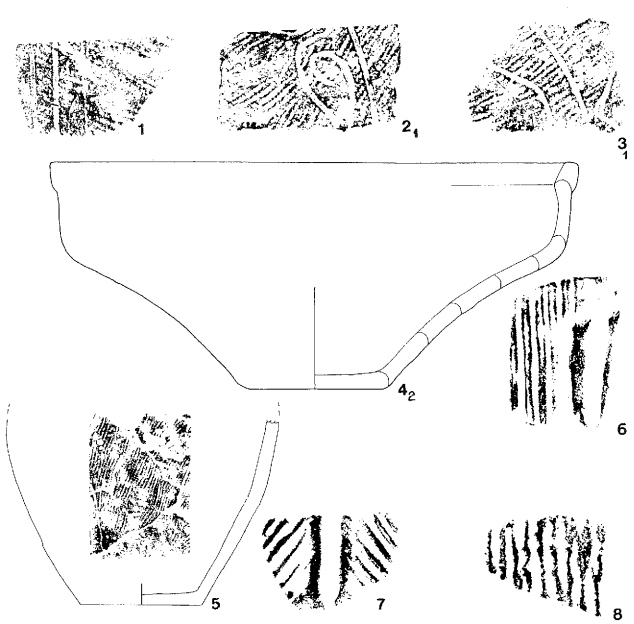
第24図　第10号住居址実測図　（S＝1／60）

ころもみられる。壁はゆるやかな立ち上がりをみせ，西側で20cmの壁高を示し，東に行くに従い低くなり15cm前後である。

炉は住居址北東寄りに位置し，方形の石組み炉である。大きさは外形110×100cm，内形80×50cmである。東側を除く三方は大き目な平べったい自然石を横長に用い，東側のみ細長い石を縦長に使用している。炉石は半分ほどを床面に埋め込んでいる。炉の内部は床面を5cmほど掘り込み，炉石上面からすると10cmである。ほぼ中央に深鉢形土器の胴下半部（第25図－5）以下が埋設されていた。

主柱穴はP_1，P_3，P_4，P_6，P_8の五本と考えられ，同時期の住居址にはあまり例をみない。火災によって残った炭火材のうち，柱と考えられるものは，P_8の南にあるもので，直径15cmで，一部だけである。材質はクリである。

住居址の中央西壁に寄ったところに石棒と立石それに浅鉢形土器（第25図－4）が伏さった状態で出土している。石棒の手前は床面が軟弱である。石棒は花崗岩質で細長く断面は三角形を呈すもので，自然面の一部をわずかたたいている。長さは1.3mあり片方の先端はややとがり，もう一方は丸味をおびている。出土したときには二つに折れ，もう一箇所にもき裂が認められた。立石は石棒の北はじから70cm北西に発見され砂岩製の角柱で，60度の角度で南・土器に向かって倒れている。長さ40cmあり10cmほど床面に埋められている。浅鉢形土器は立石の南，石棒の西側に口縁を下にして北側は床よりわずか浮いて発見された。



第25図　第10号住居址床面出土土器
（4・5は$\frac{1}{6}$，他は$\frac{1}{3}$。5は炉内埋設土器）

さらに土器の北東に花崗岩が2個，P_6・P_5の西側に大きさはまちまちであるが，花崗岩と砂岩の円礫が床面に置かれている。これについては一種の聖域と考えるのが妥当で，祭壇の変形と考えたい。

浅鉢形土器の南P_7を掘っているとその北側にロームを10cmほど固く貼ったピットが確認された。土器は半分をその貼り床されたピットの上に伏せられている。

炉の動きや柱穴の動きからは住居址の建て直しは考えられず柱穴を埋めたとは考えられない。

また石棒などと併せた祭壇

に付属すると考えることもできようが，はっきりしないため，今回は土壙11とした。

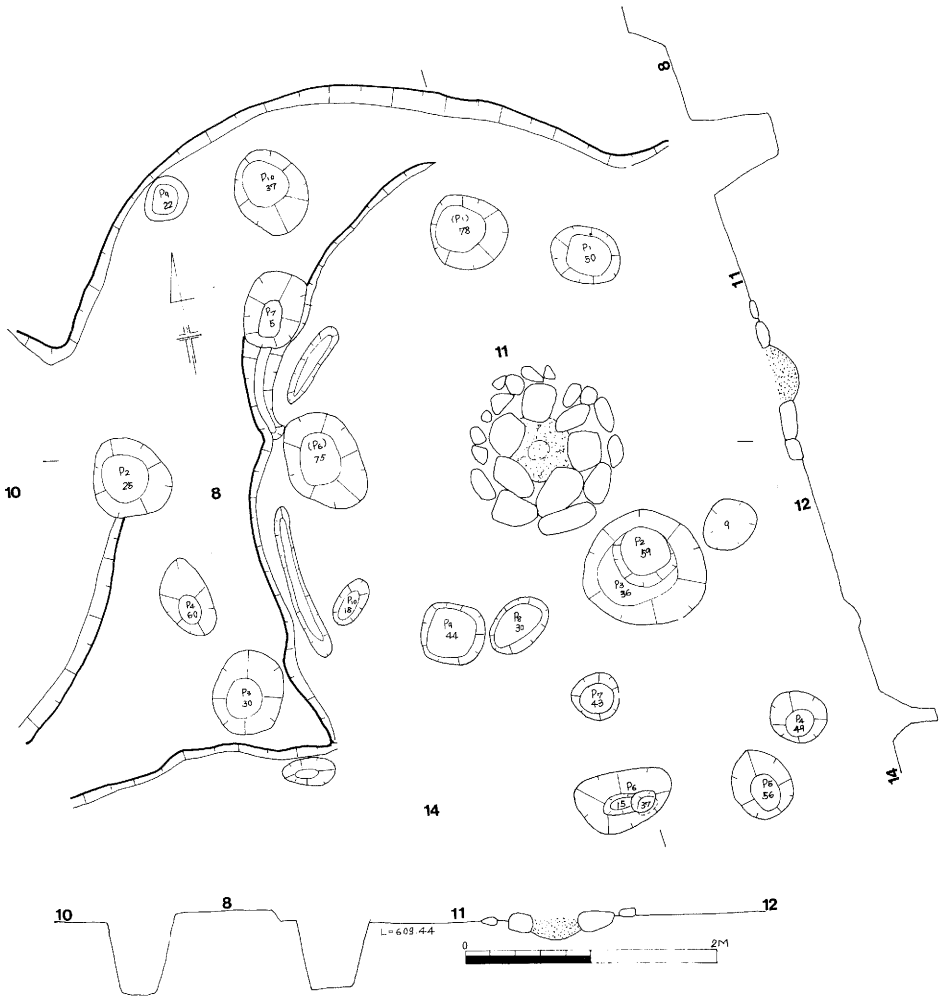
貼り床の上に浅鉢形土器が伏せてあることなども非常に興味あることで，ご教示いただきたい。

P_3の東にまとまって土器が出土したが，残念ながら復元はできなかった。第25－２・３がそれである。

遺物（第25図）

土器・石器とも非常に少ない。土器の出土状態はすべてに述べてある。２・３は深鉢形土器の胴部破片で同一個体である。縄文地に沈線を曲線的にめぐらすものである。１とともに加曽ＥＩ式である。

４は口径42cm，底部の大きさ11cm，高さ18cmの無文の浅鉢形土器で完形品である。小さ目の



第26図　第11号住居址実測図　（S＝1／60）

底部から内屈しながら頸部へ強くはり，頸部から口縁にかけては垂直にのびる。口唇部はわずかに段をもたせている。全体に褐色を呈し，長石を多く含む。内外面とも丹念なヘラみがきが行われている。加曽利Ｅ期のものである。

５は炉内埋設土器で，深鉢形土器である。地文は縄文で細い沈線が懸垂する。加曽利ＥⅠ式である。

６，７は曽利Ⅰ式，８は井尻期のものであろう。

出土土器から曽利Ⅰ期の住居址と考える。

土器同様石器も全部で７点と少ない。内訳は，打製石斧２，特殊敲打器１，磨き石１，石棒１，石核１，横刃型石器１点である。剝片は３片である。

10　第11号住居址（第26～28図）

遺構（第26図）

本住居址大部分は西にある第８号住居址に貼り床されたものである。東は第12号住居と南は14号住居址と同一床面でつながる。

プランは西壁からするに円形を呈すと思われるが定かではない。

床面は全体に平垣で固く良好である。壁はゆるやかな立ち上がりで，壁高は北側で25cm，西側は第８号住居址との床面差15cmほどである。

炉は住居址のほぼ中央に位置すると思われる。炉石を二重にめぐらせた特殊な炉である。形は内外ともほぼ円形で，大きさは外形 130 × 120 cm，内形40×40cmで内部は狭くなっている。

炉石は炉内部に向かってやや傾斜ぎみにすえられ，石自体は床面に半分ぐらい埋め込まれている。内側の炉石は大き目な石が用いられている。全体に平盤な石である。外側とりわけ北側には，小さなものがみられる。

炉石は花崗岩質の自然石を利用したもので，一部砂岩質のものもみられる。また炉石は横長に利用されている。南側に平盤な大き目な石があり，平盤石皿的に全体を利用した可能性が強い。炉石に特に焼けた跡はみられない。

炉の内部はすり鉢状に堀り込まれ，中心部で床面より15cm，炉石から20cmを測る。炉石を二重にめぐらした炉は，当遺跡では，第15号住居址，第23号住居址で，他には 茅野市和田遺跡において一例知られるぐらいで，類例を知らない。非常に珍しく特殊な炉形態を持つものとして注目したい。

主柱穴はプランがはっきりしないので，明確にならないが，P_1，P_4・P_5，P_9がそれにあたると思われ，４本の可能性が強い。

土器の出土状態は，覆土中に散在してみられ，床面近くでは，炉の西側に集中して出土している。

遺物（第27・28図）

遺物は多いが，器形を知るものは，床面出土の深鉢形土器（22・23）だけで，それとても胴下半部以下のものである。

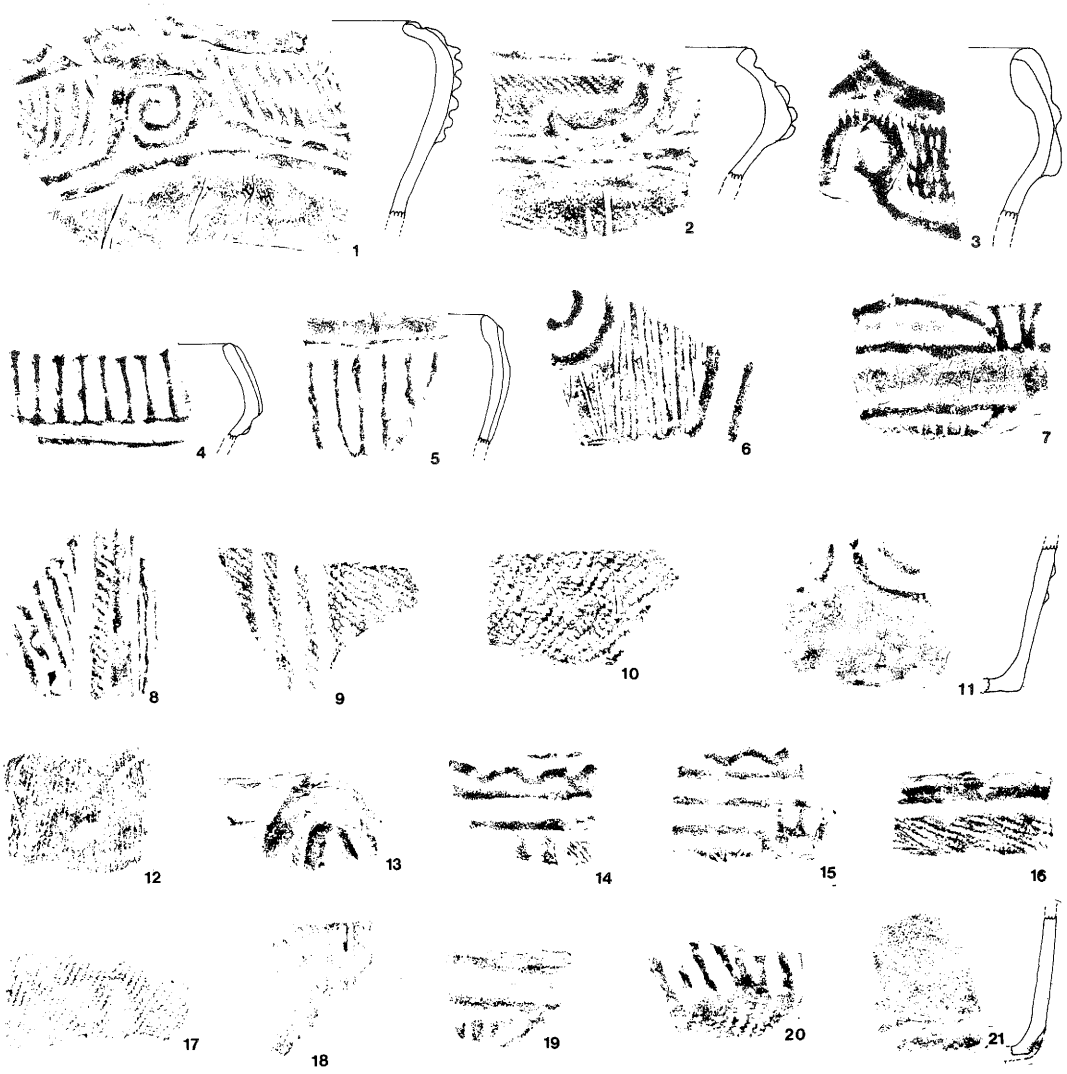
覆土出土のものと床面出土のものとには明瞭な時期差はみとめられない。

22は深鉢形土器で，胴部はふくらみを持つと思われる。器面全体は縄文でおおわれ，不規則な沈線の懸垂がみられる。

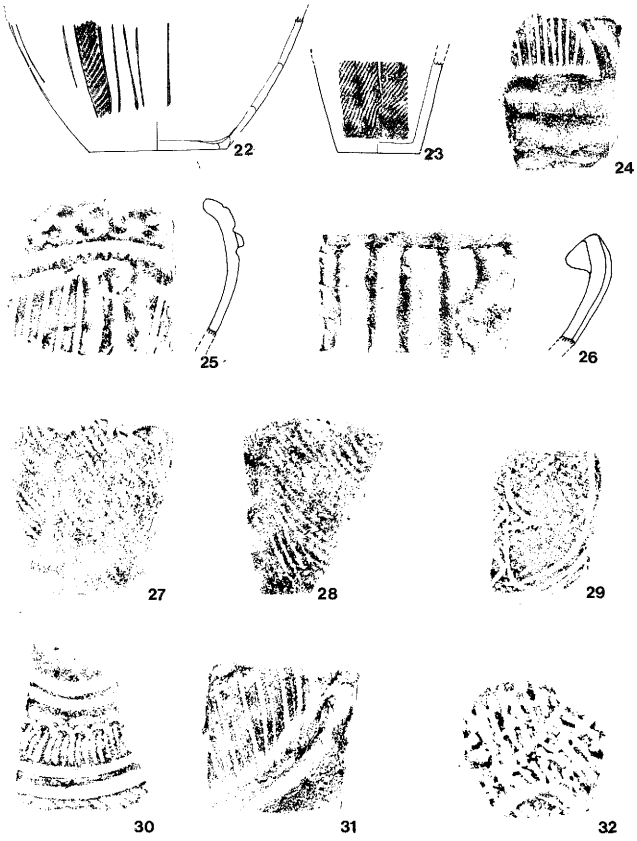
23は小形の深鉢形土器である。やはり縄文を地文とし，細い沈線の懸垂がみられる。懸垂は４本と考えられる。

共に加曽利ＥⅠ式に比定されるであろう。

他のものもすべて深鉢形土器の破片であろう。１・２・３は共に口縁部破片で，隆帯によって



第27図　第11号住居址覆土出土土器　（１／３）



第28図　第11号住居址床面出土土器
（22・23は１／６，他は１／３）

区角するものである。区角内には１は太い沈線，２は縄文，３は刺突文がみられる。１・２とも胴部には縄文を地文とし，２には懸垂沈線がみられる。共に加曽利ＥⅠ式である。

４，５，26は浮隆線文による口縁部破片で，井戸尻最末期から曽利期にみられるものである。

14，15は頸部破片で同一個体である。

当住居址の一群の土器には加曽利Ｅ的要素を持つものが多くみられる。

当住居址は曽利Ⅰ期のものであろう。

12はやや後出するもの，30は井戸尻期のものである。

石器は全部で87点，剥片は43片出土している。石器の内訳は，打製石斧14，磨製定角石斧２・蛤刃石斧２，大形粗製石匙２，石錘２，敲打器Ｄ類11，特殊敲打器23，石皿１，磨石１，磨き石20，横刃形石器９点である。

11　第12号住居址（第29，30図）

遺構（第29図）

本住居址は第11号住居址の東に位置し，北側は水田によって破壊されている。

第11号住居址とは同一床面で続いており，さらに土壙がみられ両者の複合関係は不明である。

プランは円形と思われるが定かでない。

床面は固く良好である。

壁は南側に認められるだけである。壁高は25cmを測る。それに沿って幅20cm前後の周溝がみられる。

炉は住居址の南寄りに位置する。当遺跡の各住居址の炉がほとんど中央か北寄りにあるのに対して変化をみせている。炉石はすべて抜かれている。堀り形は不整円形で150 × 140 cmを測

第29図　第12号住居址実測図　（S＝1／60）

第30図　第12号住居址床面出土土器　（$\frac{1}{3}$）

り炉内堀り込みは50cmと深く焼土は底の方にわずかに堆積しているだけである。

主柱穴はP_8，P_{11}がそれと考えられるが本数ははっきりしない。

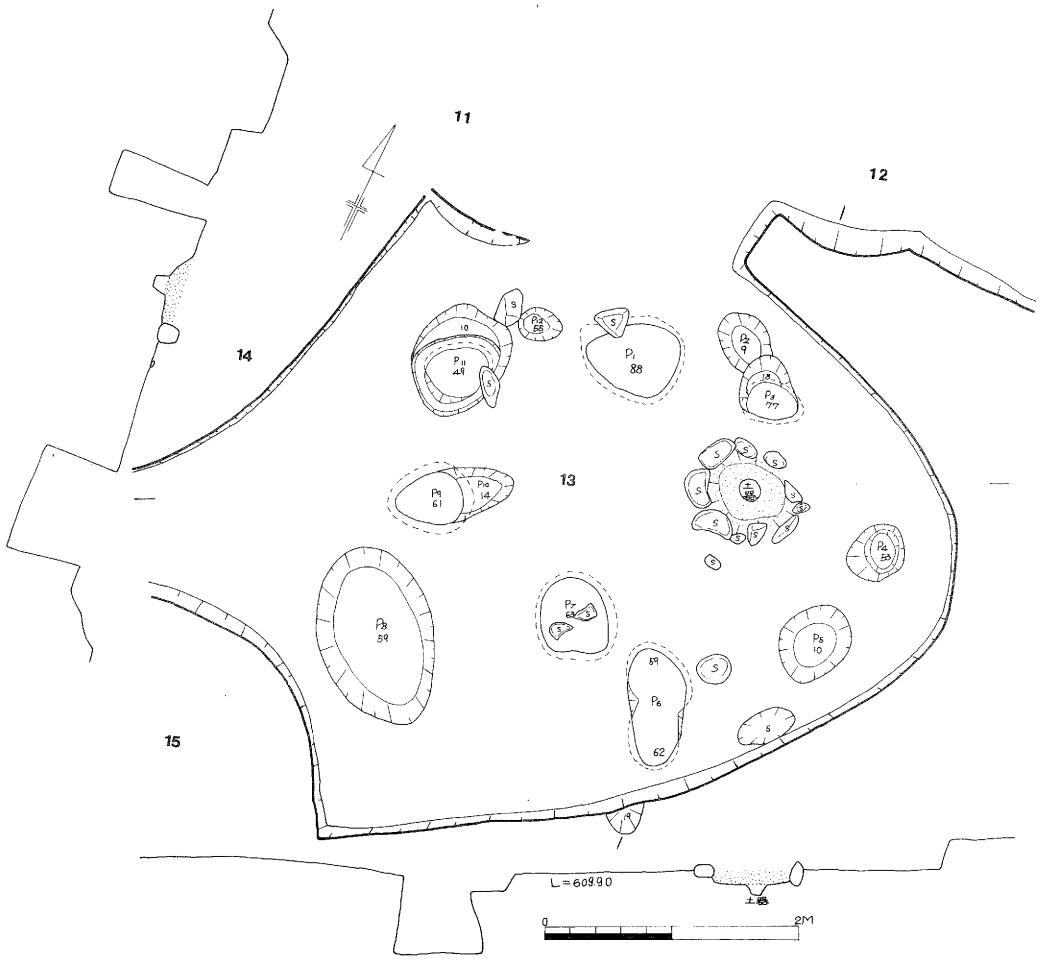
住居址東側に土壙7がある。ピットと土器が出土したものであるが，本住居址に伴う可能性も強い。

本住居址と第11号住居址との間に土壙14と15がある。ピットと配石の組み合わせである。

遺物（第30図）

土器はすべて床面出土のものである。量は少なく器形を知り得るもなく，すべて破片である。ともに深鉢形土器の胴部破片である。１～３は，平行沈線を主体とする一群で，曽利Ⅰないし Ⅱ式によくみられるものである。４～６・８は，縄文地に懸垂沈線や曲線やを配したもので加曽利ＥⅠ式に類似する。磨消技法はまだみとめられない。７・９は大形深鉢形土器の胴部破片で曽利Ⅱ式に比定される。住居址の時期は曽利Ⅱ期でも古い時期と考えられる。

石器は64点，剥片41片が出土している。内訳は打製石斧８，磨製定角石斧２，蛤刃石斧１，大形粗製石匙２，敲打器 *a* 類２・*b* 類２，特殊敲打器10，磨石１，磨き石19，石核４，横刃形石器13点である。



第31図　第13号住居址実測図　（S＝1／60）

12　第13号住居址（第31，32図）

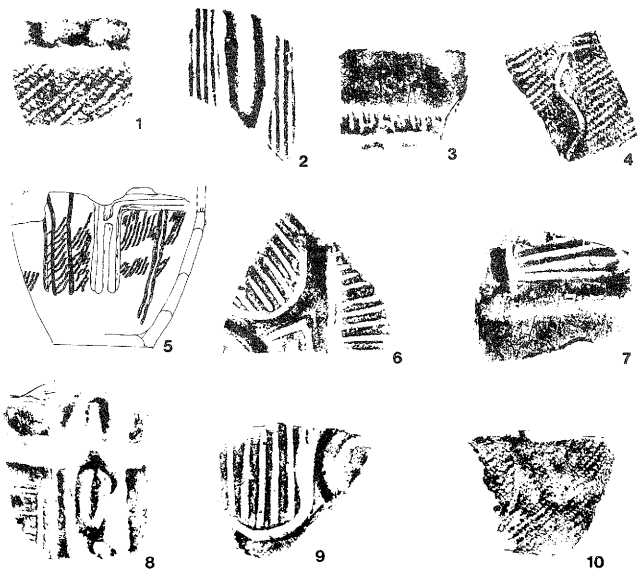
遺構（第31図）

本住居址は北に第11・12号住居址，西は第14号住居址，南は第15号住居址に囲まれたものである。第15号住居址によって南側は一部切られているようにみられるが土器からは逆転しており，住居址が接する程度と思われる。第14・11号住居址との複合関係ははっきりしない。住居址の西側はなだらかにあがり壁ははっきりしないが，あがり切った所に第14号住居址の東壁がみられるところから切り合い関係はないと考えるのが妥当と思われる。また第11号住居址との関係は壁外が一部切られているが，床面は同一レベルでつながっており，不明である。

このようにプランははっきりしないが，楕円形と呈すと思われ，その規模は南北4.5m，東西5mと推定できる。

床面は西側がさきほど述べたように傾斜するが固く良好である。北から東にかけての壁の立ちあがりは直に近く，南ではややゆるやかである。壁高は25cm前後を測る。

炉は東央東寄りにみられ，石組み炉である。形は北東部がくずれているが内外とも円形をしている。大きさは，外形100×80cm，内形70×50cmである。西側は大きめな自然石を横長にして並べ，東側は細長い小さ目な石を縦長に使っている。炉石はすべて花崗岩質の自然石を用いている。内部は10cmほど平らに堀られ炉石からの深さは15cmである。ほぼ中央に口頸部を欠く小形深鉢形土器（第32図－5）が埋設され，炉内には焼土が充満している。



第32図　第13号住居址出土土器
（5は$\frac{1}{6}$・他は1／3，1～4は覆土○6～10は床面出土，5は炉内埋設土器）

P_1，P_6，P_7，P_9，P_{11}はともに袋状ピットである。南西部に大きな楕円形のピットがみられるが貯蔵穴であろうか。住居址に伴わない土壙とも考えられるが不明である。

主柱穴はP_3，P_4，P_6，P_9，P_9・P_{11}など考えられる，プランとは若干異なっている。

遺物（第32図）

土器，石器とも出土量は少ない。

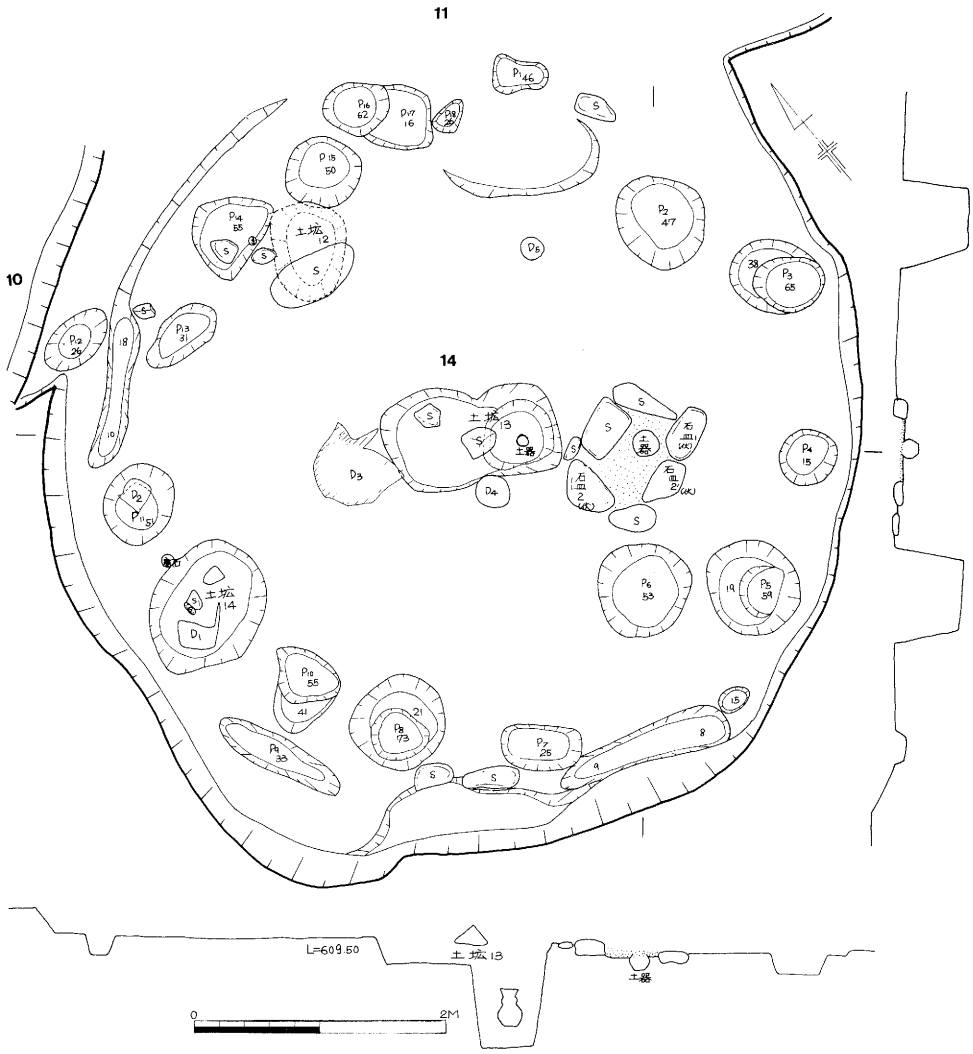
土器は炉内部より出土した5を除いては，すべて破片である。

覆土出土のもの（1～4）と床面出土のもの（5～10）とには時間差はみられない。

5は小形の深鉢形土器で口頸部はない。横走する二条の隆帯は，胴部において懸垂文となり，胴部を埋める縄文

の間には浅い懸垂沈線がみられる。加曽利ＥⅠ式に類似する。４・10も同様である。２・８のように曽利Ⅰ式的要素を持つものもみられるが，総じて曽利Ⅱ式に比定される。

石器は全部で43点，外に剝片が28片出土している。石器の内訳は，打製石斧15，磨製定角石斧２・蛤刃石斧１，石錘１，特殊敲打器18，ハンマー１，横刃形石器５点である。



第33図　第14号住居址実測図　（S＝1／60）

13　第14号住居址（第33～35図）

遺構（第33図）

本住居址は第10号・第11号住居址の南に位置し，東には第13号住居址がある。第11号住居址とは同一レベルにて床面はつながっている。複合関係は不明である。

プランは北側がはっきりしないが，ほぼ円形を呈すと思われ，規模は東西6.5ｍ，南6.3ｍと比較的大きい。

床面は東側へやや傾斜する。ロームを固くたたきしめて良好な床面である。壁は全体にゆるやかな立ちあがりを示し，壁高は西で25cm，東に行くに従い低くなり10cmを測るのみである。

炉は住居址中央東寄りに位置し石組み炉である。形は内外とも長方形を呈す。大きさは外形で90×110 cm，内形は40×70 cmである。炉石には図示するように石皿が用いられている。石皿1は完形品，石皿2と2'は同一のもので接合する。ともに伏せて使っている。石皿2・2'は壊れたものを再利用したのか，わざわざ壊ったものかは不明である。このように石皿を利用した炉は珍しい。これが伏せてなければ利用価値も見いだせるが今後の問題である。

炉の内部はわずかに堀りくぼめられ，東寄りより口頸部を欠く小形深鉢形土器（第35図―33）が埋設されていた。内部にはわずかに焼土がみられるだけである。

P_3，P_5，P_8，P_{10}，P_{16}，P_{17}などからすると柱の移動が考えられる。また内側に柱穴と考えられるP_2，P_6もみられ，拡張の可能性も考えられるがしかしながら炉には何ら変化がみられない。主柱穴は一応6本と考えられる。

住居址南側と北側に一部周溝がみとめられる。

炉の北西住居址中央部に140×70 cmの楕円形のピットがありその東部分にはさらにもう一つ深さ80 cmの穴が堀られ，内部より小形の壷に近い深鉢形土器が完形で出土している。ピットの位置，さらにピットの上部に石がみられることからして土壙13とした。

またピットの上部に石をもち，土器を伴うものとしてP_{11}とP_{10}の中間に土壙14がある。

P_{14}・P_{15}の中間内側に大きな自然石の花崗岩がみられ，その下に貼床されたピットがみつかっている。土壙12としてある。

これらの土壙と住居址の先後関係であるが，土壙12は住居址より以前，土壙13・14は以後のものである。

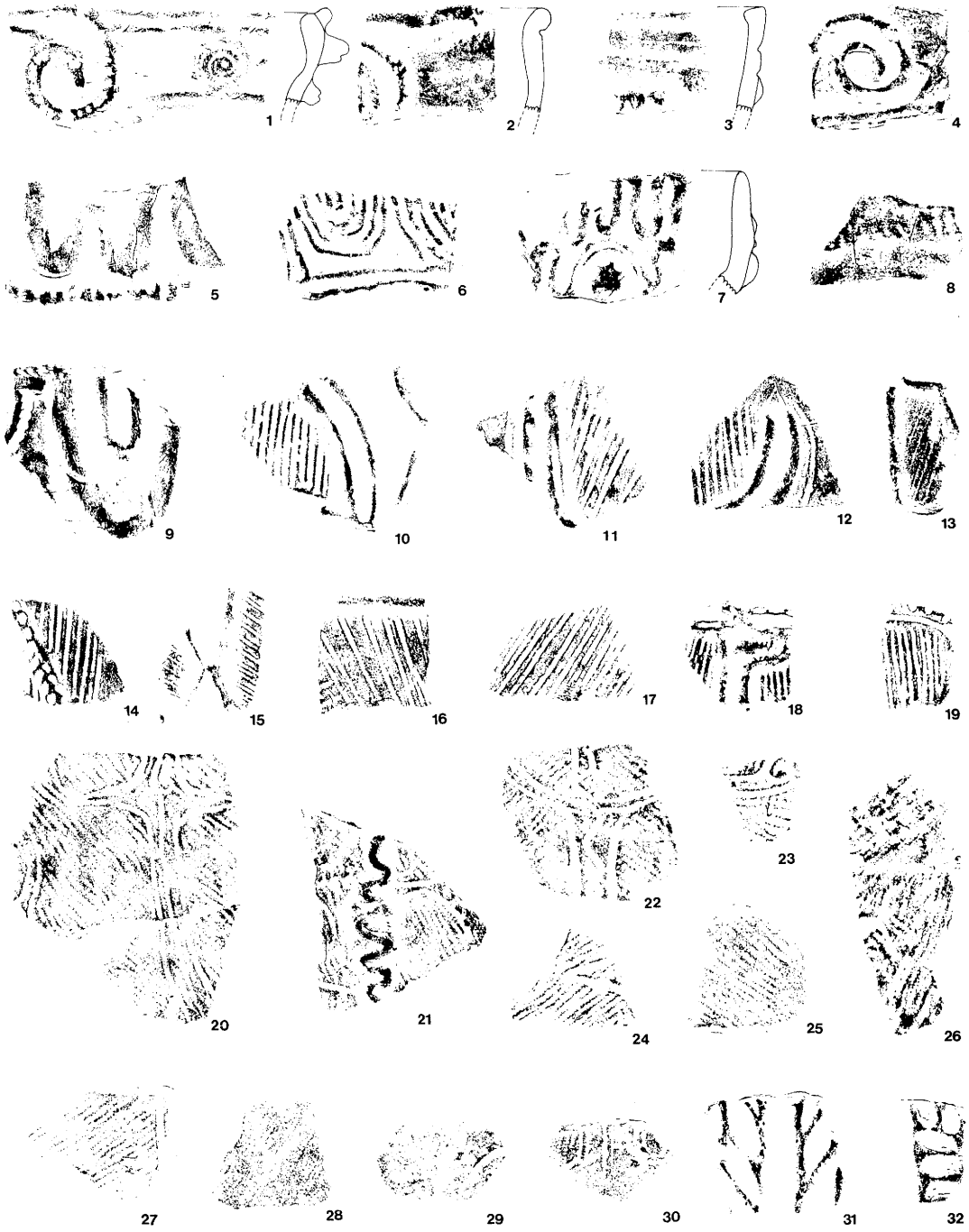
土器・石器とも非常に多量に出土している。土器は覆土出土のものが7割ほど占め散在的にみられた。

床面には図示するように三箇所から個体毎あるいはまとまって出土している。D_2はP_{11}に倒れ込むように出土したもので第35図－34に示す胴下半部を欠く壷形土器である。D_3は土壙13の西につぶれて出土したものであるが，残念ながら復元できなかった。第35図－35がそれである。土壙13の南に第35図－36に示す壷形土器（D_4）が横倒しの状態で発見されている。

遺物（第34・35図）

土器は非常に多量にみられ，出土状態はすでに述べたところである。

覆土出土のもの（第34図）と床面出土のもの（第35図）との間には時間差はみられないので

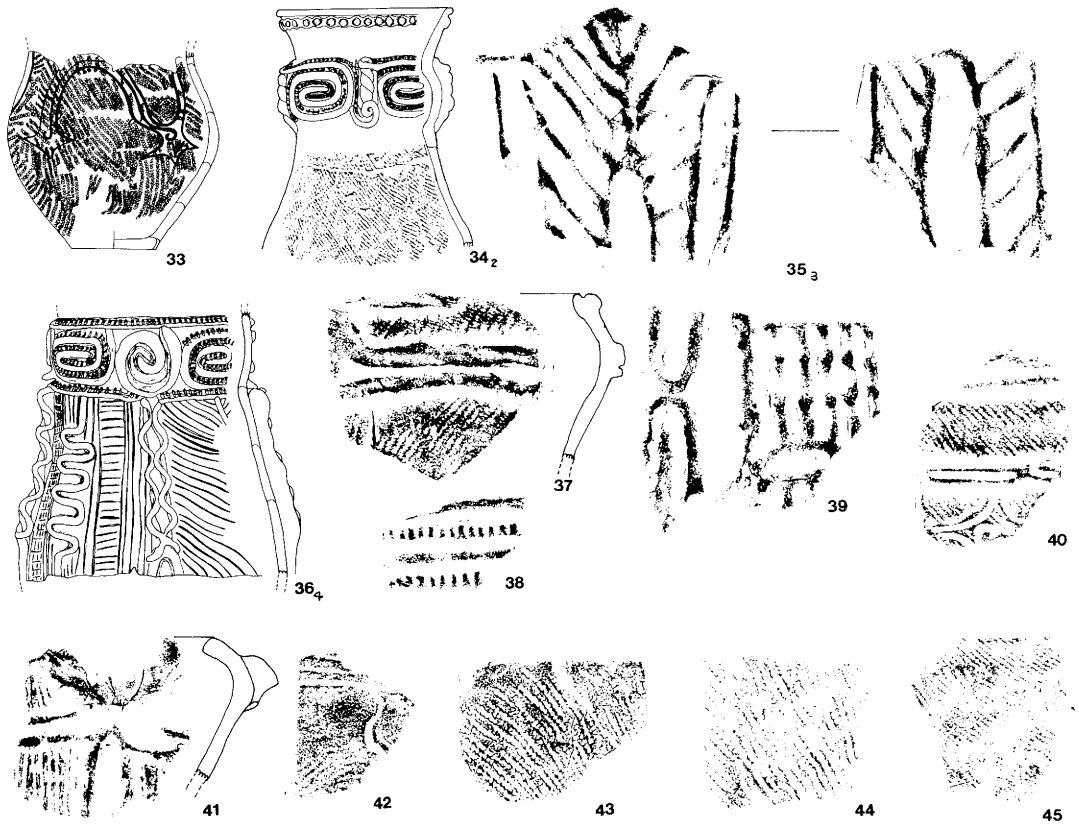


第34図　第14号住居址覆土出土土器　（1／3）

併せて説明したい。

33は炉内埋設土器である。胴部は丸味を持ち口頸部を欠くため器形ははっきりしないが，壷形土器の範ちゅうに入るかも知れない。器面は縄文が施され，細い沈線が曲線文を描く。伊那谷南部においてよくみられる土器である。34は胴下半部を欠くが壷形土器である。口縁は頸部からラッパ状に開き，頸部から強く張る胴部は胴下半部に最大径を持つと思われる。口唇部に段を有し，さらにその下に指頭圧痕文を持つ隆帯が一条めぐらされる。頸部には，やはり隆帯によるねじり状懸垂文と渦巻文が4個ずつ交互に配される。渦巻文の内部には竹管工具による連続押し引き文がみられる。胴部は縄文でおおわれる。33同様珍しい施文を持つ土器である。33は加曽ＥⅠ式に類以するものとみられ，諏訪地方においては曽利期の初めに共伴することが知られている。33，34とも曽利Ⅰ式に比定される。

36は34と同様の器形を呈すと思われ，最大径が胴下半部にくる壷形土器である。口縁はラッパ状を呈し，無文と思われる。ふくらみを持つ頸部には34同様に隆帯による渦巻文が4個ずつ交互に配される。胴部は隆帯による8字懸垂文と蛇行懸垂文が，やはり4個ずつ交互に施され，



第35図　第14号住居址床面出土土器　（33・34・36は$\frac{1}{6}$・他は1／3，33は炉内埋設土器）

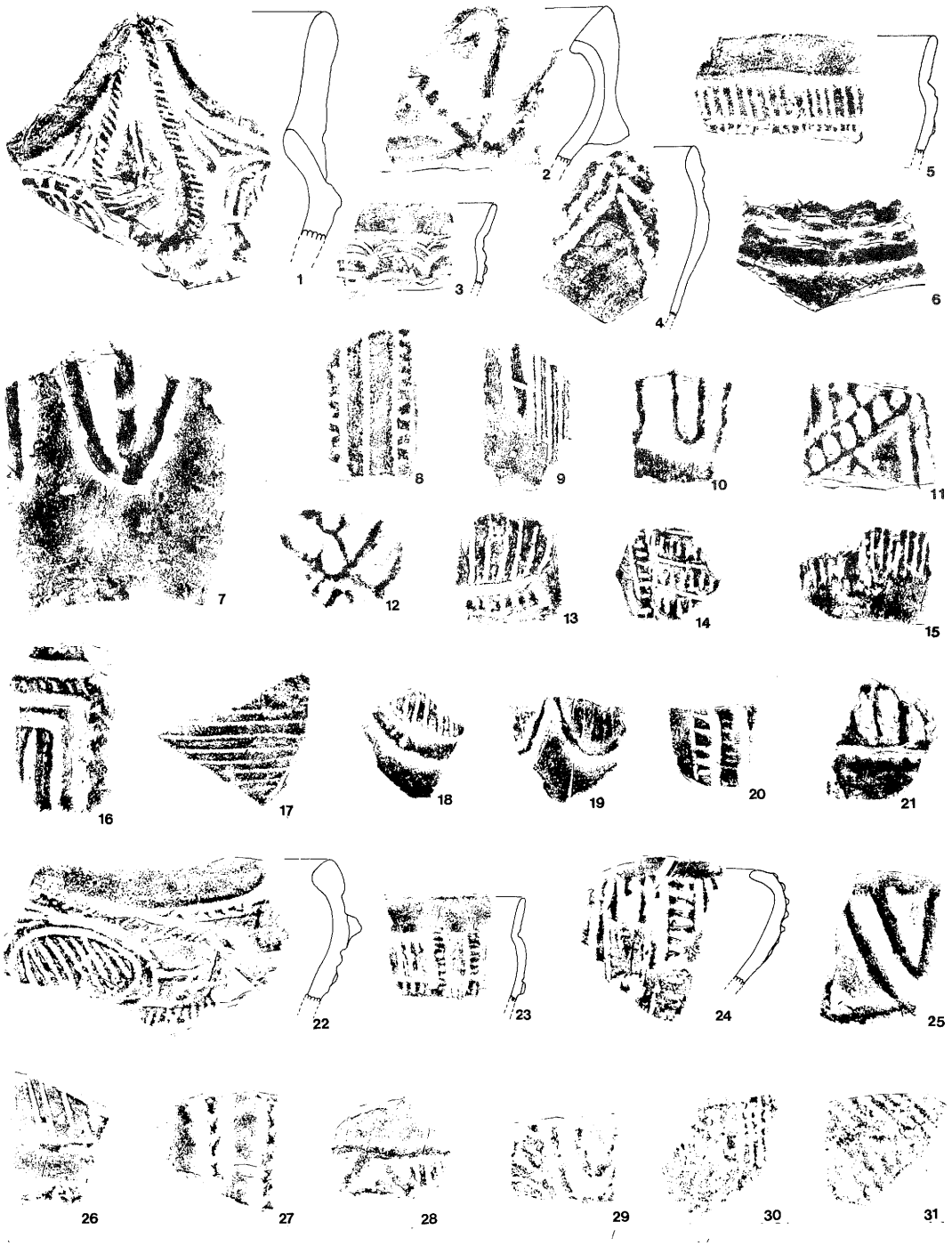
その間には細い沈線が縦走，横走あるいは斜走する。内面にはヘラ磨きが見られる。曽利Ⅰ式土器である。

1，2，3，6，7，31，32，35，37，39，41は，深鉢形土器の口縁及び口縁部付近の破片である。隆帯による文様を持つものが一般的である。胴部破片は縄文をもつ一群（8，20～30，40，42～45）とそうでないものとにわけることができる。20，21は同一個体である。5，9，10，12はやや先行する井戸尻期のものと考えられる。

時期は，井戸尻期の影響を残すものもみられるが，総じて曽利Ⅰ式期に比定される。

石器も土器同様多量に出土しており，全部で189点，剝片84片である。内訳は打製石斧34，磨製定角石斧5・蛤刃石斧1・乳棒状石斧2，大形粗製石匙9，石錘11，敲打器a類4・b類7，特殊敲打器57，石皿2，磨石3，磨き石37，砥石1，石核3，横刃形石器13点である。

第36図　第15号住居址実測図　（1／60）



第37図　第15号住居址出土土器　（1／3０1～21は覆土，22～31は床面出土）

14　第15号住居址（第36・37図）

遺構（第36図）

本住居址は第14号住居址の東，第13号住居址の南に位置する。プランは円形で径５ｍである。

壁は西・南側は直に近く，北及び東側ではややゆるやかである。壁高は東が最も高く35cm，西及び南は25cm前後，北側は15cmと低くなっている。

床面は中央部がやや高くなり，固くたたかれており全体に良好である。

炉は住居址中央北西寄りに位置する。第11号住居址同様炉石を二重した石組み炉である。形は外形はややくずれた円形，内形は方形に近い。大きさは外側80×85cm，内側35×30cmを測ることができる。内側西中央に細長い花崗岩をすえ，後は小さな丸味を持った自然石を用いている。全体に石は縦長に用いられている。東側の斜線のある炉石は火熱を受けて赤色を呈しているものである。内部は浅く堀られやや舟底状をなしている。炉石からの深さは深いところで10cmである。内部には焼土が充満している。

主柱穴はP_1・P_2・P_3，P_4，P_6，P_7の４本と考えられるが全体的に北に寄る。炉の南東部に小さな浅いピットが幾つかみられる。機能は不明である。

遺物（第37図）

土器はあまり多くは出土していない。床面付近のもの（22～31）より覆土より出土したもの（１～21）の方が多い。

出土状態は全般に散在して発見された。両者には時期差はみられない。

深鉢形土器の破片がほとんどと思われる。

時期は総じて井戸尻Ⅲ式に比定される。

石器は比較的少なく28点，剝片は31点である。石器の内訳は，打製石斧３，磨製乳棒状石斧１，大形粗製石匙３，敲打器a類２・b類２，特殊敲打器７，磨石１，磨き石３，礫核状石器２，石核１，横刃形石器３点である。

15　第16号住居址（第38，39図）

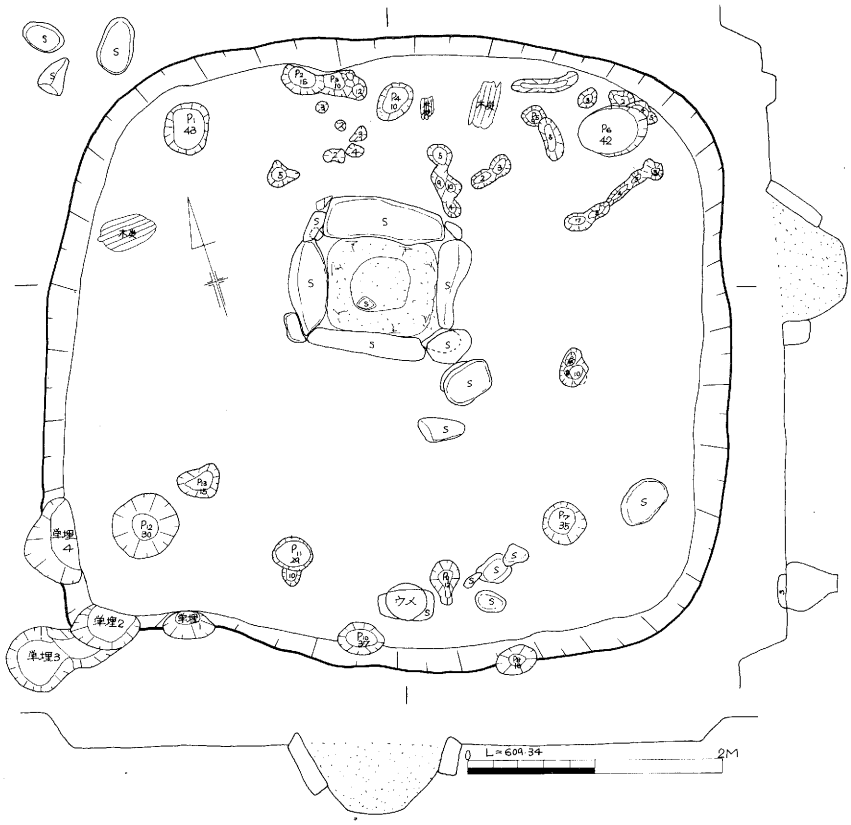
遺構（第38図）

本住居址は第２号住居址の南西４ｍの所に位置する。プランは隅丸長方形で南北５ｍ，東西5.５ｍを測る。

この住居址も第10号住居址同様，火災にあったもので，厚く焼土の堆積がみられ，床面近くには上屋材と思われる炭化材がみられた。柱と思われるものはなかった。

壁は全体にゆるやかで，壁高は西で40cm，東に行くに従い低くなり20cm前後である。ロームの床面は固くたたきしめられ，平担で良好である。

炉は住居址中央北寄りに位置し，内・外とも方形の石組み炉である。南と北側には大きな割り石を用い，東と西側には細長い大きな自然石を利用している。各々の石の合わさり目には，適当な石を選び裏詰めをしている。北西と南東のコーナーは二段の裏詰めがみられ，そのうち



第38図　第16号住居址実測図　（S＝1／60）

北西部の裏詰めには石棒の欠損品が使われている。現代人にも簡単には組め得ないような手の込んだ構築をしている。大きさは外側で130×140，内側で70×80㎝を測る。内部は床面を60㎝堀りくぼめ，断面はすり鉢状を呈している。内部は焼土が充満している。炉石はすべて花崗岩で当然縦長利用である。石を割る技術にも注目したい。

主柱穴はP_1　P_6，P_7，P_{12}の４本と考えられ，P_4，P_{13}は支柱穴であろう。P_9，P_{10}，P_{11}は入口部の施設に伴うピットの可能性も考えられる。

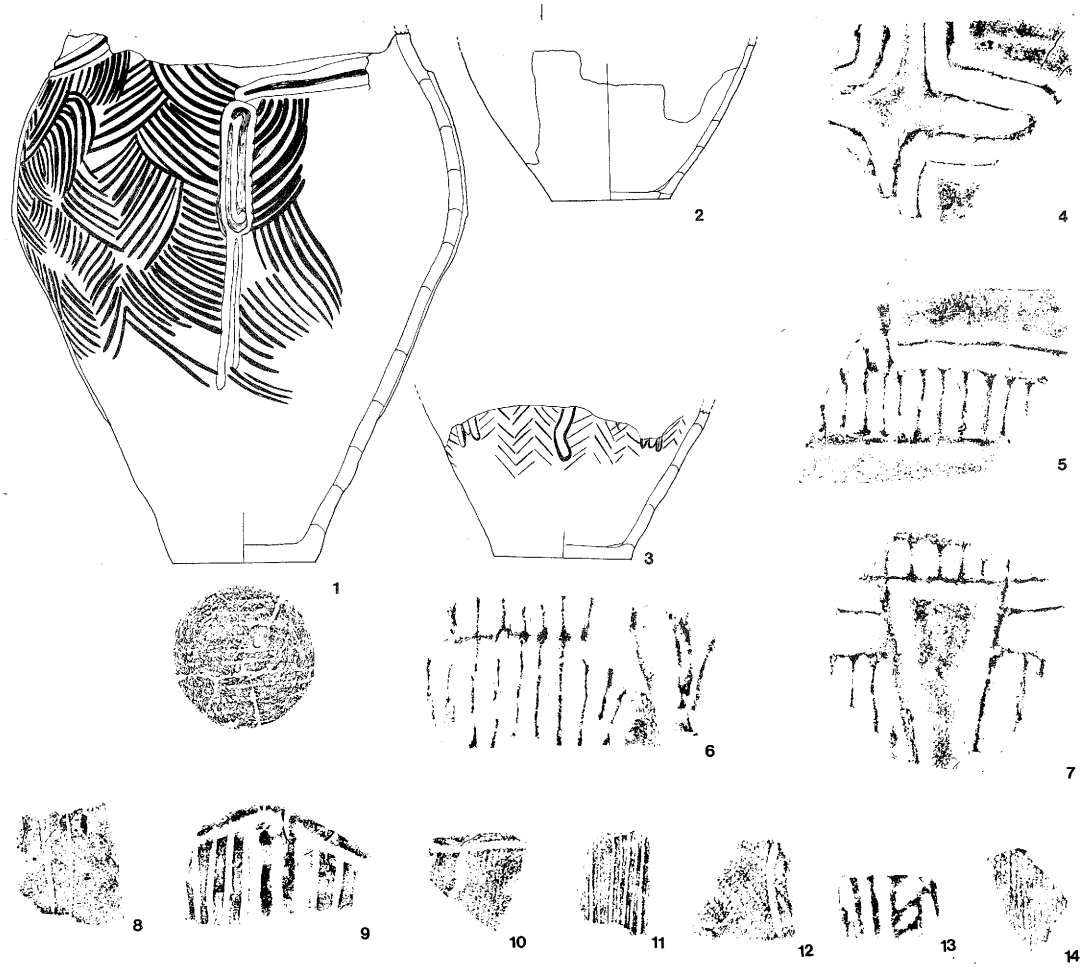
中央南壁ぎわに石ぶたを持った正位の埋甕（第39図－１）が発見されている。入口部における埋甕と考えられる。

当遺跡においては珍しい隅丸方形プランを持ち，さらに炉も他と異なりをみせておる。時期的相違に基づくものなのか特殊なものなのか興味深い問題である。

遺物（第39図）

出土土器は少ない。器形を知り得るものは１のみで他は底部や破片である。

１は正位の埋甕で口縁部を欠く。上には石ぶたがあり，内部は黒色土が充満し内部よりは何



第39図　第16号住居址床面出土土器　（1～3は1／6他は1／3，1は正位の埋甕）

も検出されなかった。キャリパー状の器形の深鉢で底部は以外と小さい。口縁部文様は不明であるが，胴部には変形人体文を4つ懸垂させ，その間はヘラ状工具による浅い平行沈線がうろこ状に施される。網代底を持つ。

2・3は深鉢の底部である。3は隆帯を懸垂させその間を綾杉状の沈線が埋める。4～7は同一個体の破片で細い粘土紐によって文様を施すもので大形深鉢の口縁部破片である。

4～7は時期的にやや先行するが，他の土器は曽利Ⅱ式に比定される。

石器は57点，剝片が44点とまあまあの出土状態である。石器の内訳は打製石斧16，磨製定角石斧2，大形粗製石匙3，石錘1，敲打器*a*類2・*b*類1，特殊敲打器21，磨き石3，石棒1，石核2，横刃形石器5点である。

16　第17号住居址（第40・41図）

遺構（第40図）

本住居址は第１号住居址の西約５ｍの所に発見されたもので，柱穴のみで壁はみられない。田の客土を排土した所地場中に柱穴と焼土が確認された。おそらく開田のさい壁は削られたものと考えられる。主柱穴は６本でP_5は貯蔵穴であろうか。

炉は焼土を残すのみで石組み炉であったか，地床炉であったかは今となってはまったく不明である。

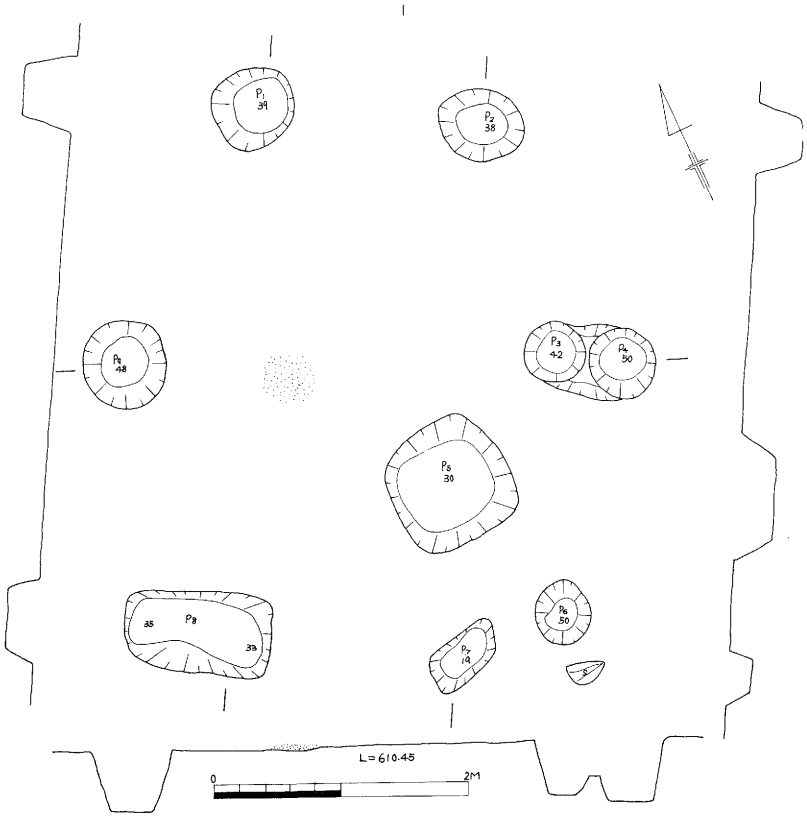
土器は地場中にわずかに出土したのみである。

遺物（第41図）

出土遺物は当然少ない。

１，２は同一個体のもの，７，８は節形文を持つものである。総じて井戸尻Ⅱ式である。

石器は打製石斧３，大型粗製石匙４，石錘２，特殊敲打器１，横刃形石器１の計11点である。剝片は16片出土している。



第40図　第17号住居址実測図　（S＝１／60）

第41図　第17号住居址床面出土土器　（1／3）

第42図　第18号住居址実測図　（S＝1／60）

17　第18号住居址（第42・43図）

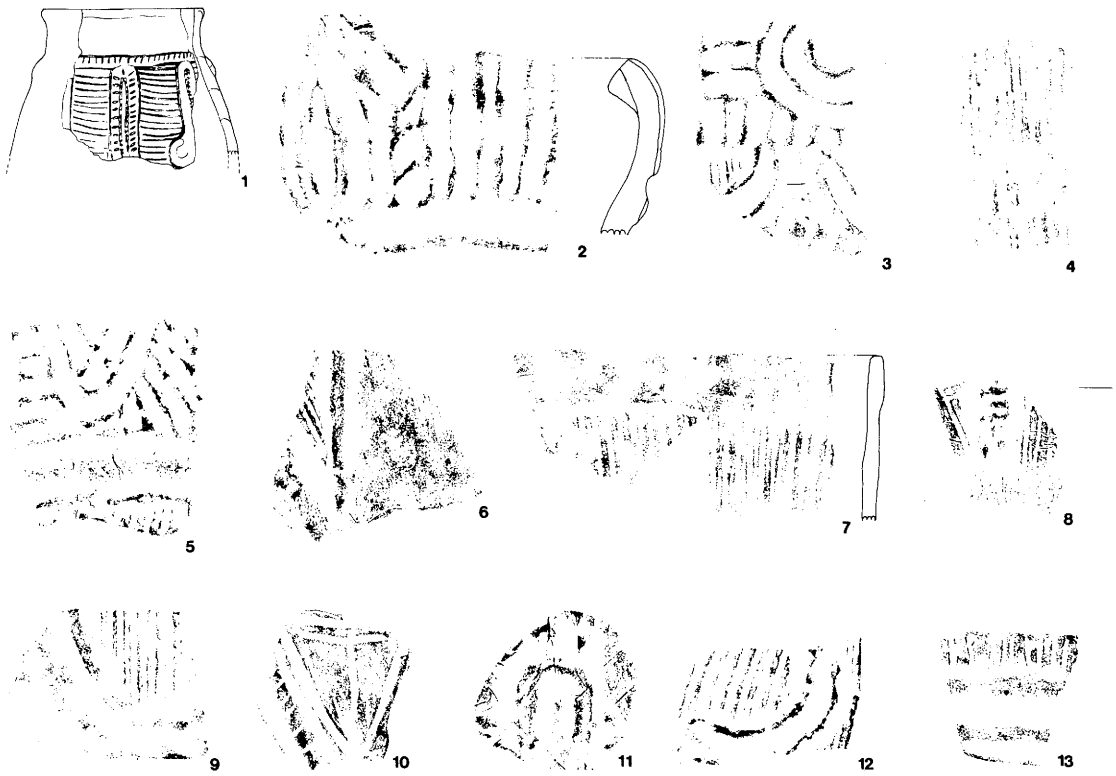
遺構（第42図）

本住居址は住居址群の最西端に位置し第19号住居同様他の住居址より独立している。

プランは不整円形を呈し規模は径5.7ｍを測る。壁は垂直に近いが南ではゆるやかである。壁高は西と東は高く30cmほど南では低く10cm前後である。南壁ぎわに田のあぜがあり，井があったところから壁が一部壊されたものと思われる。ロームの床面は固く全体に良好であるが，南がわはジメジメして軟弱である。先に述べたような理由からして後からのものと思われる。

主柱穴は何本であるかはきめ難い。壁ぎわに沿ってピットがみられるがすべて柱穴であろうか。P_4・P_5，P_{15}・P_{16}などをみると柱の移動も考えられ，今後の問題である。

炉は住居址中央東寄りにみられ，方形の石組み炉で内部はやや五角形ぎみである。規模は外部で80×70cm，内部で40×40cmを測る。焼土は内部に薄く堆積がみられる。炉石は自然石を横長に利用している。炉の西がわに自然石がすえられている。一部台石などに利用されたものと思われる。



第43図　第18号住居址床面出土土器　（1は1／6他は1／3）

遺物（第43図）

出土土器は少なく器形を知り得るものは１のみで他は破片である。

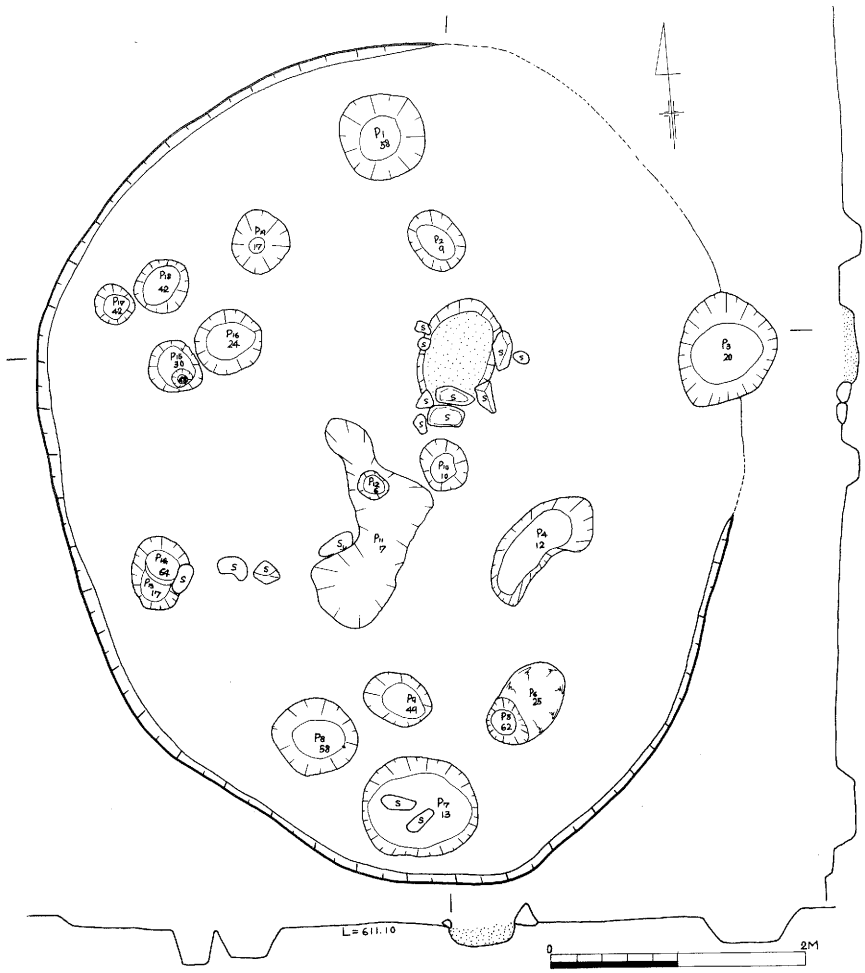
１は破片からの図上復元で壷形土器である。頸部に隆帯を横走させ，それに交わる懸垂文を施して内部は横走する平行沈線で埋める。頸部にヘラ削りがみられる。

２・３は同一個体のもので細隆線文を持つ。５も同様である。平行沈線で描くものが多い。

９は櫛形文と思われる。

総じて井戸尻Ⅲ式に比定でき得ると思われる。

石器は45点，剝片が35片出土している。石器の内訳は打製石斧６，磨製定角石斧２，乳棒状石斧１，大型粗製石匙２，石錘１，敲打器a類５・b類６，特殊敲打器７，凹石１，磨き石７，砥石１，石核３，横刃形石器３点である。



第44図　第19号住居址実測図　（S＝1／60）

18　第19号住居（第44～46図）

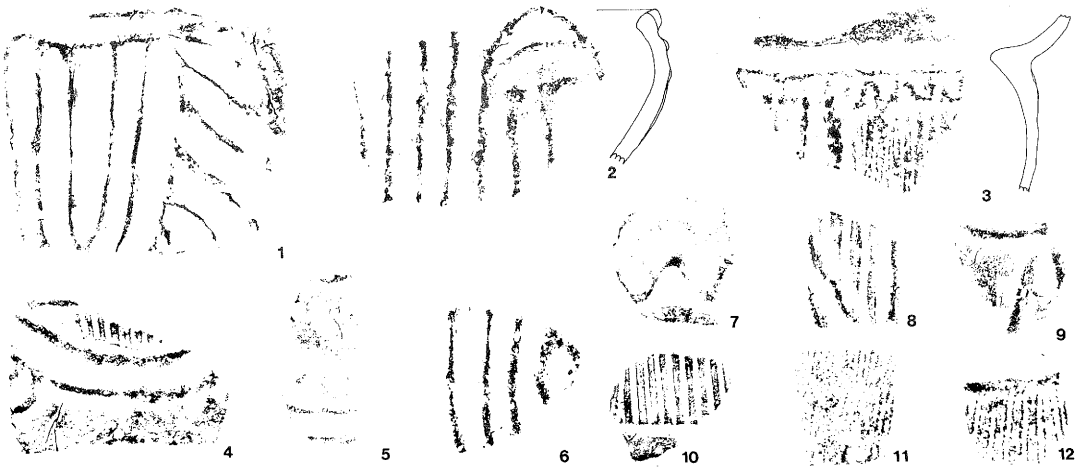
遺構（第44図）

本住居址は第18号住居址の東25ｍの所に位置し，第18号住居址同様住居址群の西にあり，他の住居址より離れてある。

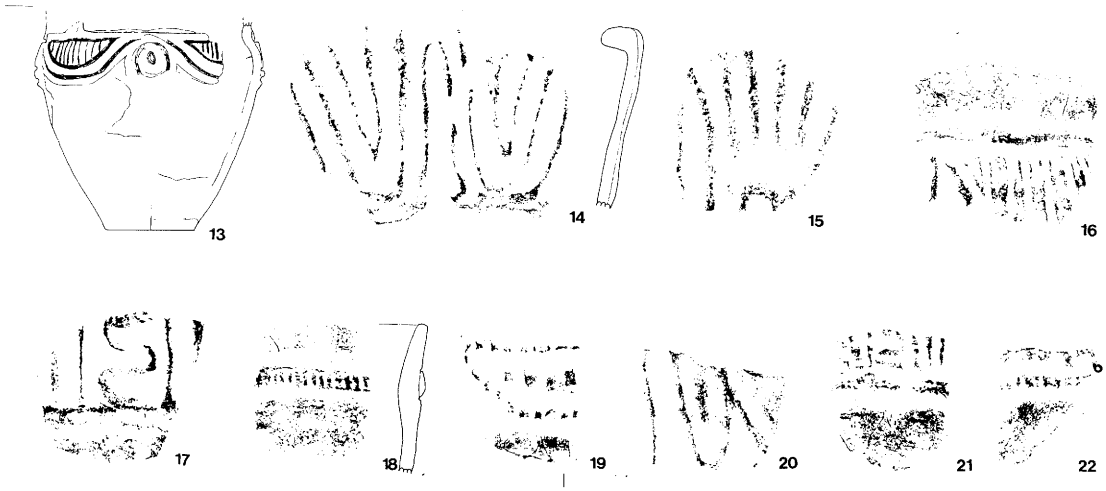
プランは東の壁が不明のためはっきりしないが，長楕円形を呈し，規模は南北6.5ｍ，東西5.5ｍを測ると思われる。開田によって壁は大部壊されたものであろう。

壁はゆるやかで壁高は10cm前後東ではない。床面は全体に軟弱である。

主柱穴は6本と考えられる。



第45図　第19号住居址覆土出土土器（1／3）



第46図　第19号住居址床面出土土器（1／3，13は1／6）

炉は住居址中央北寄りにあり，楕円形の石組み炉で一部炉石を残すのみで他は抜かれている。大きさは90×70cmで内側の大きさは不明である。内部は15cmほど堀り込まれ焼土の堆積がみられた。

土器（第44・46図）

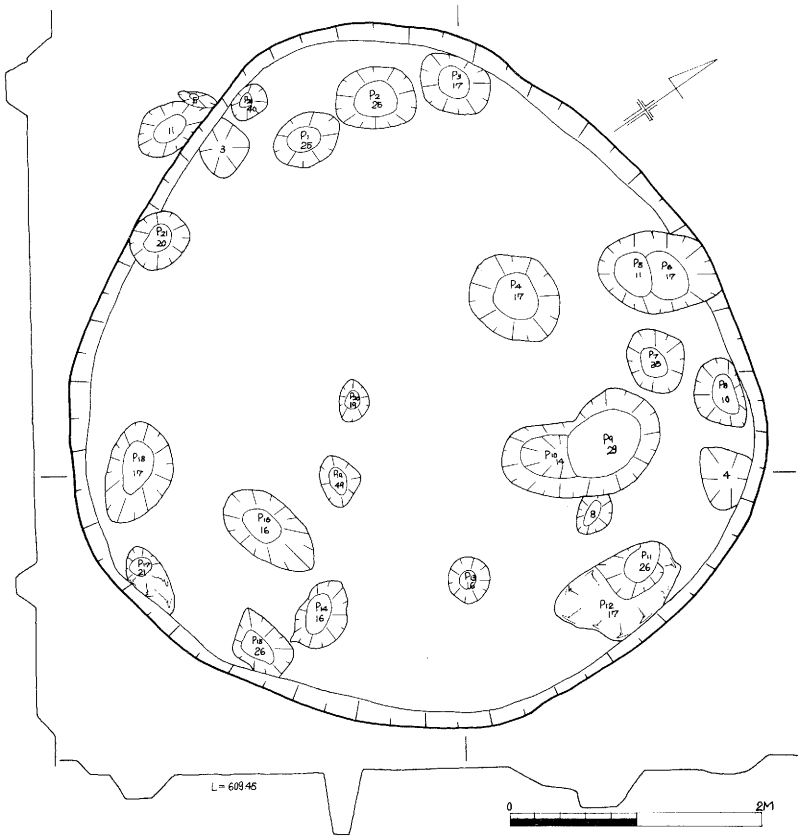
出土土器は少ない。器形を知り得るものは13のみで他はすべて破片である。

1・2は同一個体のもの，6も同様の施文である。4は櫛形文を持つものである。

第46図は床面より出土のものである。13は図上復元である。胴上半部に渦巻文と櫛形文が施される。所々に炭化物の付着がみられる。

総じて井戸尻Ⅲ式に比定される。

石器は93点と多い。剝片は47片である。石器の内訳は打製石斧5，磨製定角石斧1，大形粗製石匙3，石錘3，敲打器a類2・b類2・c類2，特殊敲打器47，磨石5，磨き石10，横刃形石器13点である。



第47図　第20号住居址実測図　（S＝1／60）

19　第20号住居址（第47図）

遺構（第47図）

本住居址は第４号住居址の一部を切って東側に発見されたものである。北西部の伸びた不整円形を呈し，大きさは5.7×5.5ｍである。

第４号住居址との床面差は10cm，壁高は北及び南側で25cm，東側は低くなり10cm前後である。床面は全体に平坦で固く良好である。

第48図　第21号住居址実測図（S＝1／60）

炉址はもちろん焼土もまったくみられない。住居址の壁があるので開田時の破壊とは考えられない。炉址のないものとして第５号住居址と同様である。またピットも深さ30cmを超えるものはなく珍しい例である。

土器，石器はまったく出土していない。

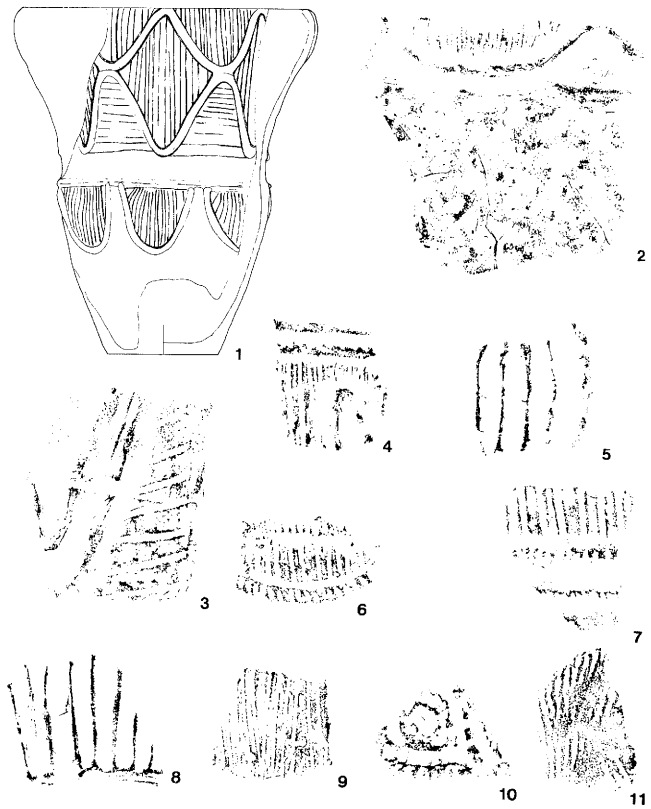
20　第21号住居址（第48・49図）

本住居址は第20号住居址の北東，第23号住居址の南西部に位置する。北及び東側に壁がないためプランは，はっきりしないが，隅丸方形と思われる。規模は推定南北・東西とも６ｍほどと思われる。

壁は直に近く壁高は西で20cm，東に行くに従い低くなりなくなる。床面はわずかに凹凸し，固くたたきしめられている。

炉は住居址のほぼ中央北寄りにあり，石組み炉である。北東部はもともと炉石を持たないと考えられ，Ｕ字形をしている。大きな花崗岩質の自然石を横長にすえている。大きさは外側で80×70cm，内側で50×30cmを測る。炉石は西では床面上に北及び南側では半分ほど埋め込み，東側はせりあがって床面となる。炉石からの深さは10cmで内部には焼土が充満している。

P_{30} と P_{31} の間，炉の南側 P_{32} と P_{34} の間に焼土がみられる。さらに炉の南側に楕円形の深さ13cmのピット34があり内部より焼土が発見されている。石の抜かれた炉ー旧炉址と考えたい。



第49図　第21号住居址床面出土土器（１は1／6，他は1／3）

ピットは多く検出され主柱穴はどれときめがたい。実測図中破線で示した貼り床されたピットが７個確認されている。

炉や焼土の動きなどからして，住居址の建て直しに伴って古い柱穴は貼り床されたものと考えられる。

これらから最低二度の建直しが想像される。

今回の発掘においては古い柱穴を貼り床した例が多くみつかっている。

また貼り床されたP$_3$内より小形深鉢形土器の大きな破片（第49図－１）が発見されている。第32号，第33号，第37号住居址において同様な例が知られている。特異な例ではあるが，建直しに伴う制約的なものがあったのであろうか。

旧住居址の規模などは不明である。

遺物（第49図）

土器は少ない。１を除いてすべて床面直上のもので，破片のみである。

１はP$_3$内より出土したもので小形深鉢形土器の三分の一ほどの破片である。隆帯によるX字文を連続させ，その内部は細い沈線で充填する。胴部には櫛形文が施される。井戸尻Ⅱ式に比定される。２～11はすべて深鉢形土器の破片である。５．８はやや後出するが他は同時期と思われる。

石器は51点，剝片が26片出土している。石器の内訳は，打製石斧10，磨製乳棒状石斧１，大形粗製石匙５，石錘６，敲打器ａ類１・ｂ類１，特殊敲打器９，磨石１，磨き石10，横刃形石器６点である。

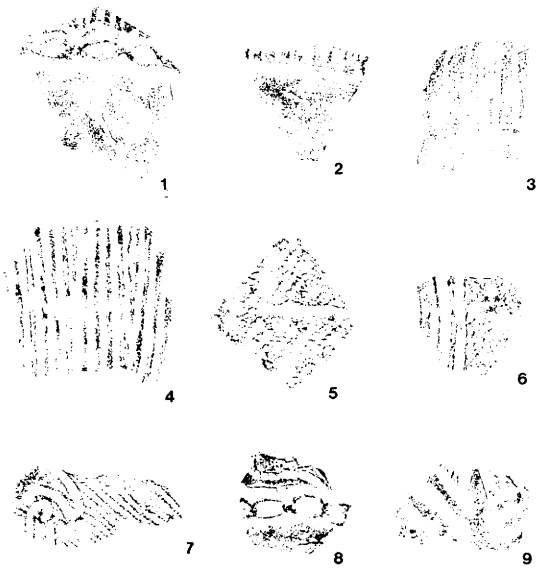
21　第22号住居址（第50.53図）

遺構（第53図）

本住居址は第25号住居址の南西部に炉が確認されたためつけたものである。そのため規模やプランはまったく不明である。炉は方形の石組み炉と思われ，炉石は一部を残して抜かれている。東側は一部貼り床上にある。内部には焼土がわずかにみられるだけである。

床面は第25号住居址と同一である。

遺物は住居址の性格上わけがたかったが，第22号住居址の炉の南東部から出土したものである。



第50図　第22号住居址床面出土土器（1／3）

遺物（第50図）

土器のみで石器は出土していない。当然第25号住居址との混在が考えられる。

深鉢形土器の破片だけで，器形を知り得るものはない。

１～３，８，９は井戸尻期，他は曽利期に比定できるであろう。

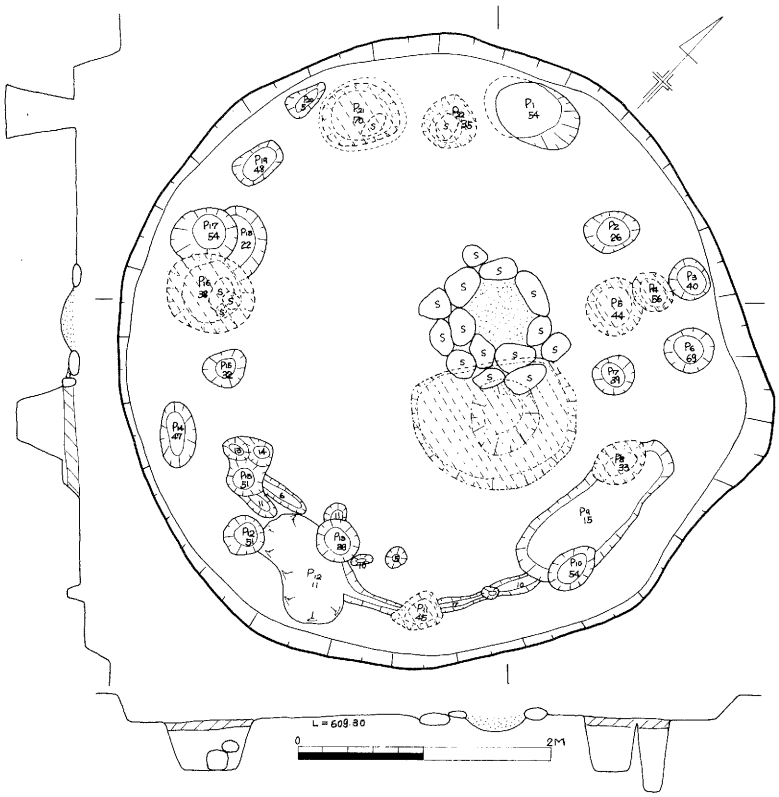
このように住居址の当該時期は決めがたい。

22　第23号住居址（第51・52図）

遺構（第51図）

本住居址は第21号住居址の北に位置する。

プランは円形で規模は径５ｍを測る。



第51図　第23号住居址実測図（S＝1／60）

壁はゆるやかな立ちあがりを示す。壁高は均一でなく，北は高く40cm，南に行くほど低くなり20cm前後である。

床面は西側がやや低くなる。固くたたきしめられ良好な床面である。

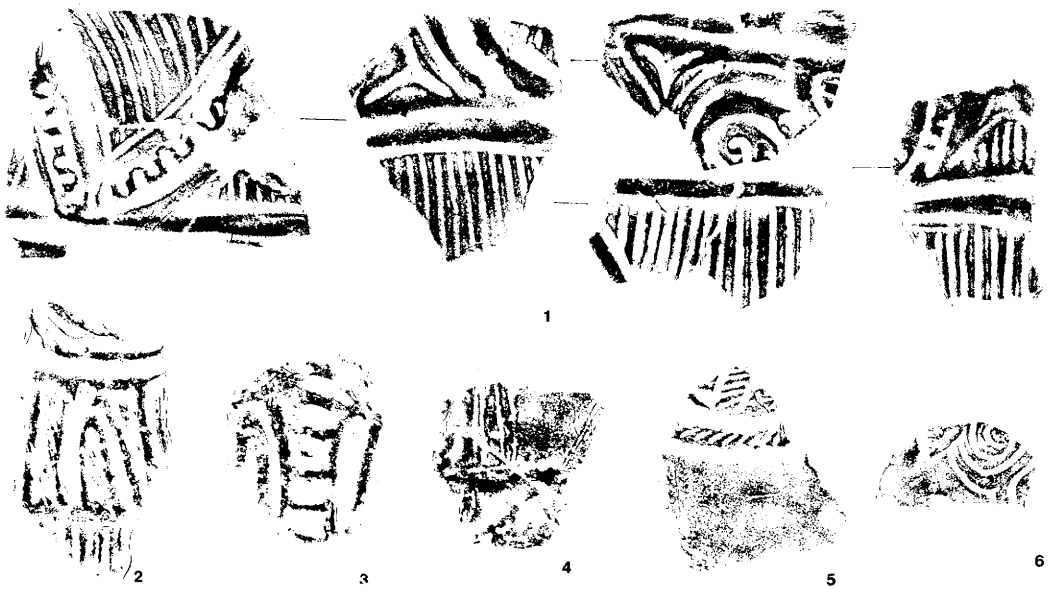
炉は住居址中央北寄りに位置し，一部炉石を二重した石組み炉である。北側部分は炉石が二重になった形跡はみられず，もともとこの形態であったと思われる。形は外形は方形に近く，内形は六角形を呈す。炉石は砂岩が二個みられるので，後はすべて花崗質の自然石を横長に用いて構築している。炉の東側は貼り床されたピットの上に一部のっている。大きさは外側100×120cm，内側で40×60cmを測る。内部は丸底に15cmほど掘られ，炉石からの深さは20cmである。

主柱穴はP_1，P_3，P_6，P_{10}，P_{12}，P_{14}・P_{15}，P_{17}，P_{19}の6本と考えられる。P_4，P_5，P_8，P_{11}，P_{16}，P_{21}，P_{22}のように貼り床されたピットがみられるところから家の建直しが考えられる。P_{16}，P_{21}，P_{22}などは新住居址の柱穴とほぼ同じ円心状に位置し，南側にみられるP_4，P_5，P_8はやや内側に入った所に位置している。これからすると同心状の拡張でなく南側を拡張した可能性が強い。柱穴からは二度の建直しも考えられるがはっきりしない。建直しに伴う炉の移動はなかったのか痕跡はみられない。P_9とP_{12}を結んで周溝がみられる。周溝中に貼り床されたP_{11}がありこれをもって旧住居址とするには問題が残る。

さきに述べたように炉の東側に貼り床されたピットがある。1.2×1mの楕円形プランで，内部には径50cm深さ50cmのピットがみられる。外側の浅いピットのみであれば，旧炉址の可能性もあるが，さらに一段深いピットがあるところから炉とは考えられない。土壙であろうか。

遺物（第52図）

1は覆土中に一括出土したものであるが復元はできなかった。大形の深鉢形土器の頸部から



第52図　第23号住居址出土土器（1／3，1は覆土，2～6は床面出土）

胴部にかけてのもので井戸尻Ⅱ式に比定される。

2～6は床面出土のもので，すべて小形の深鉢形土器片で，井戸尻Ⅱ式に比定されるであろう。

石器は28点，剝片が20片出土している。石器の内訳は，打製石斧5，大形粗製石匙3，石錘4，敲打器a類3，b類3，特殊敲打器2，磨石1，磨き石6，横刃形石器1点である。

23　第25号住居址（第53～56図）

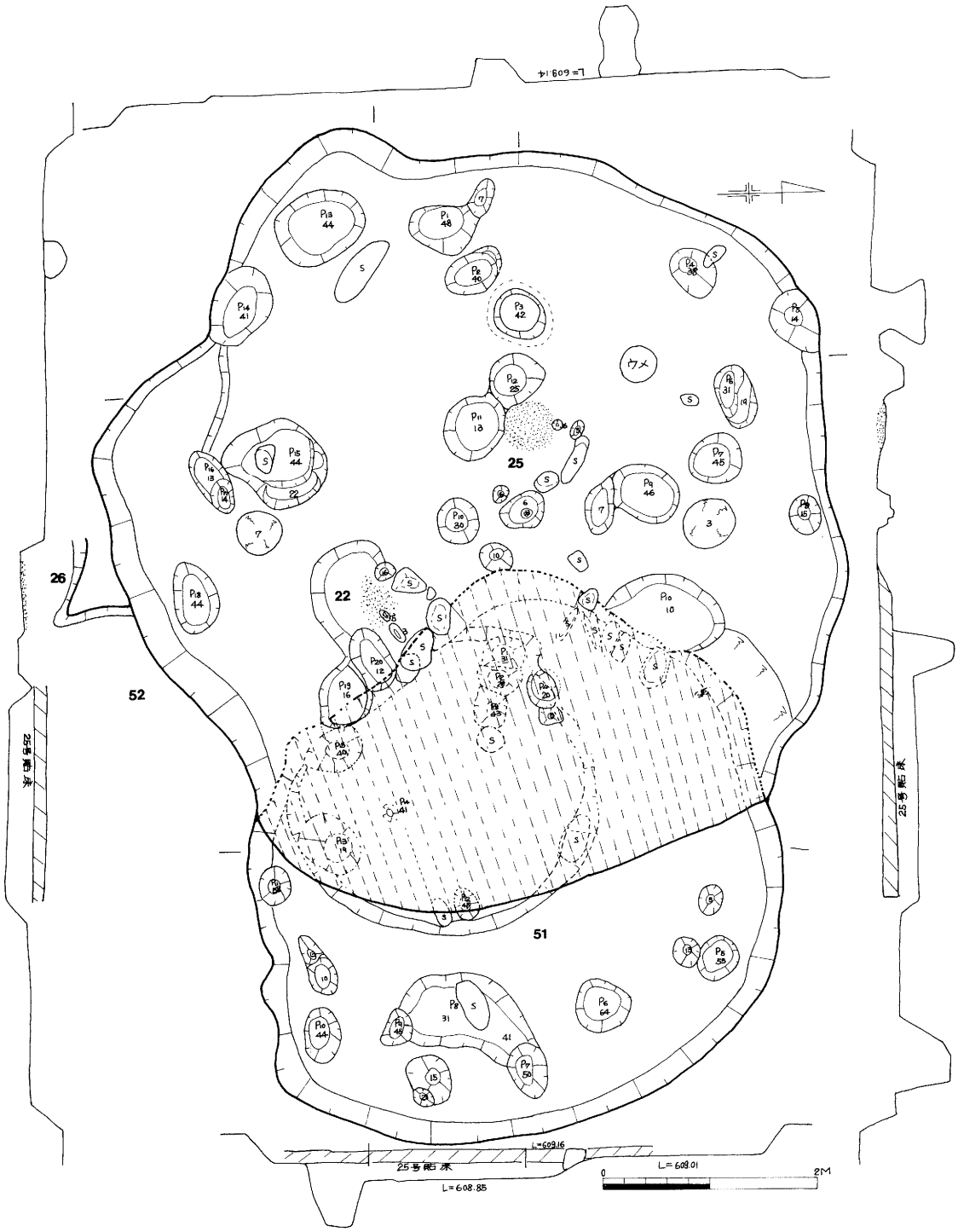
遺構（第53図）

本住居址は第26号住居址の北側に位置し，東側は第51号住居址に貼り床している。さて当住居址のプランであるが，南側には第22号住居址とした炉がみられ，それが同一床面上にあるところからはっきりとはわからない。P_{13}からP_{14}を結ぶところに，一部床面に段がみられる。これを壁と考えると北壁との関係から楕円形のプランが想像される。また柱穴からすると炉を中心とした径6m前後の円形プランも考えられ，プラン規模はまったく不明である。

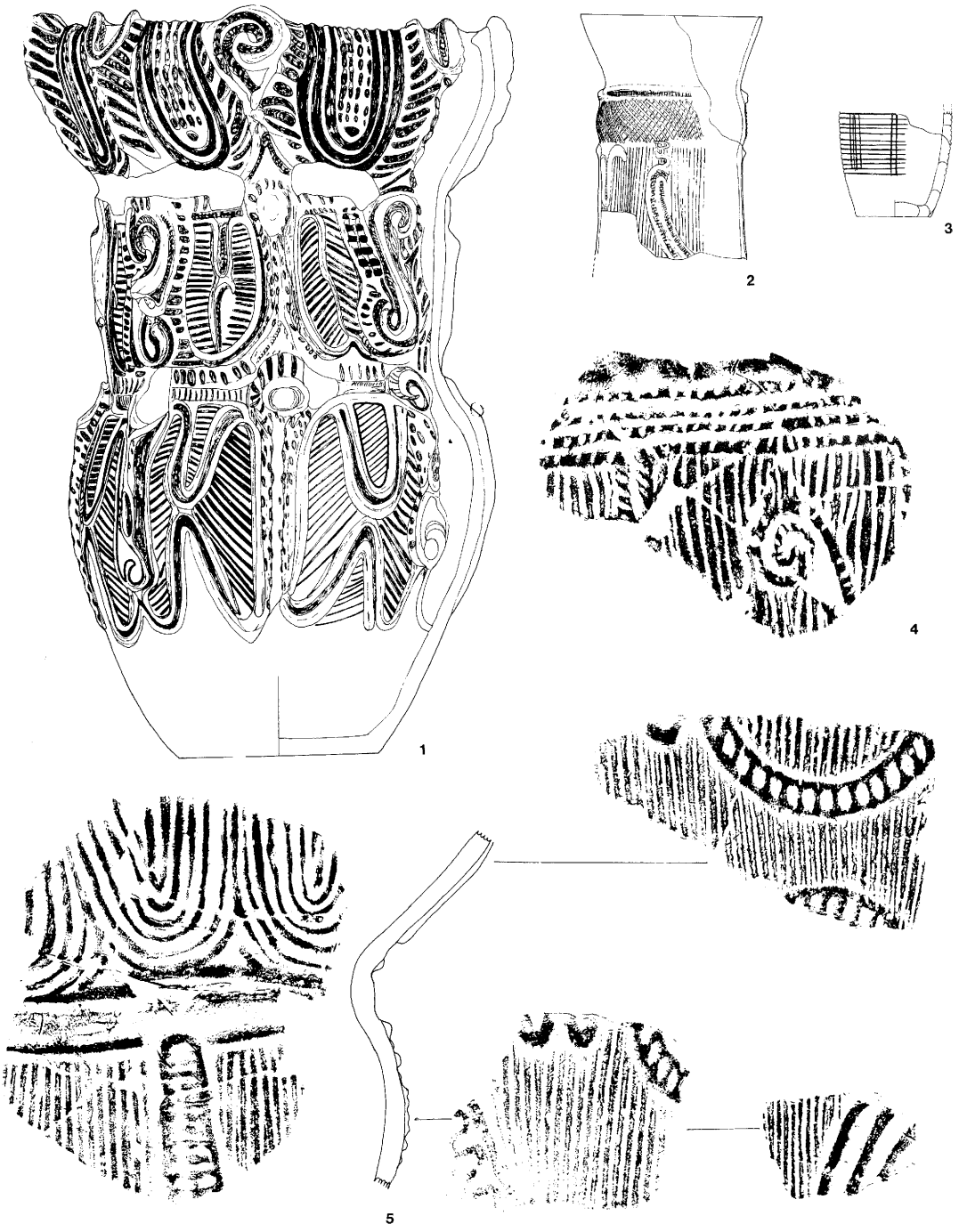
壁高は20cm前後で全体にゆるやかな立ちあがりを示している。床面は固く良好である。貼り床は10cm前後にロームがはられ明瞭であった。第51号住居址との床面差は12cm前後である。

炉は住居址のほぼ中央にあり，北東部に自然石を二個置き，若干掘りくぼめた地床炉に近いもので，炉石の抜きとられた跡はない。

主柱穴はP_1，P_4，P_6・P_7，P_{15}など考えられ，P_9，P_{10}，P_{13}は第22号住居址のものと考えたい。



第53図　第22・25・51号住居址実測図　（S＝1／60）



第54図　第25号住居址床面出土土器（1～3は1／6，他は1／3，1は正位の埋甕）

第55図　第25号住居址床面出土土器（1／3）

第56図　第25号住居址床面出土土器（1／3）

炉の北西，P_3 と P_6 の中間に正位の埋甕（第54図－1）が発見されている。内部には黒土が充満しており，内部よりは何も発見されなかった。埋甕の位置が壁より大分内側にあること，また北側に位置することは珍しいことである。

遺物は非常に多く出土している。とりわけ土器は多く，炉の西側を中心にして厚さ10cm位の層をなして一括出土している。しかしそのわりに器形を知り得るものは少ない。

遺物（第54～56図）

1は大形の深鉢形土器で正位の埋甕である。底部は大きくどっしりした安定感のある土器である。底部からふくらむ胴部は上半部にて一担くびれ頸部にかけてほぼ直になり，外に開く口縁は内湾する。文様構成は変形人体文の懸垂文によって大きく四分され，さらにその間が二分される。また口縁部，胴上半部，胴下半部文様帯に三分される。文様は隆帯と沈線さらに連続刺突文からなり，立体感にあふれた華麗な土器でこの種のものとしては優品である。井戸尻Ⅲ式に比定でき得る。

2～34は先に述べたように一括出土したもので廃棄に伴うものである。出土状態からして層位をわけることはできない。

2は小形の円筒形土器で口縁部は無文でラッパ状に開く。胴下半部を欠き，口頸部も半分ほどしかない。頸部には竜目文，胴部には縦走する沈線と隆帯文がみられる。

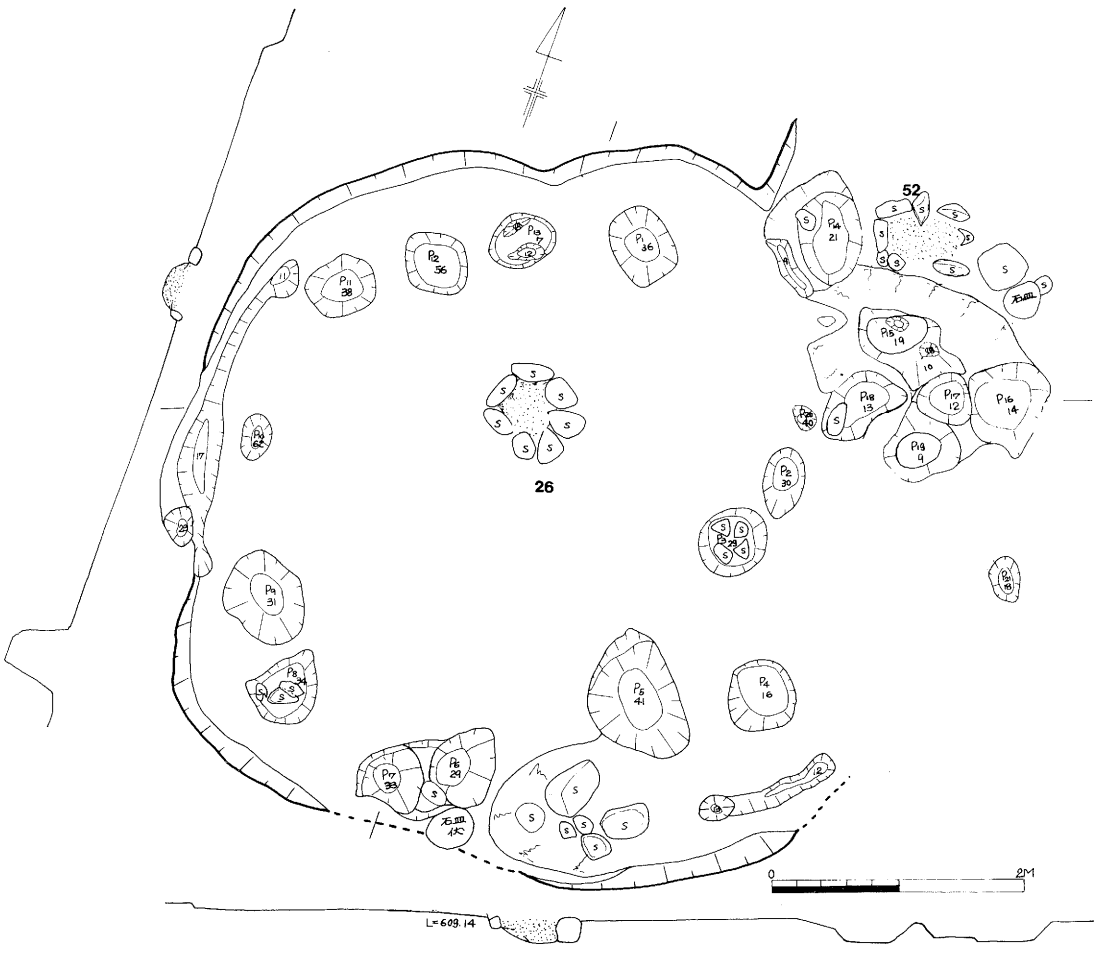
3は小形の深鉢形土器の底部で，深いシャープな沈線による井桁文が施される。

4は浅鉢形土器の　胴部破である。5は深鉢形土器の一括資料であるが復元はできなかったものである。

6～15はすべて深鉢形土器の口縁部破片である。6は接合できなかったが，胴部に櫛形文を持つものである。10は半肉状の彫刻文である。

これらの時期は総じて井戸尻Ⅲ式に比定され，住居址の所属時期と同じである。

石器は92点，剝片82片と多く出土している。内訳は打製石斧22，磨製定角石斧2・蛤刃石斧



第57図　第26・52号住居址実測図（S＝1／60）

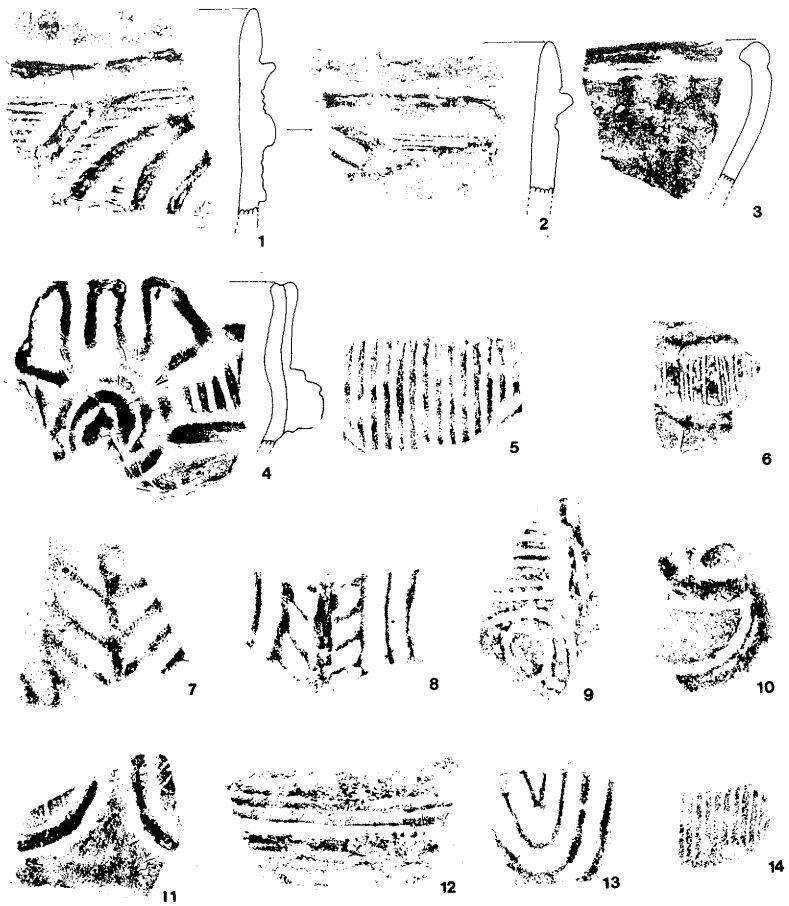
1，大形粗製石匙７，石錘５，敲打器ａ類５・ｂ類４・ｃ類１，特殊敲打器16，磨石４，凹石１，磨き石13，砥石４，石核２，横刃形石器５点である。

24　第26号住居址（第57，58図）

遺構（第57図）

本住居址は第27号住居址と南側で接し，北側には第22，25号住居址がある。さらに北東部には第52号住居址が同一床面で続いている。そのため東側には壁がみられないが，プランは円形と思われ，大きさは5.8×5.6ｍほどである。第52号住居址との切り合い関係は不明である。

壁高は北で15cm，西及び南では５cm前後と均一でない。壁はゆるやかな立ち上がりをみせ，南では壁自体があまりはっきりとしない。床面は西から東へやや傾斜している。はっきりしたたたきはみられず床面は軟弱である。



第58図　第26号住居址出土土器（1／3，1～6は覆土・7～14は床面出土）

炉は住居址中央北寄りに位置し，石組み炉である。形は内外とも円形で，大きさは外形70×70cm，内形は40×40cmである。炉石には花崗岩の自然石を用い，横長にして構築する。北及び西側では細長い石を用い，他の二方は丸味のかかったものを用いている。内部は丸底を呈し，深さは15cmである。炉石は全体に深く埋められ，床上にあまり頭を出していない。

主柱穴は6本と考えられるが定かでない。P_3，P_8の内部には，3個ないし4個の自然石がみられる。またP_5の南側に若干くぼみをもたせやはり自然石がおかれている。性格は不明である。

P_6の南壁ぎわより石皿が伏さって出土している。

遺物（第58図）

土器は散在して出土したもので，器形を知り得るものはなく，量も少ない。

すべて深鉢形土器の破片である。

総じて井戸尻Ⅲ式に比定されるであろう。

石器は53点，剝片が41片出土している。石器の内訳は打製石斧12，磨製定角石斧1，敲打器a類5・b類5，特殊敲打器15，石皿1，磨き石5，石核6，横刃形石器3点である。

25　第27号住居址（第59，60図）

遺構（第59図）

本住居址は北側は第26号住居址と接し，南側では第29号住居址を切っている。プランは円形で大きさは南北4.5m，東西4.7mである。

壁高は均一でなく，東が高く30cm，西では20cm，北側は低く15cm前後を測る。壁は全体にゆるやかな立ち上がりを示している。

床面はやや東に傾斜し，固くたたかれ良好である。

炉は住居址中央北西寄りに位置し，石組み炉である。形は内，外ともくずれてはいるが長方形をなし，大きさは，外側60×80cm，内側30×40を測る。炉石は砂岩と花崗岩の自然石からなり，全体に小さなものを利用している。北東部は他より小さい細長い石を用いて二重にしている。内部は8cmほど堀られ，炉石からは12cm前後の深さを持つ。内部には焼土が充満している。

主柱は一応6本と考えられる。しかし柱穴と考えられるピットが多くみられることから，柱の移動が行われたとするのが妥当であろう。

遺物（第60図）

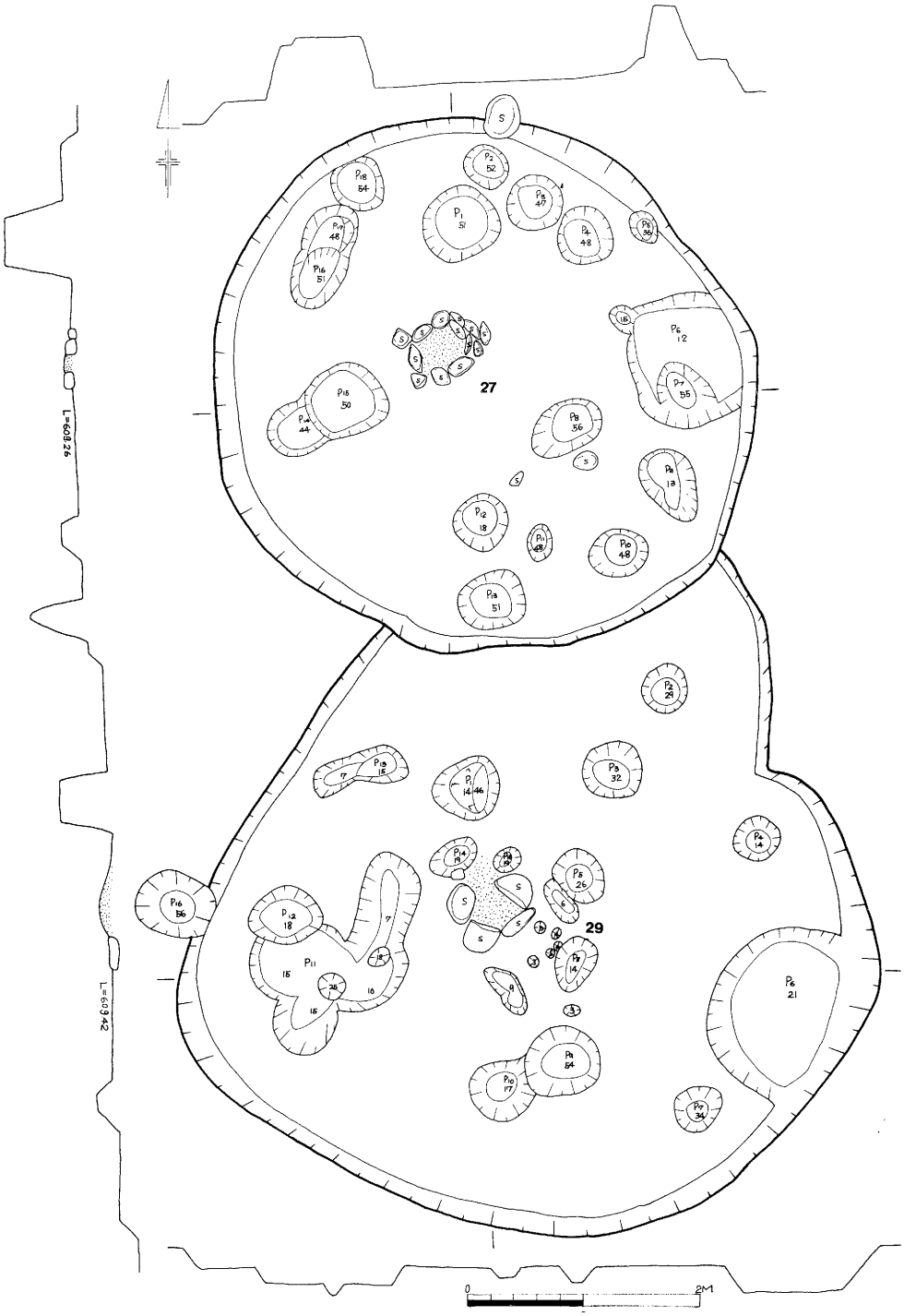
土器はすべて破片で器形を知り得るものはない。

1～10は覆土出土のもの，他は床面近くより出土したものであるが時期のずれはない。

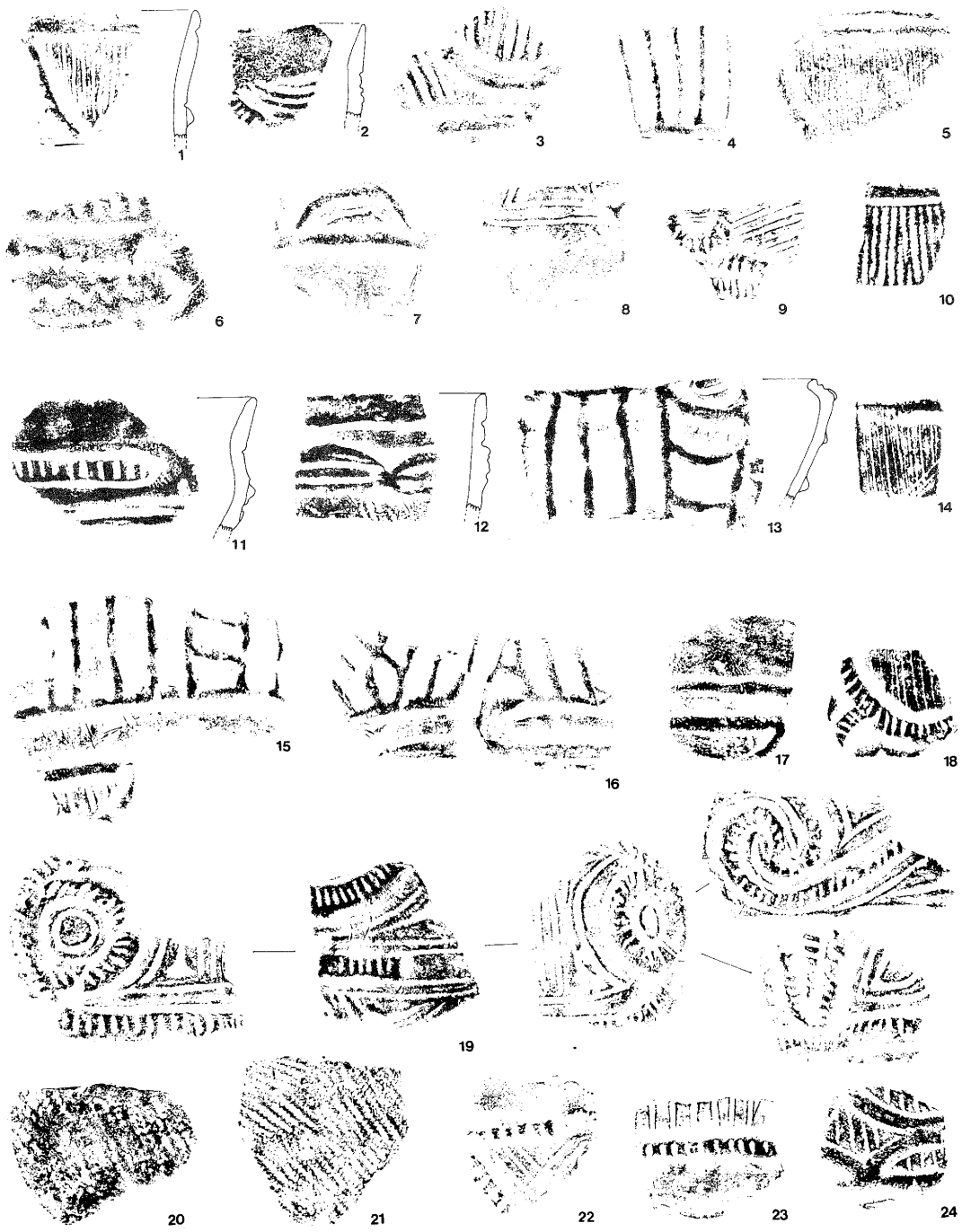
1，5，14，15，17は櫛形文を持つものである。12は浅鉢形土器の口縁部破片で他はすべて深鉢形土器である。13，15は同一個体である。19は大形の深鉢形土器の同一個体である。

総じて井戸尻Ⅱ式に比定される。4.13.15.16はやや後出するものである。

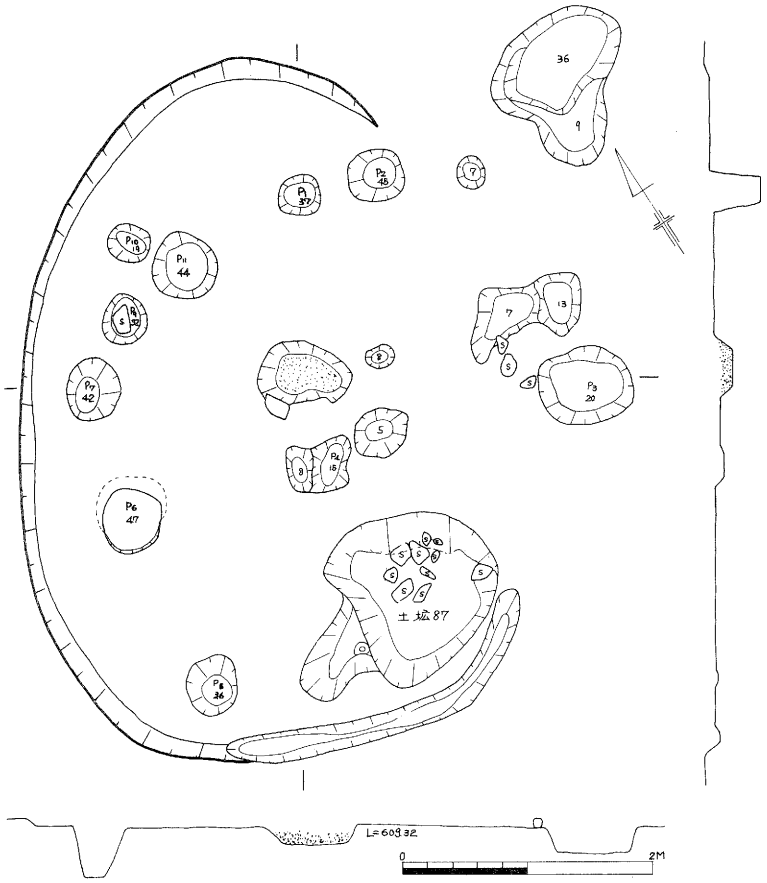
石器は71点，剝片が61片出土している。石器の内訳は打製石斧17，磨製定角石斧3・蛤刃石斧1，大形粗製石匙2，石錘9，敲打器a類6・b類1・c類1，特殊敲打器13，磨石2，磨き石8，掻器2，石核4，横刃形石器2点である。



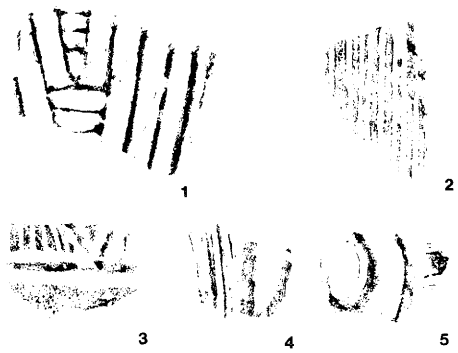
第59図　第27・29号住居址実測図（S＝1／60）



第60図　第27号住居址出土土器（1／3，1～10は覆土・11～24は床面出土）



第61図　第28号住居址実測図（S＝1／60）



第62図　第28号住居址床面出土土器（1／3）

26　第28号住居址（第61，62図）

遺構（第61図）

本住居址は第27号住居址の2ｍ西に発見されたものである。

東側の壁はなく。プランは一応楕円形と考えられ，大きさは南北5.5ｍ，東西3.8ｍを測るであろう。壁は全体に浅く，10cm前後で東に行くに従い浅くなり壁はみられなくなる。壁の立ち上がりはなだらかである。

床面は平垣であまりたたきはみられない。

炉は住居址中央北寄りにあり，石組み炉であるが石はすべて抜かれている。掘り方の大きさは50×80cmである。内部は平らに掘られ深さは15cmで焼土が充満している。

主柱穴は6本以上と思われるが，東側にみられず不明である。

住居址南東壁ぎわに上幅20cm前後深8cmほどの周溝がみられる。

周溝の内側には径1.3ｍほどの不整円形の大きなピットがあり，上部には自然石を配してある。土壙（87）と考えたい。

住居外と考えられる東

側にピットがみられるが性格は不明である。

遺物（第62図）

遺物は非常に少なく，石器の出土はまったくない。土器もほんのわずかの出土で，もちろん器形を知り得るものはなく破片のみである。

時期はこれだけでは判然としないが，曽利Ⅰ期に比定されるであろう。

27　第29号住居址（第59，63図）

遺構（第59図）

当住居址は北側を第27号住居址によって切られたもので，プランは北側が狭いダルマ形をしている。

大きさは南北６ｍ，東西最大幅は６ｍを測る。

壁は全体にゆるやかな立ち上がりをみせ，壁高は20cm前後である。床面は平垣で全体に固くたたきしめられ良好である。第27号住居址との床面差は16cmである。

炉は住居址ほぼ中央に位置し，石組み炉である。北側は炉石が一つ抜かれている。形は外側，内側とも方形である。規模は外形70×60cm，内形30×30cmである。南東部の炉石を除く他の三個は花崗岩の平べったい自然石を用いている。他は砂岩の細長い自然石である。内部は丸底を呈し，床面より10cm，炉石より15cmの深さである。

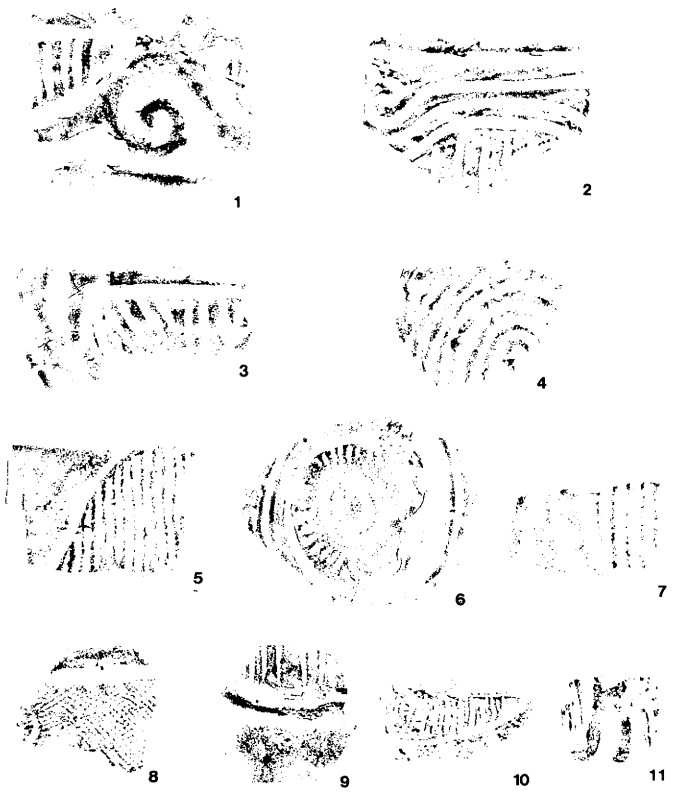
主柱穴は定かでない。

遺物（第63図）

遺物は少なく石器はまったく出土していない。

土器はすべて破片で器形を知り得るものはない。床面近くに散在的に出土したものばかりである。

ともに深鉢形土器の破片である。１～３は口縁部に近いもので他のものとは時期を異にする。後世の混入と考えたい。



第63図　第29号住居址床面出土土器（1／3）

住居址の時期は第27号住居址との切り合いや遺物からして，井戸尻Ⅱ式に属すると思われる。

28　第30号住居址（第64，65図）

遺構（第64図）

本住居址は第31号住居址などにともに南東部に位置する一群の住居址である。

プランは不整円形を呈し，大きさは南北4.4ｍ，東西4.7ｍである。

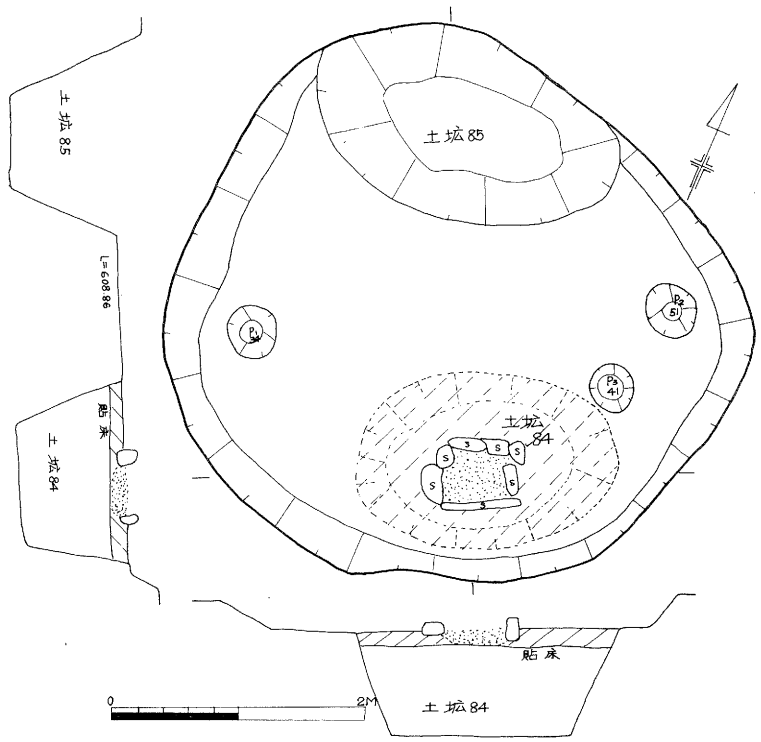
壁はゆるやかな立ちあがりを示し，壁高は30cm前後を測る。床面は非常に軟弱である。

炉は住居址中央南側に位置する。当遺跡においては珍しい例である。しかも非常に壁に接近していることも大きな特徴である。方形の石組み炉で大きさは外形60×80cm，内形40×50cmである。南側は細長い花崗岩1個を縦長にすえ他は若干丸味のある自然石を用いている。西側のみ炉石は横長にすえられている。内部は15cmほど焼土が堆積している。

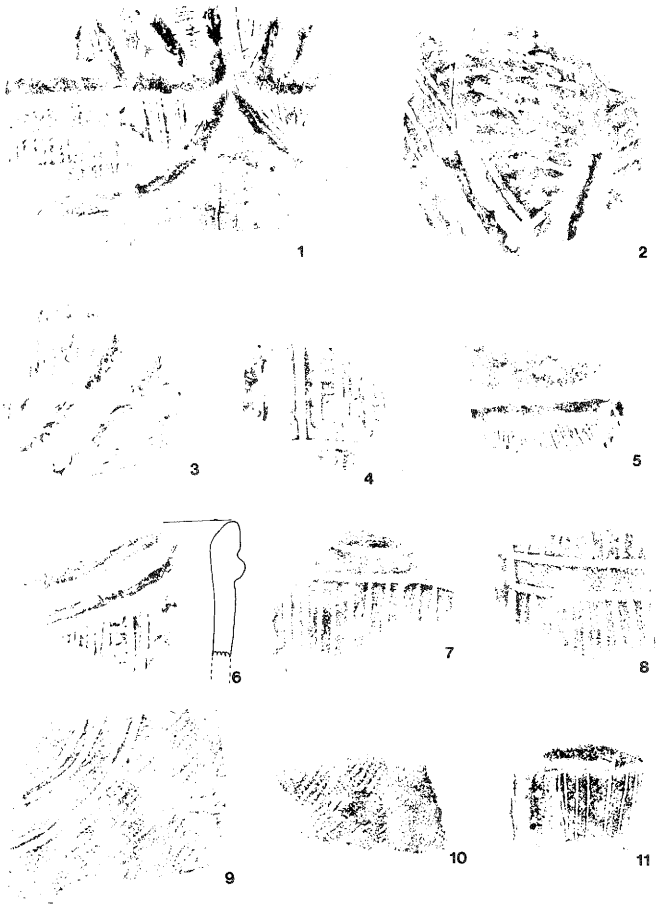
炉は土壙84の上に貼り床をしてから構築されている。

ピットは全部で三個発見されただけである。おそらく主柱穴は4本と考えられ，土壙85によって破壊されたものであろう。

炉の下部と住居址北壁にそって土壙がみられる。土壙84は貼り床の存在から当然住居址の以



第64図　第30号住居址実測図（S＝1／60）



第65図　第30号住居址出土土器（1／3。1～5は覆土，
6～11は床面出土）

前のものである。土壙85は住居址廃絶後のものであろう。

遺物（第65図）

土器，石器とも出土量は少ない。

土器は散在的な出土状態をみせ，器形を知り得るものはない。

覆土出土のもの（1～5）と床面出土のもの（6～11）とがあるが，両者には時期差はみとめられない。

図示したものはすべて深鉢形土器の破片である。

6は波状の口縁部破片，7，8は同一個体である。

総じて井戸尻Ⅲ式に比定されるであろう。

石器は21点，剝片は16片の出土である。内訳は打製石斧4，磨製定角石斧1・蛤刃1，敲打器a類2・b類2，特殊敲打器2，磨き石9点である。

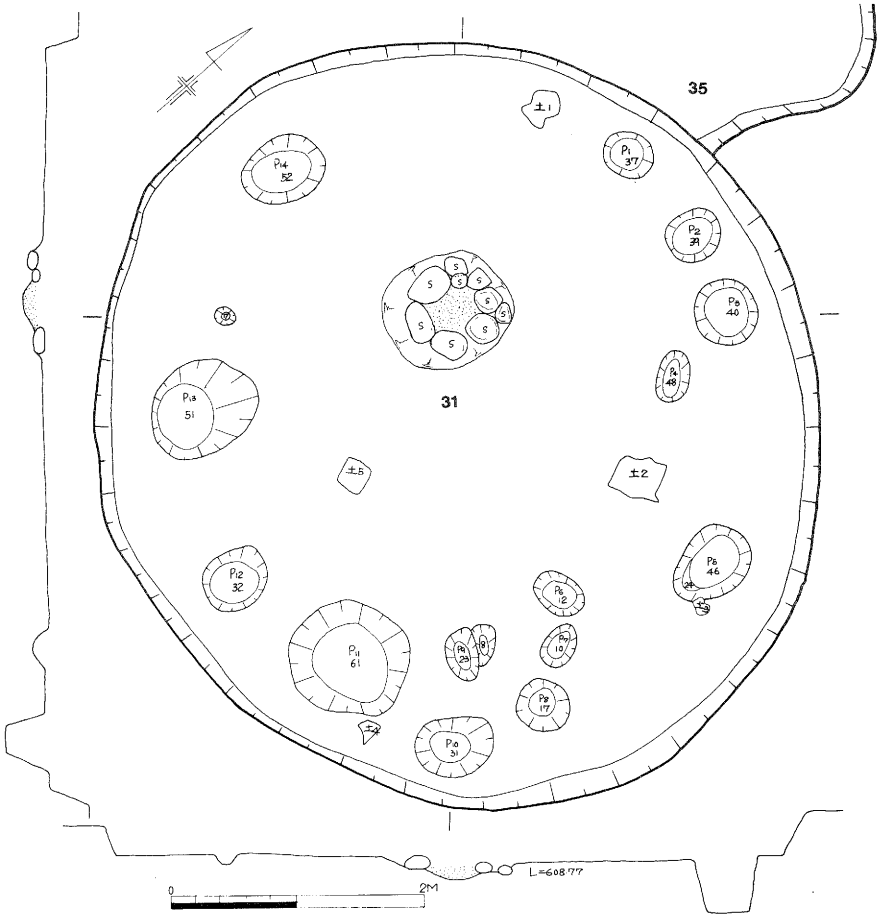
29　第31号住居址（第66～68図）

本住居址は第30号住居址の南に位置し，西側では第35号住居址を切っている。

平面プランは円形で大きさは南北6.1m，東西5.8mを測る。

壁は直に近い立ち上がりをみせる。壁高は均一でなく，東側が40cmと最も高く西に行くほど低くなり30cm前後である。第35号住居址との床面差は30cmである。床面は壁ぎわが若干高くなる。床は固くたたきしめられており良好である。

炉は住居址中央西寄りに位置し，円形の石組み炉である。内部はやや六角形に近い。全体に丸味のある花崗岩質の自然石を横長に用いて構築している。大きさは70×80cm，内側では30×40cmである。炉石のまわりは全体にくぼくなっており，第11，15号住居址にみられる二重の炉石の外側が抜き取られたとも十分考えられる。内部は丸底を呈し，床面より15cmほどの深さがある。全体に炉石は床面より低く，外側にもう一重炉石のあったことがうかがえる。



第66図　第31号住居址実測図（S＝1／60）

主柱穴は８本と考えられる。

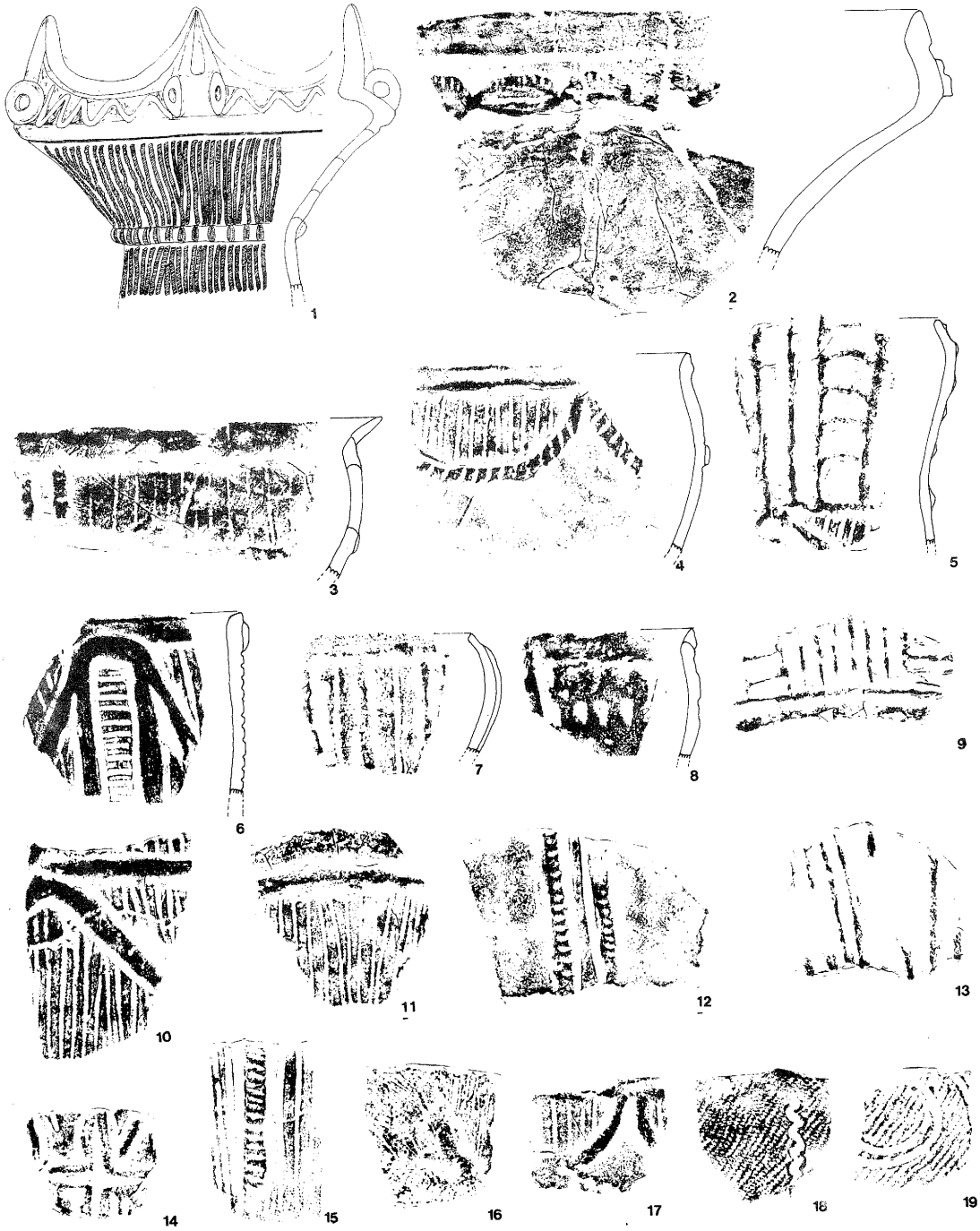
遺物の出土状態は逆三角形をなし覆土中より多量に発見されている。床面上の遺物との間はわずかに黒色土の間層がみられた。

量的には，覆土中のものの方が床面出土のものの約２倍を持っている。

遺物（第67，68図）

土器の出土状態は先に述べたが，覆土出土のもの（第67図）と床面出土のもの（第68図）の間には時期差はない。

１は深鉢形土器で底部を欠く。底部はく字底と思われる。胴部から強くはった口縁部はく字に外屈しそそり立った波状口縁を持つ。波状の下には滑車状の把手がつき，その間は粘土紐が



第67図　第31号住居址覆土出土土器（1は1／6，他は1／3）

第68図　第31号住居址床面出土土器（20～24は1／6，他は1／3）

波状に走っている。胴部は中央に刻みを持つ隆帯を一条めぐらし，その上下は太い原体の縄文で埋めている。

20も1同様底部を欠く小形深鉢形土器である。くびれた胴部から外に強くはった口縁はく字に内湾する。口唇部には無文帯を残し，その下部には粘土紐による流水文や肋骨文が施され胴部にはやはり粘土紐が細かく懸垂される。

21～23はともに小形の深鉢形土器の口縁部である。口縁はともに内湾する。

2は浅鉢形土器で頸部に連続指頭痕を持つ隆帯が一条めぐらされる。

2以外はすべて深鉢形土器の破片である。5，9，13，22，27，30，35，38は口縁部及びそれに近い破片で粘土紐による施文のみられるものである。

18，19，39は後出の土器と考えられる。時期は井戸尻Ⅱ式的要素がみられるが井戸尻Ⅲ式に比定されるであろう。

石器は97点出土し，覆土中49，床面出土48点と相半ばしている。剝片は95片の出土をみせ，比率はやや覆土の方が高い。

石器の内訳は打製石斧19，磨製蛤刃石斧2・乳棒状1，大形粗製石匙3，石錘9，敲打器a類8・b類9・c類3，特殊敲打器8，磨き石18，掻器2，石核3，横刃形石器12点である。

30　第32号住居址（第69，70図）

遺構（第69図）

本住居址は第35号住居址の北西約4mのところに位置し，西は第33号住居址を切っている。

プランは円形と考えられるが，南側には稜がみられ五角形ぎみである。大きさは南北4.8m東西4.9mを測る。

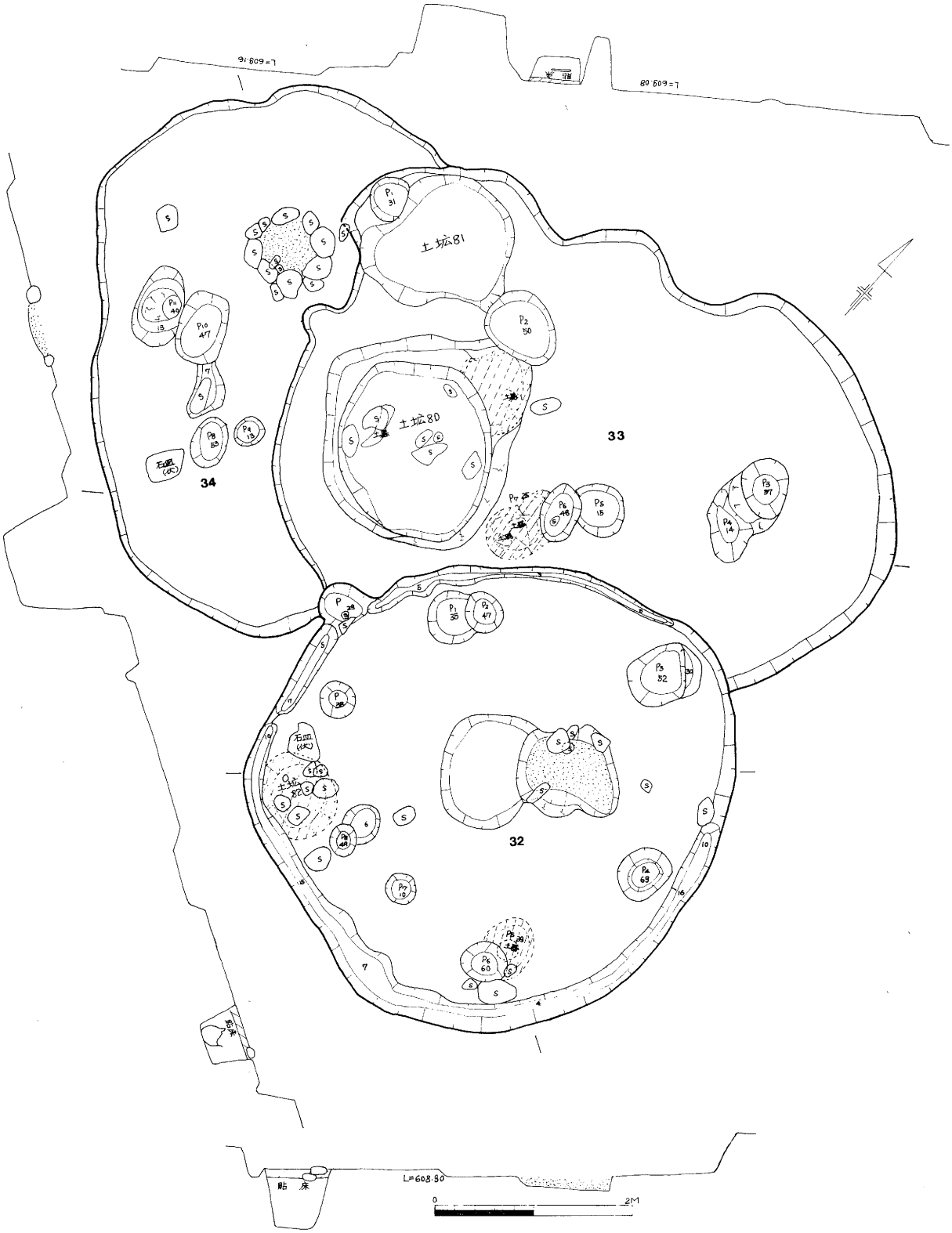
壁はややゆるやかな立ち上がりを示す。壁高は北側で40cmを測り南へ行くに従い低くなり30cm前後である。床面は平坦で固くたたきしめられており良好である。第33号住居址との床面差は15cm前後を測る。

炉は住居址中央東寄りに位置し，石組み炉である。炉石は一部を除いて抜かれている。堀り方の大きさは80×100cmである。底は平らで深さは15cmほどで内部には焼土が充満している。

炉の西側には120×80cm深さ10cmほどの楕円形のピットがあり，床面は赤色でボロボロになっており火熱を受けたことを物語っている。柱穴の動きからして住居の建直しが行われたことは明らかで，旧住居址の炉である。

主柱穴はP_1，P_2，P_3，P_4，P_6，P_8，P_9の6本と考えられる。明らかに柱穴の移動が行われたといえる。P_6の北側に並んで貼り床されたピットがある。貼り床は非常に固く上部からでは確認できなかったが，P_6を堀り進めていくうちに検出されたもので，内部には口縁部と底部を欠く深鉢形土器（第70図－9）が埋設されていた。旧住居址の柱穴と考えられる。第21号住居址の項で述べたがこのような例は今回4住居址で確認されている。

またP_8とP_9の真ん中に貼床したピットの上に自然石を並べたものがある。柱穴とするには大きく，一応土壙（82）とした。



第69図　第32・33・34号住居址実測図（S＝1／60）

北東部の一部を除いて周溝がまわる。幅，深さとも均一でない。

柱穴や炉から本住居址が建直しされたことは確かであるが，旧柱穴が並んでいたりP_8，P_9などは柱穴の再利用が考えられ，拡張に伴う建直しなのかは判然としない。

土壙82の北床面上に石皿が伏さって出土している。このような出土状態は当遺跡において多くみられ，興味あるところである。使用しない場合は伏せておいたものであろうか。今後の資料増加に待ちたい。

第70図　第32号住居址出土土器（9・10は1／6，他は1／3，1～6は覆土，7～15は床面出土）

遺物（第70図）

土器，石器とも出土量は少ない。散在的に出土し，石器はほとんどが覆土中のものである。

土器は覆土中のもの（1～6）と床面出土のもの（7，8，10～15）とがあるが両者に時期差はみられない。

9は貼り床された旧柱穴P_5より出土したもので，口縁部と底部を欠く小形の深鉢形土器である。胴部はやや丸味を持つ。器面は縄文を地文とし，浅い細い沈線が走る。曽利期の初めに所属する。これは出土状態からして新住居址に伴うものと考えたい。

1，2は深鉢形土器の口縁部破片で加曽利ＥⅠ式に比定される。7，8は大形の深鉢形土器の同一個体である。

時期は曽利Ⅲ式要素もみられるが，曽利Ⅱ期に属するであろう。

石器は21点の出土で少なく，床面出土のものは石皿2点と横刃型石器1点のみである。内訳は打製石斧7，磨製定角石斧1，大形粗製石匙1，敲打器a類2・b類1，特殊敲打器6，石皿2，横刃形石器1点である。剝片は16片出土している。

31　第33号住居址（第69，71図）

遺構（第69図）

本住居址は第32号住居址の北西にあり，その南東部は第32号住居址に切られており，西側では第34号住居址を切っている。プランは楕円形を呈すが不整である。大きさは東西6.5ｍを測る。南北は4.5ｍほどと思われる。

壁はゆるやかな立ち上がりで，壁高は東側で20cmを測る。第34号住居址との床面差は8cmほどである。床面は全体に軟弱で西壁近くはやや上がっている。

炉は検出されていない。土壙80によって壊されたものなのか，第5，20号住居址同様炉を持たなかったものなのかは不明である。

またピットもすべて壁より大分内側にみられ，他の住居址と異なっている。P_1は第34号住居址のものと考えられる。

P_6の南に貼り床されピット（P_7）があり，内部より深鉢形土器の底部（第71図－1）が壊れて出土している。

また土壙80とP_2の間にやはり貼り床されたピットがあり，内部より小形深鉢形土器（第71図－2）の破片が出土している。本住居址の構築のために貼り床したものと考えられる。建直しに伴うものであろうか。また第34号住居址の柱穴とも考えられる。性格は不明である。

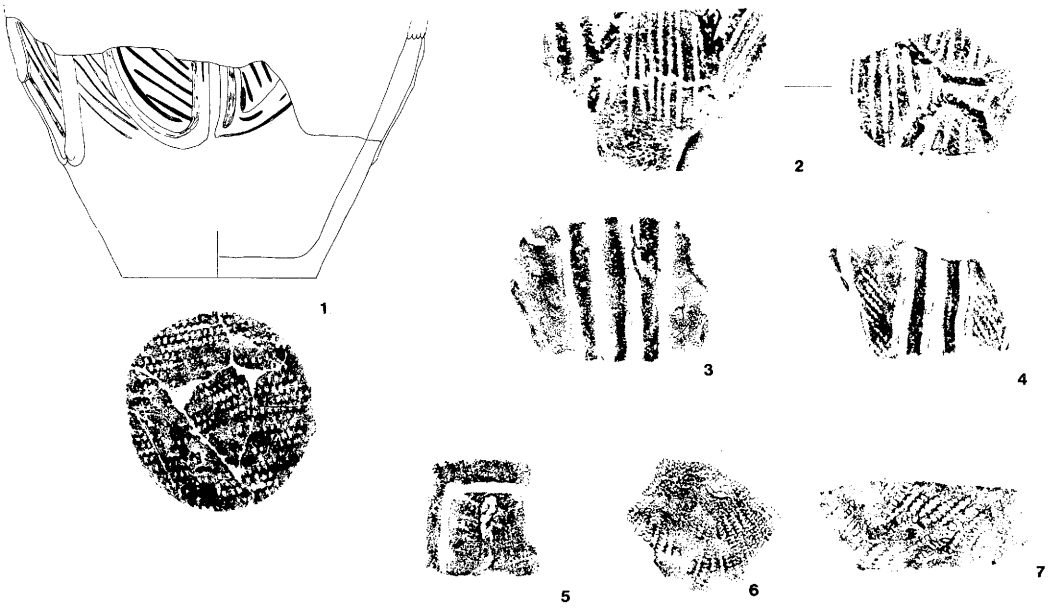
住居址の西側には土壙80と81が発見されている。

遺物（第71図）

土器，石器とも少ない。すべて床面出土のものである。

1は貼り床されたP_7の出土のもので大形深形土器の底部で壊してあったものを復元したものである。隆帯による懸垂文がみられ，その内部は太い沈線が斜走する。底部は網代底である。

2もやはり貼り床された土壙80の北のピットより出土したもので，深鉢形土器の同一個体が8



第71図　第33号住居址床面出土土器（1は1／6，他は1／3）

片あるが復元できなかった。一連の土器の中ではやや古手に属するであろう。

3～7はすべて深鉢形土器の胴部破片である。

時期は曽利Ⅱ式に比定される。

石器は25点，剝片が23片出土している。石器の内訳は，打製石斧9，大形粗製石匙4，石錘1，敲打器a類2・b類1，特殊敲打器2，磨石1，横刃形石器5点である。

32　第34号住居址（第69，72図）

遺構（第69図）

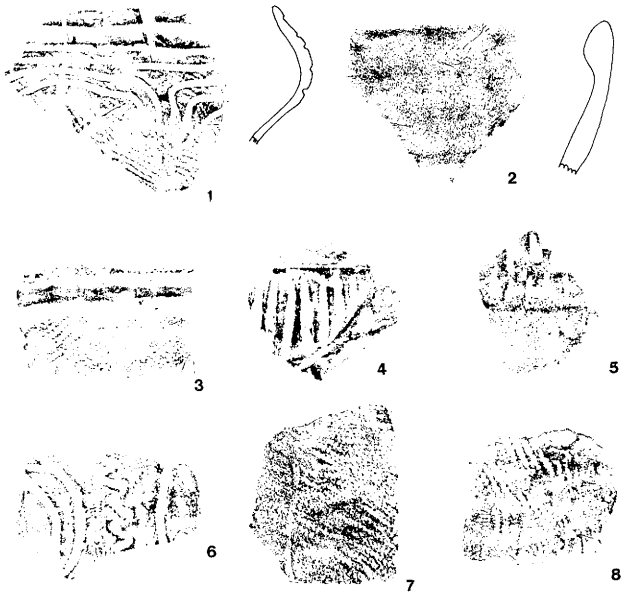
本住居址は東側を第33号住居址によって切られ半分ほど残すのみである。プランは楕円形を呈すと思われ，大きさは東西5m，南北は推定4.5mである。

壁高は低く15cm内外である。床面は固く平坦である。

炉は住居址中央西寄りに位置し，石組み炉である。プランは外形は円形，内形は五角形ぎみである。炉石は花崗岩を主とし一部に砂岩がみられるがすべて自然石で，横長に用いている。大きさは外形80×90cm，内形50×50cmを測る。内部は丸底に10cmほど堀られ，炉石からの深さは15cmである。

柱穴ははっきりとしない。P_8，P_{10}など考えられるが内側すぎるきらいもある。

P_8の南西床面上に石皿が伏って出土している。第32，33，34号住居址はその切り合い関係からして，34－33－32号住居址の順に構築されたことは明らかであるが，三者の間には土器形式



第72図　第34号住居址出土土器（1／3）

においては時期差はみらず，単期間における切り合い関係である。

遺物（第72図）

土器は床面よりわずかに出土したのみで，すべて破片で器形を知り得るものはない。

深鉢形土器のみで，1，2は口縁部破片である。

曽利Ⅱ式に比定でき得るであろう。

石器は土器同様少なく22点ですべて床面出土のものである。剝片は23片出土している。

内訳は打製石斧9，大形粗製石匙1，石錘1，敲打器2，石皿1，磨石3，磨き石2，石核1，横刃形石器2点である。

33　第35号住居址（第73，74図）

遺構（第74図）

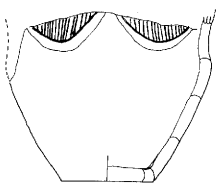
本住居址は第31号住居址の北西に位置し，その南東部は第31号住居址によって切られている。

南側は壁が検出できずプランははっきりしないが，楕円形を呈すと思われる。大きさは，東西5.8m，南北4mと考えられる。

壁は非常にゆるやかな立ちあがりを示し，壁高は北側は20cmで高く南側ではなくなっている。

床面はわずかに凹凸がみられ，全体に軟弱である。第31号住居址との床面差は25cmを測る。

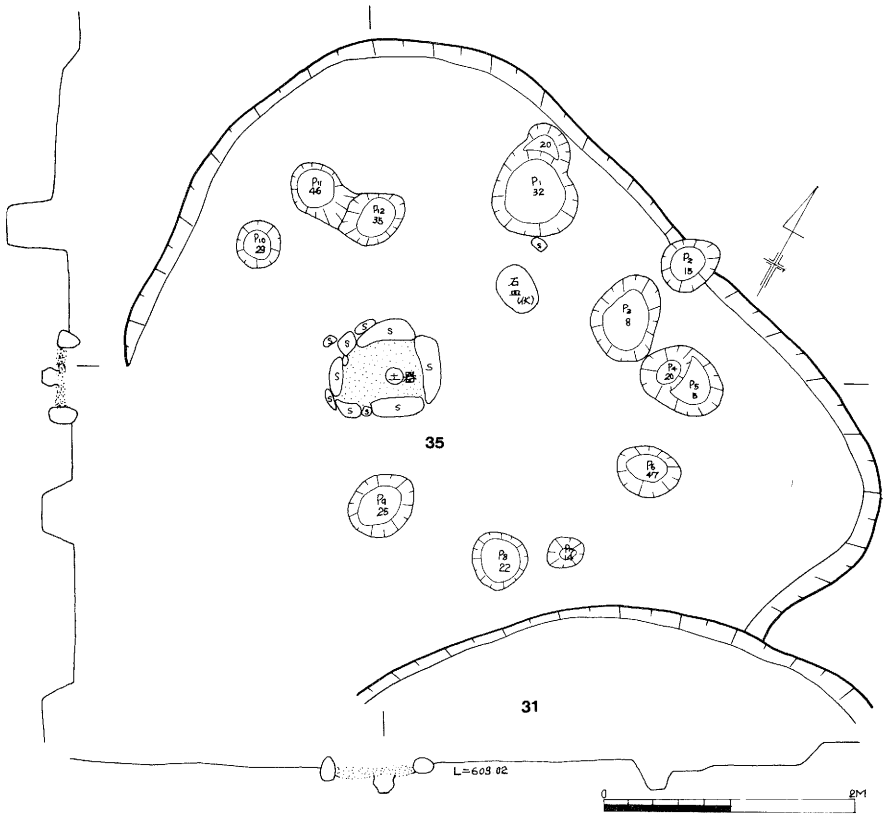
炉は住居址中央西寄りにみられ，石組み炉である。プランは内外形ともややくずれるが長方形を呈し，大きさは外形80×90cm，内形40×60cmを測る。炉の南西部を除く三方は細長い自然石を用い，一方は三つのやや小ぶりな自然石を並べその周りは小石をつめている。炉石の用い方であるが北東部のみ横長に他の三方は縦長に使っている。内部は10cmほど平らに掘くぼめている。炉石からの深さ15cm前後で焼土が充満している。中央やや北東寄りに胴上半部を欠く小形深鉢形土器（第73図）が埋設されていた。



第73図　第35号住居址炉内埋設土器（1／6）

主柱穴は定かでない。

第32，34号住居址などと同様，炉とP_1のほぼ中間に石皿が伏



第74図　第35号住居址実測図（S＝1／60）

さって出土している。

遺物（第73図）

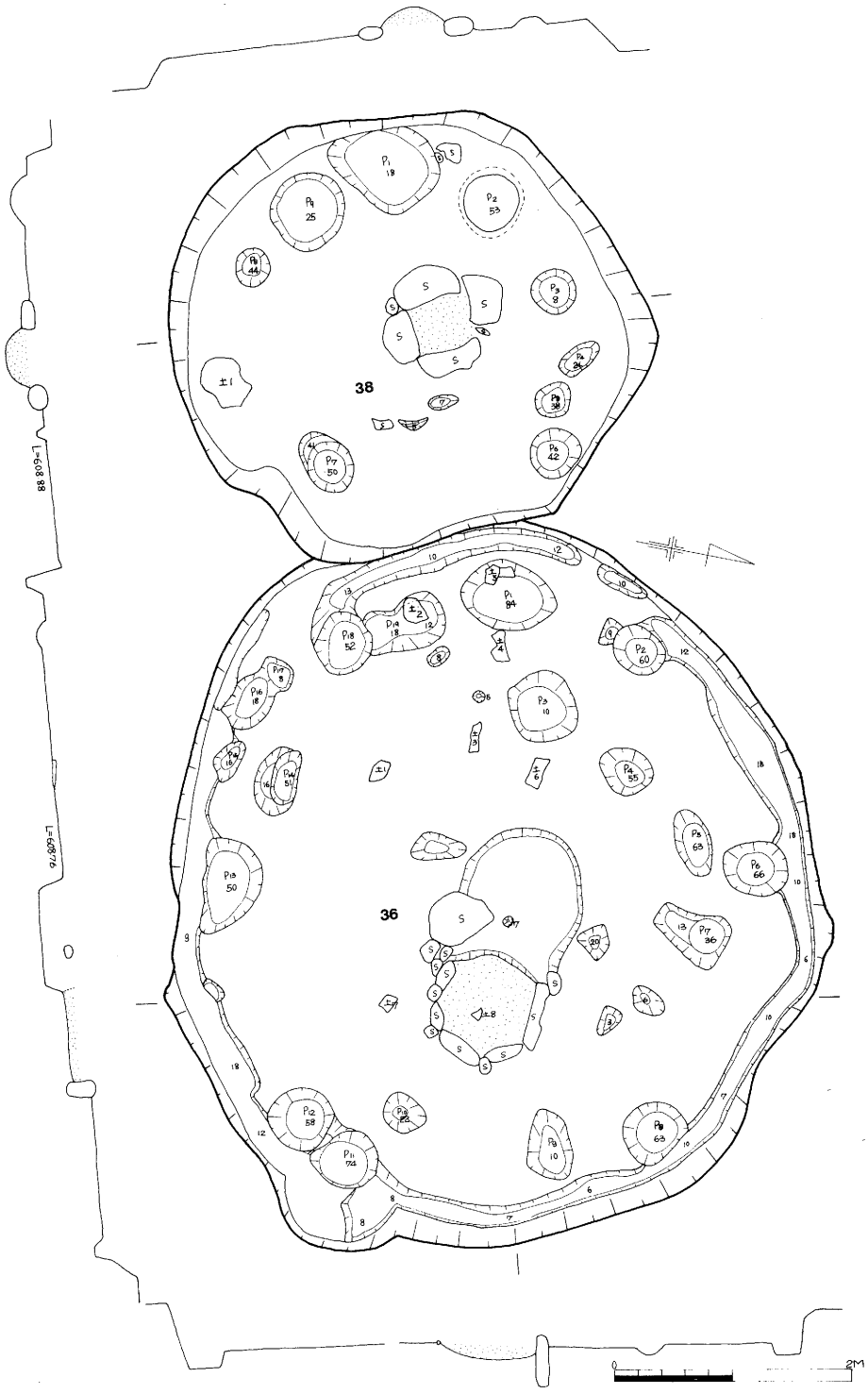
土器は炉内埋設土器以外まったく出土していない。小形の深鉢形土器で胴上半部を欠く。櫛形文を持っものである。共伴土器がないため時期ははっきりしない。井戸尻Ⅱ式ないしⅢ式であろう。

土器同様石器も床面上から出土した打製石斧1，大形粗製石匙1，磨石1，石皿1の計4点ときわめて少ない。剥片は2片出土している。

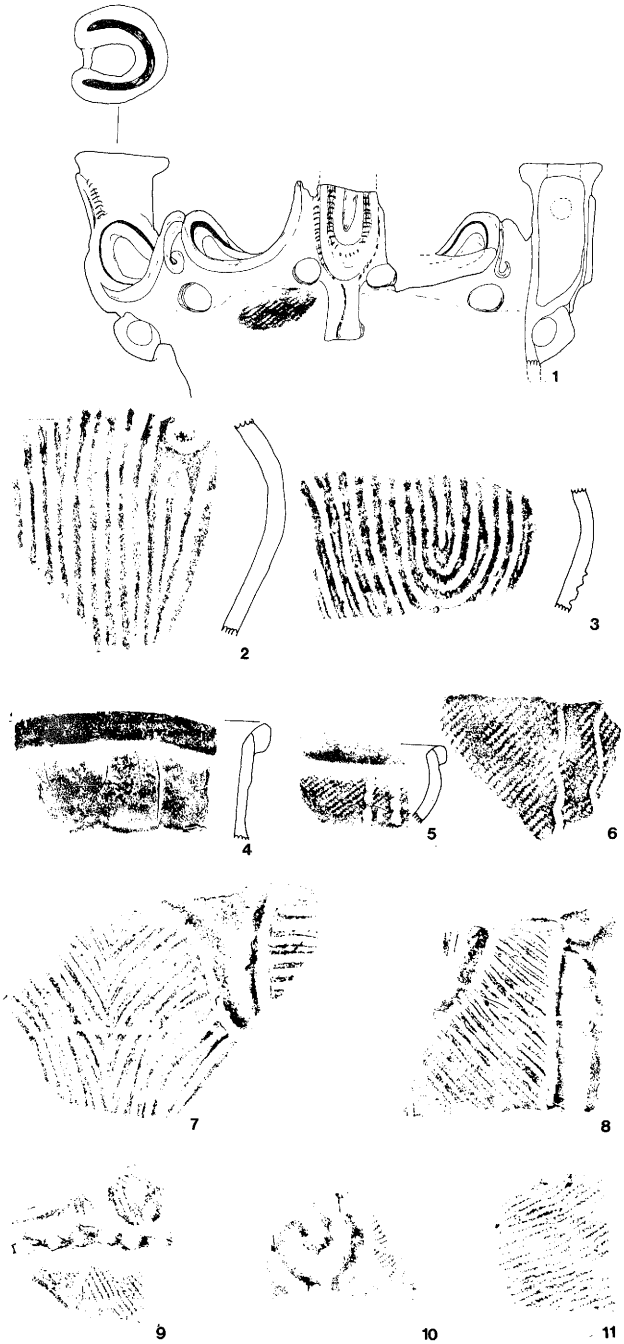
34　第36号住居址（第75，76図）

遺構（第75図）

本住居址は第38号住居址の東に接して発見されたものである。第38号住居址との切り合い関係はない。プランは不整ではあるが六角形を呈すと思われる。説明の便宜上，その6辺を時計回わり順にアルファベットで呼ぶこととする。



第75図　第36・38住居址実測図（S＝1／60）



第76図　第36号住居址床面出土土器（1は1／6他は1／3）

aはP_1の西第38号住居址コーナーとの接点からP_6の東まで，bはP_8まで，cはP_{11}の東まで，dはP_{13}の東まで，eはP_{18}の西第38号住居址のコーナーの接点まで，fは残りの第38号住居址に接する部分である。

六角形とはいっても，角が丸くまた辺も直線でないため問題もあるが，長さを測ると，a－4m・b－2.4m・c－2.8m・d－2.9m・e－3.5m・f－2.2mとふぞろなことに気付く。aとeを長くすることによって全体を長六角形にしている。大きさは6×5.5mである。壁は直に近く，壁高は東が最も高く40cmを測る。西に行くほど若干低くなる。

床面は全体に平担で固くたたきしめられ良好である。第38号住居址との床面差は12cmである。

炉は住居址中央東寄りに位置し，石組み炉である。西側は石がなく，抜かれたものか，もともとなかったかは不明である。形は内外共五角形を呈し大きさは外形100×100cm，内形80×80cmを測る，炉石は花崗岩の自然石の偏平なものを選んで，それを縦長に用いて平面的には細長くみせている。北側は一枚石で，東側は2個を用い稜を作り小石をかっている。南側はやや小さ目な2個の石を主体にしてやはり小石をかっている。内部は丸底を呈し，炉石からの深さは15cm内外である。内部は焼土が充満している。

炉の南にはこの炉を切るような形で110×100cmの楕円形，深さ20cm前後のピットがみられ，内部は黒色土で埋

まっている。底部は若干赤く焼けただれているのみである。

柱の動きなどからすると旧炉址と考えられる。焼土の堆積がみられないことは第32号住居址と同様で疑問を持つところである。

主柱穴はP_1，P_2，P_6，P_8，P_{11}・P_{12}，P_{13}，P_{18}の7本と考えられる。住居址西側の内側にみられるP_3，P_4，P_{14}は旧住居址の柱穴であろう。東側はP_{11}かP_{12}のどちらかとP_8は再利用の可能性が強い。これらからすると旧住居址の大きさは5×5.5mで円形に近いと思われる。旧炉址の位置は住居址中央西寄りに位置することとなり，新住居址における炉の位置とは逆になっている。当然住居址における出入口部の位置，方向にも変化があったものであろう。

新住居址は旧住居址を同心状に拡張せずに西側を拡張したものである。これらに伴う問題点は多い。

新住居址の壁ぎわには西側で二箇所きれるが，周溝がまわる。深さ幅とも図示するように一定していない。

遺物（第76図）

土器は非常に少ない。すべて床面上から出土したものである。

1は大形の深鉢形土器の口縁部で図示する土1と土2の接合資料である。土1はP_1に倒れ込むように，土2は床面に密着して重なっている。内部が空洞の筒状で上部は馬蹄形を呈す把手を4個配す。その間はブリッヂ状の把手がつくられる。つまり内部はU字状を呈すこととなる。把手には両側に2個，把手の下部両側にも2個，さらブリッヂ状の把手の下に外側のみ孔がみられる。胴部は不明であるが円筒形と思われる。胴部文様は縄文である。あまり類例をみない土器で市内大城林遺跡第33号住居址出土の土器が類例としてみられる位である。曽利期の初期に位置するものであろう。

2～11はすべて深鉢形土器の破片である。総じて曽利Ⅰ式に比定される。

石器は土器に比べると比較的多く45点出土している。すべて床面からの出土である。剝片は39片出土している。石器の内訳は打製石斧11，磨製定角石斧1，蛤刃石斧1，乳棒状石斧1，石錘3，敲打器b類2，特殊敲打器6，磨石3，凹石1，磨き石4，掻器2，石核3，横刃形石器6点である。

35　第37号住居址（第77，78図）

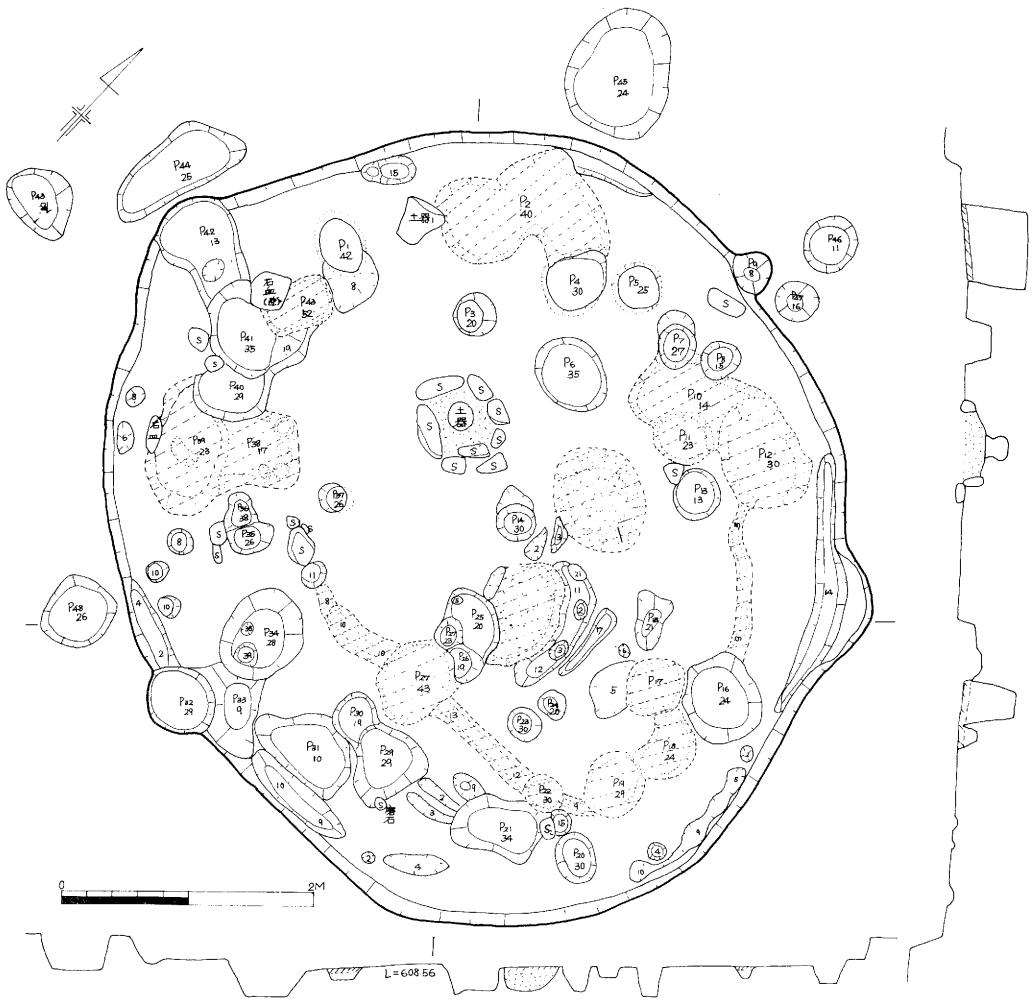
遺構（第77図）

本住居址は第42号住居址の南東5mの所に位置する。

図示するごとく貼り床されたピットや周溝それと二つの炉が確認され，少なくとも二度の建直しが行われたことがわかっている。都合三回家が建てられていたこととなる。古い住居址からA，B，Cとして説明したい。

最も新しいC号住居址は現壁で示されるもので，不整の楕円形を呈す。大きさは6.4×5.6mである。

壁は直に近く，壁高は東側が最も高く30cmを示し，西へ行くほど低くなり15cmほどである。



第77図　第37号住居址実測図（S＝1／60）

床面は東にやや傾斜を示しており，全体に固く良好である。

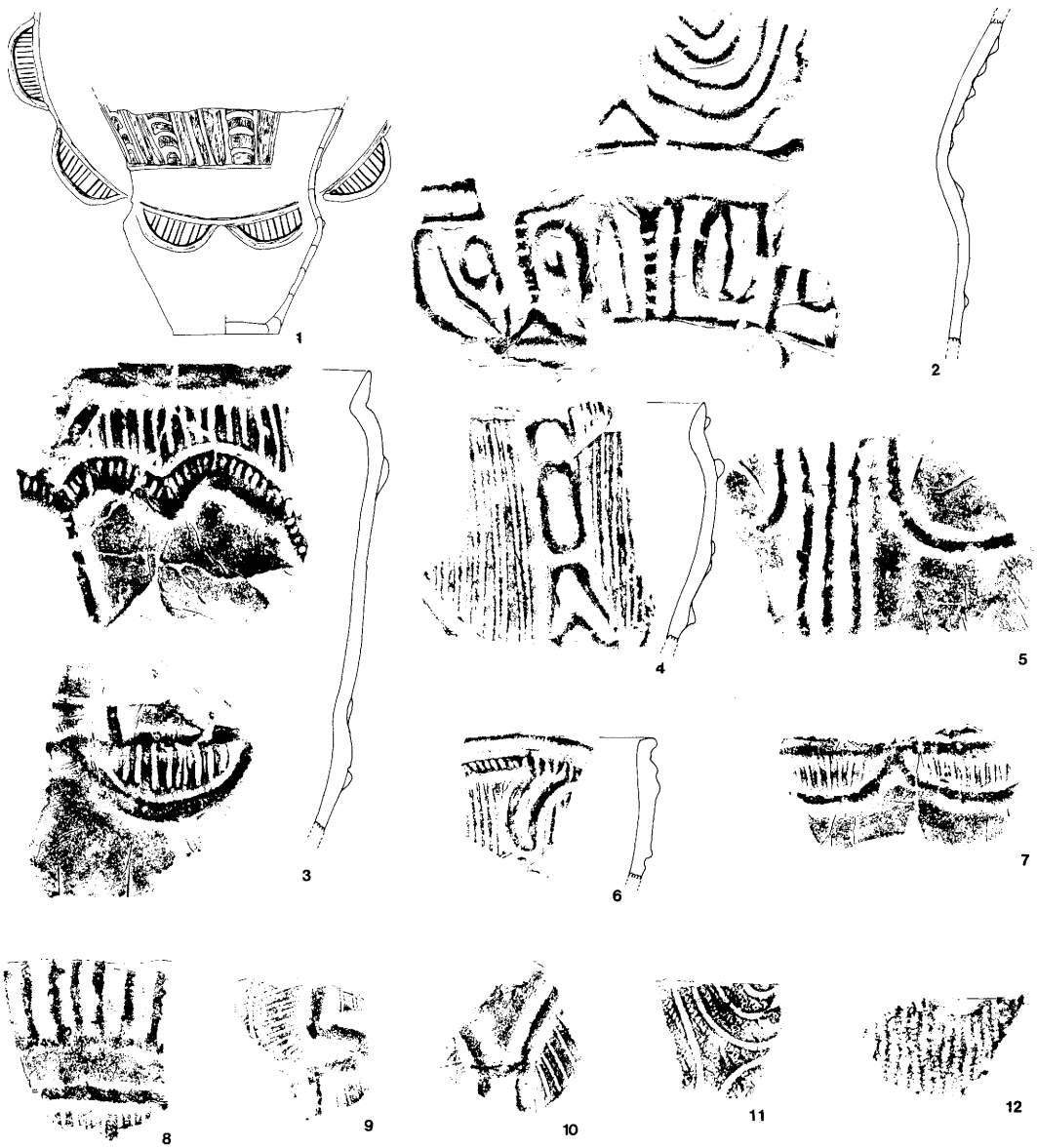
炉は住居址中央西寄りに位置し，内外形ともほぼ方形の石組み炉である。大きさは外形70×70cm内形40×40cmを測る。炉石はすべて花崗岩で平担な石を用い，縦長に組んでいる。内部は丸底で炉石からの深さは20cm前後で，焼土が充満している。内部には口縁部を欠く小形深鉢形土器（第78図－1）が埋設されている。

主柱穴はP_1，P_4，・P_5，P_{16}，P_{21}，P_{34}などと思われるが定かではない。

P_{13}とP_{14}の中間（炉2）とP_{14}とP_{24}の中間（炉3）とに内部に焼土が充満し，上部には貼り床のみられる楕円形のピットが発見されている。焼土の存在より旧炉址と考えられる。炉

2は90×70cmの楕円形で深さは20cmである。石組み炉で石は抜かれている。炉3はやはり楕円形を呈し，大きさは80×60cmで南側はP_{25}によって貼り床部分が壊されている。深さは20cmを測る。炉2同様石組み炉で石は抜かれたものと思われる。

貼り床された二つの炉とともに床面の検出中に貼り床されたピットがみつかっている。図中



第78図　第37号住居址床面出土土器（1は1／6，他は1／3・1は炉内埋設土器）

破線で示したものがそれである。上部に10cmほどロームをのせて固くたたいたもので内部は黒色土が埋まっている。また$P_{12}-P_{16}-P_{18}-P_{19}-P_{22}-P_{27}-P_{38}$を結ぶ貼り床された周溝も確認されている。貼り床はピットなどと異なり，ロームブロックと黒色土の混合上で埋まっている。

さてこれらの炉とピットのどれとどれがセットなるかは難しい。貼り床された周溝が結ぶピット群を持つものが最も古いA号となろうか。炉はどちらが伴うかは不明である。

貼り床された周溝はピットをつないでおり，第1号住居址の周溝もやはりピット間をつないでいる。一般的には壁にそって周溝がみられるのが普通であり，当例とは違っている。当然ピットより離れて壁が存在するわけで当例にみられる周溝は壁より大分内側にあり，一般的な周溝のもつ性格・機能とは異なったものと考えられるがいかなるものかは不明である。これについては今後の問題である。

P_2の南側に小形深鉢形土器（第78図－2）が半分ほどつぶれて床面に密着して出土している。

P_{43}の貼り床上に石皿が伏さってまたP_{39}の西に表を西下にして斜めになって石皿が出土している。壁外にピットがみられるが柱穴かどうかは不明である。

遺物（第78図）

土器，石器とも床面に密着及び5cmほど浮いたところから出土したものである。

土器は少なく器形を知り得るものは1の炉内埋設土器のみである。

1は口縁部を欠く小形の深鉢形土器である。頸部はく字に掘曲する。口縁部は細い隆帯によってはしご文などが施され，胴部には5つの櫛形文が配される。頸部は三分の一ほどない。

2・3とも半分ほどまとまって出土したが，復元できなかったもので，小形の深鉢形土器である。

4～12もすべて深鉢形土器である。

曽利的要素もみられるが井戸尻Ⅲ期に比定される。

石器は土器に比べて多く73点出土している。剝片は42片である。内訳は打製石斧14，大形粗製石匙8，小形石匙1，石錘6，敲打器a類1・b類6，特殊敲打器8，石皿2，磨石2，凹石1，磨き石6，ハンマー1，石核5，横刃形石器12点である。

36　第38号住居址（第75，79図）

遺構（第75図）

本住居址は第36号住居址の西に接して発見されたものである。

プランは南側が丸く不整ながら一応六角形をなすものと思われる。一辺はほぼ同じ長さである。大きさは南北4m，東西3.5mである。

壁はゆるやかで，壁高は北側で30cmを測り，南に行くに従い低くなり20cm前後である。第36号住居址と接する東側は，わずかに壁の立ち上がりを示すのみである。

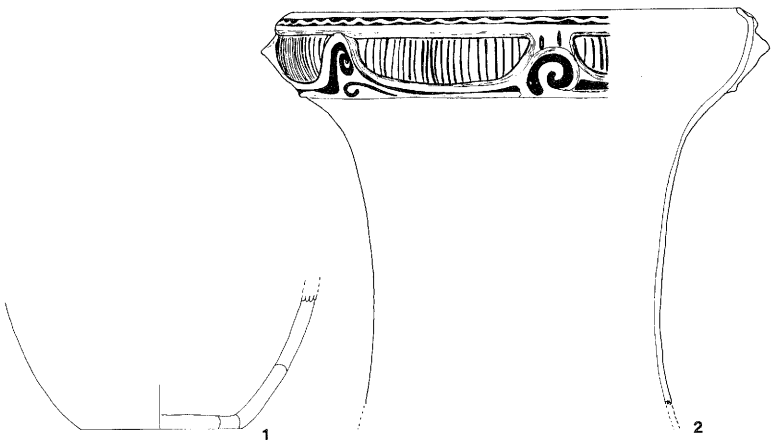
床面は平坦で全体に軟弱である。

炉は住居址中央北寄りにあり，石組み炉である。炉石は花崗岩の半月形の自然石を巧みに利用して外側は円形，内側は方形にしている。すべて炉石は横長に用いている。内部は丸底を呈

し，炉石からの深さは30cmで焼土が充満している。中央部に深鉢形土器の底部（第79図－1）が埋設されている。

炉の大きさは外形110×100cm，内形50×40cmである。

主柱穴はP_2，P_6，P_7 P_8の4本と考えられる。



第79図　第38号住居址床面出土土器（1／6，1は炉内埋設土器）

遺物（第79図）

土器は炉の南側，壁ぎわ床面上に口縁部を西にして横倒しで発見された深鉢形土器（2）と炉内埋設土器の深鉢形土器の底部（1）だけである。

2は口縁部を半分ほどと胴下半部を欠く。胴部は内反りである。口縁部文様は隆帯による渦巻文が8個配され，内部は細い沈線が楕形に施される。隆帯は沈線でふちどられる。内湾する口唇には隆帯による波状文がみられる。関東地方に盛行する加曽利E式に類似するが，口唇部の波状文は曽利式の影響であろうか。加曽利EⅠ式である。

石器はまったく出土していない。

37　第39号住居址（第80図）

遺構（第80図）

本住居址は第36号住居址の北約6mの所にあり，北東部は第42号住居址によって切られている。第42号住居址との床面差は23cmである。

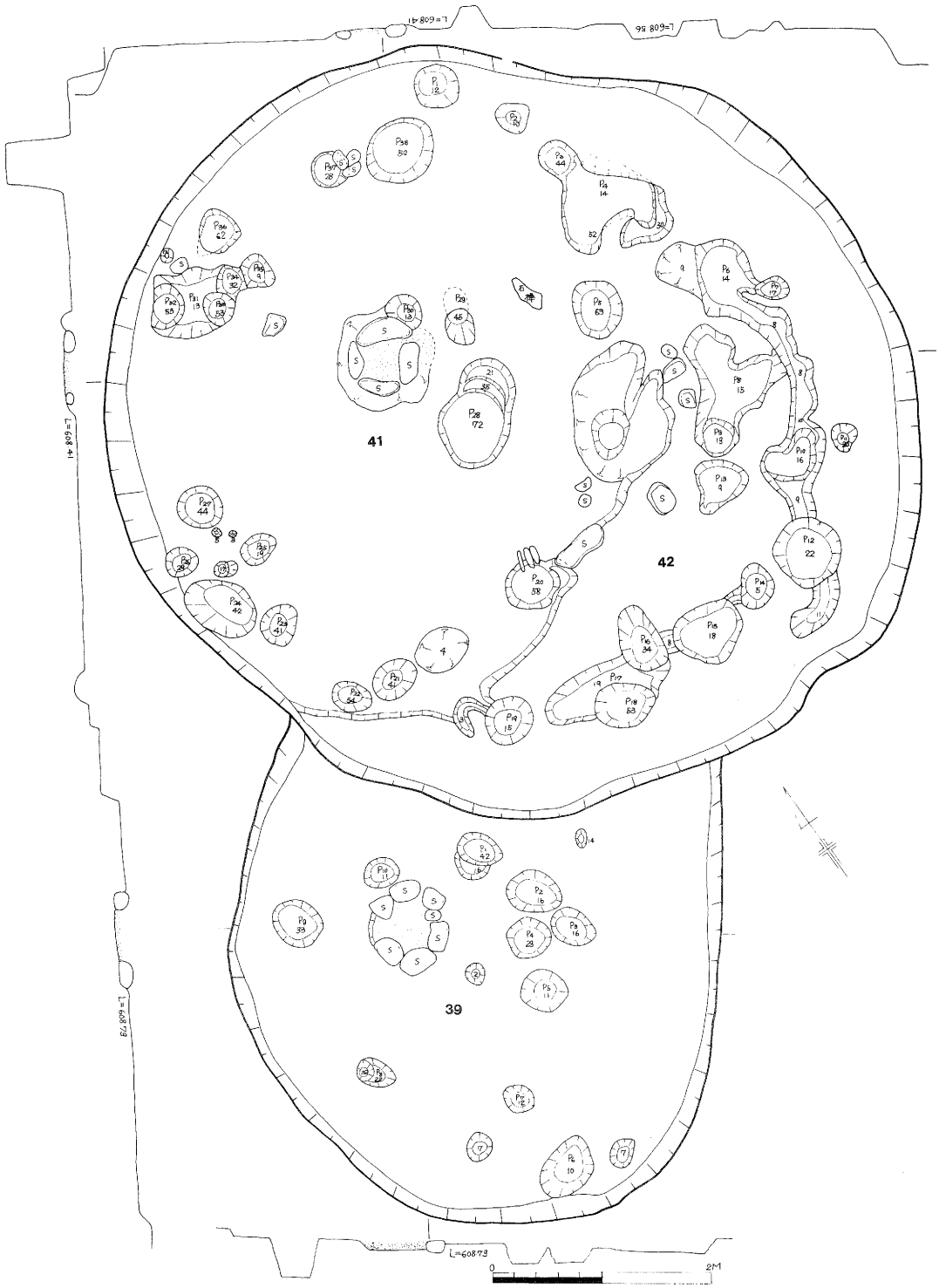
プランは楕円形を呈すと思われる。大きさは東西4.5m，南北5.5mを測ることができよう。

壁の立ち上がりはゆるやかで東側は20cm，西に行くほど低く10cm前後である。これは床面が東に傾斜していることも関係している。炉の付近を除いてはたたきはみられず軟弱である。

炉は住居址中央西寄りに位置する。住居址内における位置からすれば炉の両横が広い，即ち横長の住居址である。炉石は丸味のある平担な花崗岩と砂岩の自然石を横長に用いて構築している。プランは内外形ともほぼ円形を呈す。西側の炉石が一つないが，抜かれたものと思われる。大きさは外側80×80cm，内側40×40cmである。内部は平担で炉石からの深さは10cm，焼土が充満している。

柱穴はP_9を除いてはまったく不明である。東側のものは内側に入りすぎる感もあり全体に浅い。第42号住居址のP_{19}は本住居址に所属するものであろうか。

土器，石器は全く出土していない。時期は不明である。



第80図　第39・41・42号住居址実測図（S＝1／60）

第81図　第40・46・47号住居址実測図（S＝1／60）

38　第40号住居址（第81，82図）

遺構（第81図）

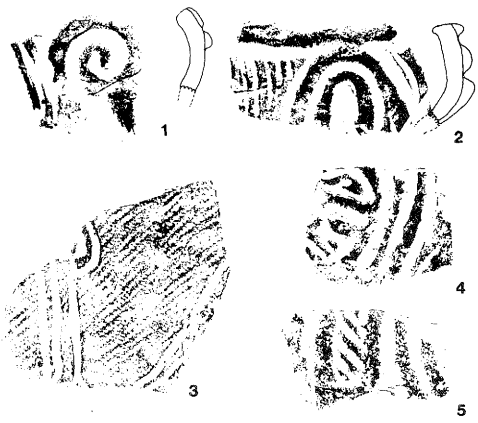
本住居址は第41号住居址の約３ｍ北西に発見されたものである。

西側は第46号住居址と同一床面でつながり，さらに第５マウンドによって壊され プランははっきりしないが，不整の長楕円形を呈すと思われる。

大きさは南北５ｍ，東西は推定6.２ｍを測る。

壁は全体にゆるやかで，壁高は南側で20cm，北は低くなりP_9にてなくなってしまう。

床面はたたきはあまり顕著でない。P_1と第５号ロームマウンドを結ぶあたりで床面に若干の変化がみられるが，壁に相当するものであろうか。



第82図　第40号住居址床面出土土器（１／３）

炉は住居址の北東寄りにあり，第39号住居址同様，炉の位置からすると横長の住居址である。内外とも楕円形の石組み炉である。大きさは外側80×105cm，内側40×70cmを測る。内部は丸底ぎみで炉石からの深さは30cm内外である。炉石は南側には細長い砂岩を他はやや小ぶりな丸味を持った花崗岩の自然石わすべて横長に用いて構築している。内部は焼土が充満じている。

主柱穴はP_2，P_6，P_{11}，P_{14}の４本であろうか。重複するピットもあることから柱の移動も考えられる。P_4とP_6を結んで深さ４cmの溝がある。第１号，23号，37号住居址にみられたピット間の周溝として注目したい。

遺物（第82図）

土器，石器とも少ない。土器は床面上に散在して発見されたものである。すべて深鉢形土器で，１・２は口縁部破片，他は胴部破片である。曽利Ⅰ式に比定されるであろう。

石器は16点の出土で床面出土のものは４点である。剝片は24片出土している。内訳は打製石斧７，特殊敲打器４，石皿１，磨石２，横刃形石器２点である。打製石斧は７点のうち完形品は１点のみである。

39　第41号住居址（第80，83図）

遺構（第80図）

本住居址は第40号住居址の南東約３ｍの所にあり，第42号住居址の北側部分と第39号住居址の一部を切っている。

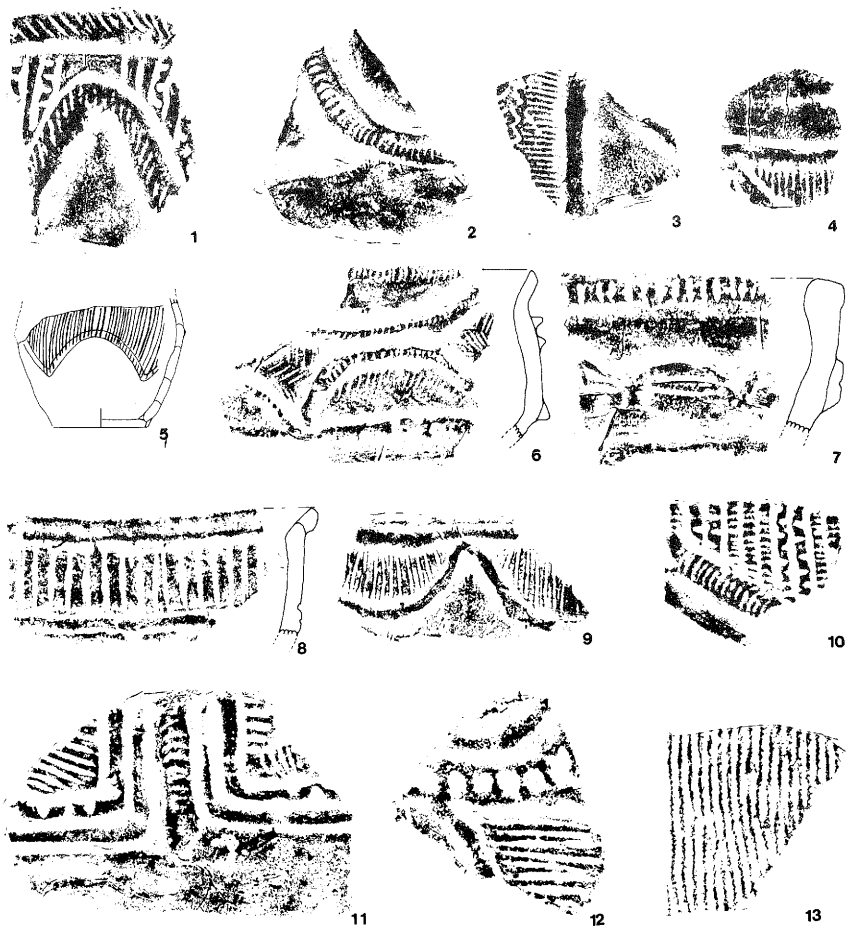
第39号住居址の北東部に大きなほぼ円形を呈す落ち込みを確認し，重複住居のおそれもあるため，南，西，北側の壁ぎわに50cm四方の試掘溝を設定し，床面を確認した結果西側床面の方が15cmほど低く重複の可能性が強くなった。掘り進めると南側において床面差15cmほどの違う床面が検出され貼り床はまったく見られず第41号住居址が第42号住居址を切っていることがわかった。しかしながらこの床面差も南部分のみで東壁近くでは確認できなかった。

壁はP_{20}からP_5の外側さらにP_4を通ると思われ楕円形のプランと思われる。大きさは6.2×5mと推定される。壁は北東ではやや直に近く西はゆるやかになっている。壁高は北は35cm，西では高く50cm前後である。床面は全体にやや北東に傾斜している。全体にたたきが良く行われている。

炉は住居址のほぼ中央に位置する。石組み炉で形状，構築方法は第38号住居址に以ている。4個の炉石からなり，北東と南西の相対する炉石は半月形に近い自然石を用いて外側に丸味をもたせている。形は外形は円形に近く，内形は方形である。炉は100×90cmの深さ10cmほどの凹みに作られており，炉石の頭は床面とほぼ同じである。第31号住居址同様もう一重炉石があったとも考えられる。大きさは外側70×65cm，内側35×30cmである。内部は焼土が充満している。炉石はすべて横長に用いている。

主柱穴は重複したピットや第42号住居址のピットの関係もあり定かでない。

炉とP_5との中間床面上に横たわって自然石を利用した石棒が出土している。またP_{20}の北側に打製石斧の完形品1点と磨製乳棒状石斧が2点並んで床面上から出土している。



第83図　第41号住居址出土土器（5は1／6・他は1／3，1～4は覆土・5～13は床面出土）

遺物（第83図）

土器，石器とも出土量は少ない。第42号住居址の遺物も若干混在しているものと思われる。土器は覆土出土のもの（1～4）と床面出土のものと（5～13）とがある。5を除いては破片のみで器形を知り得るものはない。

5は小形の深鉢形土器の胴上半部を欠く。隆帯によって連弧文を配しその上部は細い沈線が縦走する。6・8は深鉢形土器の7は浅鉢形土器の口縁部である。6はあまり類例をみないものである。

3および11は先行する藤内式に他は井戸尻Ⅱ式に比定されるであろう。

石器は28点出土している。打製石斧1点を除きすべて床面出土のものである。剝片は34片出土している。内訳は打製石斧11，磨製蛤刃石斧1・乳棒状石斧2，石錘1，敲打器a類2・b類2・c類2，磨石2，石棒1，横刃形石器3点である。

40　第42号住居址（第80図）

遺構（第80図）

本住居址は西側で第39号住居址を切り，北側部分は第41号住居址によって切られている。床面は三日月状を呈すのみでプランははっきりしないが，第41号住居址の炉の付近まであったと思われ，円形をなすと考えられる。大きさは東西6.5m，南北は5.8mほどと推定される。

壁はゆるやかで，東側はローム層を30cm堀り込んでいる。床面は北西に傾斜し，たたきはあまりみられない。

炉は検出されず第41号住居址によって破壊されたものと考える。

ピットが重複してみられ主柱穴は定かでない。P_{28} は本住居址に属するであろう。

壁より1mほど内に入った所に $P_6-P_{10}-P_{12}$，$P_{15}-P_{16}$ をつないで壁にそった溝が発見されている。第1号，23号，37号，40号住居址にみられた溝と同様なものである。柱穴からすると十分建直しが考えられるがこの溝のもつ性格はなんであろうか。

遺物

本住居址に確実に伴う土器はない。石器は壁ぎわ床面より17点出土している。剝片は石器の倍以上の37片が覆土と床面から出土している。内訳は打製石斧4，磨製蛤刃石斧1，大形粗製石匙4，石錘1，敲打器a類3・b類4点である。

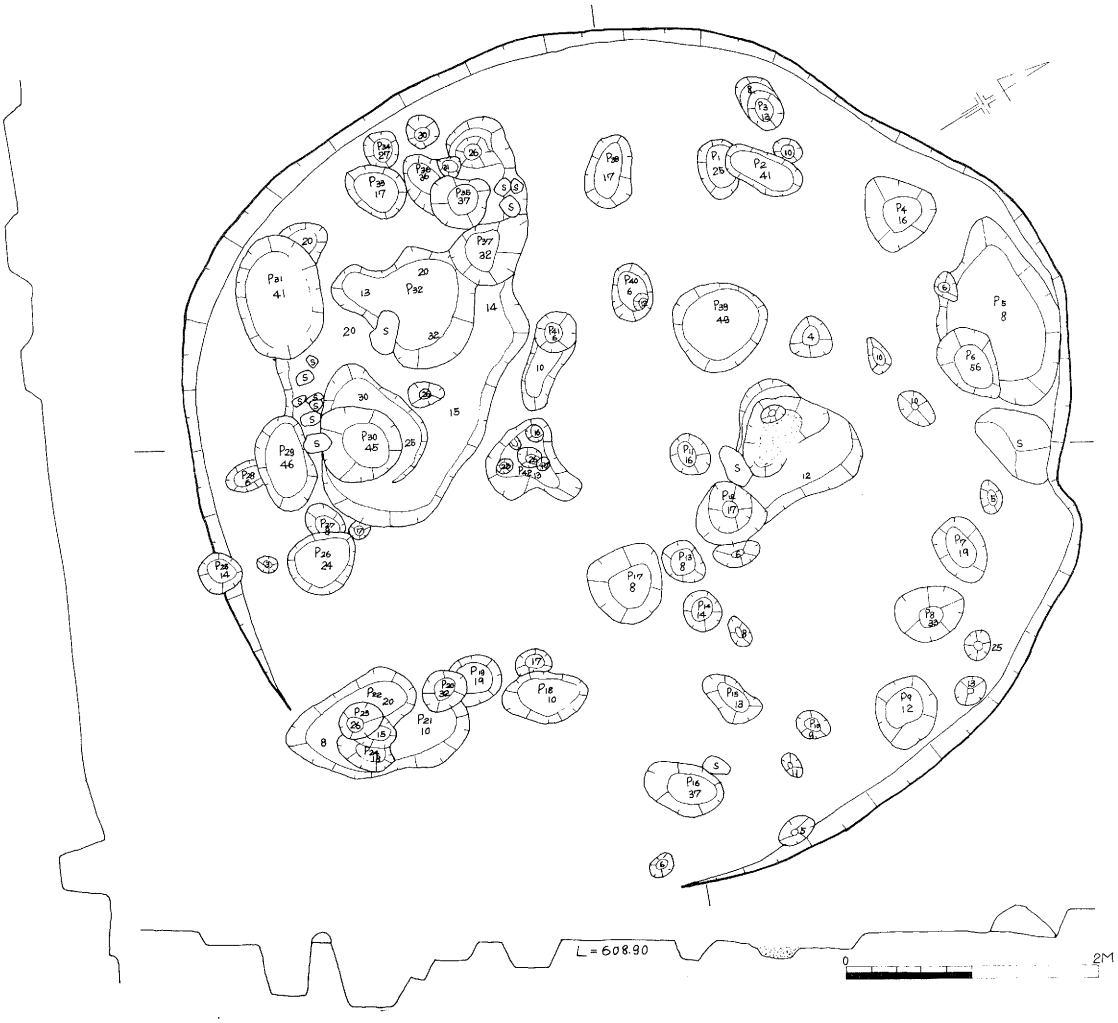
41　第43号住居址（第84，85図）

遺構（第84図）

本住居址は第40号住居址の北に接し一部は床面は同一レベルでつながっている。第47号住居址を切っているようであるが定かでない。

プランはほぼ円形を呈し，大きさは南北6.5m，東西6.7mである。

壁は直に近い。壁高は北側25cmを測り南に行くほど低くなる。床面は若干凹凸がみられるが，全体に固く良好である。

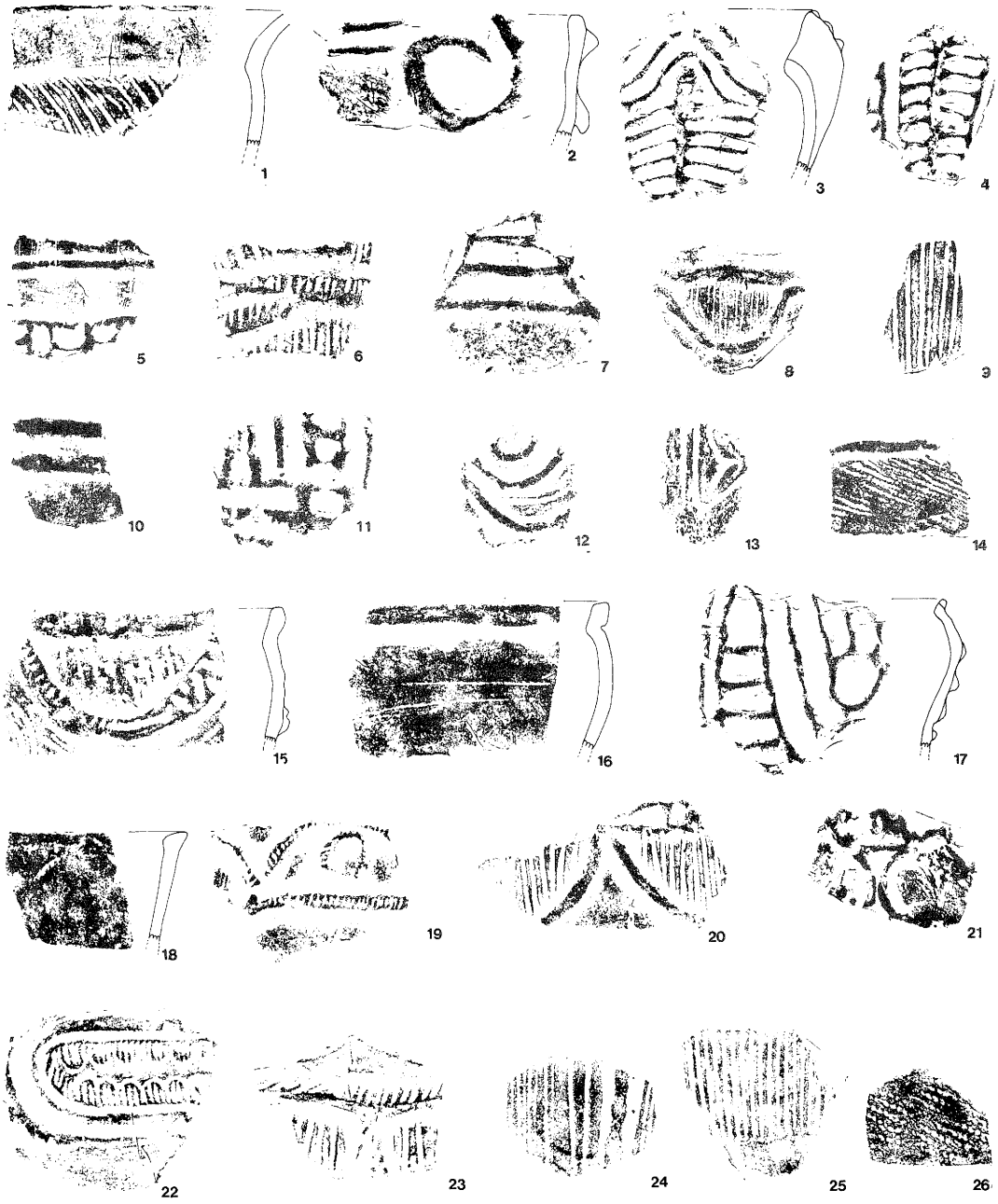


第84図　第43号住居址実測図（S＝1／60）

住居址北東寄りP_{12}とP_{39}との間に焼土を伴った楕円形のピットが検出されており，炉と考えられる。ピットは途中に段を有すところから石抜き炉であろう。堀り方の大きさは90×90cmである。深さは20cmを測る。

P_1・P_2，P_6，P_8，P_{16}，P_{29}などは主柱穴と考えられるが，ピットがあまりにも多く，また重複するため定かでない。住居址の建直しも考えられる。

住居址西側にみられる浅い大きなピットとピット群の性格は不明である。集石の存在などからすると土壙であろうか。



第85図　第43号住居址出土土器（1／3。1～14は覆土・15～26は床面出土）

遺物（第85図）

土器は覆土出土のもの（1～14）と床面出土のもの（15～26）とがある。出土量は比較的多いが，器形を知り得るものはなくすべて破片である。両者には時期差はみられない。

すべて深鉢形土器の破片である。1～4・15～18は口縁部ないし，口縁部に近いものである。3・4・11・12・17は粘土紐による装飾の施されるもの。8・20は櫛形文を持つものである。22は一群の土器より先行するものである。

時期は井戸尻Ⅲ式に比定されよう。

石器は61点出土している。覆土出土のものは36点，床面出土のものは25点である。剝片は46片出土している。石器の内訳は打製石斧15，大形粗製石匙3，石錘4，敲打器a類2・b類6，

第86図　第44号住居址実測図（S＝1／60）

特殊敲打器16，磨石１，磨き石７，石核１，横刃形石器６点である。

42　第44号住居址（第86，87図）

遺構（第86図）

本住居址は東を第47号住居址に北を第48号住居址に西は第50号住居址に囲まれたところに位置する。

北側の壁を欠くためプランははっきりしないが，隅丸の台形を呈すと思われる。大きさは東西６ｍ，南北は西で5.８ｍ，東で4.２ｍを測る。

壁の立ちあがりは非常にゆるやかではっきりしない。壁高は10㎝前後で北側ではなくなっている。床面は平坦でたたきは顕著でなく，軟弱である。

炉は住居址中央東寄りあり，石組み炉である。形は内外とも円形を呈している。大きさは75×85㎝内部は45×45㎝である。炉石は丸味のある小さ目な自然石を用いている。内部は平底で10㎝ほど掘りくぼめられており，焼土が充満している。炉石は床面上にわずか頭を出すだけである。

P_5・P_8・P_{11}などは主柱穴と考えられるが，はっきりしない。

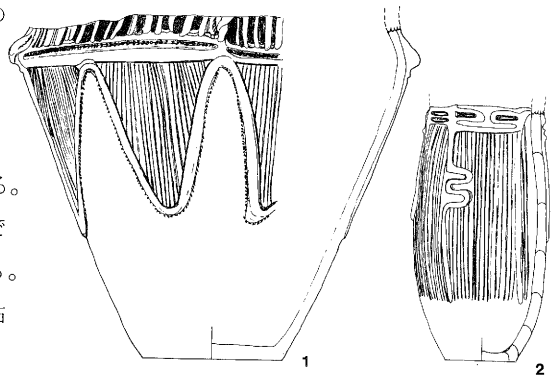
P_8からP_{11}に向かってまたP_{22}とP_5を結んで周溝がみられる。性格はいかなるものであろうか。

遺物（第87図）

土器・石器とも床面出土のものである。

土器は少なく第87図の複元土器だけである。

１は胴上半部を欠く大形の深鉢形土器である。胴下半部には連続三角文がみられる。楕形文の変形であろうか。その上部には粘土紐による装飾がみられる。



第87図　第44号住居址床面出土土器（１／６）

２は小形の円筒形土器で口縁部はラッパ状に開き無文と思われる。頸部には隆帯文が施され，それに直交する懸垂文が６本みられる。その間は細い浅い沈線が縦走する。

ともに曽利Ⅱ式に比定されるであろう。

石器・剝片とも22点ずつ出土している。石器の内訳は打製石斧６，磨製定角石斧１，大形粗製石匙１，敲打器ａ類６・ｂ類１，特殊敲打器２，磨石１，磨き石１，石核１，横刃形石器２点である。

43　第45号住居址（第88，89図）

遺構（第88図）

本住居址第48号住居址の北２ｍの所に発見されたものである。プランは変形ながら五角形を

第88図　第45号住居址実測図（S＝1／60）

呈すると思われる。大きさは5×5mを測る。

壁の立ち上がりはゆるやかである。壁高はほぼ均一で23cm前後を測る。床面は固くたたきしめられ平担である。

炉は住居址東寄りにあり石組み炉で五角形を呈す。大きさは外側は80×60cm，内側は40×30cmである。東側には大きな平担な自然石を他は細長い自然石をともに横長に利用してつくっている。内部は5cmほど掘りくぼめられただけで焼土が充満している。炉石は床面にわずか頭を出すだけである。

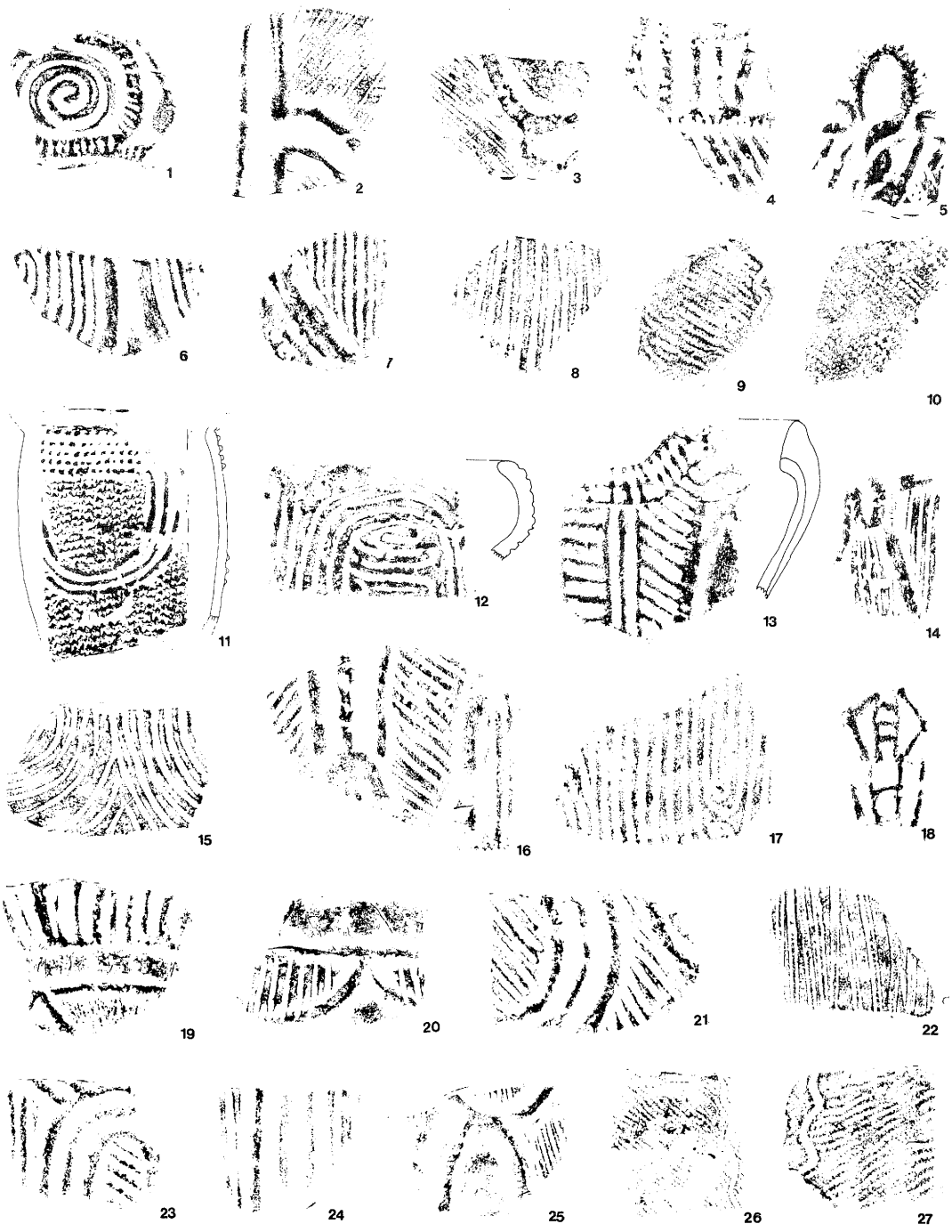
主柱穴は何本かは重複するものもあったりしてはっきりしない。建直しがあったかは不明である。

P_3の西側床面上に石皿がおかれている。

遺物（第89図）

土器は覆土出土のもの（1～10）と床面出土のもの（11～27）とがある。量的には床面出土のものの方が倍近く出土している。11の大形破片を除けば，器形を知り得るものはない。

すべて深鉢形土器である。11は大形破片からの図上復元の小形深鉢形土器で口縁部は強く張



第89図　第45号住居址出土土器（11は1／60他は1／3。10は覆土，11～27は床面出土）

り出すと思われる。頸部には5.条の結節浮線文がみられる。胴部は深い沈線を伴った3本の隆線が円弧文を描き，地には直接結節状文が施される。類例を知らない土器である。

19・20は櫛形文を持つものでやや先行する井戸尻期のものである。他は総じて曽利Ⅰ式に比定される。

石器は覆土出土のもの14点，床面出土のもの50点計64点出土している。剝片は52片である。

石器の内訳は打製石斧20，大形粗製石匙9，小形石匙1，敲打器a類3・b類2，特殊敲打器12，石皿1，磨き石7，石核4，横刃形石器5点である。

44　第46号住居址（第81，90図）

遺構（第81図）

本住居址は北東で第40号住居址と北西部では第47号住居址とそれぞれ同一床面でつながっている。複合関係はまったく不明である。

プランははっきりしないが隅丸方形を呈すと思われる。大きさは東西は推定6.0m，南北は6.1mである。

壁の立ち上がりはゆるやかである。壁高は南西部では20cmを測るが東に行くに従い低くなっている。床面は第40号住居址同様たたきがあまりみられず軟弱である。

炉は住居址の南東寄りに位置し石組み炉である。形は内外とも方形を呈す。大きさは外形90×70cm，内形は40×35cmである。炉石はすべて花崗岩質の自然石で石は横長にすえられている。内部は丸底を呈し，床面を10cmほど掘りくぼめてある。炉石は半分ほど頭を床面上に出しており，炉石からの深さは15cmである。内部には焼土が充満している。

主柱穴ははっきりしない。P_{24} は炉の位置からして本住居址に所属するものであろう。

遺物（第90図）

土器・石器ともに非常に少ない。

土器は床面出土のものですべて破片で器形を知り得るものはない。

深鉢形土器の破片のみである。1は無文の口縁部破片，2・8は櫛形文を持つものである。3～5は地文に縄文を有するもので，3・4には懸垂沈線がみられる。

2・6・8のような井戸尻期に属する一群と他の曽利前半期に属する土器との混在がみられる。住居址の所属時期はどちらとも決め難い。

石器は横刃形石器1点のみである。剝片も4片出土しただけである。ともに床面より出土している。

第90図　第46号住居址床面出土土器（1／3）

45　第47号住居址（第81・91図）

遺構（第81図）

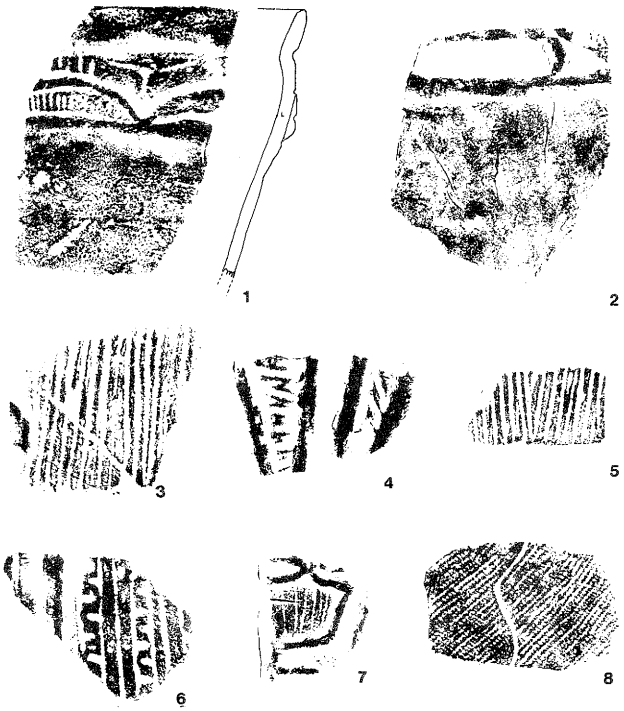
本住居址は第46号住居址の北にあり，同一床面でつながっている。また東側はピット群があり壁はなく，第40号住居址までやはり床面はつながっている。

このようなことからプランははっきりしないが，隅丸長方形を呈すと考えられる。大きさは主軸方向は6m，他方は推定5m前後であろう。

壁の立ち上がりはゆるやかで壁高は10cm前後で東に行くに従い低くなりなくなっている。

床面は全体に平坦であるが軟弱である。

炉は住居址北東部にあり石組み炉である。外形は楕円形を呈し，90×60cmを測る。内形は方形に近く50×40cmである。炉石のうち1と2は石を縦長に他は横長に用いてつくっていろ。内部は丸底で20cmほど掘りくぼめられ，焼土が充満している。炉石の頭は床面上にわずか出るだけである。



第91図　第47号住居址床面出土土器（1/3）

主柱穴は6本と考えられるが，重複するものもあり，どれとは決め難い。P_3の底部より4個の石が発見されている。

なお，第40，46，47号住居址の中間地帯には多くのピットがあったり，周溝がみられる。3軒の住居址の位置・プランなどからすると住居址に含まれないものが大半である。もう一軒の住居址の存在が考えられるのか，それとも土壙的なものであろうか不明である。

遺物（第91図）

土器・石器とも出土量は少ない。

土器は床面出土のものですべて破片で器形を知り得るものはない。

1は浅鉢形土器の口縁部破片である。他は深鉢形土器である。

1・2・6・7は井戸尻期，他は曽Ⅰ式に比定される。

住居址の所属時期は不明である。

石器は9点の出土で床面出土の横刃形石器1点の外はすべて炉内よりの出土である。剝片は床面出土で25片ある。石器の内訳は打製石斧1，石錘2，敲打器b類2，特殊敲打器2，横刃

形石器２点である。

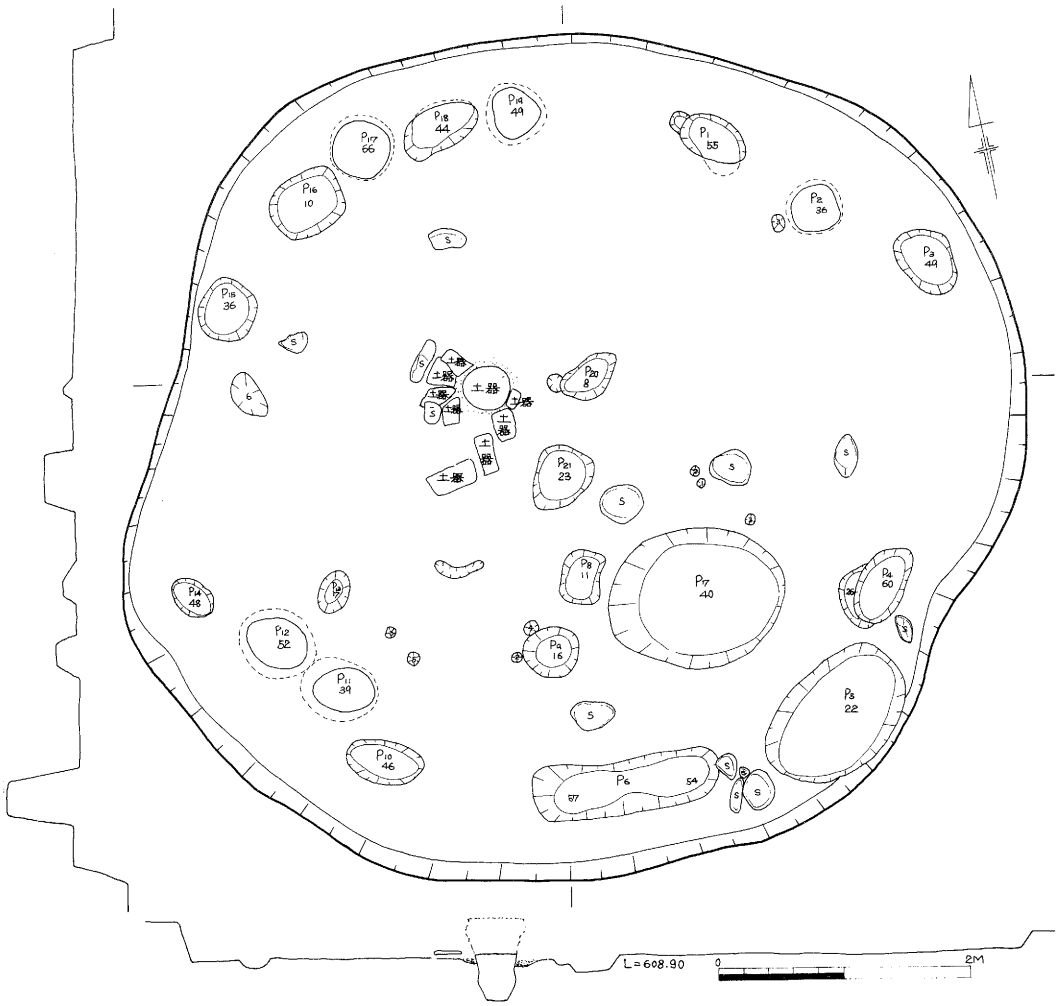
46　第48号住居址（第92・93図）

遺構（第92図）

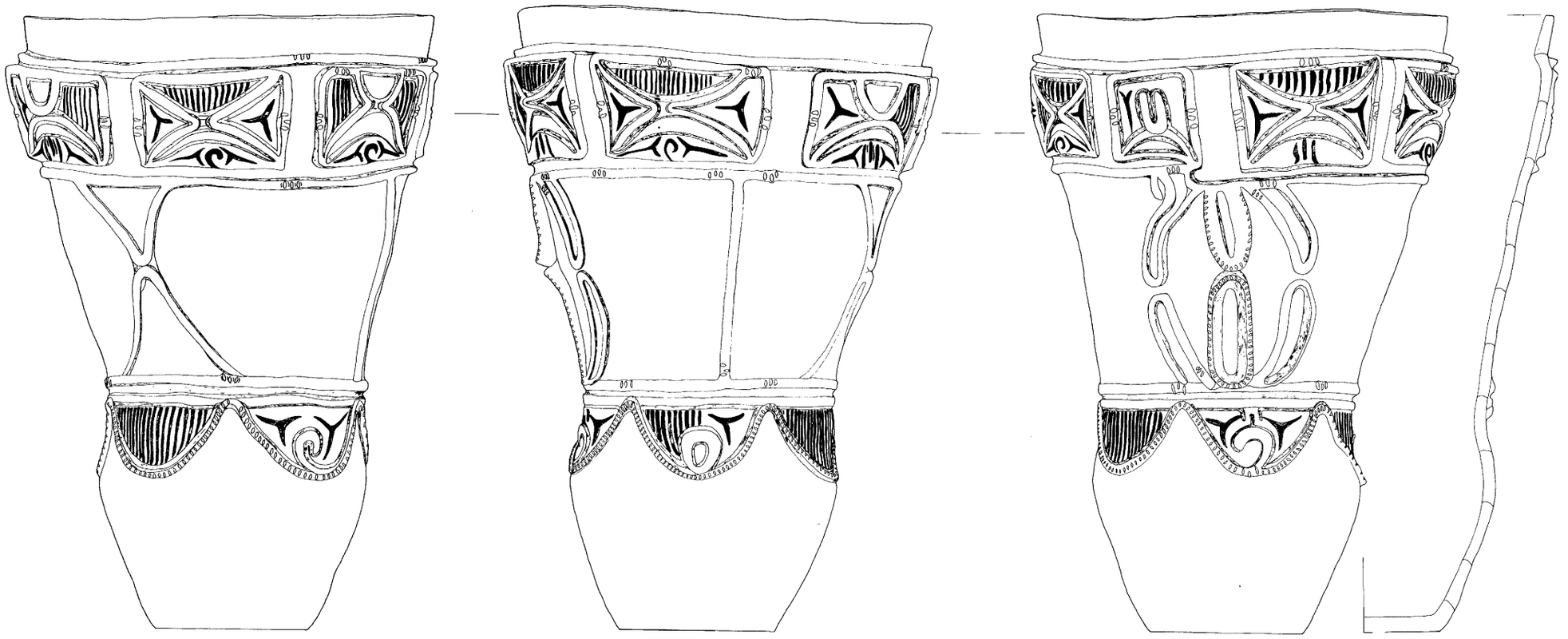
本住居址は第44号住居址と第45号住居址のほぼ中間に位置している。

プランは不整ながら円形を呈す。大きさは東西6.6 m，南北 6.8 mを測る大きなものである。

壁の立ち上がりは直に近く。壁高は均一でなく，南側は40cmと高く，北側では30cm前後東側



第92図　第48号住居址実測図（S=1/60）



第93図　第48号住居址炉内 埋設土器（1/6）

は低くなり15cm前後である。

床面は若干の凹凸はみられるが，全体に良くたたきしめられ良好である。

住居址中央西寄りに焼土と胴上半部を欠く大形深鉢形土器（第93図）が埋設状態で発見されている。一般的にこのようなものを埋甕炉と呼んでいるが，当例は埋甕炉と呼ばれるものとは性格が異なっている。

埋設土器は実測図に示すとおりわずかに床面上に頭を出すだけで，ローム中に埋設されている。断面観察によると土器のまわりには黒色土はまったく見られず土器のみの空間を作り埋設したものである。第92の土器断面図中実線で示したところが発見時の高さである。実測図にみられる胴上半部・口頸部は，埋設土器の周辺から出土したものである。第92図中「土器」と明記したものがそれである。図にみるとおり南側周辺に集中していることがわかる。これらの土器破片は床面より5～10cmほど浮いて発見されたもので床面との間には覆土がみられる。埋設土器の内部には土器破片はまったくみられない。内部を覆う土は覆土と同じものである。焼土は埋設土器のまわりにすり鉢状に10cmほど掘りくぼめられ焼土が堆積している。焼土は埋設土器中よりはまったく検出されていない。土器の表面くびれ部の上部すなわち焼土にあたった部分には部分的ではあるが，わずかに表面が剥落したり，すすの付着がみとめられる。またこれに呼応するかのように，くびれ部上部の内面には5cmほどの幅で炭化物の付着が一周している。

当例のような胴上半部や口縁部を欠いた炉内埋設土器を往々してみかけるが，それらは焼土が充満しているこがあったり，また明らかに不用部分を切って埋設したと考えられ，当例はこれらの埋甕炉と異なっていることが理解できる。周辺から発見された土器破片によって完形品として復元されたことは埋設時において切断されたものでなく第92図に示すごとく完形品として埋設されていたものとしか考えられない。かりに埋設に切断したとするならば，不用部分のものは存在しないのが普通であると考えられるからである。完形品として床面より出ていた部分－口頸部・胴上半部が，住居址埋没時に壊れたものである。破片が内部に落ちこまないことは器形からも理解できるが，南側に集中していることは何らかの力が加わったものであるが不自然な感もある。さらに破片が床面より浮いて出土したことはある程度埋没してから壊れたものであろうか，それとも最終生活床面がこの高さまであったものであろうか。埋没時間との関連もあるが，興味ある問題である。

一般的な埋甕炉と異なることは理解できようが，はたしていかなる用途が考えられるであろうか。特徴をあげてみたい。

1　常設的なものであること

2　武藤雄六氏の指摘する蒸し器の器形であること※1

3　内面くびれ部上部にのみ5cmほどの幅で炭化物の付着がみられること

4　表面くびれ部上部にすすの付着と若干の剥落があり，そのまわりに焼土があること

3については4からまた使用される状態からして二次利用でなくこれによって付着したものであることは明白である。さらに1についても埋設状態からして妥当である。

煮沸具あるいは蒸し器とも考えられるが問題はある。胴下半部が埋設されていることから底

部及び胴下半部よりの加熱が受けられないことである。煮沸であれば水に焼け石を入れることも考えられるが，3にみる炭化物の付着状況からして考えられない。3の状態での炭化物付着からは蒸し器のさなの存在を考えなくてはならない。4にみるくびれ部上部のみの加熱のみでは煮沸すら困難であるうし，かりに初めから湯を入れておいても難しいのではなかろうか。先に述べた焼け石利用と併用すれば可能なのかははっきりしない。今後の問題である。それともまったく異なった調整方法が考えられるのであろうか。調整道具以外の用途は考えられず，またさなが存在したことは確かである。武藤氏のご教示によると，炭化物（内面付着のもの）はまきなどをたいたときよりおきを用いて加熱した場合の方がより多く付着されるとしている。※2

当例は特殊な埋甕炉として性格は今後の研究にゆずるが，今まで発見された口縁部・胴上半部を欠く埋甕炉の中にも同様な性格を持つものもあったことも十分考えられる。また埋甕炉の性格についても検討されねばならない。

主柱穴は6本以上と考えられるが定かでない。

遺物（第93図）

土器は炉内埋設土器（第93図）のほかには覆土と床面よりわずかに出土しているだけである。

第93図は大形の深鉢土器である。高さ65cm，口径42cm，底径16cmを測る。胴部にくびれ部を持ちそれから口縁部にかけては直線的に外反する。口唇部は無文で段をもちその下につばがつけられ，その下には浮隆文による7分画の文様構成がみられる。その内部は変形人体文や縦位の沈綿などが施される。浮隆帯にはところどころ三本ずつ刻みが行われている。くびれ部の下胴下半部には連続して五個の櫛形文が施される。内部は縦位の沈線によるものと沈線によって渦巻文などが刻まれるものとがある。隆帯には連続刻み目文がみられる。頸部文様帯の下と櫛形文の上には隆帯が一条ずつめぐらされ，その間はやはり隆帯による2本の懸垂文と二個の変形人体でつないでいる。

時期は井戸尻Ⅱ式に比定される。

石器は全部で35点，剝片が26片出土している。石器の内訳は打製石斧16，磨製定角石斧2，大形粗製石匙2，敲打器a類4，特殊敲打器4，磨き石5，横刃形石器2点である。

※1　武藤雄六「中期縄文土器の蒸器－櫛形文土器の変遷と意義」　信濃17－7　昭和40年

※2　執筆にあたって電話でご教示いただいたものである。説明不足もあったりして，武藤氏の意にそわない点があれば筆者の責任である。

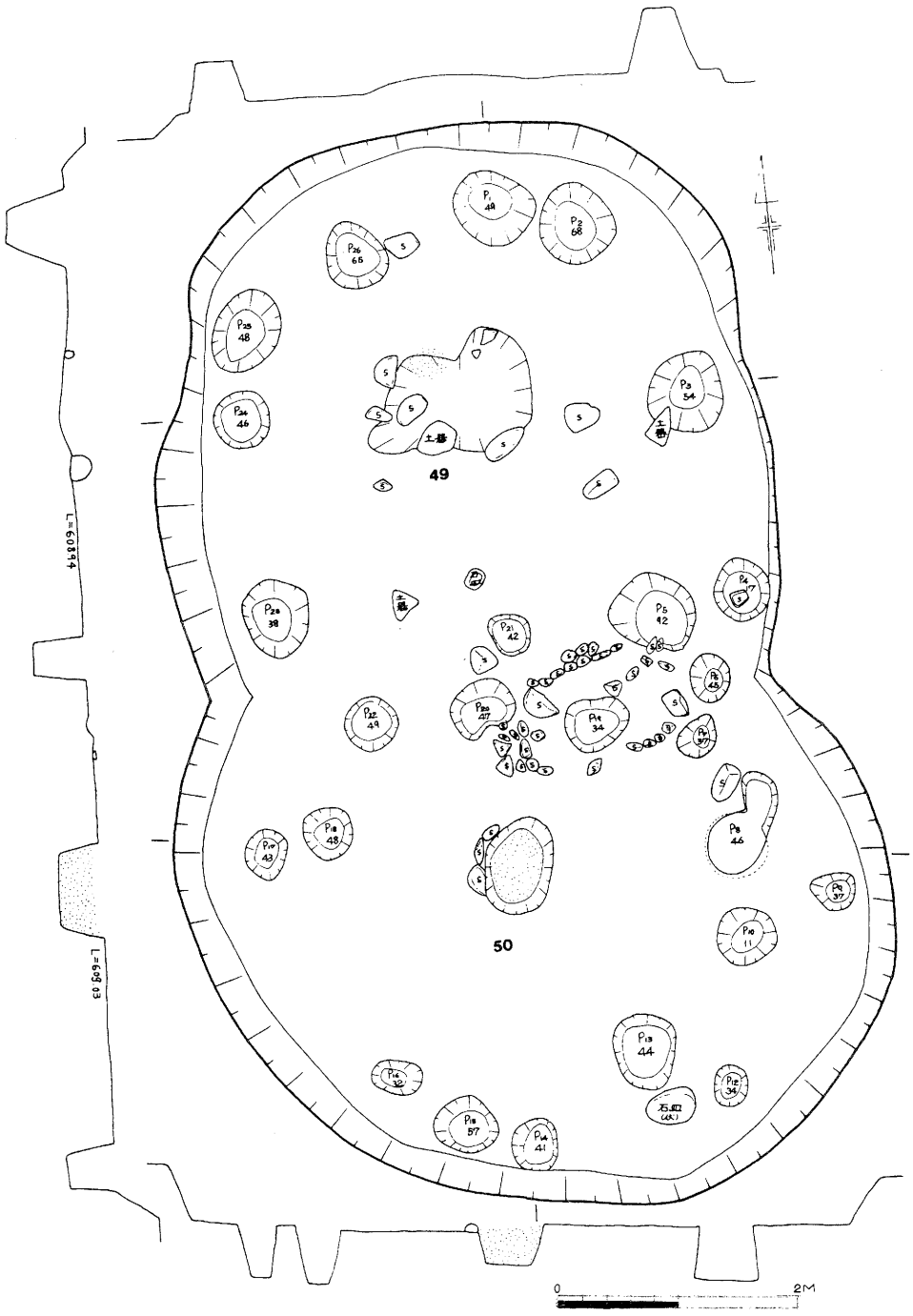
47　第49号住居址（第94・95図）**遺構**（第94図）

本住居址は第26・27号住居址，第53・54号住居址，第44号住居址の中間に位置しており，南側は第50号住居址と同一床面でつながっている。

大きさは南北は推定5.5m，東西5.1mで惰円形を呈すと思われる。

北側及び西側の壁の立ち上がりはなだらかであるが，東側は直に近い。壁高は北側と西側は20cm前後，東側は15cm前後と低くなっている。

床面は全体に良くたたきしめられており良好である。



第94図　第49・50号住居址実測図（S＝1/60）

第95図 第49号住居址床面出土土器(1/6)

炉は住居址中央北寄りにある130 × 80cmほどの楕円形の浅いピットがそれであろう。底は赤く焼けただれ，北側にはわずかに焼土がみられる。深さは10cmほどの丸底である。石組み炉の石が抜かれたものであろう。

主柱穴はP_1, P_2, P_3, P_5, P_{23}, P_{24}・P_{25}, P_{26} の6本と第50号住居と重複するP_{10}・P_{20}・P_{22}のうち2本の計8本と考えられる。P_1・P_2またP_{24}・P_{25}は柱の移動を想像させる。

P_{21}の北側床面上に石皿がある。位置からして本住居址のものであろう。第95図に示す有孔鍔付土器の破片がP_3の西側と石皿西側床面上から出土している。

遺物 (第95図)

土器は第95図に示す有孔鍔付土器以外出土していない。

半分ほどからの図上復元によるもので，口径は17cmを測る。最大径は34cmと口径の倍で胴上部に位置する。頸部はゆるやかな曲線を描いて口唇部にいたる。鍔は口唇下 2.5 cmの所と頸胴部の境にみられる。最初の鍔の上部に孔がうがたれている。孔は径0.8cmで 2.5 cm間隔に規則正しくみられる。孔はわずかに内側に傾斜している。胴部文様は彫刻文による半肉状にうきあがらせた渦巻文を中心とし，区角文で埋めている。藤内Ⅱ式に比定される。

石器は土器に比べると出土量は多く78点出土している。床面出土のものは打製石斧1，敲打器3，石皿1，磨き石2点の7点と少なく他は覆土出土のものである。剝片は94片である

石器の内訳は打製石斧20，磨製乳棒状石斧1，大形粗製石匙1，石錘5，敲打器a 類9・b類5，特殊敲打器15，石皿3，磨石1，磨き石10，礫核石器1，石核4，横刃型石器3点である。

48　第50号住居址 (第94，96図)

遺構 (第94図)

本住居址は第49号住居址の南に接し，北側は同一床面でつながっている。

プランは楕円形を呈すと思われ，大きさは 6.1 × 5.2 mを測るであろう。

壁の立ち上がりはややゆるやかで，壁高はほぼ均一で40cm前後である。床面は平坦で固くたたきしめられている。

炉は住居址ほぼ中央に位置する。石抜き炉で一部つめ石が残されている。掘り方の大きさは外形85×60cm，内形60×40で楕円形を呈す。底は平底で30cmと深く内部には焼土が充満している。

主柱穴は5本であろうか。P_8・P_9，P_{12}・P_{13}，P_{17}・P_{18}などは柱穴が外側に動いたと考えられ，建直しも考えられるが定かではない。

住居址の北東部にP_{19}を中心として楕円形の配石がみられる。大きさは1.6×1mで小さな自然石を主として一部二重に並んでいる。さてこの配石の所属であるが，本住居址に伴うものと考えたい。第49号住居址は本住居址より古いことは出土土器からして明らかで第49号住居址に伴うものだとすれば，邪魔になるからである。性格は一種の祭壇であろうか。配石の所属からするとP_{19}は第49号住居址の柱穴と考えるのが妥当であろう。

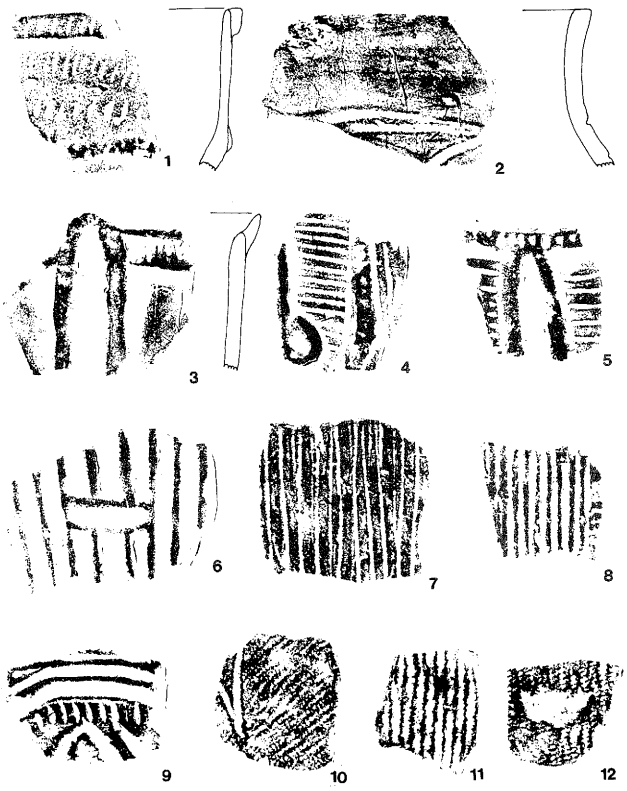
遺物（第96図）

土器・石器とも少なくすべて床面出土のものである。

土器はすべて破片で器形を知り得るものはない。深鉢形土器のみである。

1・2・3は口縁部である。1は折りかえし口縁で連続爪形文をもつ。中期としては類例を知らない。

土器は総じて曽利Ⅰ式に比定される。



第96図　第50号住居址床面出土土器（1/3）

石器は18点剝片が17片出土している。石器の内訳は打製石斧7，大形粗製石匙1，石錘2，敲打器a類3・b類1，特殊敲打器2，石皿1，横刃形石器1点である。

49　第51号住居址（第53・97図）

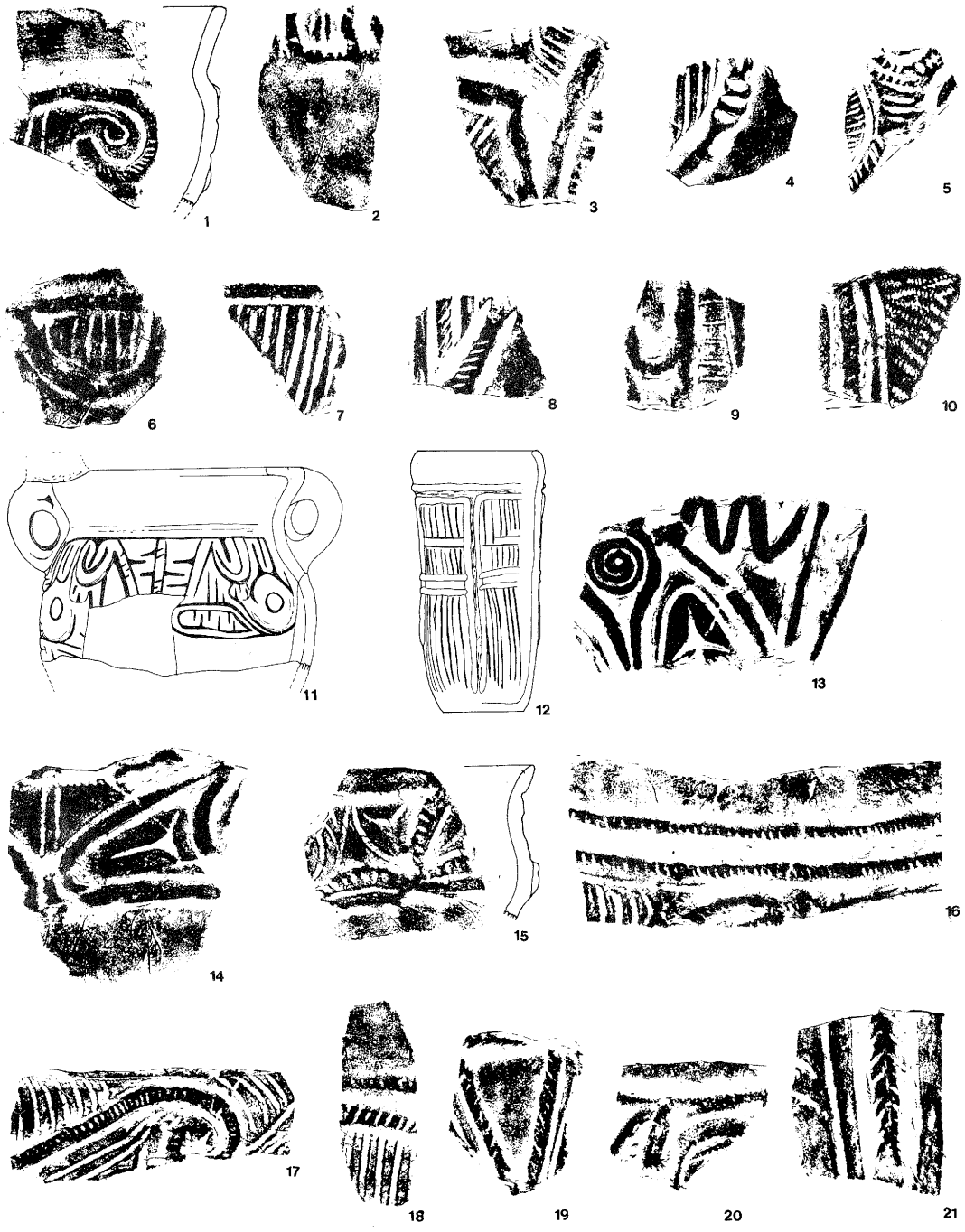
遺構（第53図）

本住居址は第25号住居址の東にあり，西側半分は貼り床されている。プランは変形ではあるが五角形に近い。大きさは東西5.3m，南北4.9mを測る。

壁の立ち上がりはゆるやかで，壁高は30cm前後でほぼ均一である。第25号住居址の貼り床は床面まで達している。床面は固くたたきしめられ良好である。

炉は検出できなかった。破壊されたものと思われる。

住居址の南西部に3.1×2.8mのほぼ円形の小竪穴が掘られている。底は平らで固くたたきしめられている。第51号住居址との床面差は16cmほどである。小竪穴の壁にそってピットがみられることからも当住居址に伴うものでなく，別のものと考えたい。上部に貼り床のなかったことから当住居址より後のものである。当住居址の炉は，この小竪穴によって破壊されたものであ



第97図　第51号住居址出土土器（11・12は1/6，他は1/3，1～10は覆土，11～21は床面出土）

であろう。

主柱穴は定かでない。

遺物（第97図）

土器・石器とも多く出土している。

土器は覆土出土のもの（1～10）と床面出土のもの（11～21）とがある。両者には時期差はみられない。

11・12以外は破片ですべて深鉢形土器である。

11は底部を欠く壺形土器である。半分ほどからの図上復元である。滑車状の把手を2個持つ。口唇は強く内屈する。文様は胴部にみられ彫刻文である。

12は小形の円筒形土器である。口頸部はわずかに内傾し無文である。胴部は隆帯によって器面が縦に4分画され，さらに横に3分画される。内部は浅い沈線が縦走する。

総じて井戸尻Ⅱ式に比定される。

石器は81点，剝片が6片出土している。石器の内訳は打製石斧27，磨製定角石斧1，大形粗製石匙5，石錘5，敲打器a類11，特殊敲打器15，石皿1，磨石1，磨き石11，横刃形石器4点である。

50　第52号住居址（第57・98図）

遺構（第57図）

本住居址は第26号住居址の北東に炉のみ発見されたもので，プラン・規模・柱穴などはまったく不明である。

炉の周辺にわずかたたきがみとめられのみである。

炉は石組み炉で一部石が抜かれている。長方形を呈し，大きさは外形80×60cm，内形60×40cmを測る。底は平底で深さ10cm，内部は焼土が充満している。炉石は花崗岩及び砂岩の自然石で，細長いもの横長にすえている。

炉の東側に平盤な花崗岩の自然石と石皿がある。

土器は第98図に示すものだけで，石器とともに炉の周辺床面より出土している。

第98図　第52号住床面出土土器（1/3）

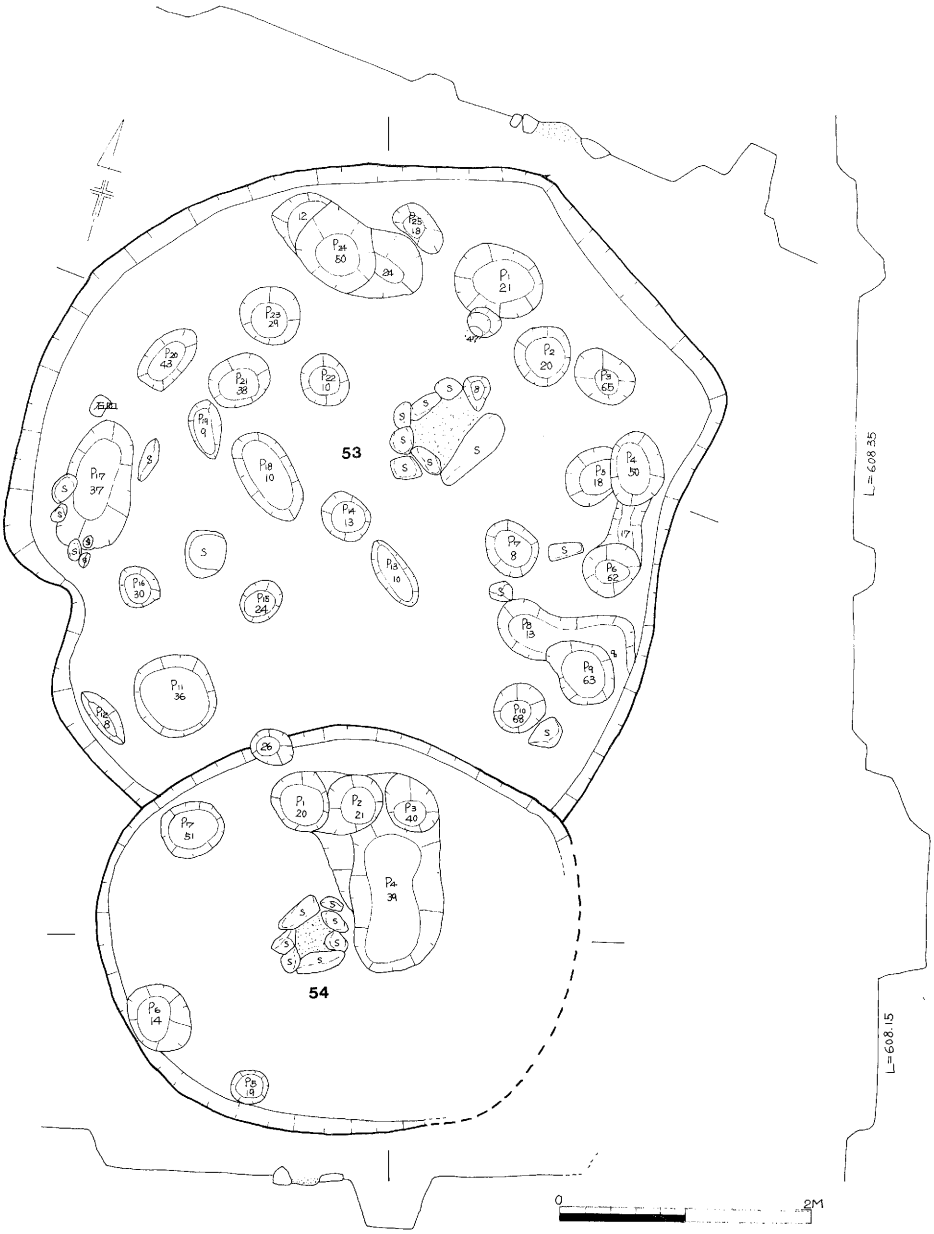
遺物（第98図）

土器，石器とも少ない。

土器は第98図に示すものだけである。同一個体で深鉢形土器である。沈線によって流水文を描くもので曽利Ⅰ式に比定される。

石器は14点，剝片が8片出土している。すべて床面出土のものである。

内訳は打製石斧3，石錘1，敲打器a類2・b類2，特殊敲打器3，石皿1，磨石1，磨き石1点である。



第99図　第53・54号住居址実測図（S=1/60）

51　第53号住居址（第99，100図）

遺構（第99図）

本住居址は第45・49・51号住居址の中間に位置し，南側は第54号住居址によって切られている。

プランは不整の楕円形を呈す。大きさは南北は推定5.9ｍ，東西は5.2ｍを測る。

壁の立ち上がりはゆるやかである。壁高はほぼ均一で20㎝前後である。床面は固くたたきしめられ良好である。第54号住居址との床面差は20㎝を測る。

炉は住居址のやや北東寄りにあり，石組み炉である。プランは長方形を呈し，大きさは外形90×70㎝，内形50×30㎝を測る。北東部の炉石は抜かれている。南東部に細長い石をすえ，他はやや丸味のある自然石を横長にすえている。底は丸底で床面からの深さは10㎝ほど炉石から18㎝前後を示す。炉石は半分ほど埋められている。内部には焼土が充満している。

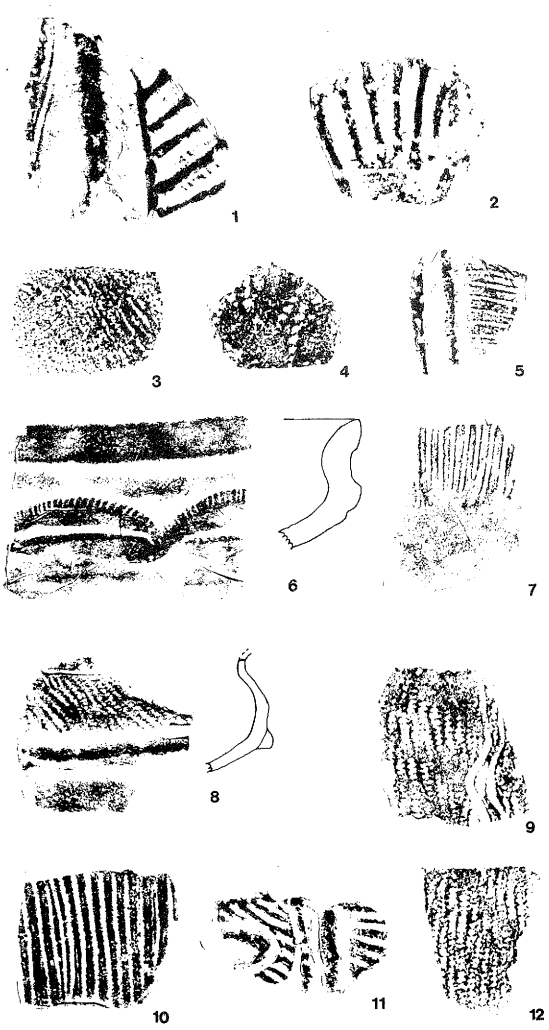
ピットは非常に多くみられる。P_3，P_9，P_{11}，P_{20}など主柱穴と考えられるが定かでない。一部柱の移動も考えられる。

遺物（第100図）

土器は覆土出土のもの（1～5）と床面出土（6～12）のものとがある。すべて破片で器形を知り得るものはない。

6は浅鉢形土器で他は深鉢形土器である。6は一群の土器よりやや先行すると思われる。

総じて井戸尻Ⅲ式に比定される。



第100図　第53号住居址出土土器（1/3・1～5は複土，6～12は床面出土）

石器は73点と比較的多く出土している。剝片は46片の出土である。

石器の内訳は打製石斧21，磨製定角石斧２，大形粗製石匙３，石錘３，敲打器ａ類８・ｂ類１，特殊敲打器15，石皿１，磨石３，磨き石６，礫核石器１，横刃形石器９点である。

52　第54号住居址（第99図）

遺構（第99図）

本住居址は第53号住居址の南にあり切っている。一部東側部分を確認できなかったが，プランは楕円形を呈す。大きさは東西 3.8 m，南北 3.3 m を測る。

壁の立ち上がりはややゆるやかである。壁高は西側で30cm，南では20cmとなり，東に行くほど低くなっている。床面は壁ぎわが若干高くなっている。床は固くたたきしめられており，良好である。

炉は住居址中央やや西寄りにあり，石組み炉である。形はくずれた方形で大きさは外側60×60cm，内側25×25を測る。北側と南側には細長い自然石を用い他は丸味のある小さ目な石を用い，横長にすえている。底はほぼ平らで床面からの深さは 5 cmほどである。炉石からの深さは一定せず西側は20cm他は10cm 前後である。

P_7，P_3以外は浅いピットである。東側のごく一部が未調査とはいえ，ピットが西側にかたよっている。主柱穴が何本であるかは不明である。炉の東側に 120 ×70cmの惰円形のピットがある。当住居址に伴うものか，土壙であるかは不明である。

土器・石器はまったく出土していない。

第 3 節　その他の遺構と遺物

第 2 節で述べてきた住居址のほかに，埋独埋甕址・特殊小竪穴・土壙・ロームマウンドがある。順を追って述べることとする。

1　単独埋甕址（第 5，101～103図）

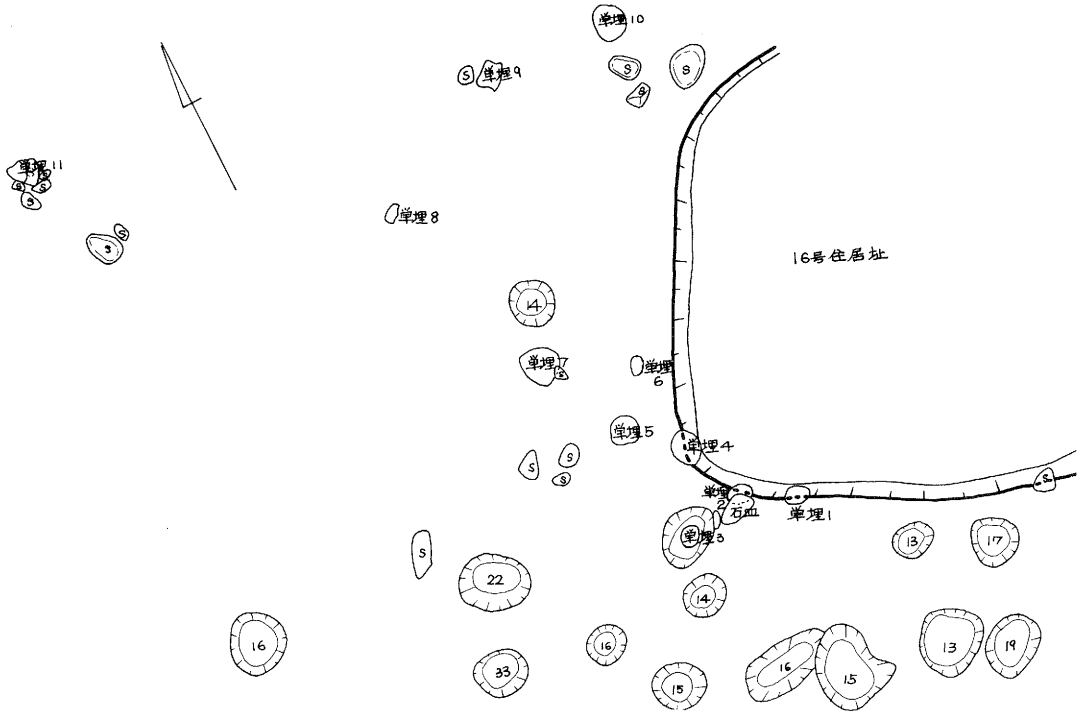
遺構（第 5 ・101図）

単独埋甕址とは住居址外に土器が埋設されているものを呼称したものである。その意味では土器埋設址の方がふさわしいかも知れないが，後述する土壙の中にも土器を伴うものもあるので区別する意味をもたせたものである。土壙と区別しがたいが，土器をそのまま埋め込んだものは住居址内埋甕と埋設方法が類似する。また破片として埋め込んだものも土器片をわずかに掘り込んで埋め込むもので土壙とは異っている。

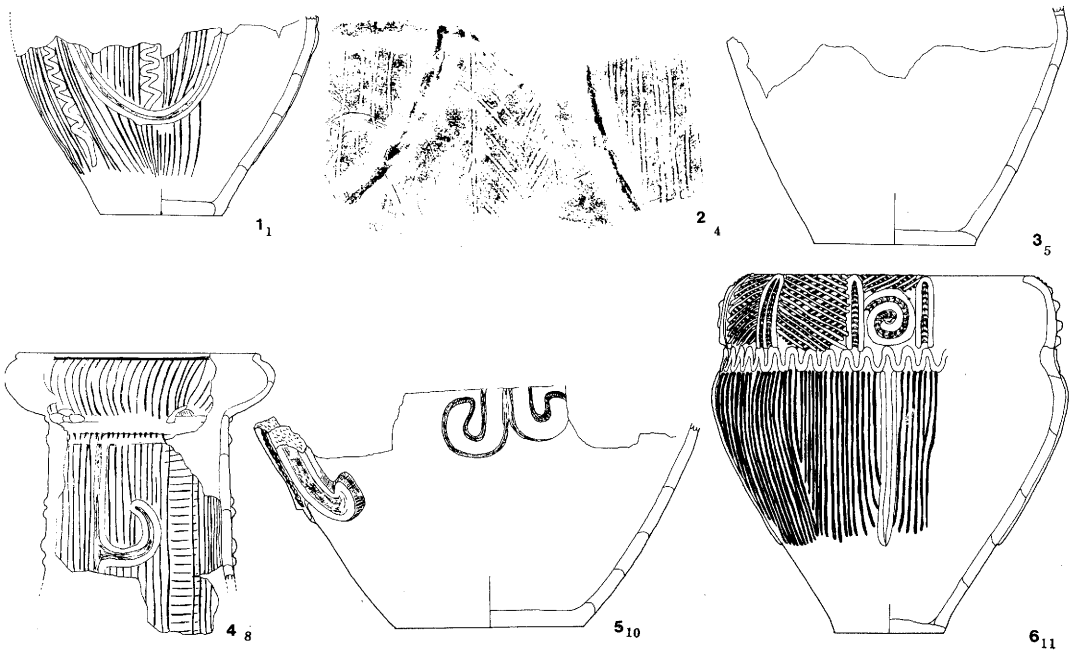
1～11は第16号住居址の南西部に集中して発見されている。12は第 33号住居址と第46号住居址の中間に，さらに13は第45号住居址の東に位置している。

埋設方法は11・12のように完形品を正位に埋め込んだもの，1・5・10のように口縁部を欠くものを正位に埋設するもの，2・3・6・7・9のように個体の一部を埋め込んだもの，13のように幾個体もの一部を埋め込んだものの 4 とおりに区別される。1・5・10については発見された所が田の地場下であったので上部に出ていた部分が破壊されたことも考えられる。

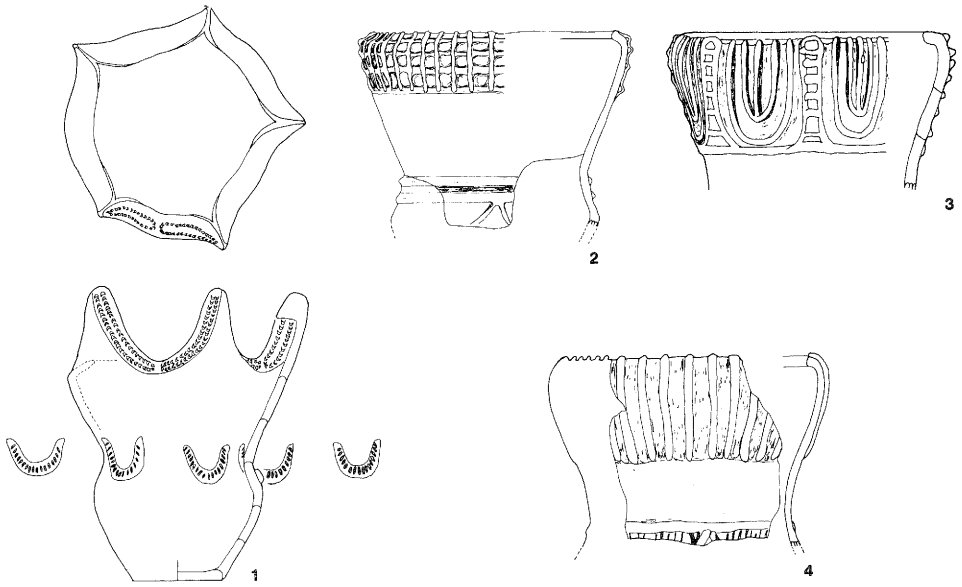
2 には石皿が，11には配石が伴っている。また 1・2 などの南にあるピットや各埋甕址の間



第101図　単独埋甕址（1～11）位置図（S=1/80）



第102図　単独埋甕址（1～11）出土土器（2は1/3 他は1/6）



第103図　単独埋甕址（12・13）出土土器（1/6。1は12，2～4は13出土）

にみられる置き石はこれらに関係するものかは不明である。

土器（第102・103図）

13の遺構から出土した土器のうち図示でき得たものは，1（1）・4（2）・5（3）・8(4) 10(5)・11(6)出土の6個と12(1)と13(2～4)　出土の4個の計10個である。

第102図－1は深鉢で胴上半部を欠く。隆綿による円弧文・蛇行懸垂文を施し内部は縦走する平行沈線で埋めている。

第102図－2は節形文を持つ大きな深鉢の胴部破片である

第102図－3は大形の深鉢の底部である。

第102図－4は半分ほどからの図上復元である。小形の深鉢形土器で隆帯の懸垂文と細い平行沈線によって文様が構成される。

第102図－5は3同様大形の深鉢形土器の底部で，隆帯による文様がみられる。

第102図－6は一部口唇部を欠くがほぼ完全に近いものである。口縁部は隆帯による渦巻文・懸垂文によって区画され，内部は籠目文で埋めている。頚部は隆帯を一条波状にはわせ，胴部には二本と一組とする隆帯懸垂文を等間隔に4個施し，その間は太い深い沈線で充填される。

1は曽利Ⅱ式，4・6は曽利Ⅰ式にそれぞれ比定でき得る。2・5は井戸尻期に属すると思われる。

第103図－1は小形の深鉢形土器で完形に近いものである。5個の山形状突起を持つ波状口縁で口唇部は強く内傾し，半截竹管工具による連続刺突文が2条施される。くびれる頚部には隆帯によるU字文が施され，ヘラによる刻みがみられる。ヘラなで調整が全体に行われてい

る。

第103図－2～4は13からの出土土器でまだ伴出土器が2個体ほどあるが図示できなかった。ともに小形の深鉢形土器で器形も類似する。口縁部文様帯と胴部文様帯との間は無文で隆帯による井桁文・はしご文・流水文などが口縁部文様の特徴である。

1はあまり類例をみないが，第1号住居址出土土器（第8図－23）等に類似する。その共伴関係から井戸尻Ⅲ式に比定できる。2～4も井戸尻Ⅲ式であろう。

2　特殊小竪穴（第104図）

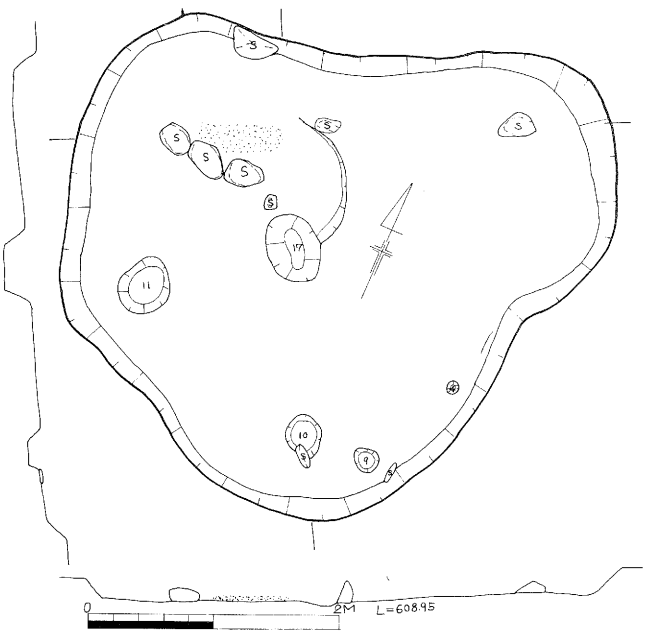
本遺構は第30・31・35・36・38号住居址の中間に位置する。

プランは不整で五角形と三角形ともとれる。大きさは南北3.7m東西4.3mである。

壁の立ちあがりはなだらかで，壁高は15～20cmである。床面は凹凸がみられる。住居址の床面とは違いたたきはまったくみられず軟弱である。

遺構の西側に厚さ5cmほどの焼土がある。床面を掘りくぼめてはない。焼土の南側には3個の花崗岩が並んでいる。炉であろう。

ピットは小さく浅いものが南側にみられるだけで主柱穴と考えられるものは存在しない。



第104図　特殊小竪穴実測図（S=1/60）

一見住居址と似るが柱穴の存在床面のたたきがみられないことから特殊小竪穴としたものである。

住居址中第5号・20号址は，柱穴・床面のたたきは存在するが炉がみられないもので本例とは逆となっており，特殊小竪穴と呼ぶべきかも知れない。また第51号住居址に掘り込まれた小竪穴も同例である。

本遺構に共伴する土器・石器はまったく出土していない。

3　土　壙（第105～117図）

土壙は全部で84基発見されている。住居外に検出されたものは問題ないが，住居址内においてのものは土壙かどうか判断に苦しむものが多かった。今回は住居址にあっては生活に邪魔になるもの，貼り床されており旧柱穴とは考えられないもの，住居址施設を壊っているもの，上

部に配石を伴うものなどを基準として判断したため，このほかにも住居址内土壙はあると考えられる。なお土壙８・９・86は欠番となっている。

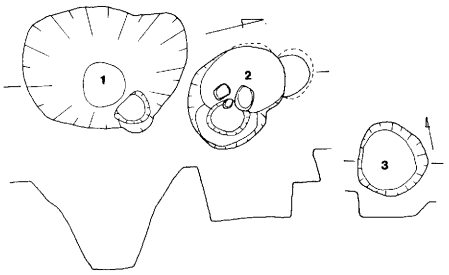
また説明はブロック毎などをもとに適宜まとめて行うこととする。

1）土壙1・2・3（第105図）

土壙１・２は第３号住居址の南東に発見されたものである。土壙1は 1.7 × 1.3 m の楕円形を呈し，上部に比べて底部が小さくすり鉢状をしている。土壙２は内部に二重の穴を持つもので，上部に自然石３個が置かれている。覆土はおもに黒色土で，炭化物を含む。

土壙３は第４号住居址の炉をこわっているものである。径80cmほどのほぼ円形である。

土壙１・２・３とも共伴遺物はない。

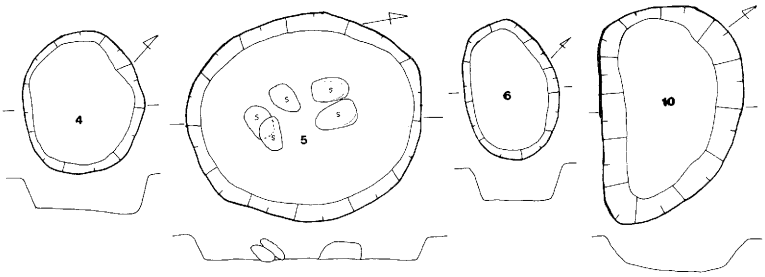


第105図　土壙1・2・3実測図（S＝1/80）

2）土壙4・5・6・10（第106図）

これらの土壙は第10号及び14号住居址の西側に単独で検出されたものである。

土壙４は 1.5 × 1.3mの楕円形で平底である。土壙5は 2.5× 2.2m の楕円形で大きなものである。底は平らで内部に自然石５個がおかれている。土壙6は 1.5 × 1.0ｍの長楕円形を呈す。底はやはり平らである。土壙10は 2.5×1.5ｍの大きさを測り一隅がややつぶれている。底はやや丸底ぎみである。



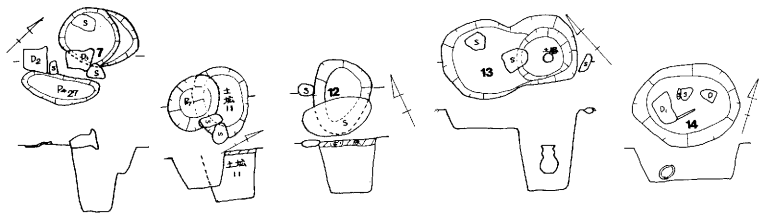
第106図　土壙4・5・6・10実測図（S=1/80）

いずれの土壙からも遺物は出土していない。

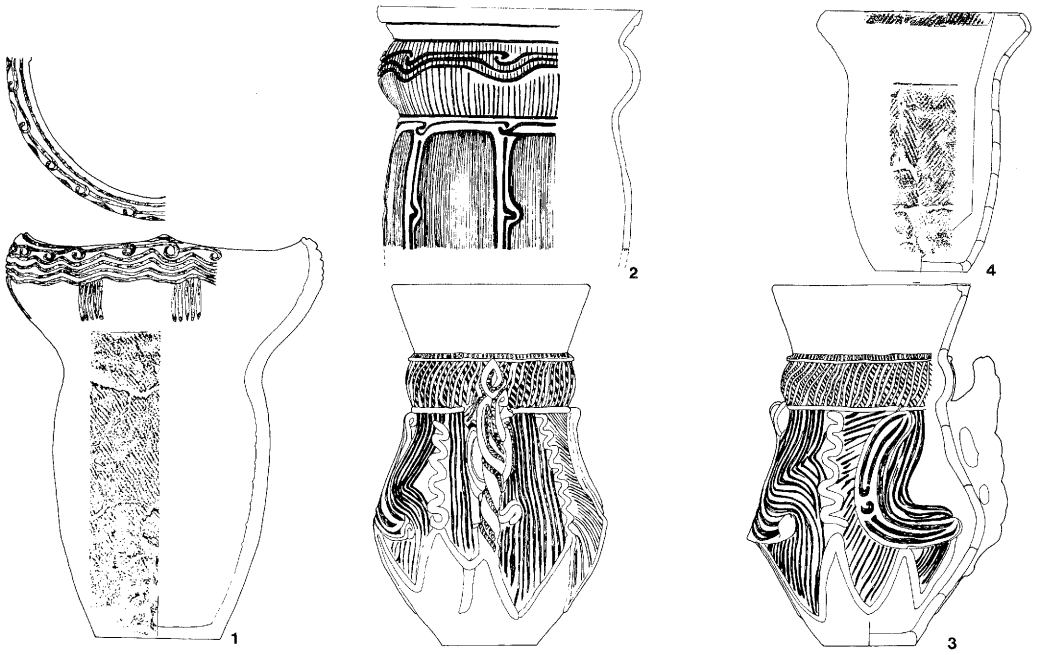
3）土壙7・11・12・13・14（第107, 108図）

この５基の土壙は共に住居址内土壙である。土壙７は第12号住居址の東部分に発見されたものである。段を持つ土壙で大きさは85×60cmで楕円形を呈す。上部に配石がみられ，その南東に深鉢形土器（第108図－１・２）が２個横倒しで発見されている。この土器は住居址に共伴する可能性もある。

１は完形の小形深鉢形土器でキャリパー形を呈す。内湾する口唇部には連続竹管押引文を一条めぐらし，その下部は沈線による連続わらび手状文，４条の波状文が施される。また五条を一組する縦位の集合沈線が器面を６分画する。里木Ⅱ式あるいは中富式ないし 神明Ⅰ式土器



第107図　土壙7・11・12・13・14実測図（S=1/80）



第108図　土壙7・13・14出土土器（1/6。1・2は7，3は13，4は14出土）

に類似するものである。伊那谷南部にはよくみられる土器であるが，詳細は不明である。

2はやはり小形の深鉢形土器であるが胴下半部を欠く。口唇部は段をもち外反する。口縁部には浅い平行沈線が縦走し，ワラビ手状文と二条の波状の沈線文がめぐらされる。頸部には沈線文がみられそれから胴部にかけて懸垂沈線文が施され，分画される。里木Ⅱ式・中富式などの影響を強くうかがわせる土器である。曽利Ⅱ～Ⅲ式に比定される。

土壙11は第10号住居址の西壁近くに発見されたものである。柱穴によって一部壊され，他の部分は貼り床されている。楕円形を呈し，大きさは75×55cm，深さ55cmを測る。共伴遺物はない。

土壙12～14は第14号住居址内に検出されたものである。12は上部に貼り床が行われ，自然石がその半分ほどを覆っている。プランは楕円形で大きさは80×55cm，深さ55cmを測る。共伴遺物はない。

土壙13は炉の横に検出されたもので浅い楕円形のピットと円形の深いものとからなる。深いピットの内部から底より浮いて正位に埋設された壺形土器（第108図－３）が発見されている。ピット内覆土中には炭化物が多量に含まれている。

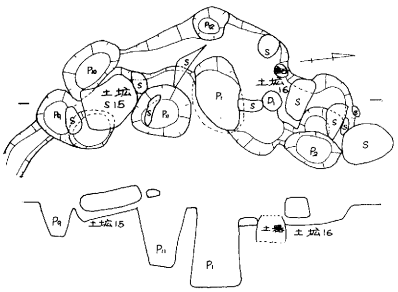
３は完形の壺形土器である。無文の口縁部はラッパ状に開き，頸部はふくらみ籠目文が施される。胴部はひねり棒状の把手と３個のＬ字貼付文によって４分画され，さらにその間を隆帯の蛇行懸垂文が走る。その中は深い平行沈線で埋められている。均整のとれた形と文様は優品である。曽利Ⅰ式に比定される。

土壙14は第14号住居址の西壁にそって発見されたもので，内部より横倒しの小形深鉢形土器（第108図－４）と３個の自然石が出土している。プランは楕円形で110×85cmを測る。底は平らで深さは35cmである。土壙13と同様多量の炭化物が検出されている。

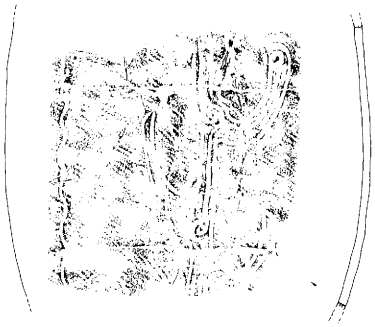
４は完形のキャリパー形小形深鉢形土器である。文様は縄文のみである。焼きは良く薄手作りである。縄文の施文方法は中期において珍しいもので類例を知らない。時期は不明である。

４）土壙15・16（第109・110図）

この二つの土壙はともに第11号住居址と第12号住居址との境に発見されたもので，上部に配石を持つ。土壙16よりは，胴部のみの大形深鉢形土器（第110図）が逆位に半分ほど埋まって出土している。



第109図　土壙15・16実測図（S＝1/80）


第110図　土壙16出土土器（1/3）

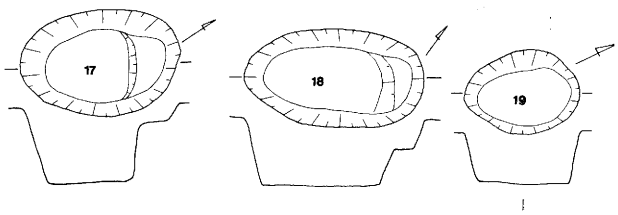
第110図は口縁部と底部を欠く大形の深鉢形土器である。縄文を地文とし，沈線による蛇行懸垂文や変形人体文が施される。

５）土壙17・18・19（第111図）

ともに第３～６号住居址の西側に単独で発見されたものである。

土壙17は段を持つもので楕円形を呈し1.7×1.1ｍの大きさである。深さは75cmと20cmである。

土壙18もやはり段をもつ。1.9×1.1ｍの長楕円形プランを呈し，深さは70



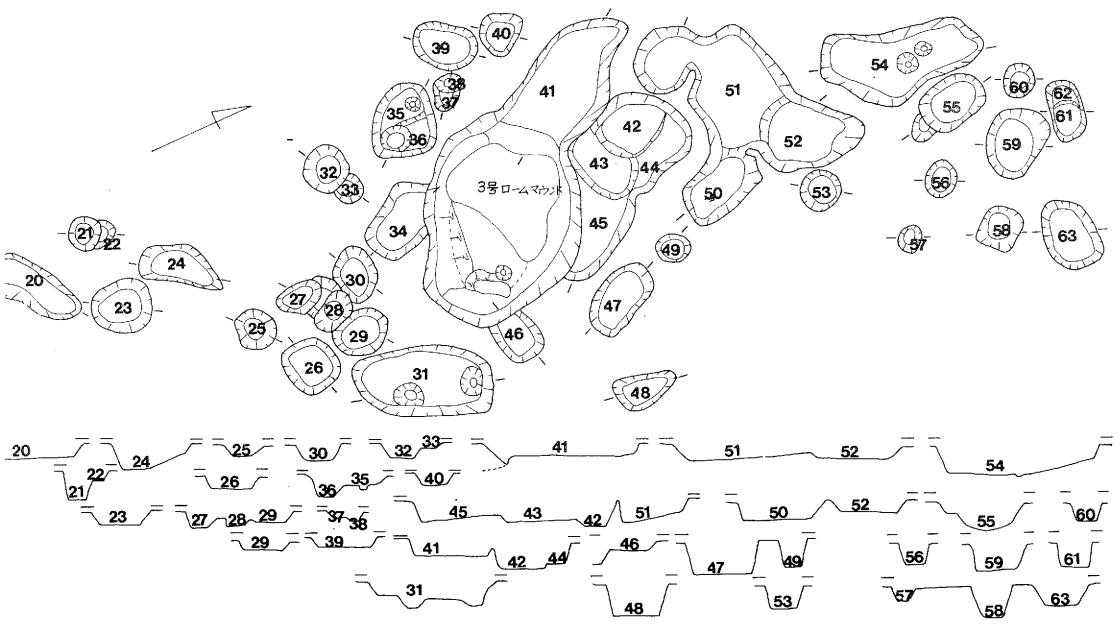
第111図　土壙17・18・19実測図（S＝1/80）

cmと30cmである。

土壙19は1.2×0.9mの楕円形プランを呈すもので，深さは50cmを測る。

ともに底は平底である。共伴遺物はない。

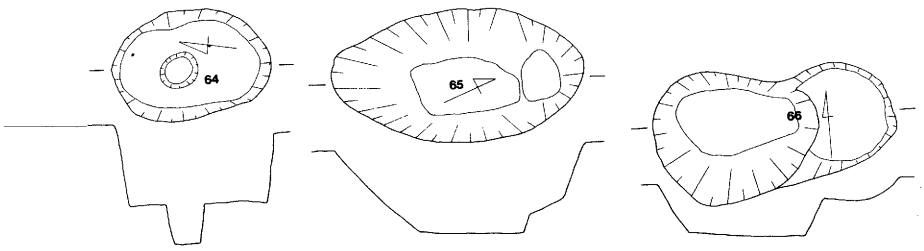
6）土壙20～63（第112図）



第112図　土壙20～63実測図（S＝1/120）

土壙20～63は第17号住居址の西に集中して発見されたものでプランは一定していない。共伴遺物はまったくない。土壙群の中央部にローム マウンド（3号）がある。

7）土壙64・65・66（第113図）



第113図　土壙64～66実測図（S=1/80）

土壙64・65・66は第18号住居址の西に発見されたもので単独である。全体に大きくて深い。

土壙64は1.65×1.1mの楕円形で深さは70cmを測る。内部に深さ40cmほどのピットがある。

土壙65は2.7×1.4mの長楕円形を呈し，壁はゆるやかで，北に段をもっている。深さは80cmほどである。

土壙66は二重の竪穴である。一つを切ったものなのかは不明である。

いずれも伴出遺物はない。

8）土壙67～69（第114，115図）

土壙67～79は第19号住居址の北東に集中して発見されたものである。

不整円形を示すものが多く，土壙68は浅く大きなものである。

土壙67と68の境より石皿が出土している。

土壙よりの伴出遺物は少ない。

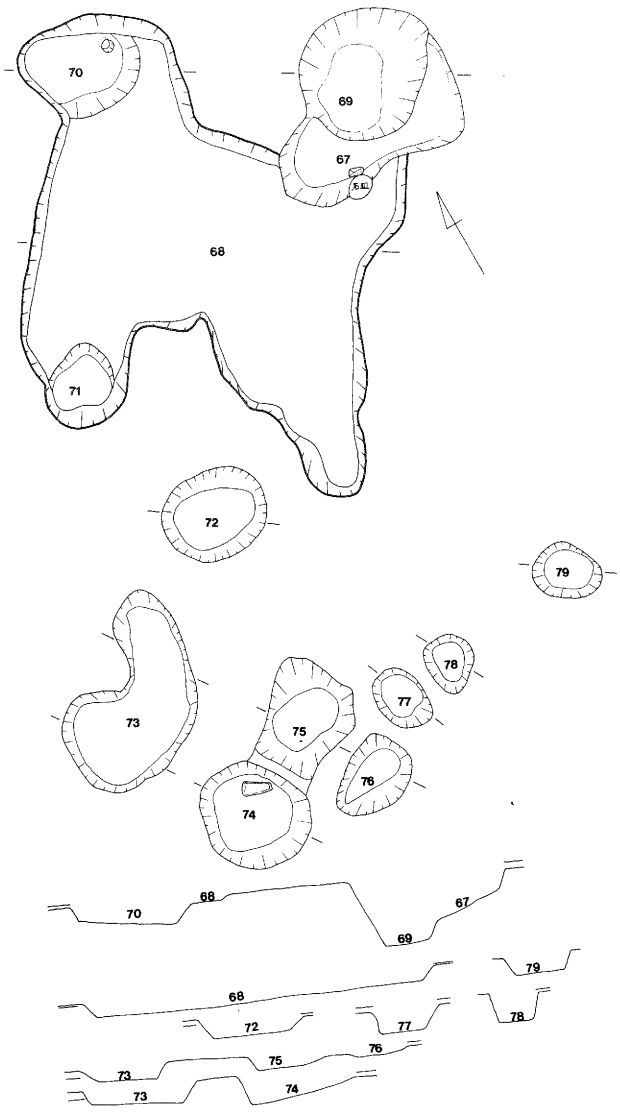
土壙67・69・72を除いては出土しても細片である。

第115図－1～4は土壙67からの出土である。2・3は同一個体ですべて深鉢形土器である。井戸尻Ⅲ～曽利Ⅰ式に比定される。

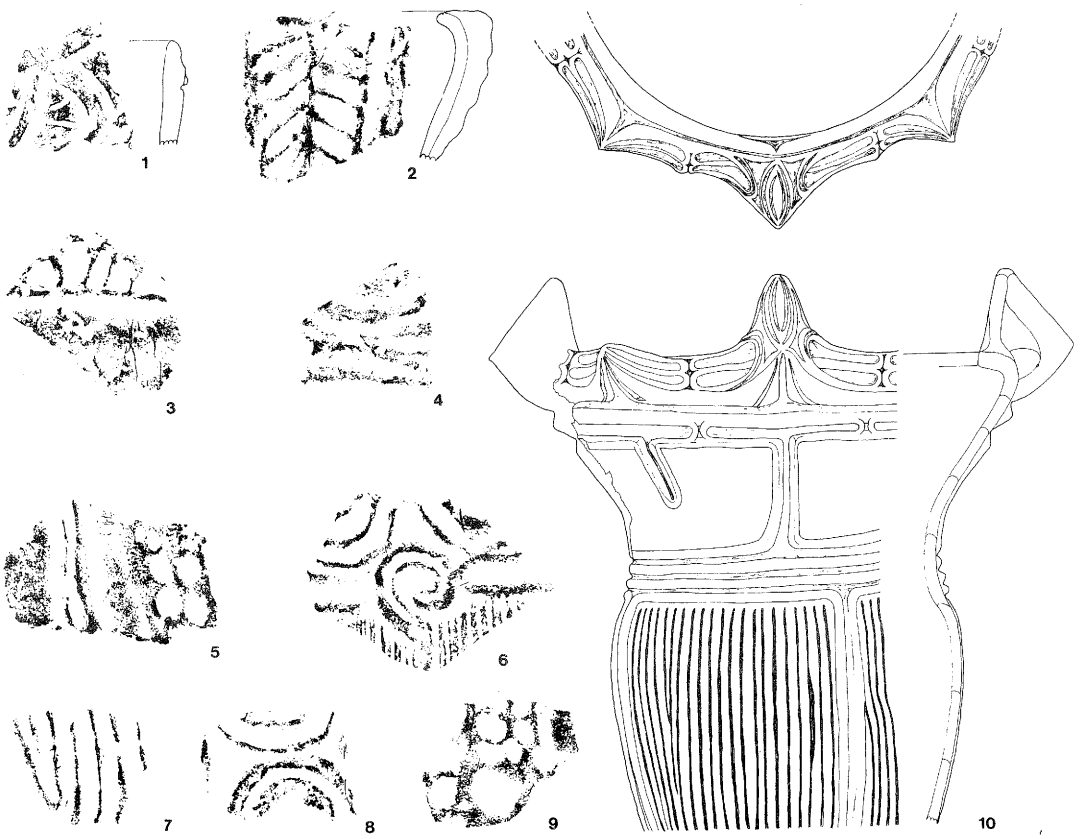
5～9は土壙69から出土したものである。深鉢形土器でやはり井戸尻Ⅲ～曽利Ⅰ式に比定される。

10は土壙72より出土したもので，半分ほどからの図上復元である。

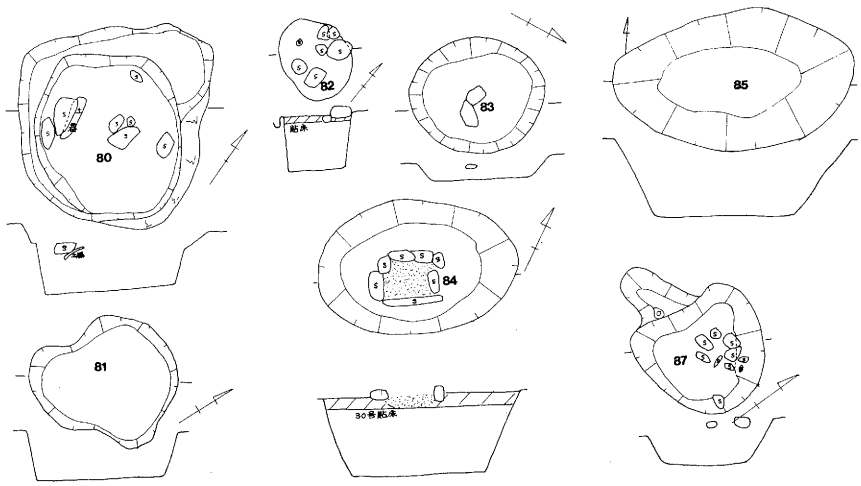
底部を欠く大形深鉢形土器で，鶏頭状の把手を4個と爪形状の把手を4個交互に配している。口縁から頸部にかけては粘土紐の横帯文やU字文によって構成される。胴部は二条を一組とする隆線によって縦位に区角され，内部は深い沈線が平行に縦走している。胎土には砂粒を含む。器面調整良く固く焼かれている。



第114図　土壙67～79　実測図（S＝1/80）



第115図　土壙67・69・72出土土器（10は1/6 他は1/3。1～4は67，5～9は69，10は72出土）

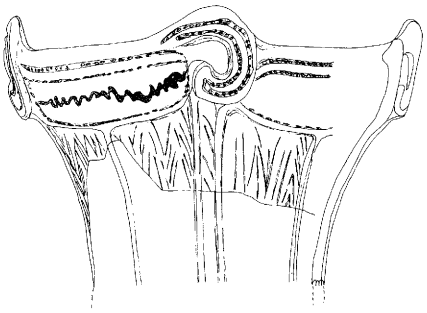


第116図 土壙80・81・82・83・84・85・87実測図（S＝1/80）

9）土坑80・81・82・83・84・85・87（第116，117図）

土壙83を除くとすべて住居址内より発見された土壙である。

土壙80は第33号住居址の南側部分に発見されたもので，西に土壙81がある。1.5×1.7mの隅丸方形を呈す。底は平底で深60cmである。覆土は黒色を呈し，片状になった木炭や細かい炭化物を多量に含んでおり一層である。竪穴上部には配石があり，西側には深鉢形土器（第117図）が横倒しになって発見されている。



第117図　土壙80出土土器（1/6）

第117図は口縁部から一部胴部にかけての深鉢形土器である。口縁は4つの山形状の波状口縁でその下部には馬蹄状の貼付文が巡され，その中は隆帯による方形区角文がみられる。内部は連続刺突文と横走する蛇行文で構成される。胴部は二本と一本の隆帯の懸垂文によって八分画され，間は綾杉状沈線文が埋める。曽利Ⅱ式に比定される。

土壙81はたらい状のもので1.5×1.4mの不整円形を呈している。覆土中には80同様片状の木炭や炭化物が多量に発見されている。

土壙82は第32号住居の南西壁ぎわに発見されたもので貼り床されている。床上には配石がある。大きさは径80cmで円形を呈す。深さは55cmである。

土壙83は第35号住居址と第38号住居址，特殊小竪穴に囲まれあり，プランは楕円形を呈す。大きさは1.6×1.3m，深さ20cmを測り浅いものである。

土壙84は第30号住居址の炉の下にあり，貼り床されている。2.1×1.4mの長楕円形で深さは80cmを測る

土壙85はやはり第30号住居址内に発見されたものである。2.5×1.4mの長楕円形で深さは80cm前後である。

土壙87は第28号住居址の南西部に検出されたもので，上部に配石を持っている。浅くたらい状を呈している。

80以外はまったく伴出遺物はない。

4　ロームマウンド（第112，118図）

今回の発掘で最近各地で発見されロームマウンドと呼ばれているものが5基発見されている。

1は第3，4号住居址の東に発見されたもので南西には土壙1・2がある。掘り込み部は楕円形で2.4×1.8mを測る。内部のローム部は2×1.3mあり外壁に沿っている。溝部分は北側がやや狭くなる。すり鉢状に掘られ，底部に一部ローム腐乱土があり，黒色土，ロームとなっている。2～5も層位関係はほぼ同様である。

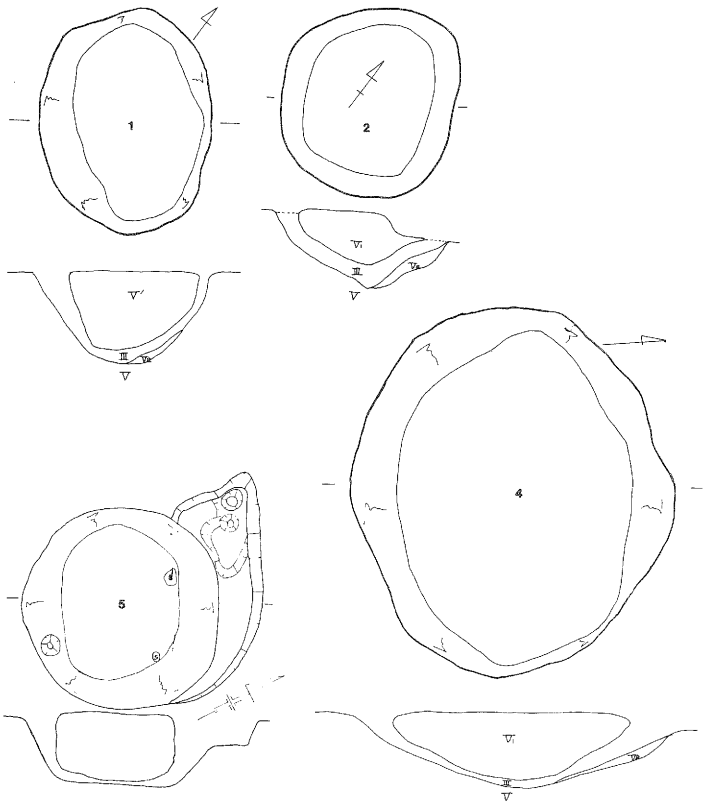
2は第12号住居址の北側にあり住居址を壊つている。北側部分は開田によって幾分か削られている。

掘り込み部は2×1.8m，ローム部は1.6×1.3mである。

3は土壙20～66が集中する中央部にみられ，土壙によって破壊されている。掘り込み部は3.2×2.4m，ローム部は推定2.4×1.6mと思われる。

4は最も大きなもので，第25号住居址西側3mに発見されたものである。掘り込み部は3.9×3.4m，マウンド部は3.5.×2.4mを測る。東側溝部分が狭くなっている。

5は第40号住居址の西側を壊ってつくられているものである。円形に近く掘り込み部は2.1×2.0m，マウンド部は1.6×1.2mで楕円形を呈している。



第118図　ロームマウンド1・2・4・5実測図（S＝1/80）

さてこれらロームマウンドの時期であるが，共伴遺物がまったくないためはっきりしない。しかしながら今回の発掘によって検出された住居址等は，すべて縄文時代中期中葉から後葉にかけてのものであり，遺構より出土した遺物も同様で，他時期のものはないため同時期のものと考えたい。

第4節　石器

今回の発掘によって得られた石器及び剥片の量はぼう大なものである。限られた予算と日数の中では十分な報告ができないことを最初におわびしておきたい。石器全点の計測も行ってあるが割愛しなくてはならず，非常に残念である。

今回の石器の分類にあたっては，当調査の一年前に実施した南原遺跡[※1]の方法に依っている。

※1　「南原遺跡」駒ヶ根市教育委員会－昭和52年　南原遺跡は当遺跡の東方段丘下にあり，縄文中期中葉の時代に属し石器製作址の性格を持つ遺跡である。

図表1　　住居址別石器出土表

(　)内は破損品・加工中のものを示す

住居址	形態 層位	打製石斧	磨製石斧				大形粗製石匙	小形石匙	石錘	敲打器					石皿	磨石	凹石	磨き石	石棒	礫核石器	砥石	ハンマー	石核			計	剥片
			定角	蛤刃	乳棒	計				a	b	c	計														
1	床面	5(2)					1		3	2(1)	3(1)		5(2)	17				7						7	45(4)	
	フク土	10(3)					5(2)			1	2(1)		3(1)	24				13						10	65(6)	
	小計	15(5)					6(2)		3	3(1)	5(2)		8(3)	41				20						17	110(10)	54
2	床面	4(2)								1(1)			1(1)	5		2		2						1	15(4)	
	フク土	10(3)	2		1(1)	3(1)	2(1)		5	1	2(2)		3(2)	7		1		13						6	51(7)	
	小計	14(5)	2		1(1)	3(1)	2(1)		5	2(1)	2(2)		4(3)	12		3		15					1	7	66(11)	36
3	床面	16(6)			2(1)	2(1)	1		3	2	2	1	5	6			1	5					4	9	52(7)	
	フク土	10(6)					3		5	1	3	1(1)	5(1)	7				3			1			7	41(7)	
	小計	26(12)			2(1)	2(1)	4		8	3	5	2(1)	10(1)	13			1	8			1		4	16	93(14)	32
4	床面	12(4)	1(1)	2(1)	1(1)	4(3)	6(5)		4	1	1(1)		4(1)	8				15		1	1		5	6	66(13)	
	フク土	11(8)			1(1)	1(1)	7(6)		3	1	4(1)		5(1)	14				19		1			3	2	66(16)	
	小計	23(12)	1(1)	2(1)	2(2)	5(4)	13(11)		7	2	7(2)		9(2)	22				34		2	1		8	8	132(29)	78
5	床面										1		1			1		1							3	
	フク土	8(4)					1(1)				3		3		1			2						1	17(5)	
	小計	8(4)					1(1)				4		4		1	1		3						1	20(5)	17
6	床面	2(1)							1	1	1		2	2	1(1)	1			1					2	12(2)	
	フク土	2(1)								2(1)			2(1)	3				3							10(2)	
	小計	4(2)							1	3(1)	1		4(1)	5	1(1)	1		3	1					2	22(4)	17
8	床面	9(8)								2			2	6		2	1	12		2			1	6	41(8)	
	フク土	2(2)												8				5		1					16(2)	
	小計	11(10)								2			2	14		2	1	17		3			1	6	57(10)	34
10	床面	2(2)												1				1	1				1	1	17(2)	
	フク土																									
	小計	2(2)												1				1	1				1	1	7(2)	3
11	床面	9(6)	2	2		4	1		1		6(2)			14	1	1		13						6	56(8)	
	フク土	5(3)					1		1		5(1)			9				7						3	31(4)	
	小計	14(9)	2	2		4	2		2		11(3)			23	1	1		20						9	87(12)	43

住居址	形態 層位	打製石斧	磨製石斧				大形粗製石匙	小形石匙	石錘	敲打器					石皿	磨石	凹石	磨き石	石棒	礫核石器	砥石	ハンマー	石核			計	剝片
			定角		乳棒	計				a	b	c	計														
	床面	4(3)	1(1)	1(1)		2(2)	9(5)			2	1		3	1				9					1		4	24(5)	
12	フク土	4(3)	1			1	21(10)				1		1	9		1		10					3		9	40(3)	
	小計	8(6)	2(1)	1(1)		3(2)	30(15)			2	2		4	10		1		19					4		13	64(8)	41
	床面	8(7)		1(1)		1(1)			1					8								1			2	21(8)	
13	フク土	7(3)	2(2)			2(2)								10											3	22(5)	
	小計	15(10)	2(2)	1(1)		3(3)			1					18								1			5	43(13)	28
	床面	13(8)	2(1)	1(1)	2(2)	5(4)	6(3)		2	2	3(1)		5(1)	27	2	1		17			1		3		9	91(16)	
14	フク土	21(14)	3(2)			3(2)	3(2)		9	2(2)	4(1)		6(3)	30		2		20							4	98(21)	
	小計	34(22)	5(3)	1(1)	2(2)	8(6)	9(5)		11	4(2)	7(2)		11(4)	57	2	3		37			1		3		13	189(37)	84
	床面	1(1)			1	1	3(1)			1	1		2	3		1		2		1					1	15(2)	
15	フク土	2								1	1		2	4				1		1			1		2	13(0)	
	小計	3(1)			1	1	3(1)			2	2		4	7		1		3		2			1		3	28(2)	31
	床面	1(1)	2(1)			2(1)	2							15				3	1(1)						1	25(3)	
16	フク土	15(12)					1		1	2(2)	1		3(2)	6									2		4	32(14)	
	小計	16(13)	2(1)			2(1)	3		1	2(2)	1		3(2)	21				3	1(1)				2		5	57(17)	44
	床面	3					4		2					1											1	11	
17	フク土																										
	小計	3					4		2					1											1	11	16
	床面	6(6)	2		1	3	2		1	5	6(1)		11(1)	7			1	7			1		3		3	45(7)	
18	フク土																										
	小計	6(6)	2		1	3	2		1	5	6(1)		11(1)	7			1	7			1		3		3	45(7)	35
	床面	3(2)	1(1)			1(1)	1		2					34		3(1)		5							7	56(14)	
19	フク土	2(1)					2		1	2(1)	2	2	6(1)	13		2		5							6	37(2)	
	小計	5(3)	1(1)			1(1)	3		3	2(1)	2	2	6(1)	47		5(1)		10							13	93(16)	47
	床面	10(6)			1(1)	1(1)	5(3)		6	1	1		2	9		1		10							6	50(10)	
21	フク土																										
	小計	10(6)			1(1)	1(1)	5(3)		6	1	1		2	9		1		10							6	50(10)	26
	床面															4											
23	フク土	5(4)					3		4	3	3		6	2				6							1	28(4)	
	小計	5(4)					3		4	3	3		6	2		4		6							1	28(4)	20

住居址	形態 / 層位	打製石斧	磨製石斧				大形粗製石匙	小形石匙	石錘	敲打器				特殊打敲器	石皿	磨石	凹石	磨き石	石棒	礫石器	砥石	ハンマー	石核	搔削器及び	横刃形石器	計	剝片
			定角	蛤刃	乳棒	計				a	b	c	計														
25	床面	15(11)	2			2	5		2	3(2)	4(2)		7(4)	10		4	1	7			4		2		2	61(15)	
	フク土	7(3)		1(1)		1(1)	2		3	2		1	3	6				6							3	31(4)	
	小計	22(14)	2	1(1)		3(1)	7		5	5(2)	4(2)	1	10(4)	16		4	1	13			4		2		5	92(19)	82
26	床面	9(6)	1			1				5(1)	5		10(1)	15	1			5					6		3	50(7)	
	フク土	3(2)																								3(2)	
	小計	12(8)	1			1				5(1)	5		10(1)	15	1			5					6		3	53(9)	41
27	床面	8(4)	2(1)			2(1)	1		6	3		1(1)	4(1)	3		1		4					1	2	1	33(6)	
	フク土	9(4)	1	1(1)		2(1)	1		3	3(2)	1(1)		4(3)	10		1		4					3		1	38(8)	
	小計	17(8)	3(1)	1(1)		4(2)	2		9	6(2)	1(1)	1(1)	8(4)	13		2		8					4	2	2	71(14)	61
30	床面	2(1)	1(1)	1(1)		2(2)				1	1		2	2				6								14(3)	
	フク土	2(1)								1(1)	1		2(1)					3								7(2)	
	小計	4(2)	1(1)	1(1)		2(2)				2(1)	2		4(1)	2				9								21(5)	16
31	床面	7(1)		2(1)	1(1)	3(2)			3	3	5	3	11	6				8					3	2	5	48(3)	
	フク土	12(7)					3		6	5	4		9	2				10							7	49(7)	
	小計	19(8)		2(1)	1(1)	3(2)	3		9	8	9	3	20	8				18					3	2	12	97(10)	95
32	床面														2										1	3	
	フク土	7(3)	1(1)			1(1)	1			2	1		3	6												18(4)	
	小計	7(3)	1(1)			1(1)	1			2	1		3	6	2										1	21(4)	16
33	床面	9(2)					4(1)		1	2(1)	1		3(1)	2		1									5	25(4)	
	フク土																										
	小計	9(2)					4(1)		1	2(1)	1		3(1)	2		1									5	25(4)	23
34	床面	9(4)					1		1(1)	2				2	1	3		2					1		2	22(5)	
	フク土																										
	小計	9(4)					1		1(1)	2				2	1	3		2					1		2	22(5)	23
35	床面	1(1)					1								1	1										4(1)	
	フク土																										
	小計	1(1)					1								1	1										4(1)	2
36	床面	11(8)	1	1	2(2)	4(2)			3		2		2	6		3	1	4					3	2	6	45(10)	
	フク土																										
	小計	11(8)	1	1	2(2)	4(2)			3		2		2	6		3	1	4					3	2	6	45(10)	39

住居址	形態 / 層位	打製石斧	磨製石斧				大形粗製石匙	小形石匙	石錘	敲打器				特殊打敲器	石皿	磨石	凹石	磨き石	石棒	礫核石器	砥石	ハンマー	石核	掻削器及器	横刃石形器	計	剥片
			定角	蛤刃	乳棒	計				a	b	c	計														
37	床面	14(6)					8(2)	1	6	1	6		7	8	2	2	1	6				1(1)	5		12	73(9)	
	フク土																										
	小計	14(6)					8(2)	1	6	1	6		7	8	2	2	1	6				1(1)	5		12	73(9)	42
40	床面	1(1)													1	1									1	4(1)	
	フク土	6(5)												4		1									1	12(5)	
	小計	7(6)												4	1	2									2	16(6)	24
41	床面	10(7)		1(1)	2	3(1)			1	2(1)	2	2	6(1)			2			1				1		3	27(9)	
	フク土	1																								1	
	小計	11(7)		1(1)	2	3(1)			1	2(1)	2	2	6(1)			2			1				1		3	28(9)	34
42	床面	4(2)		1(1)		1(1)	4		1	3	4		7													17(3)	
	フク土																										
	小計	4(2)		1(1)		1(1)	4		1	3	4		7													17(3)	37
43	床面	4(2)					2		2					10		1		3					1		2	25(2)	
	フク土	11(8)					1		2	2(1)	6(1)		8(2)	6				4							4	36(10)	
	小計	15(10)					3		4	2(1)	6(1)		8(2)	16		1		7					1		6	61(12)	46
44	床面	6	1			1	1			6	1		7	2		1		1					1		2	22	
	フク土																										
	小計	6	1			1	1			6	1		7	2		1		1					1		2	22	22
45	床面	17(11)					8	1		2	1		3	7	1			7					3		3	50(11)	
	フク土	3(2)					1			1	1		2	5									1		2	14(2)	
	小計	20(13)					9	1		3	2		5	12	1			7					4		5	64(13)	52
46	床面																								1	1	
	フク土																										
	小計																								1	1	4
47	床面	1							2		2		2	2											2	9	
	フク土																										
	小計	1							2		2		2	2											2	9	25
48	床面	6(4)					2			2			2	3				4								17(4)	
	フク土	10(6)	2			2				2			2	1				1							2	18(6)	
	小計	16(10)	2			2	2			4			4	4				5							2	35(10)	26

住居址	層位	形態	打製石斧	磨製石斧				大形粗製石匙	小形石匙	石錘	敲打器				特殊敲打器	石皿	磨石	凹石	磨き石	石棒	礫核石器	砥石	ハンマー	石核	掻削器及器	横刃石形器	計	剥片
				定角	蛤刃	乳棒	計				a	b	c	計														
49	床面		1(1)								1	2		3		1		2								7(1)	
	フク土		19(12)			1	1	1		5	8(4)	3		11(4)	15	2	1	8		1			4		3	71(16)	
	小計		20(13)			1	1	1		5	9(4)	5		14(4)	15	3	1	10		1			4		3	78(17)	94
50	床面		7(4)					1		2	3	1		4	2	1		8							1	18(4)	
	フク土																	3									
	小計		7(4)					1		2	3	1		4	2	1		11							1	18(4)	17
51	床面		17(12)					5(2)		1	9			9	10	1	1	1							1	53(14)	
	フク土		10(6)	1(1)			1(1)			4	2			2	5										3	28(7)	
	小計		27(18)	1(1)			1(1)	5(2)		5	11			11	15	1	1	1							4	81(21)	6
52	床面		3							1	2	2		4	3	1	1	6								14	
	フク土																										
	小計		3							1	2	2		4	3	1	1	6								14	8
53	床面		15(9)	2(2)			2(2)	3(3)		3	5(2)	1		6(2)	13	1	3			1					6	59(16)	
	フク土		6(4)								3(3)			3(3)	2										3	14(7)	
	小計		21(13)	2(2)			2(2)	3(3)		3	8(5)	1		9(5)	15	1	3			1					9	73(23)	
計	床面		285(162)	21(9)	13(8)	13(8)	47(25)	78(20)	2	61(1)	75(9)	68(8)	7(1)	150(19)	268	18(1)	38(1)	6	183	4(1)	5	7	2(1)	45	6	131	1336(231)	
	フク土		220(130)	13(6)	2(2)	3(2)	18(10)	40(12)	0	52	47(17)	48(8)	4(1)	99(26)	208	3	10	0	146	0	4	1	0	17	2	87	907(178)	
	小計		505(292)	34(15)	15(10)	16(10)	65(35)	118(32)	2	113(1)	122(26)	116(16)	11(2)	249(45)	476	21(1)	48(1)	6	329	4(1)	9	8	2(1)	62	8	218	2243(409)	1521

1　石器の組成（図表１）

本調査によって発見された石器は2243 点でその他剝片が1521 片ある。各住居址毎の出土量は図表１に示すとおりである。

石器中最も多いものは打製石斧で505点でこれは当時期における一般的特徴である。ついで特殊敲打器476点，磨き石 329点，敲打器249点，横刃形石器218点，大形粗製石匙118点，石錘 113点，磨製石斧65点，石核62点，磨石48点の順になっている。他は少なく石鏃はまったくみられない。この順位は若干の差異はあるが南原遺跡とほぼ同様な傾向である。ぼう大な剝片と原石さらの石器の組成をみると石器の製作が行われていたことがうかがえる。

赤穂地区の遺跡の中では，石皿・磨石は比較的多くみられている。南原遺跡同様，石鏃のないこと，小形石匙や掻器類の少ないことは注目していきたい。

住居毎，層位によって石器の比率にも変化がみられ今後時期毎の石器比率など問題である。

2　打製石斧（第 119･120図。図表 2～5）

打製石斧は図表１のとおり，石器中最も多く，505点出土している。10点の撥形以外は全て短冊形である。ここでは両者をあわせて説明することとする。

完形品は213 点で全点中42.2％を占めている。加工中のもの６点を除いた破損品 286点の破損状態をみると刃部欠損132点，頭部欠損 109点，胴部のみのもの45 点である。破損品を形状などから判断したものであるため若干の変動はあると考えられたい。

種別 / 破損状態 ＼ 石質	a 類					b 類					c 類					d 類					計
	硬砂	緑色	砂岩	その他	小計	硬砂	緑色	砂岩	その他	小計	硬砂	緑色	砂岩	その他	小計	硬砂	緑色	砂岩	その他	小計	
完形	9	13	4	0	**26**	77	26	15	2	**120**	15	5	2	0	**22**	27	10	6	2	**45**	**213**
頭欠	6	5	0	0	**11**	49	7	9	0	**65**	4	0	0	0	**4**	19	4	6	0	**29**	**109**
刃欠	3	11	3	0	**17**	42	6	3	1	**52**	13	5	0	0	**18**	27	9	9	0	**45**	**132**
胴のみ	0	0	0	0	**0**	11	7	4	0	**22**	1	2	0	0	**3**	15	2	3	0	**20**	**45**
計	**18**	**29**	**7**	**0**	**54**	**179**	**46**	**31**	**3**	**259**	**33**	**12**	**2**	**0**	**47**	**88**	**25**	**24**	**2**	**139**	**499**

図表２ 打製石斧分類・石質別破損状態表（加工中の６点は含まれていない。）

つぎに打製石斧を製作上の面から南原遺跡で試みたと同様礫表皮の具合から次のように４分類してみた。

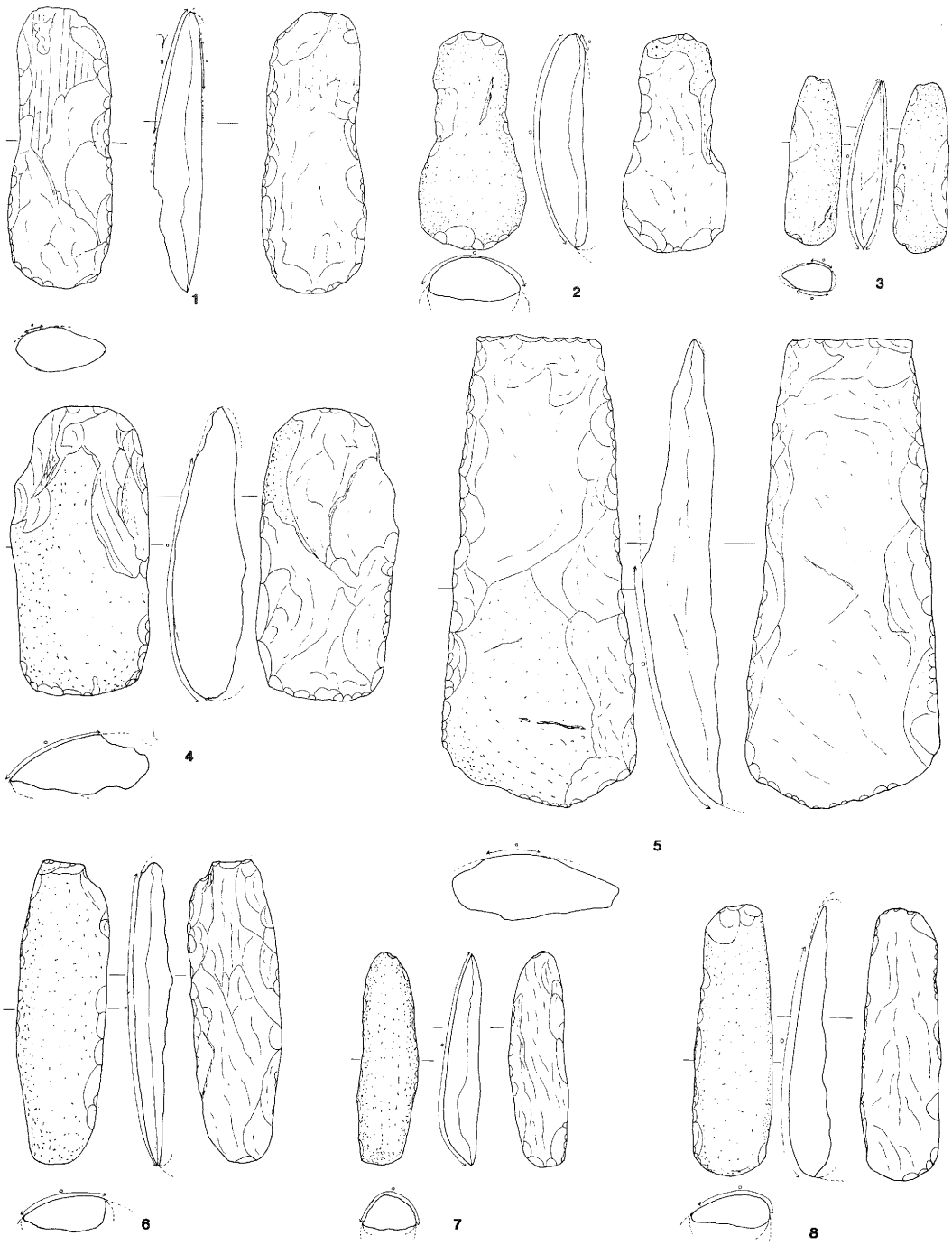
a 類－両面に礫表皮を残すもの（第119図－１～４）

b 類－片面に礫表皮を残すもの（第119図－５～８）

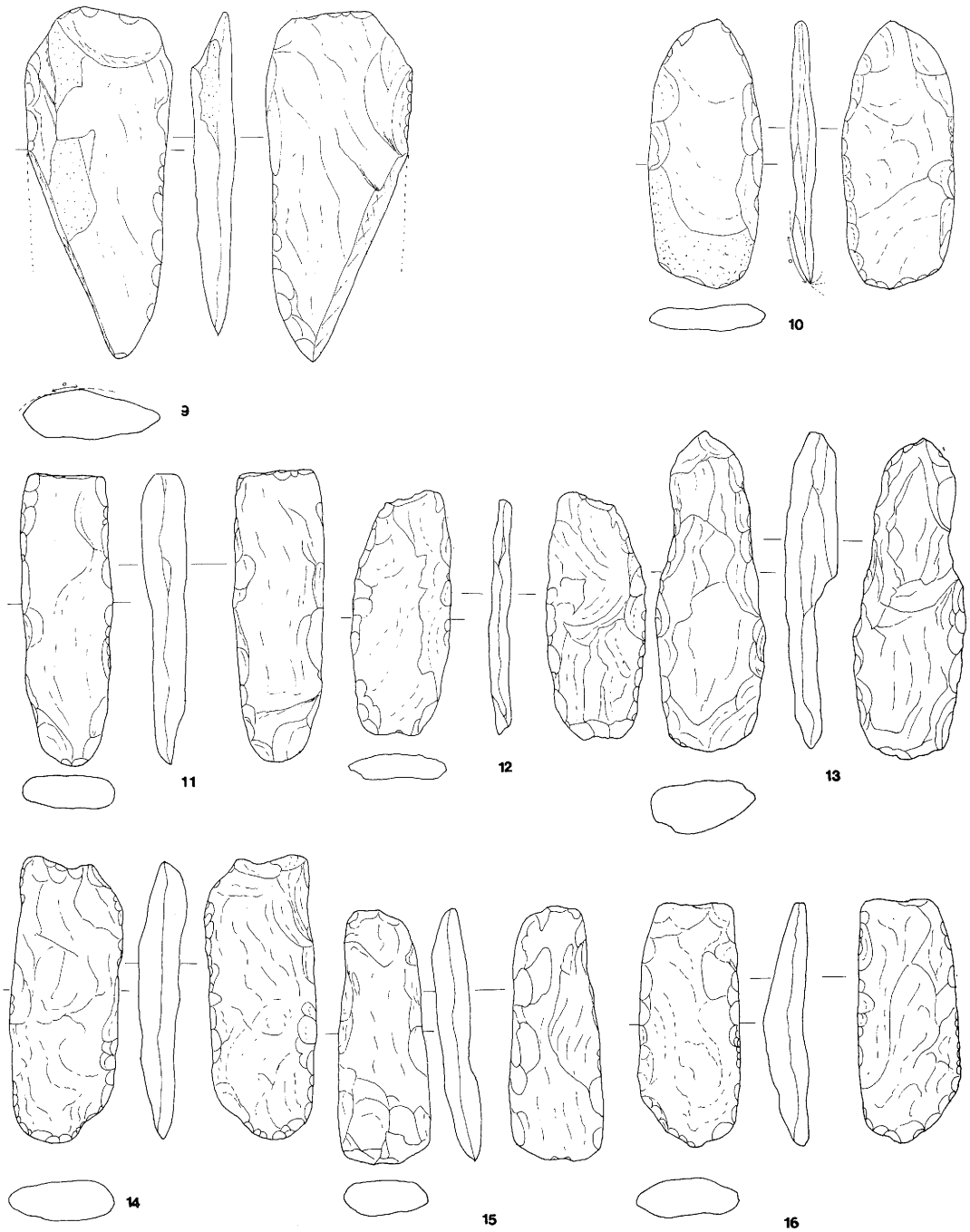
c 類－測面あるいは頭部及び刃部に礫表皮を残すもの（第120図－９・10）

d 類－まったく礫表皮をもたないもの（第120図－11～16）

これにもとずき，分類類・石質別の関係をみたものが図表２・３である。



第119図　打製石斧（a・b類）実測図（1/3）



第120図　打製石斧（a・d類）実測図（1/3）

分類 / 石質	a	b	c	d	
硬砂岩	5.7 33.3	56.3 69.1	10.4 70.2	27.6 63.3	63.7 (318)
緑色岩	25.9 53.7	41.1 17.7	10.7 25.6	22.3 18.0	22.5 (112)
砂岩	10.9 13.0	48.5 12.0	3.1 4.2	37.5 17.3	12.8 (64)
その他	0 0	60 1.2	0 0	40 1.4	1.0 (5)
	10.8 (54)	51.9 (25.9)	9.4 (47)	27.9 139	499

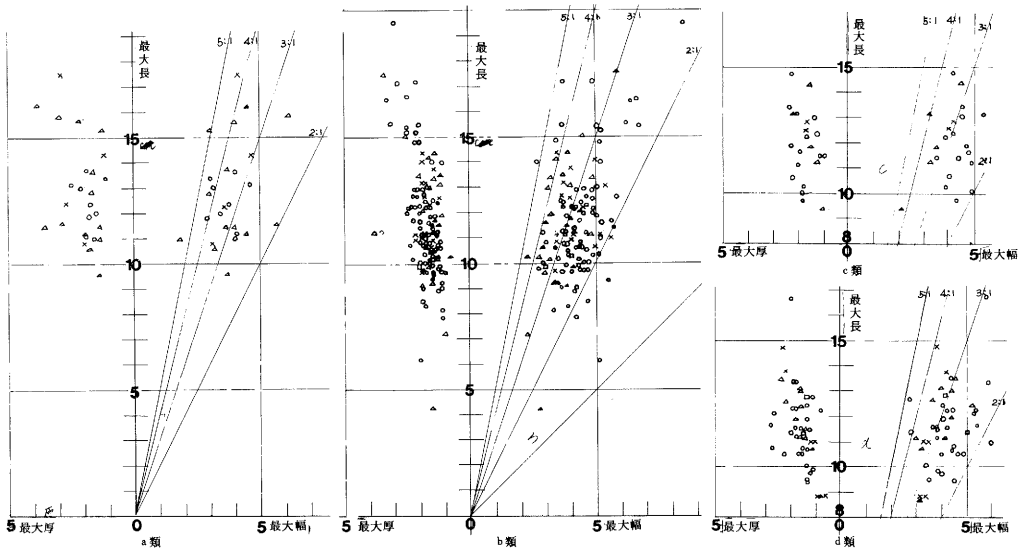
図表3　打製石斧分類・石質別比率表
（右上は石質総数・左下は分総数で割ったもの）

b類が最も多く259点，ついでd類が139点となり，a・c類はほぼ同数で少なくなっている。これは南原遺跡と同様である。つぎに石質であるが，硬砂岩が65％近くを占め，緑色岩類，砂岩その他の順である。しかしながら図表3にみるとおり，複雑な様相をみせている。

各分類における石器の素材などについては，南原遺跡において述べているので省くこととする。

つぎに打製石斧の形状についてみてみたい。図表は最大長に対する最大幅と最大厚を示すものである。

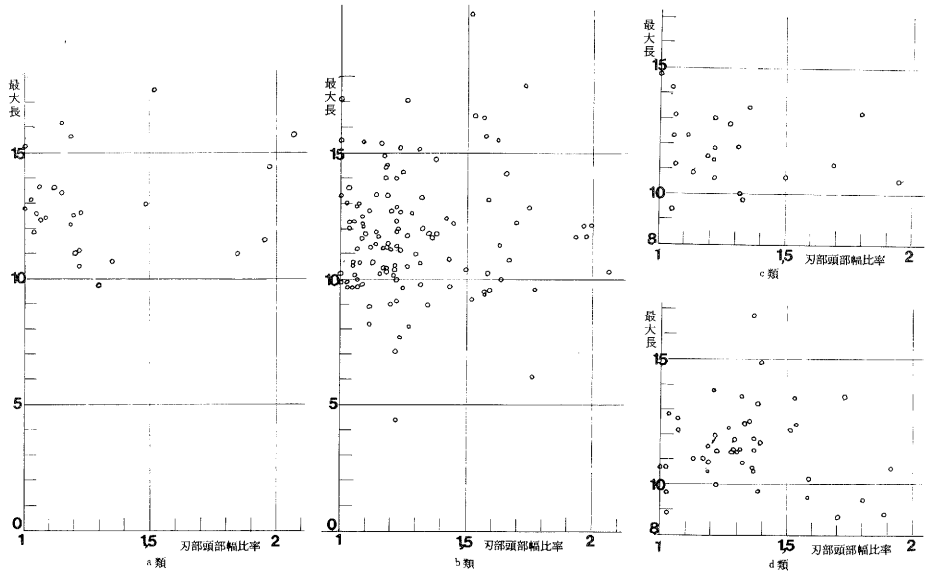
長さは9～16cmのものが大半である。b類は点数が多いためなのか素材のためなのかはっきりしないが，非常にばらつきがみられる。c・d類はほぼ一定の数値を示めしている。最大幅は大体3～6cmである。長さと幅との関係についてみると，一定して



図表4　分類別打製石斧の最長と最大幅・最大厚相関表（○は硬砂岩，△は緑色岩類，×は砂岩，□はその他，単位はcm）

いない。最大長に対する最大幅の関係は2～3：1を示すものが最も多く，ついで3～4：1のものとなっている。分類・石質による相違はあまりはっきりしていない。

厚さは1～2cmのものが多く，ついで2～3cmとなっている。最大長と最大厚との関係も一



図表5　分類別打製石斧の最長と刃部頭部幅比率相関表(横軸は刃部を頭部で割った比率)

定していない。しかしａ・ｂ類などにみられるように長さが15㎝を超すと厚みも増してくる傾向がみられる。

図表5は最大長と刃部頭部幅比率の相関図である。刃部頭を頭部幅で割った比率を横軸においてある。1～1.5の間に入るものが多い。長さとの関係ははっきりしないがｂ・ｃ・ｄ類においては短いものに比率の高いものがみられる。打製石斧の形態における撥形の基準を今回は表から1.9以上のものとしてある。南原遺跡においては2.0以上である。

3　磨製石斧（第121図）

磨製石斧は全部で65点発見されている。内訳は定角石斧（第121図－1.2）34点，蛤刃石斧(3～5）15点，乳棒状石斧（6～8）16点である。欠損品は定角では15点，蛤刃と乳棒状では10点ずつで半分以上を占めている。

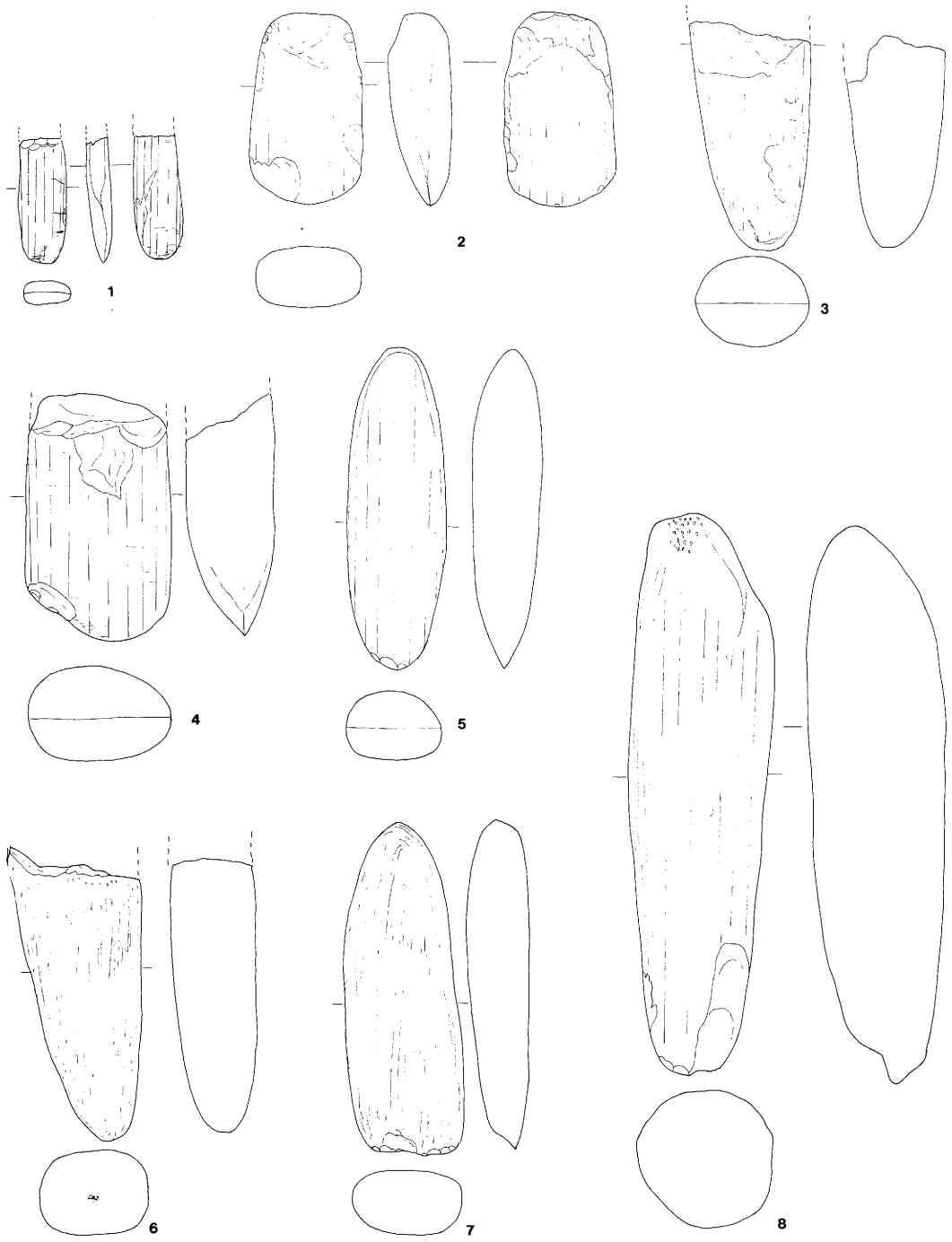
石質はすべて緑色岩類である。

乳棒状石斧は後述する敲打器に類似する機能を持つと思われる。

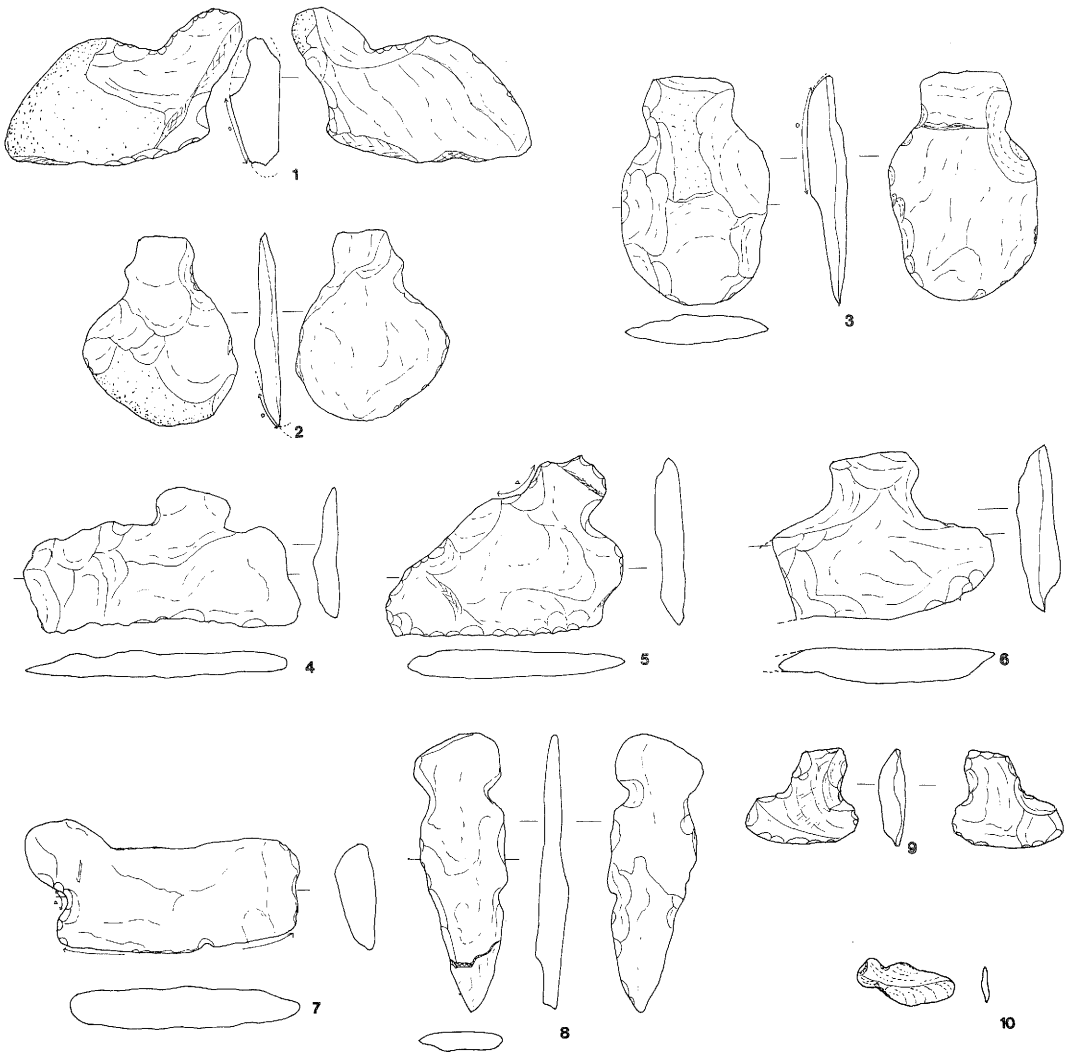
4　石　匙(第122図，図表6）

石匙は全部で120点出土している。小形の精製石匙は第122図－9・10に示す2点のみである。

石匙は縦形と横形とに分けることができる。なかには明確になし得ないものもある。また大形粗製石匙の縦形のなかには打製石斧と区別しにくいものもみられる。横形は多く88点で横形



第121図　磨製石斧実測図（1/3）



第122図　石匙実測図（1/3。1～8は大形粗製石匙，9・10は小形精製石匙。𝒴は磨滅を示す。）

は30点である。小形精製石匙はともに横形である。

大形粗製石匙について打製石斧同様礫表皮の残り具合から三分類してみた。

aは両面に自然面を残すもの（1）。bは片面のみに自然面を残すもの（2・3）。cはまったく自然面のみられないものである（5～10）。

図表6にみるとおり，a類は横形の一点のみである。b・c類は縦形においては同数，横形ではb類がわずか卓越している。

つぎに石質であるが，硬砂岩が両形あわせて80%を占めている。ついで砂岩となっている。

形態 / 分類 / 石質 / 残存状態	横形 a 完形	横形 a 破損	横形 b 完形	横形 b 破損	横形 c 完形	横形 c 破損	横形 小計	縦形 a 完形	縦形 a 破損	縦形 b 完形	縦形 b 破損	縦形 c 完形	縦形 c 破損	縦形 小計	計
硬砂岩	1	0	31	8	18	11	69	0	0	11	3	6	6	26	95
緑色岩類	0	0	2	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1	1	3
砂岩	0	0	4	0	6	1	11	0	0	1	0	1	1	3	14
粘板岩	0	0	2	0	2	0	4	0	0	0	0	0	0	0	4
安山岩	0	0	0	1	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	2
計	1	0	39	9	27	12	88	0	0	12	3	7	8	30	118

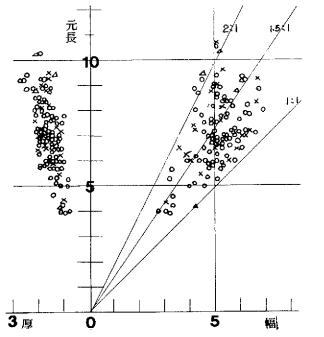
図表 6　大形粗製石匙分類表

5　石錘（第123図，図表 7，8）

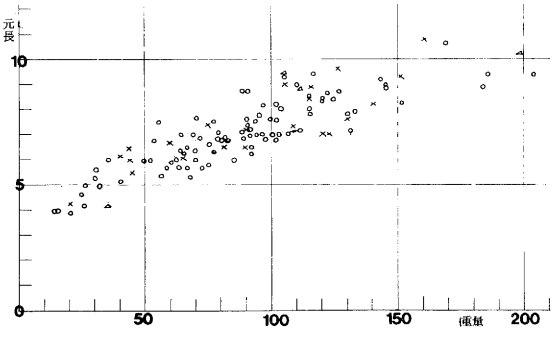
石錘は113点出土している。すべて礫石錘で切目石錘はない。扶入部が長軸にある縦形のみで横形のものはない。破損品は一点のみである。

石質は硬砂岩が圧倒的に多く86点を数え，砂岩22点，緑色岩類 4 点である。

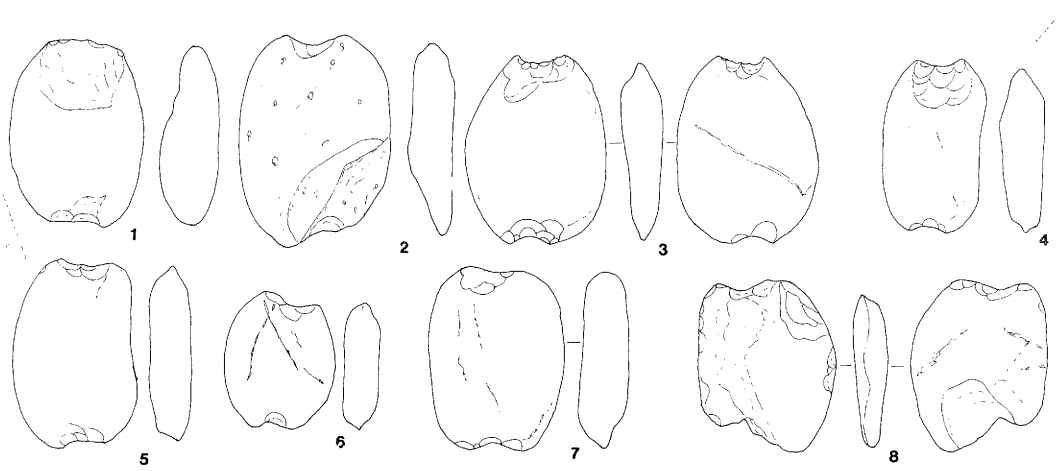
図表 7 より形状をみてみたい。原石の長さを想定した元長と幅との関係は 1 ～15:1に入るものが多く全体に円形に近いものである。長さの半分ほどの幅しか持たないスマートなものもいくらかみうけられる。元長は 5 ～10cmのものが普通である。幅は 4 ～ 6 cmのものに集中している。元長と幅との間には一定したものはない。幅は 1 ～ 2 cmのものがほとんどで 3 cmを超すものはない。長くなると厚みも増してくる傾向がうかがわれる。重量は図表 8 にみるとおり，15 g から205 g までと非常に分散している。



図表 7　石錘元長と幅と厚さの相関図
（○は硬砂岩，△は緑色岩，×は砂岩）



図表 8　石錘元長と重量相関図
（○は硬砂岩，△は緑色岩，×は砂岩）



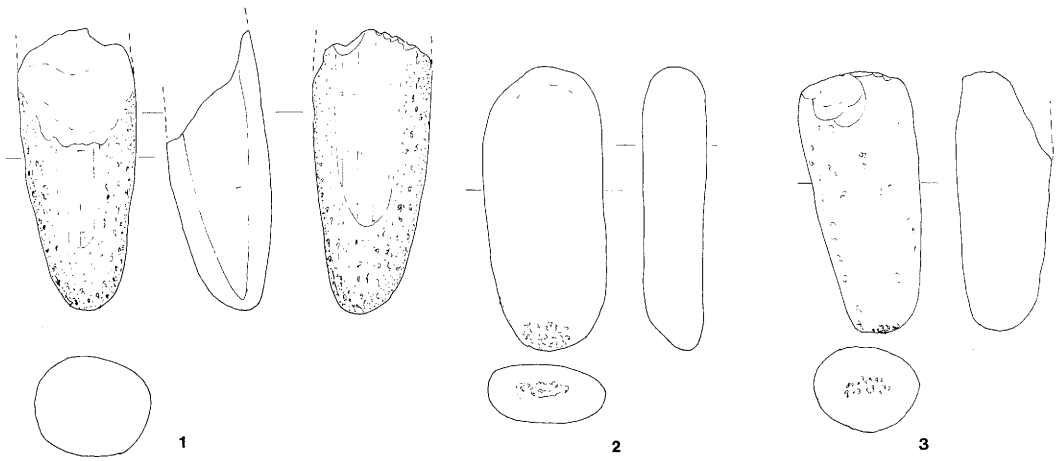
第123図　石錘実測図（1/3）

6　敲打器（第124～126図）

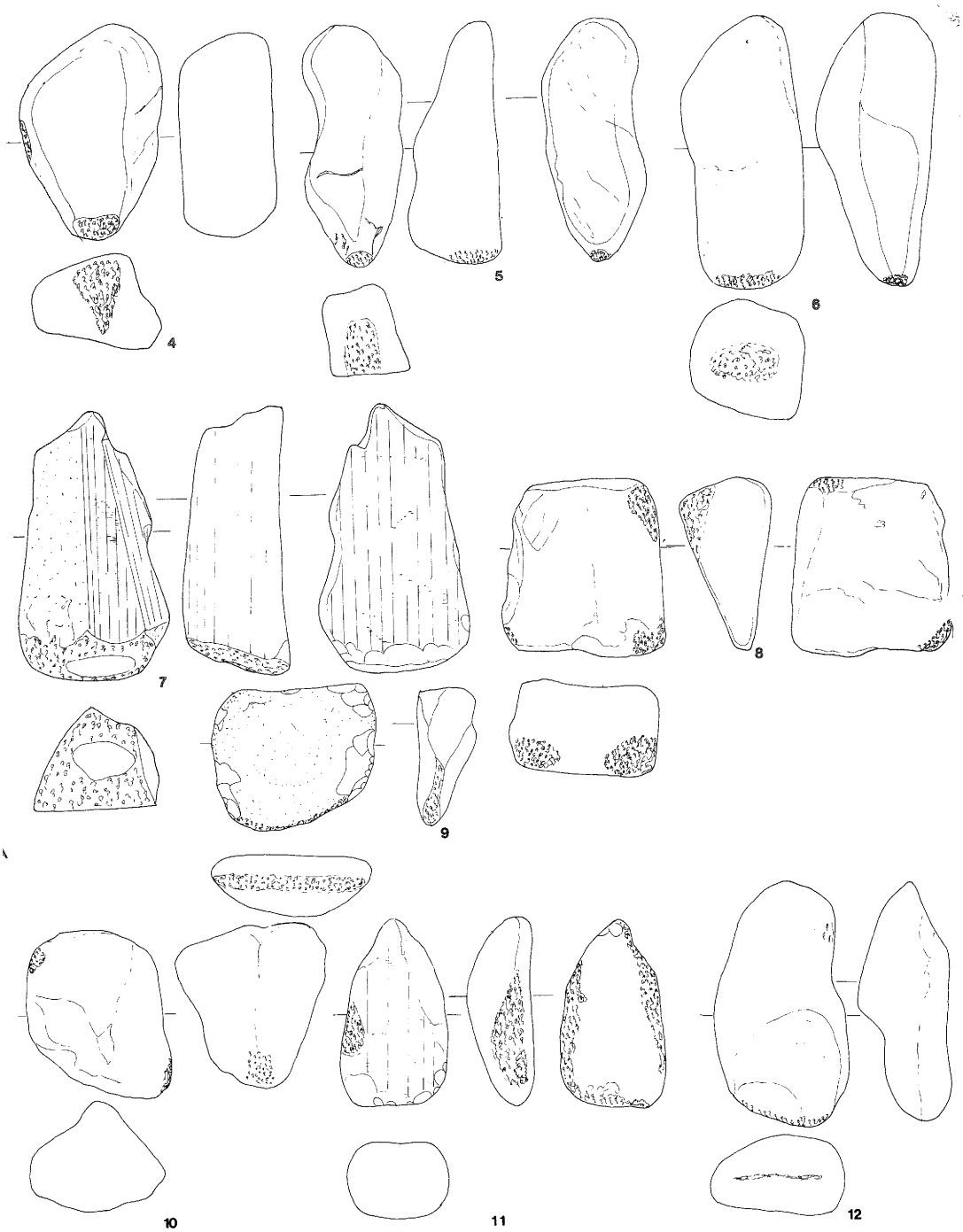
敲打器と呼ばれるものには様々なものがある。南原遺跡同様形態などから三分類する。

ａは細長い自然礫を用い，その一端あるいは両端を使用したもので，打撃痕・使用痕はｂ・ｃ類に比べて顕著でない。敲打器のうちでは最も多く発見され，122点を数える。石質は硬砂岩，砂岩，花崗岩，緑色岩などさまざまである。第122図がａ類で1には両面中央部に磨きがみられる。磨製乳棒状石斧に類似する。

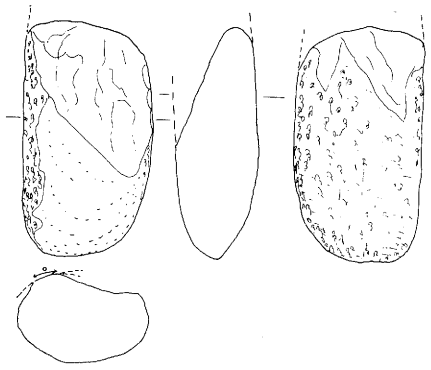
ｂは不定形の自然石の端部や測部に打撃痕の認められるもので多くは2～3箇所に打撃痕を持つ。第125図－7は磨きのみられるものである。



第124図　敲打器（ａ類）実測図（1/3）



第125図　敲打器（b類）実測図（1/3）



第126図　敲打器（c類）実測図（1/3）

本類は116点出土しており，石質はすべて緑色岩類である。

c は細長い自然礫の測辺部に打撃痕の認められるものである。敲打器中では11点と少ない。石質は b 類同様緑色岩類のみである。

a 類は従来敲石とされていたものである。b・c 類は南原遺跡において注目されたもので，類例はあまり多くない。これらの機能については南原遺跡において詳しく述べているが，石器加工具と考えたい。c 類はハンマーと同様の使用方法であろう。

7　特殊敲打器（第127図，図表9）

小形で使用痕・打撃痕のあるものである。断面三角形あるいは台形状の自然石を利用したものである。本石器も他遺跡にあまり類例はなく，南原遺跡において注目されたものである。形態から4分類してみた。

a 類　自然石を利用したもの（1～5）

b 類　平坦面あるいは両面を磨いてあるもの（6～10）

c 類　片面が割れているもの（11～15）

d 類　片面割れた部分に磨きのみられるもの（16）

分類／石質	a	b	c	d	計
硬砂岩	21	155	29	3	208
緑色岩	16	82	6	0	104
砂　岩	20	93	20	2	135
花崗岩	6	14	2	0	22
その他	0	5	2	0	7
計	63	349	59	5	476

図表9特殊敲打器分類表

石器中打製石斧についで多く476点出土している。図表9にみるとおり b 類が最も多く，a・c 類はほとんど同数，d 類は5点と少ない。

石質は硬砂岩が349点と73%ほどを占め，ついで砂岩135点，緑色岩類104点，花崗岩22点，その他7である。分類に石質の相違はみられない。

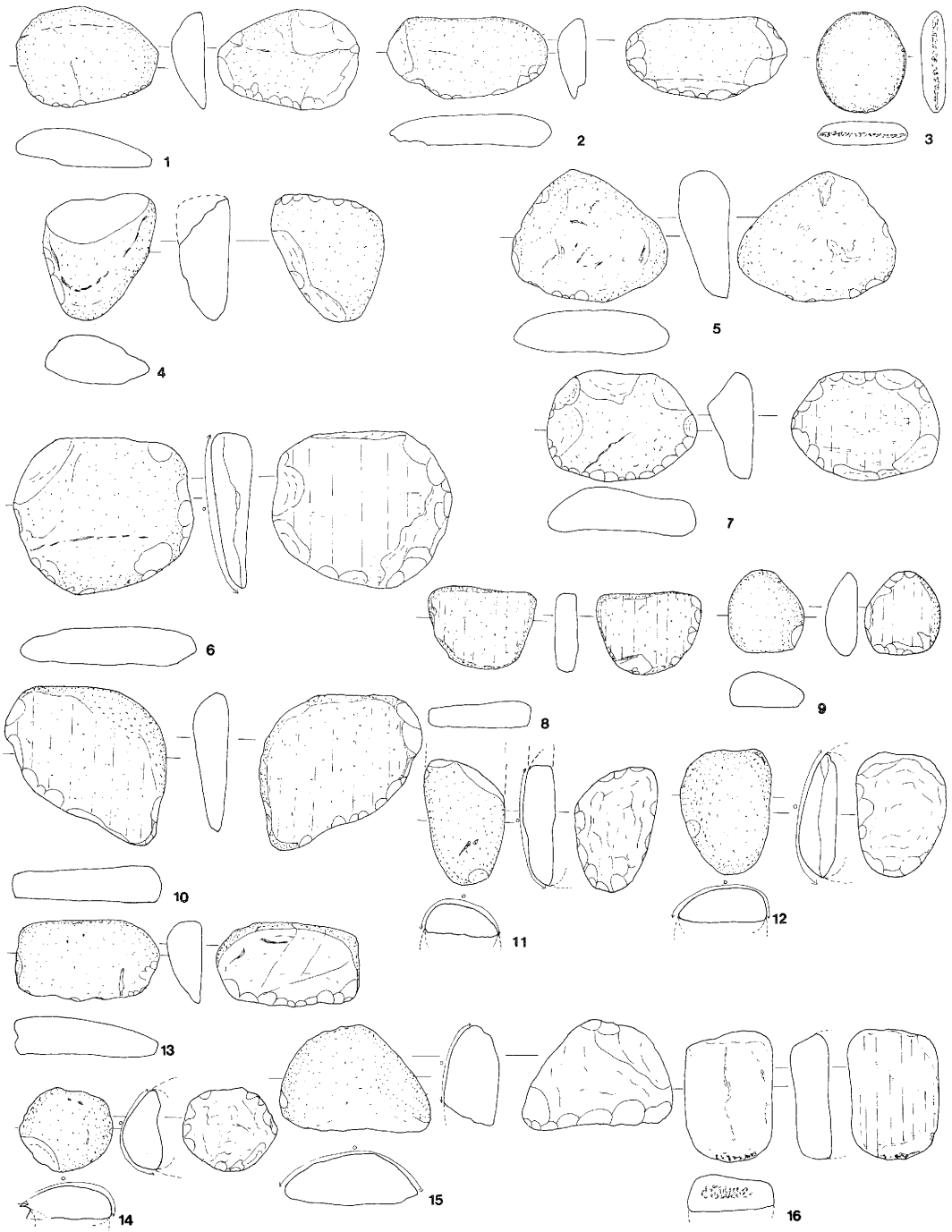
c 類は使用中に破損したことも考えなくてはならない。

手元にある限られた文献をみる限りこの種の石器はない。種類によって機能に差はないと思われるが，磨きのあるものはそれ自体にも機能があると考えられる。

南原遺跡においては，その特殊性から石器の加工調整具の一種としたが，今回も同様に考えたい。

8　石皿

石皿は21点出土している。石質は花崗岩が多く砂岩もわずかにみられる。赤穂地区の幾つかの同時代の遺跡に比べて点数が多く注目したい。また住居址に伏さって出土した例や炉石に使



第127図　特殊敲打器実測図（1/3）

用した例など注目される。

9　磨石

磨石は48点出土している。住居址によって非常にばらつきがみられる。48点のうち破損品は1点のみである。石質は花崗岩が最も多く35点，ついで砂岩10点，硬砂岩3点である。

10　凹石

凹石の出土は6点と少ない。この傾向は赤穂地区では良くみられ，地域性であろうか。

11　磨き石（第128図，図表10）

従来磨石の一種とされていたものを別に取り出して磨き石とし4種にわけて区別した。

a類－総体に小柄な自然石の平担面に磨きがみられるもの

b類－自然石の平担でない一面を磨くもの

c類－大きな自然石の一部を磨くもの

d類－小さな自然石の全体を磨きあげるもの

総数は329点で石器中3番目に多い。図表10にみるとおりa類が152点と約半数を占めている。ついでd類の81点，c類50点，b類46点である。石質は硬砂岩が最も多く利用され，ついで砂岩，緑色岩類，花崗岩，その他の順である。石質による種類の制約はみられない。

各種の機能は定かでない。c類は平盤石皿の可能性が強い。

石質＼分類	a	b	c	d	計
硬砂岩	57	20	15	45	137
緑色岩	33	7	8	13	61
砂　岩	45	8	7	15	75
花崗岩	14	11	19	8	52
その他	3	0	1	0	4
計	152	46	50	81	329

図表10　磨き石分類表

12　石棒

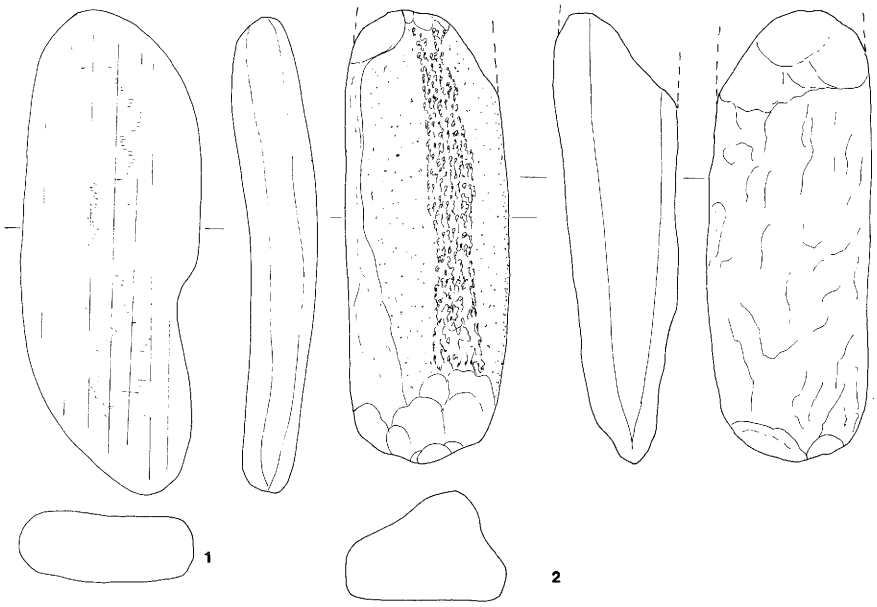
石棒は第6・10・16・41号住居址から出土した4点である。出土状態は各遺構のところで述べたとおりである。第6・41号住居址のものは自然石を若干磨いたもの。第10号住居址のものは細長い断面三角形の花崗岩に一部加工のみられるもの。第16号住居址出土のものは花崗岩製の無頭石棒である。炉の結め石に利用されていたもので，破損のため役に立たなくなったのであろうか。

13　石核石器

やや厚ぼったい平盤な自然礫の縁辺に打撃痕や調整痕のみられるものである。9点発見されている。石質はすべて硬砂岩である。これ自体石器の機能を持つのか，ある種の石器の加工途上なのかは不明であるが前者の可能性が強い。

14　砥石（第128図－1）

砥石は8点発見されている。石質は硬砂岩と砂岩である。



第128図　砥石・ハンマー実測図（1/3）

15　ハンマー（第128図－2）

石器加工用具として素材を作出するための大割り用ハンマーと思われるものが2点出土している。石質はともに緑色岩類である。

16　掻器及び削器

出土は少なく8点である。すべて黒耀石製で剥片の一部にリタッチを加えるものである。

17　横刃形石器と剥片

図表1にみるとおり1521 点という多量の剥片が出土している。ここでいう剥片とは硬砂岩や緑色岩類の剥片を示すものである。黒耀石やチャートの剥片はわずかであり含まれていないことを断っておく。南原遺跡において同様なことがみられ，石器群の組成と併せ打製石器の加工が行われたことを示すものとしたが，やはり当遺跡においても同様なことがいえる。

横刃形石器は剥片を利用するものであるため，南原遺跡同様剥片と同じく礫表皮の残り具合から5種類にわけてみた。

a類－片面全体に礫表皮の残るもの。一部に剥離のさいの打撃痕のみられるものもある。

b類－a類同様全面に礫表皮が残るが，一端ないし二端が切断または破損しているものである。この場合破損によるものか，石核状態がそうであったかは明瞭にしがたい。

c類－礫表皮面に大きな剥離痕のみられるもの。

	分類 / 石質	a	b	c	d	e	計
横刃形石器	硬砂岩	63	39	45	9	18	174
	緑色岩	10	4	8	1	4	27
	砂岩	4	2	4	0	2	12
	その他	1	0	2	0	2	5
	計	78	45	59	10	26	218
剥片		232	305	520	164	300	1521

図表11　横刃形石器・剥片分類表

d類－測辺部に自然面を残すものである。

e類－まったく自然面を残さないものである。

これを大別すると礫表皮を持つか持たないかの二つにできる。

図表11によると剥片中ではc類－d類，－e類，－a類，－d類の順になっている。これに対し横刃形石器はa類－c類－b類－e類－d類となり剥片の傾向とは異っていることがわかる。

剥片が多量に出土しない遺跡にあっても横刃形石器が多量に発見されることなどから南原遺跡の報文において横刃形石器はある程度意識して作出されたものであろうと述べておいたが，今回もその考えに変わりはない。　（以上　気賀沢進）

第Ⅳ章　　ま　と　め

今回の発掘調査の詳細はすでにふれてあるが，多くの問題点及び重要性を持った遺跡であることは間違いないところである。しかしながら種々の事情により十分な考察を加えることは不可能であるため，簡単に問題提起をしておくにとどめたい。第Ⅲ章においては今後の研究のために多くの頁数をさいてでき得る限りの資料報告をしたつもりである。これをもとにいずれの日か十分な考察を加えたいと念じている。

今回の発掘調査の最大の成果は集落全体が明らかとなったことである。県下はおろか伊那谷においても，丸山南遺跡をしのぐ大規模な集落址が発見されており，規模的には特別のものとは思われないが，住居址と土壙群，その他の遺構が発見されており，規模的には特別のものとは思われないが，住居址と土壙群，その他の遺構があますことなく確認されたことは今後の集落研究の上に果たす役割は大きなものがあると思われる。

今回確認された住居址は52軒である。その中には住居址の建て直し等の考えられる住居址があり，この台地に営まれた住居址は60軒近くあるものと考えられる。

住居址の時期別は次のとおりである。

藤内Ⅱ期　　1　（49）

井戸尻Ⅱ期　　8　（17，21，23，27，29，41，48，51）

　　1　（4）

井戸尻Ⅲ期　13　（1，2，3，15，18，19，25，26，30，31，37，43，53）
　　1　（46）
曾利Ⅰ期　9　（10，14，28，36，38，40，45，50，52）
曾利Ⅱ期　10　（5，6，8，12，13，16，32，33，34，44）
時期不明　―――　9，20，22，39，42，47，54（井Ⅲ以前）

藤内Ⅱ期に初まった集落は井戸尻Ⅲ期に非常に大規模なものとなり，曾利Ⅱ期で廃絶となっている。各期に先に示した数の家が同時に建てられたとは当然考えられないが，大方の集落の発展具合はある程度理解できるものと思われる。

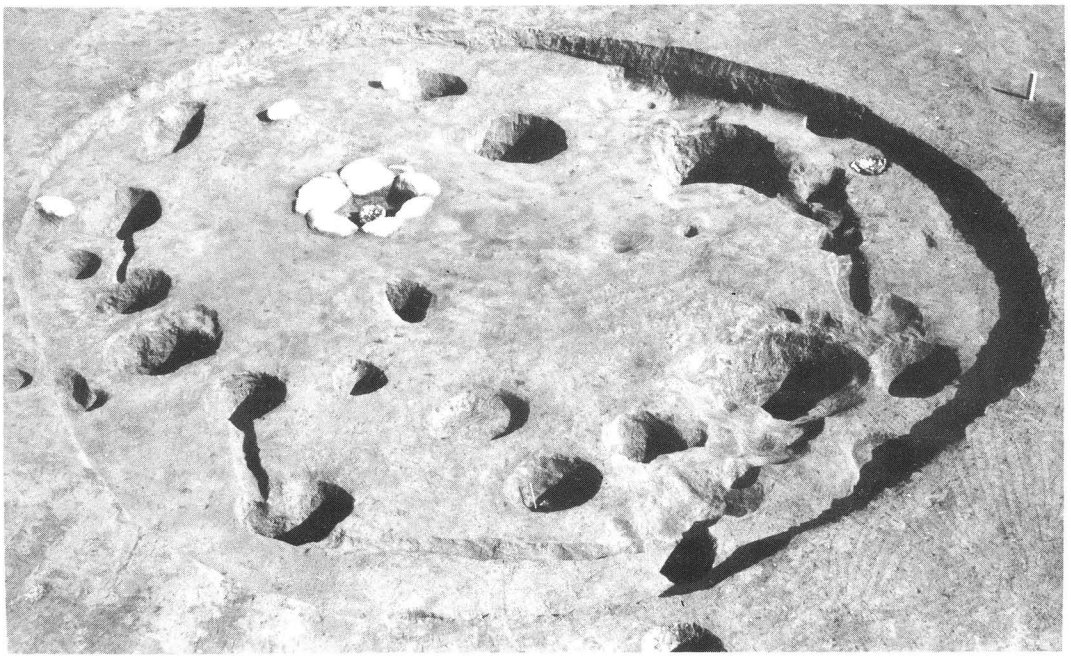
市内赤穂地区は曾利Ⅱ～Ⅲ期をもって遺跡が少なくなる傾向をみせており，丸山南遺跡の集落の廃絶が曾利Ⅱ期であることもうなづける所である。

つぎに土壙についてであるが，住居址または近くにあるもの，不定形のもので集中するもの，大きなもので単独してあるものの三つに分けることができる。住居址内のものに土器を伴うものが多いことは土壙の性格を物語るものであろうか。

単独の土器埋設址，炉形態など多くの問題を残しているが，今後の課題としておわりとする。

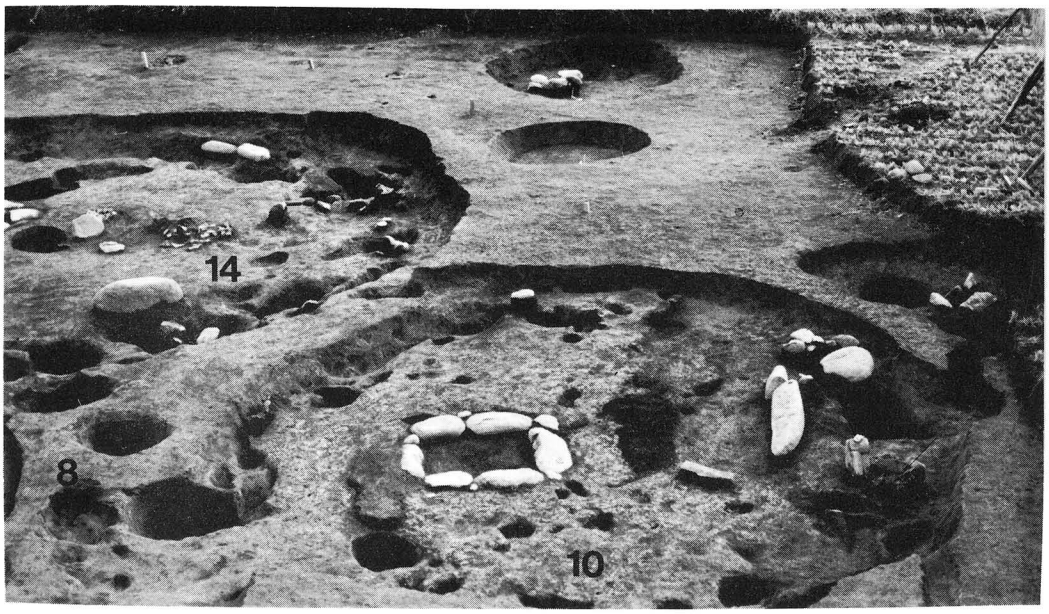
図　　版

図版１　　上は遺跡遠景　下は第１号住居址遺物出土状態



図版２　　上は第１号住居址　下は第２号住居址

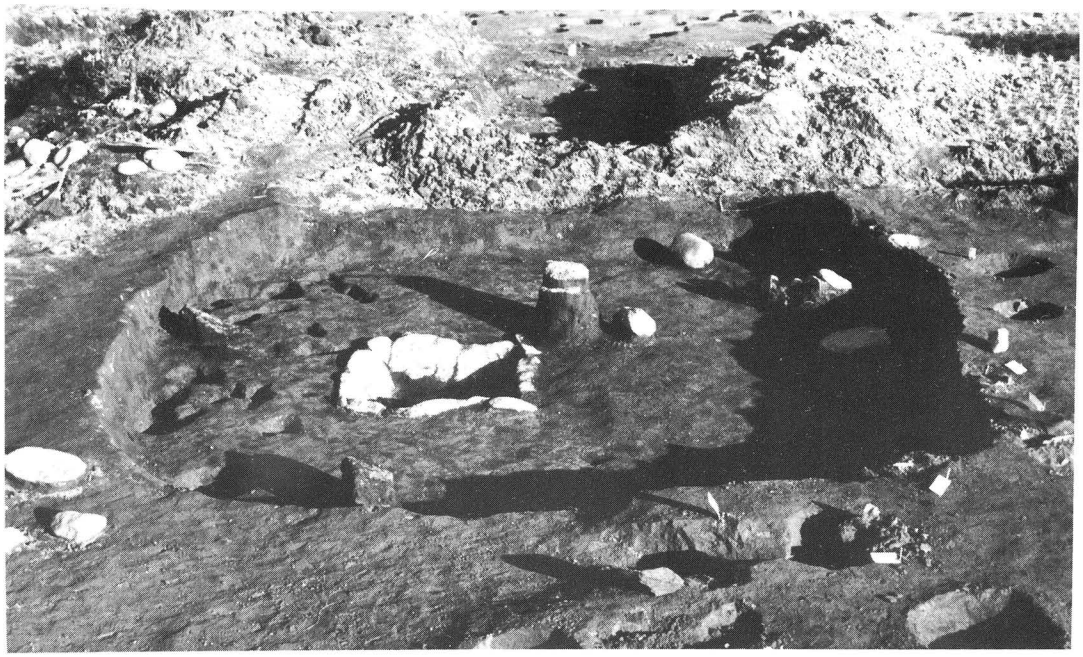
図版３　　上は第３～６号住居址　下は第３・４号住居址



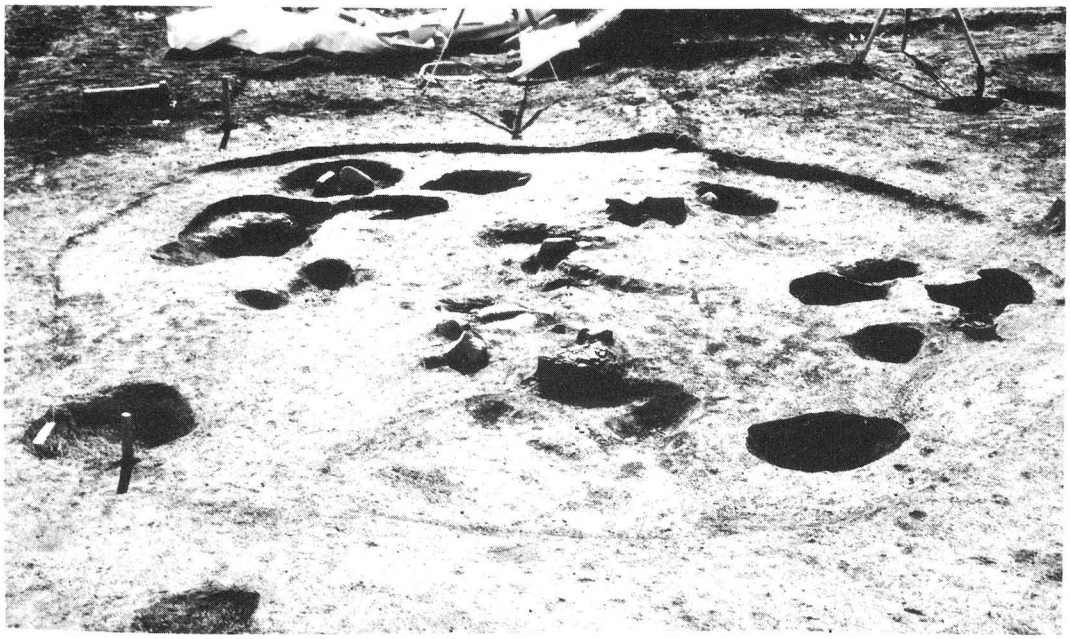
図版4　　上は第9～15号住居址　下は第8・10・14号住居址

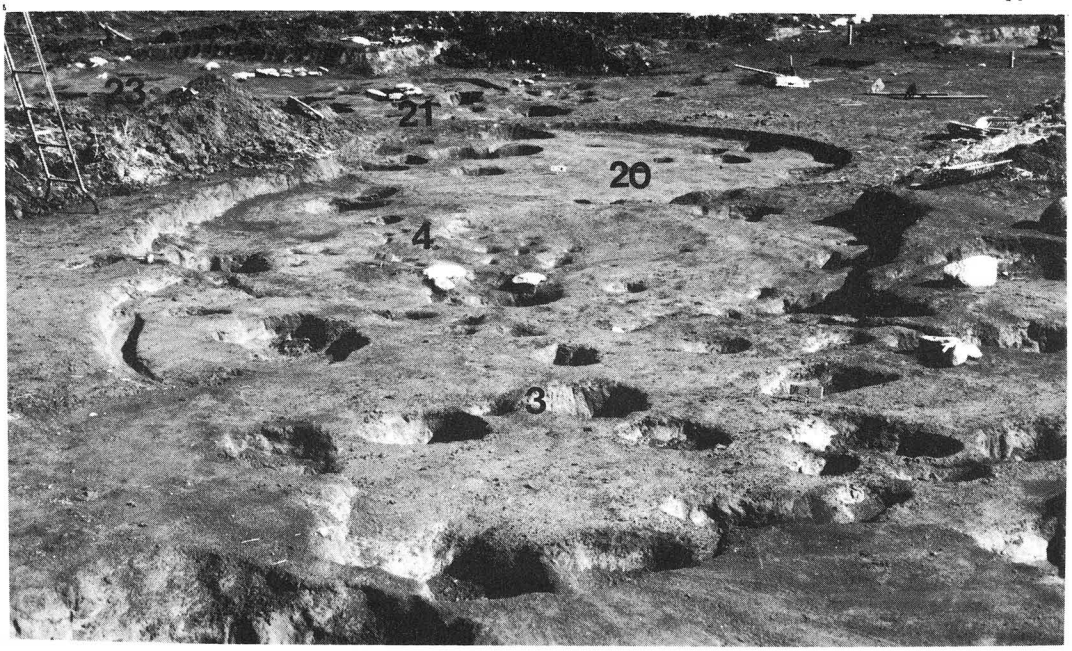
図版5　上は第8・10・11・13・14・15号住居址

図版6　　第10号住居址



図版7　　上は第16号住居址　下は第18号住居址

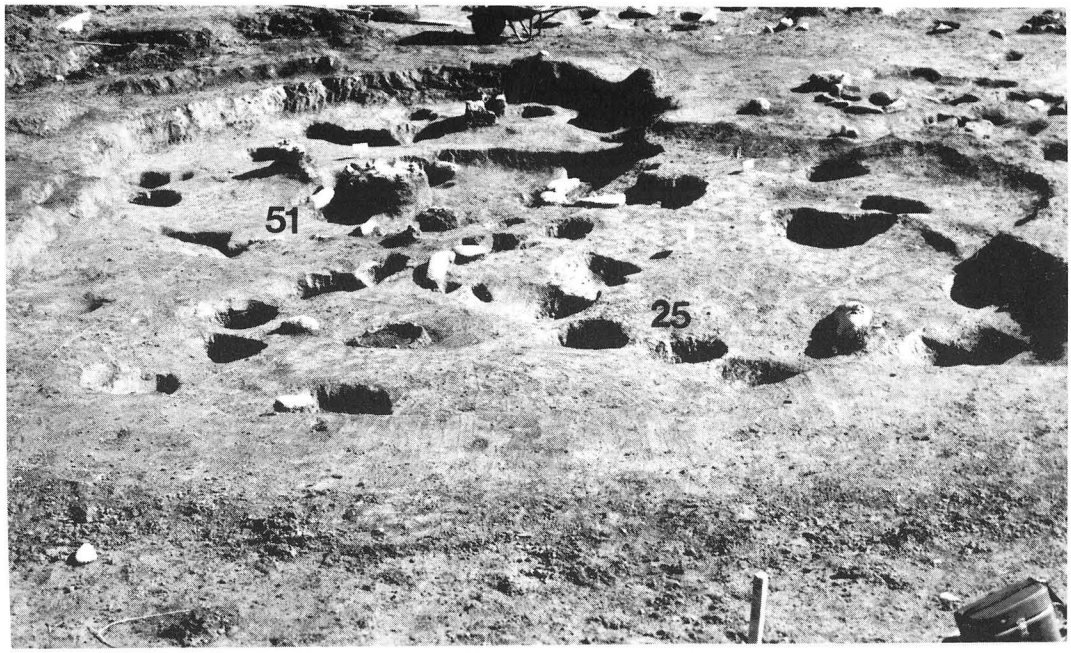




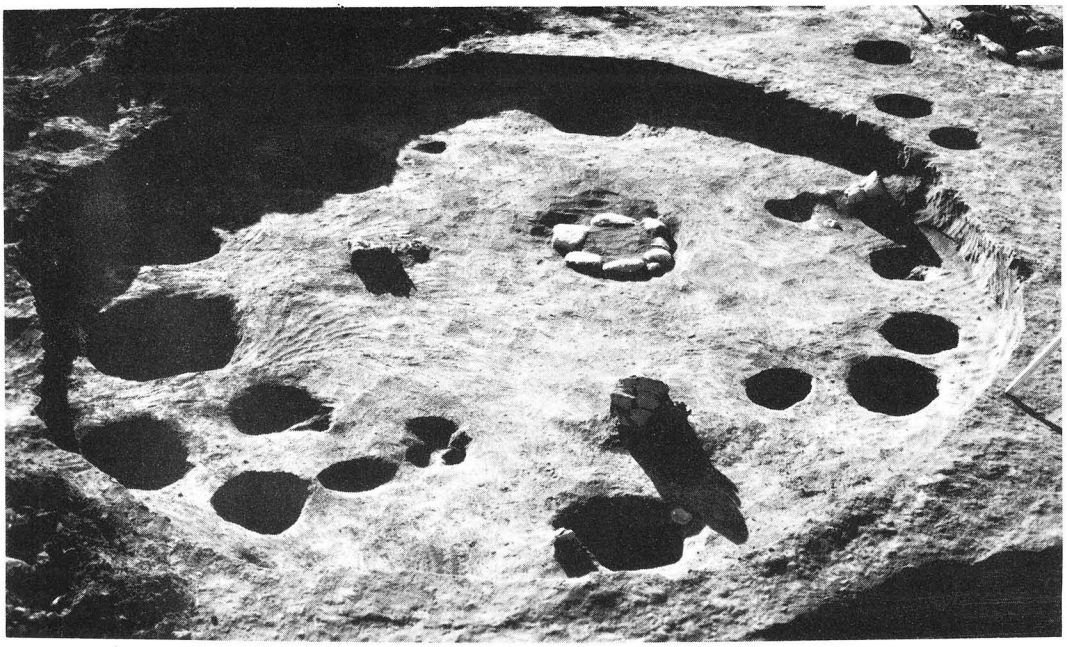
図版８　　上は第１９号住居址　下は第3・４・２０・２１・２３号住居址

図版９　　上は第２０号住居址　下は第２３号住居址

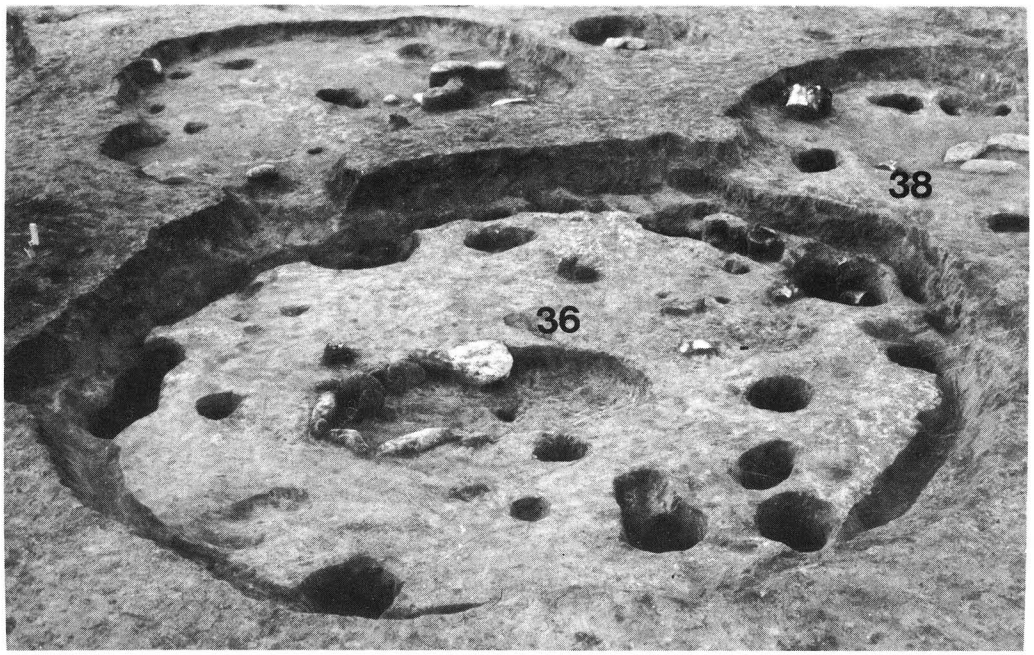
図版10　上は第22・25・26・27・29号住居址
下は第26～29・49・50・52号住居址

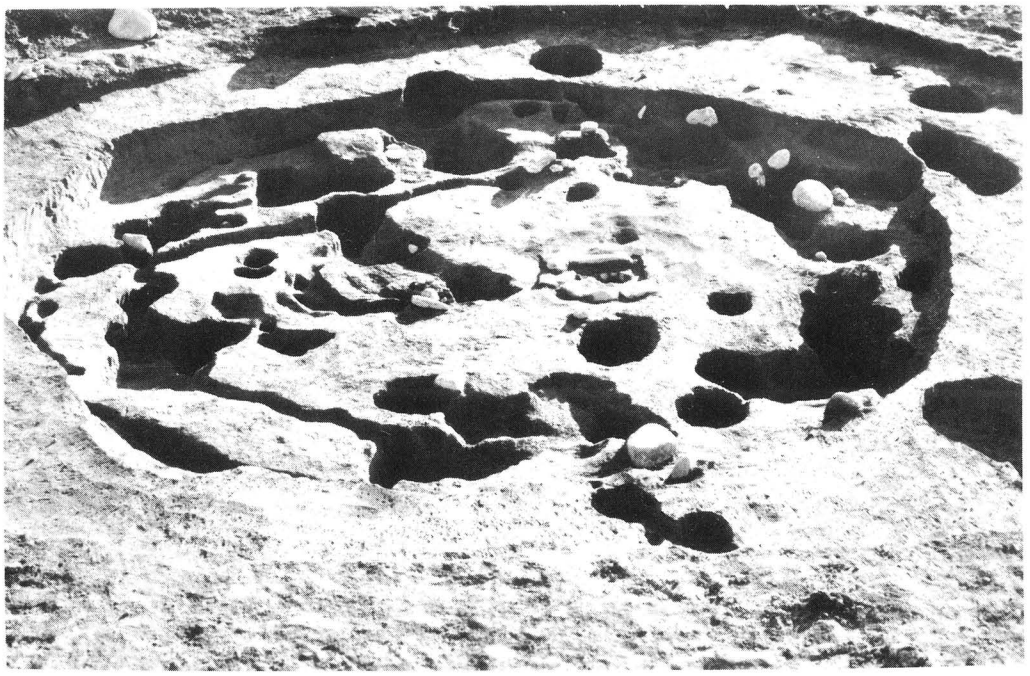


図版11　　上は第25・51号住居址　下は第28号住居址

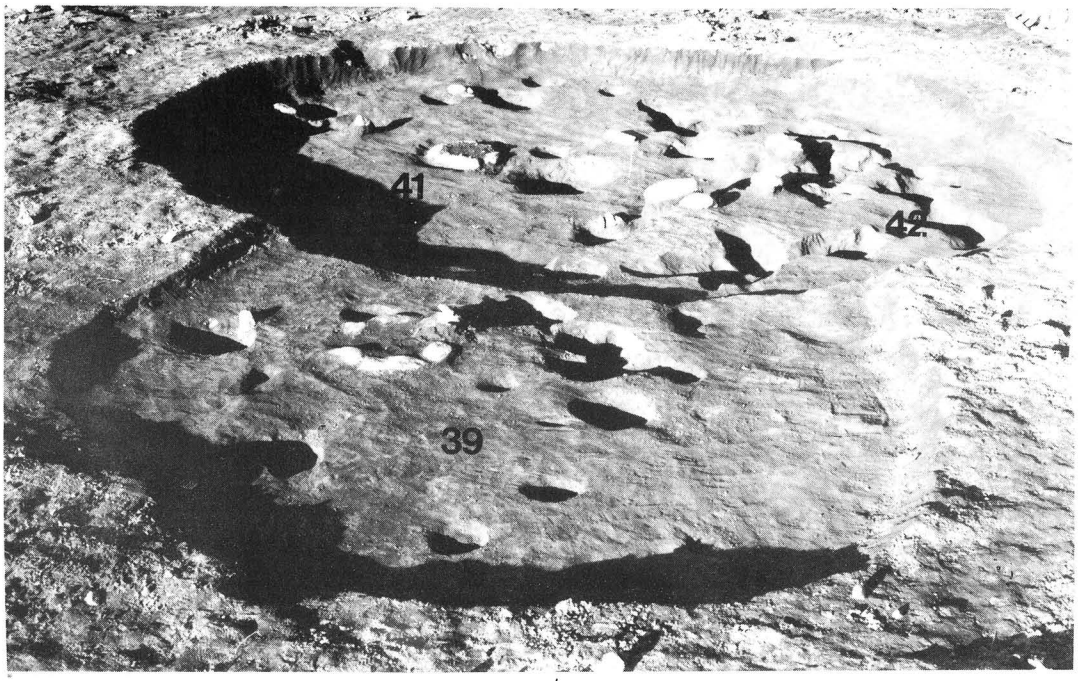


図版12　上は第30・31・35・36・38号住居址
下は第31号住居址



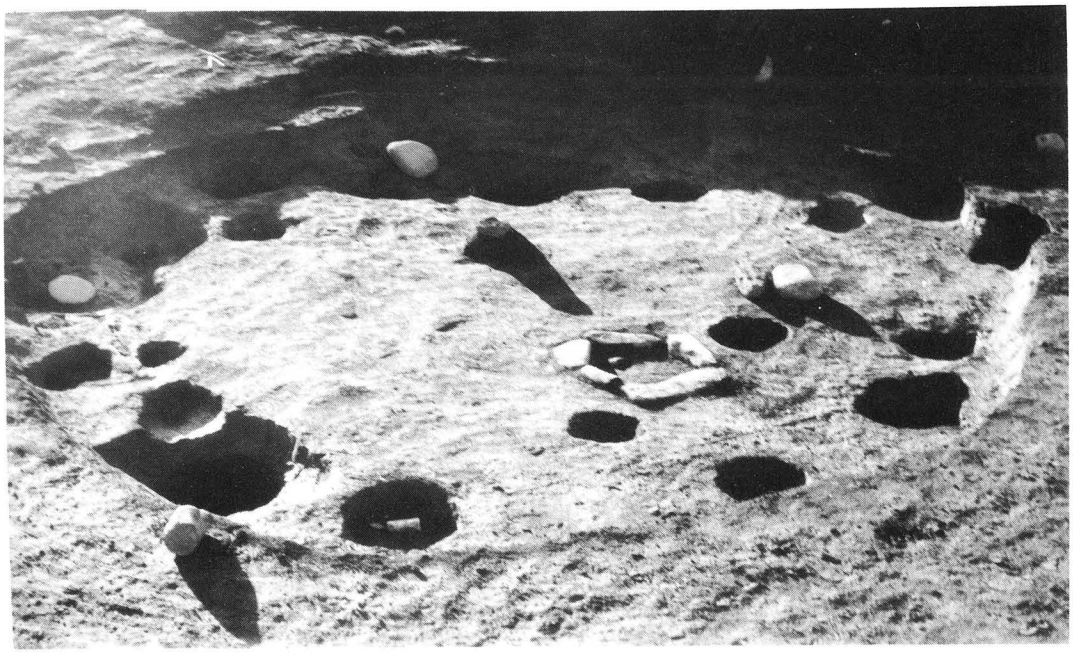


図版１３　　上は第３６・３８号住居址　下は第３３号住居址

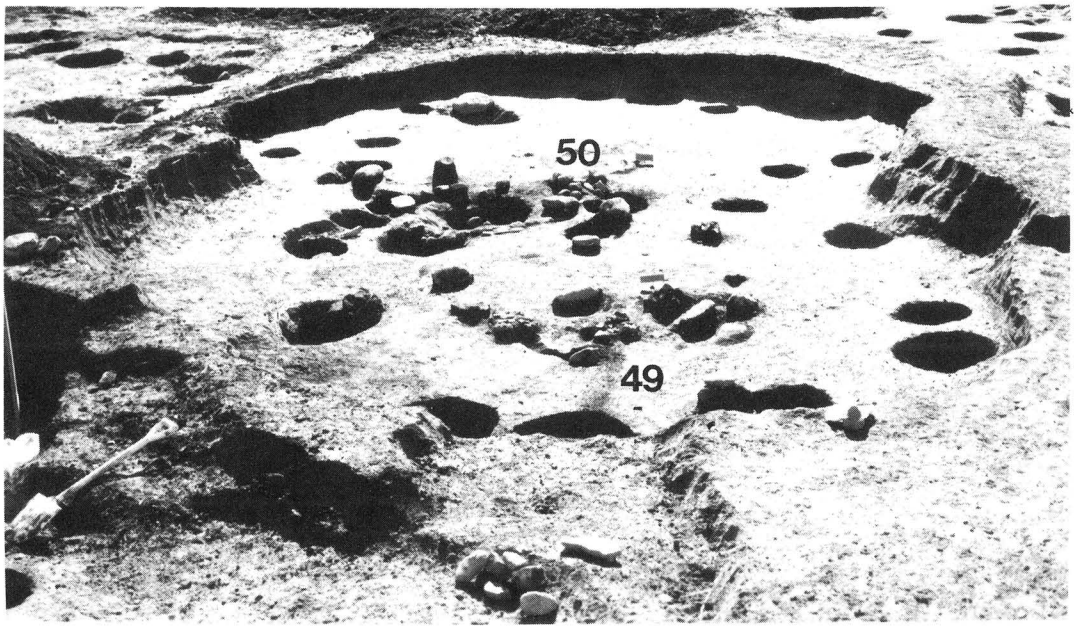


図版14　　上は39・41・42号住居址
下は第37・39・40・41・43・46・47住居址

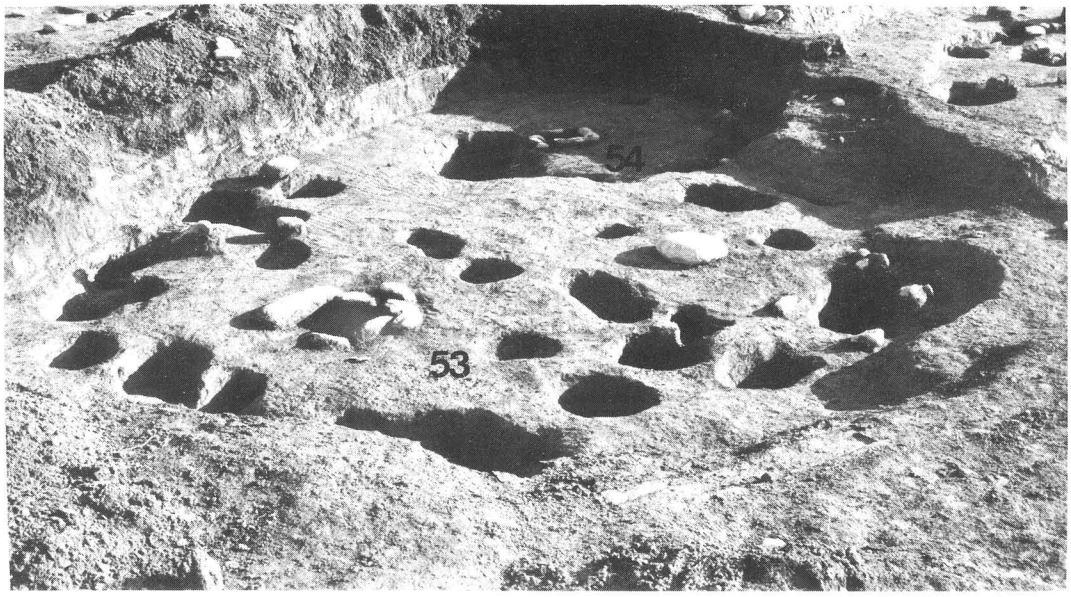
図版15　　上は第40・41・43・44・46・47・48号住居址
下は第43・44・45・48号住居址

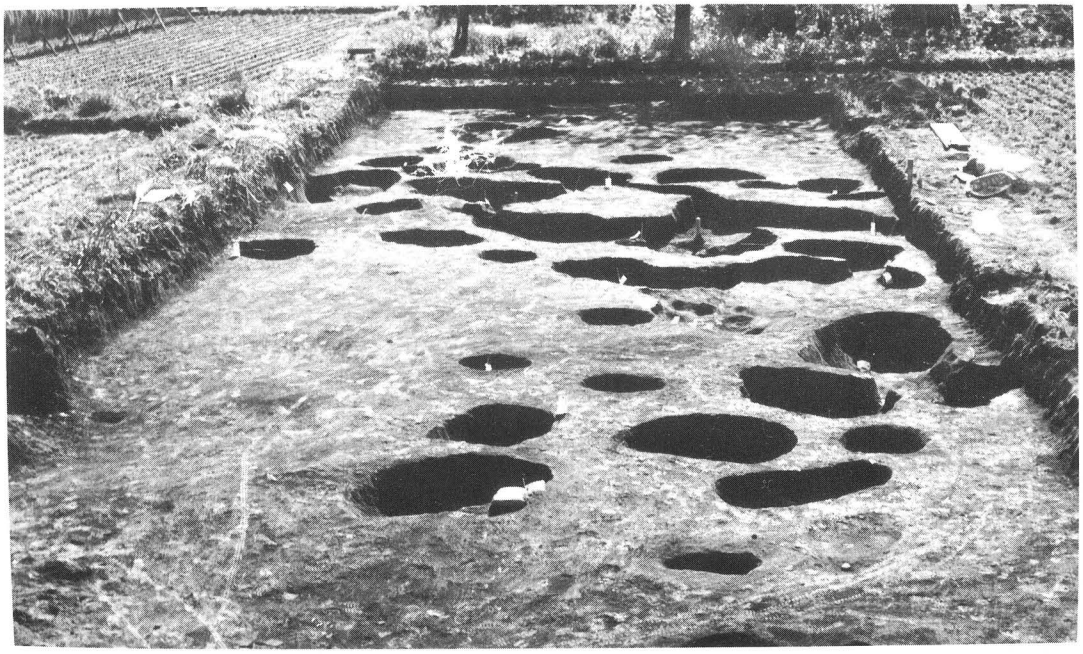


図版16　　上は第44号住居址　下は第45号住居址

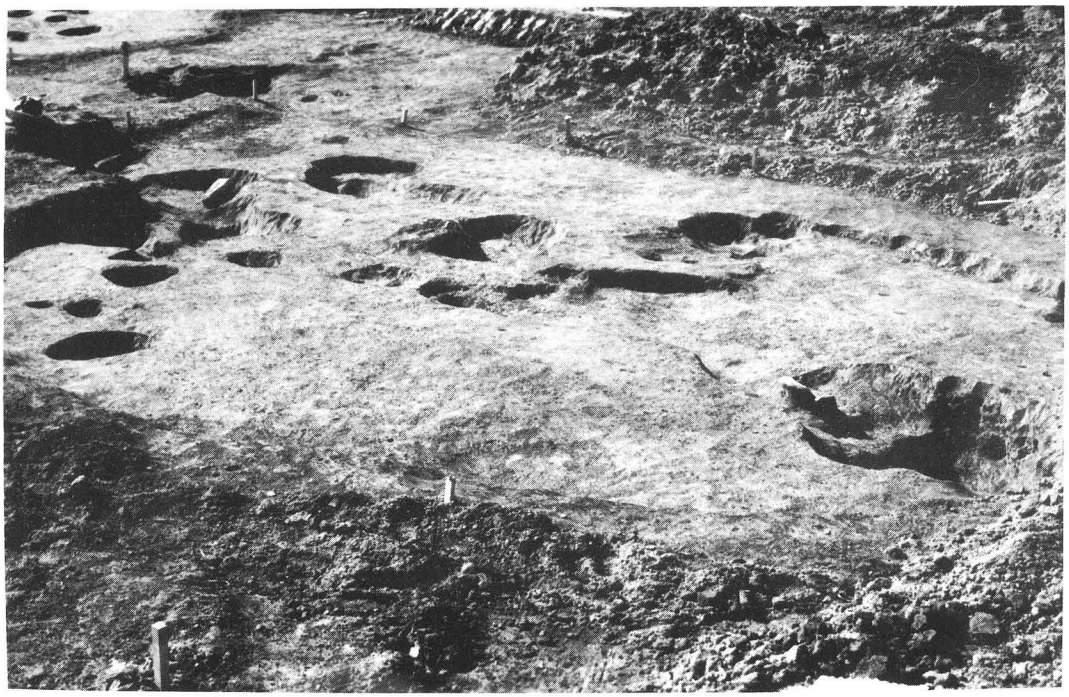


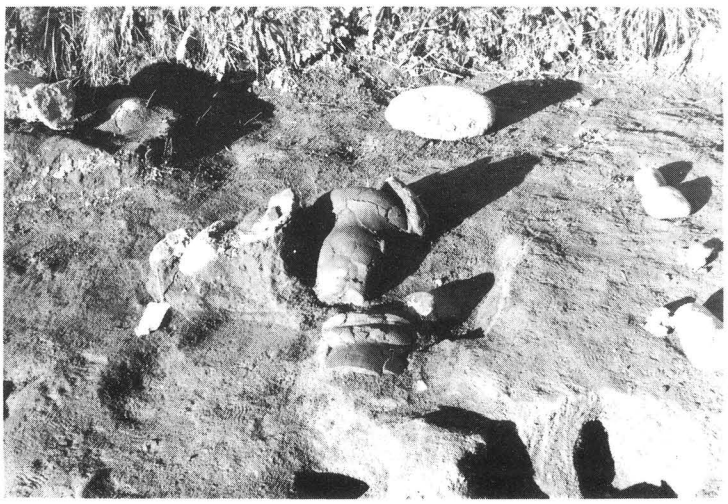
図版17　　上は第48号住居址　下は第49～50号住居址



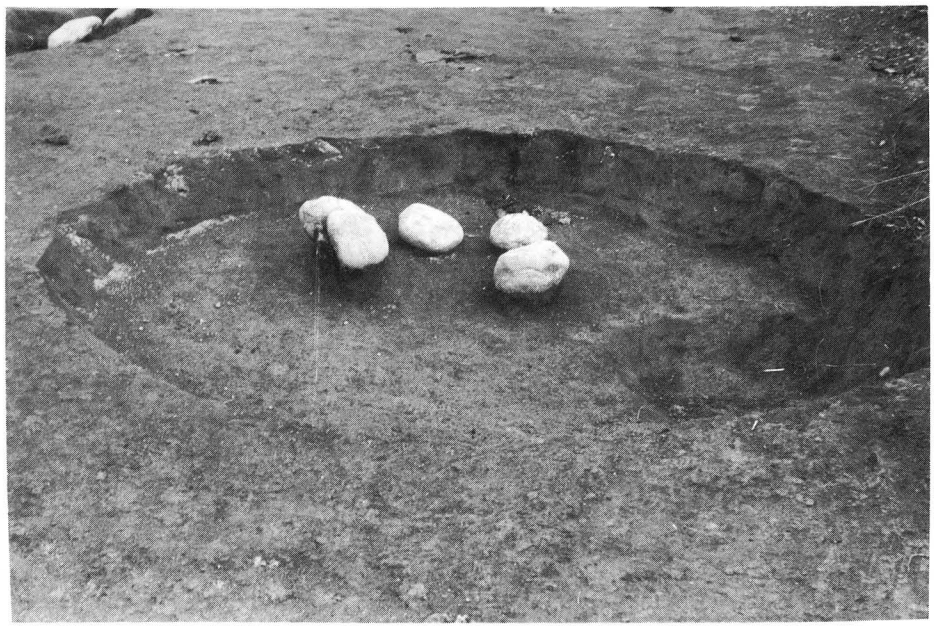


図版18　　上は第53・54号住居址　下は土壙第20～63



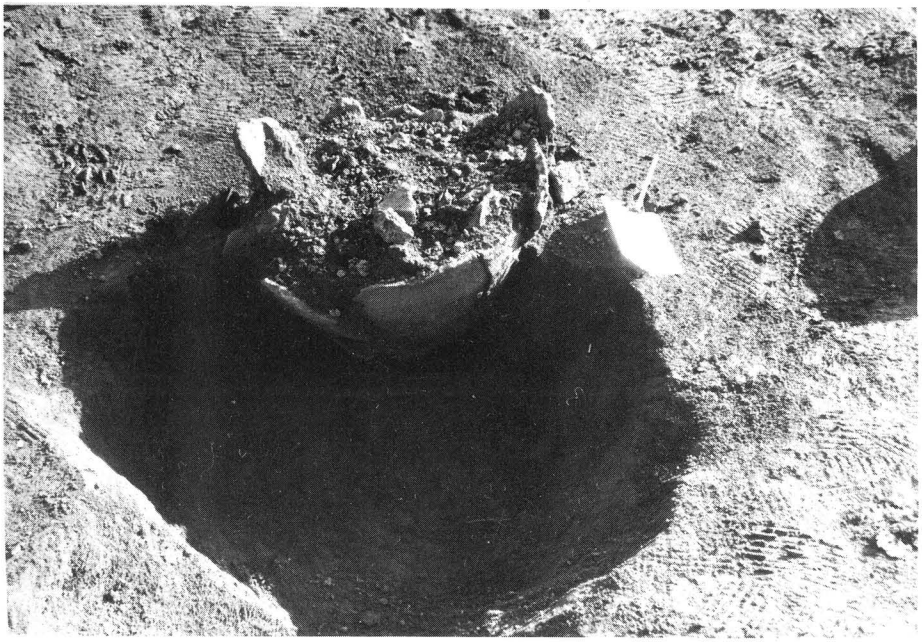


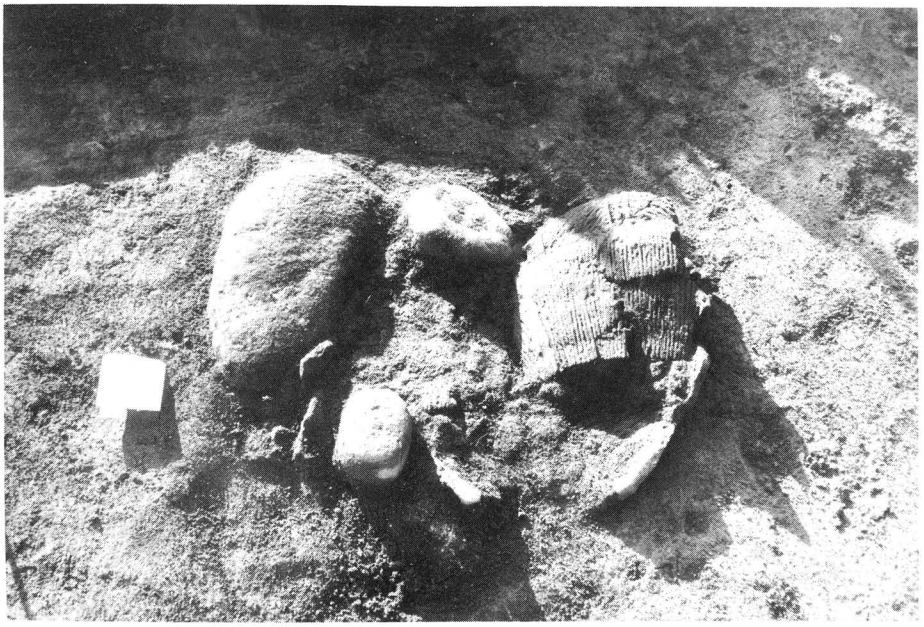
図版19　　上は土壙第67～79　下は土壙8・9



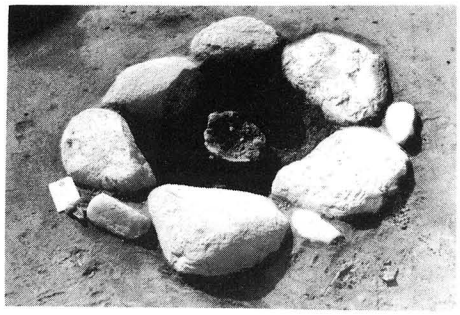
図版２０　　上は土壙５　　下は土壙１３

図版21　　上は土壙80　　下は第3号ローム マウンド

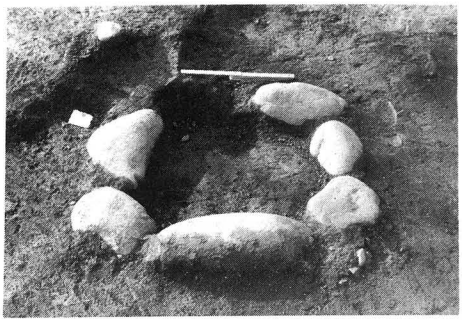




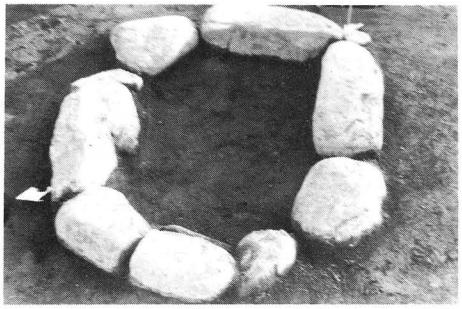
図版２２　　上は埋独埋甕１０　　下は埋独埋甕１１



1

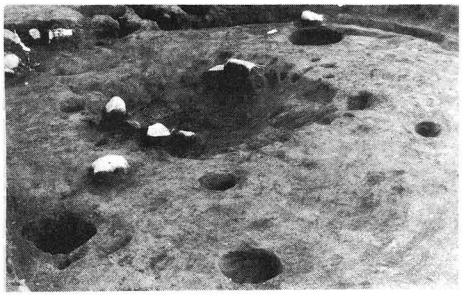


3

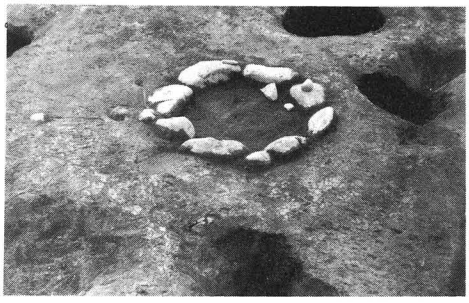


8

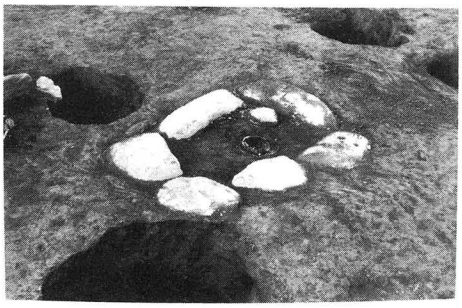
11



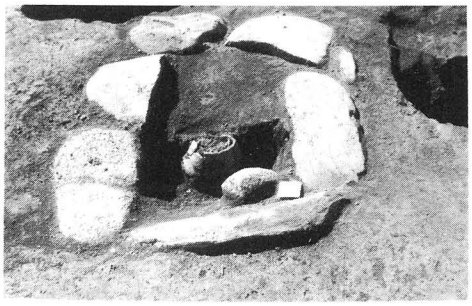
12



13

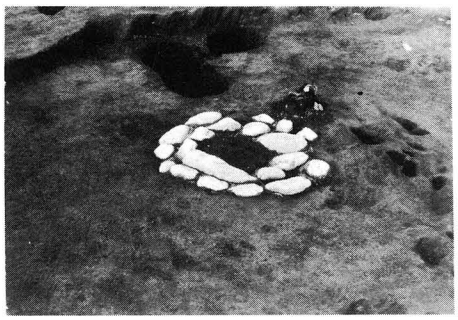


14



14

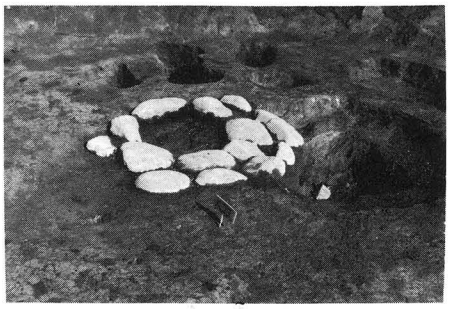
図版２３　各住居址炉



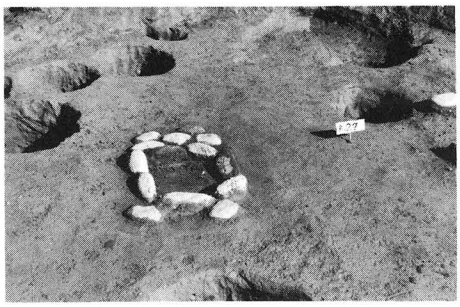
15

18

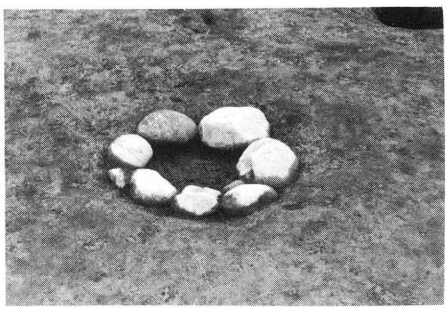
21



23

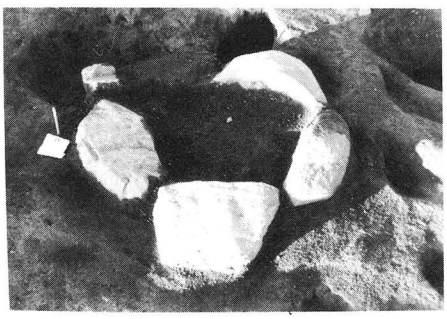


27



31

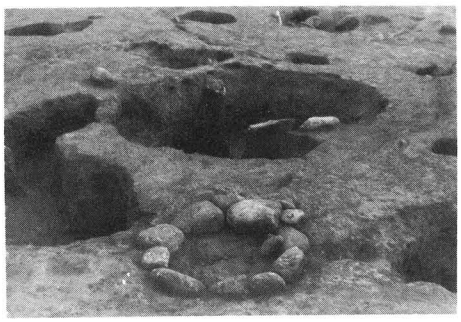
29



29

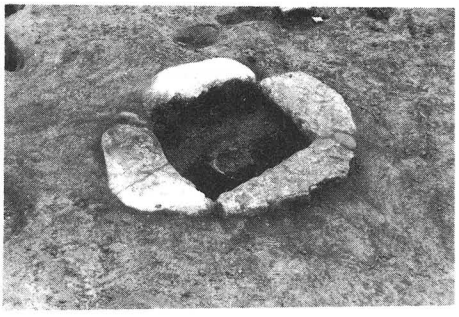
図版２４　　各住居址炉

32

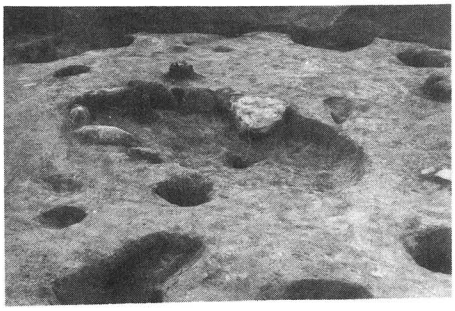


33

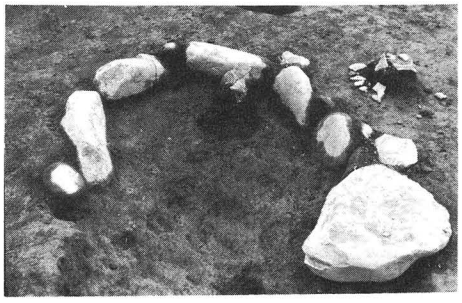
35



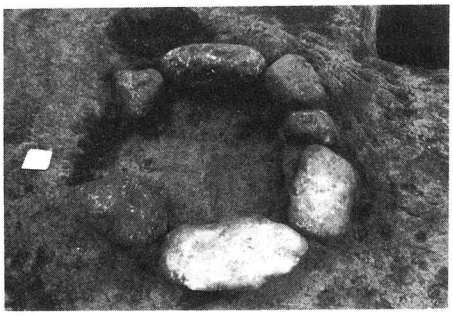
38



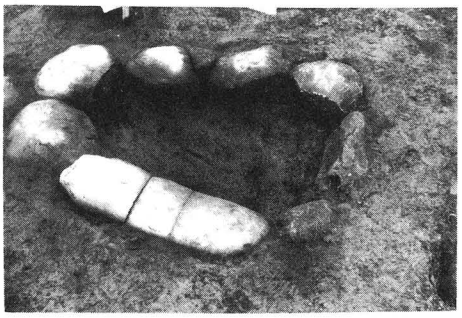
36



36

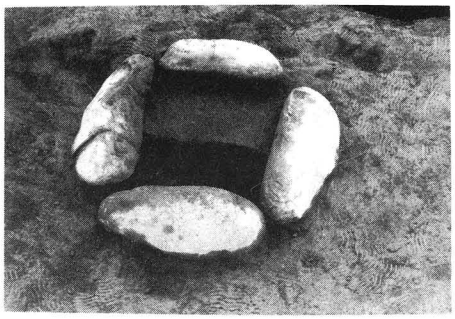


39

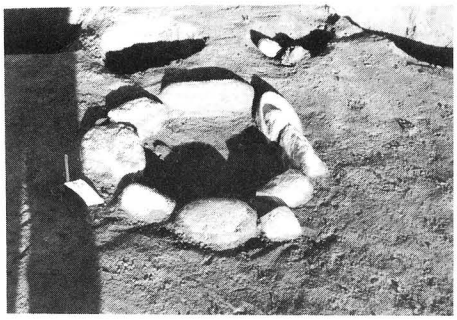


40

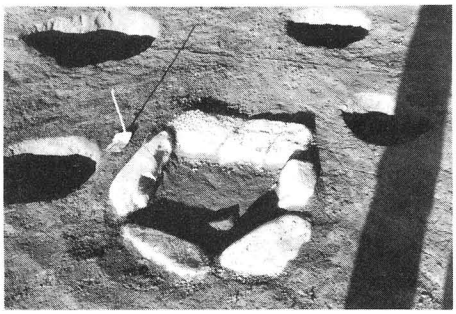
図版２５　　各住居址炉



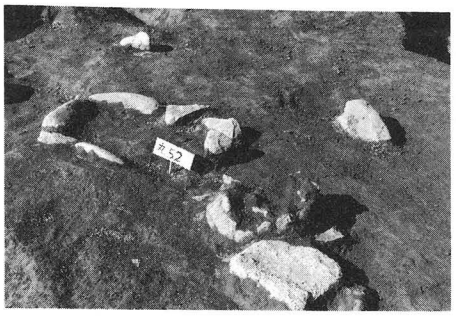
41



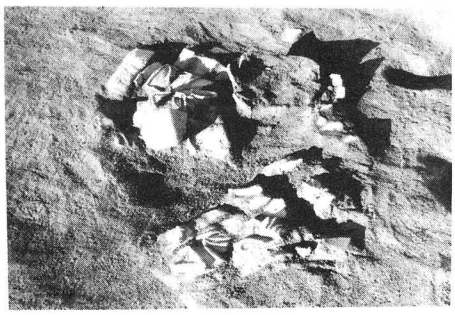
44



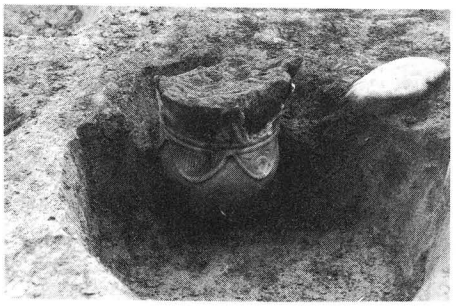
45



52



48



48

図版２６　　各住居址炉

丸　山　南　遺　跡

―― 緊急発掘調査報告 ――

昭和52年3月10日　印刷
昭和52年3月15日　発行

編集　駒ケ根市赤穂2423－6　市立博物館内
県営ほ場整備事業大田切地区埋蔵文化財調査会

発行　伊那市青木町伊那合同庁舎内
南信土地改良事務所

駒ケ根市赤穂10780－2
駒ケ根市教育委員会

印刷　伊那市大字美篶上大島
みすず創美社